

牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ

福岡県大野城市大字牛頸所在窯跡群調査報告

本文編

大野城市文化財調査報告書

第30集

1989

大野城市教育委員会

牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ

福岡県大野城市大字牛頸所在窯跡群調査報告

本文編

大野城市文化財調査報告書

第30集

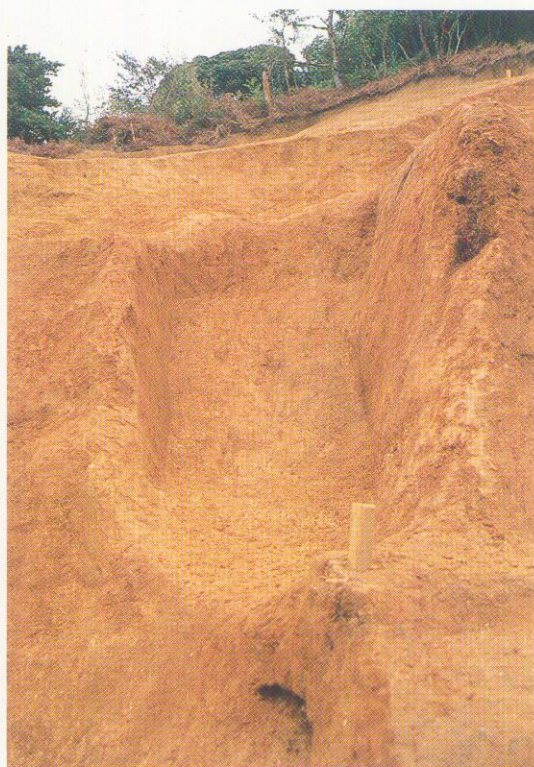




12地区遠景



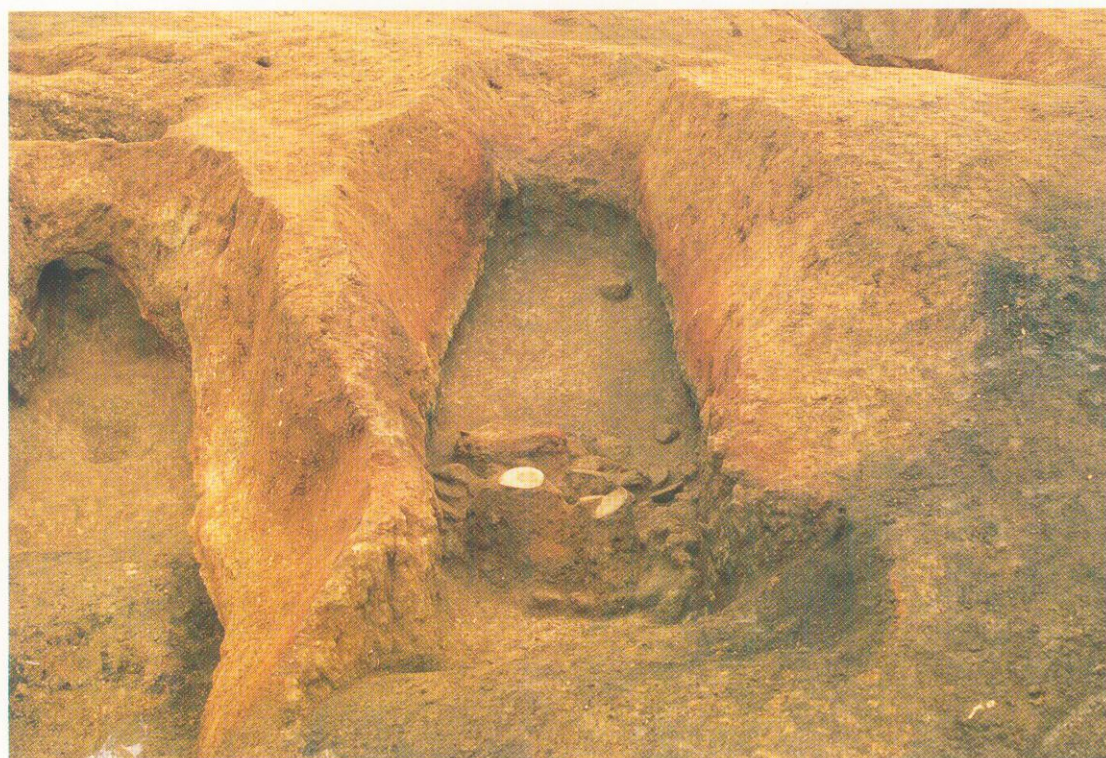
12地区Ⅶ号窯



12地区Ⅹ号窯



12地区 III号窯



12地区 IV号窯



12地区V号窯



同 上



1 地区 II号窯



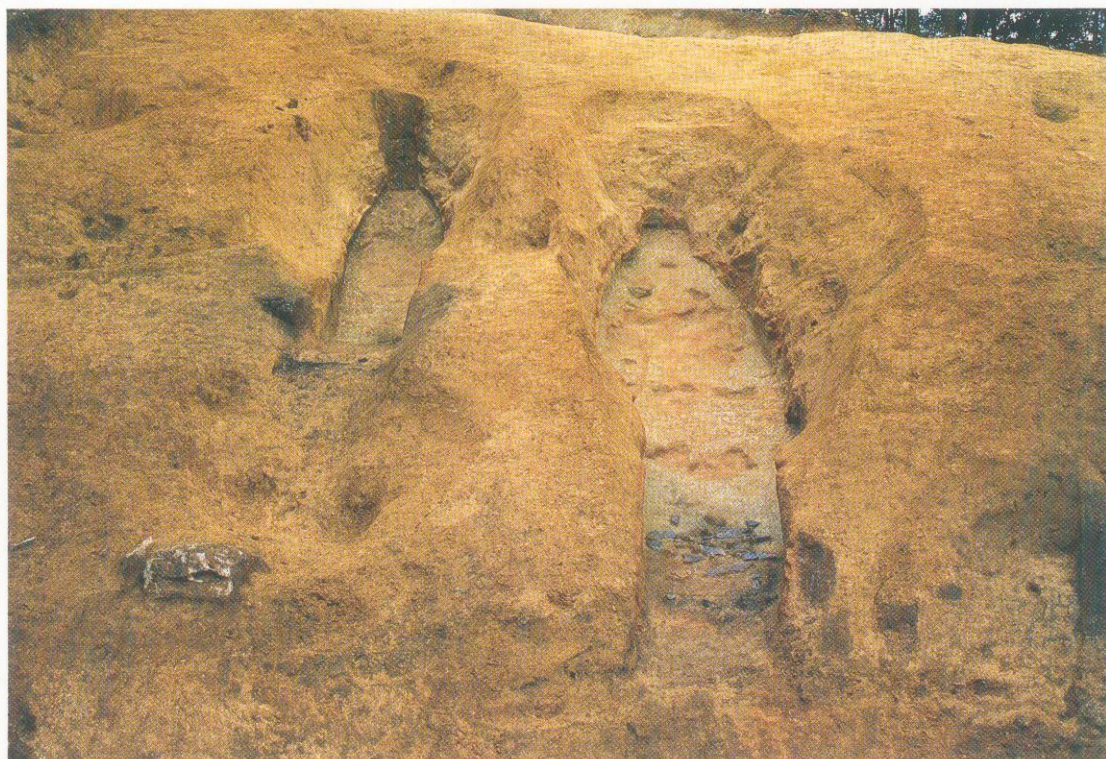
同上 煙道部



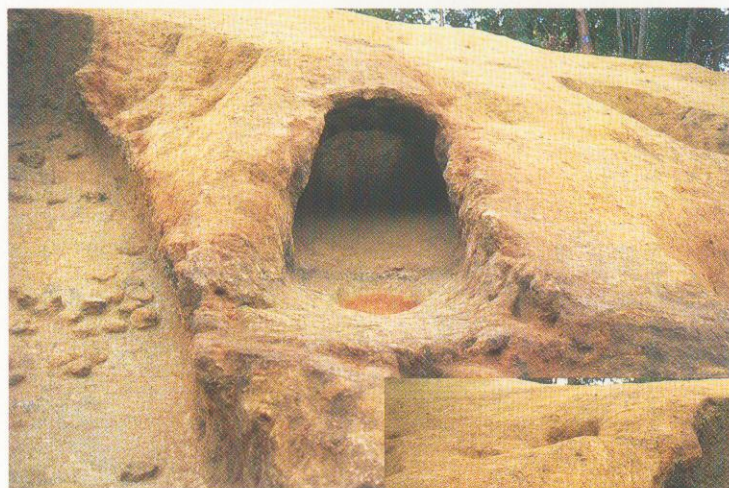
6 地区遠景



6 地区 I 号窯



22地区Ⅰ,Ⅱ号窯



22地区Ⅳ号窯



22地区Ⅲ号窯



1 地区 I 号窯およびⅢ号窯灰原



23地区全景

序

牛頸窯跡群の一支群であるハセムシ窯跡群の調査に取りかかったのは昭和62年7月のことでした。大谷女子大学助教授中村浩先生にお願いしての調査でしたが、その時の成果については『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅰ』として刊行したところです。その後の調査については本市教育委員会が引き継ぎましたが、昭和63年7・8月に再度中村先生にお願いしました。この結果分布調査、試掘調査によって判明していた窯跡はほとんど調査を完了したしだいです。今回の報告書はそれらの調査の成果をまとめたものです。

さて、今回の調査で一大トピックとなったのはヘラ書きによる文字の記された須恵器片の出土でした。「和銅6年……」、「手東里……」、「調……」などと記された土器片を驚きの眼で見入ったところです。一般の方々にはもちろん、専門家の間でも幅広く反響を呼んでいると聞きおよんでいます。今回の報告書が文化財に対する関心を高め、また学問研究の深化に役立つことを期待しています。

最後に、雨と暑さの中で調査に当たっていただいた中村先生、および学生諸氏、考古地磁気測定のため遠路来ていただいた福井大学教授中島正志先生、(株)夏原技研夏原信義氏、調査費負担を快諾された(株)西洋環境開発、現地で便宜を図っていただいた(株)鹿島建設、そして全面的に調査に協力いただいた地元牛頸区の皆様に対して心から感謝の意を表するしだいです。

平成元年3月31日

大野城市教育委員会

教育長 久野英彦

例 言

1. 本書は昭和62年11月から63年10月まで実施した福岡県大野城市所在牛頸窯跡群の発掘調査報告書である。
2. 調査は株式会社西洋環境開発からの受託事業として大野城市教育委員会が行ったが、現地調査の多くと整理作業のほとんどを大谷女子大学中村浩が担当した。調査体制および調査補助員など参加者については後に掲げる。
3. 遺物整理は、昭和63年4月から平成元年3月まで大谷女子大学資料館において実施した。
4. 遺物は、通し番号とし図版での統一をはかった。なお挿図は、この限りではない。
5. 遺物写真は阿南辰秀氏の協力を得た。
6. 本書の執筆は、各担当者が行い、各々文末に名前を記した。なお用語は原則として執筆者の意見に従っているが、一部統一したものもある。編集は中村が行い、大谷女子大学資料館職員海住智子、同嘱託広田実の協力を得た。

本文目次

序、例言

第1章 調査経過	1
1. 調査に至る経過	
2. 調査の経過	
3. 遺物整理の経過	
4. 日誌抄	
第2章 位置と環境	15
1. 概観	
2. 各時代の主要遺跡	
1) 先土器時代	
2) 縄文時代	
3) 弥生時代	
4) 古墳時代	
5) 歴史時代	
第3章 牛頸窯跡群研究史	34
1. はじめに	
2. 研究前史	
(1) 須恵器研究の展開	
(2) 九州地方の動向	
(3) 窯跡編年の成立	
3. 牛頸窯跡群における研究	
(1) 研究の成立	
(2) 研究の展開	
(3) 調査の増加	
4. 各窯跡群概要	
5. おわりに	
第4章 遺跡の調査	54
1. 調査の概観	

2. 各地区の調査

(1) 1地区の調査

① 分布の状況

② 須恵器窯跡

- 1) 1—I号窯跡 2) 1—II号窯跡 3) 1—III号窯跡

(2) 2地区の調査

(3) 6地区の調査

① 分布の状況

② 須恵器窯跡

- 1) 6—I号窯跡 2) 6—II号窯跡 3) 6—III号窯跡

③ 土坑およびその他の遺構

- 1) 6地区下方灰原 2) 6—IV号土坑 3) 6—V号土坑

- 4) 6—VI号土坑

(4) 6B地区の調査

① 須恵器窯跡

- 1) 6B—I号窯跡

(5) 7地区の調査

① 分布の状況

② 須恵器窯跡

- 1) 7—I号窯跡

③ 土坑

- 1) 7—II号土坑

(6) 12地区の調査

① 分布の状況

② 須恵器窯跡

- 1) 12—I号窯跡 2) 12—II号窯跡 3) 12—III号窯跡

- 4) 12—IV号窯跡 5) 12—V号窯跡 6) 12—VI号窯跡

- 7) 12—VII号窯跡 8) 12—VIII号窯跡 9) 12—IX号窯跡

- 10) 12—X号窯跡

(7) 22地区の調査

① 分布の状況

② 須恵器窯跡

- 1) 22—I号窯跡 2) 22—II号窯跡 3) 22—III号窯跡

4) 22—IV号窯跡

(8) 23地区の調査

① 分布の状況

② 須恵器窯跡

1) 23—I号窯跡

第5章 遺物 95

1. 概観

2. 各窯跡出土遺物の検討

① 1地区出土遺物について

a. 須恵器

② 6地区出土遺物について

a. 須恵器

b. 土師器

c. ヘラ記号について

③ 12地区出土遺物について

a. 須恵器

④ 22地区出土遺物について

a. 須恵器

⑤ 18地区出土遺物について

⑥ 20地区出土遺物について

3. 小結

第6章 考察 111

1. 窯跡の分布状況とその構造について

(1) はじめに

(2) 窯跡の分布状況について

① 分布の傾向

② 窯体の方向

③ 窯体構造について—和泉陶邑窯との比較—

2. 12地区出土の在銘片について

(1) はじめに

(2) 在銘片の文字

(3) 銘文の問題

① 記載者について

② 記載文字の内容

(4) 結語にかえて—残された問題—

第7章 牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気推定年代（その2）	126
------------------------------	-----

1) 熱残留磁気測定結果

2) 考古地磁気推定年代

遺物観察表	137
-------	-----

あとがき	184
------	-----

挿 図 目 次

- | | |
|---|-------------------------------------|
| 図 1 調査風景(22地区) | 図22 平田窯跡群の遺構及遺物『筑前平田窯跡』雄山閣出版、1974より |
| 図 2 調査風景(22地区) | 図23 神ノ前2号窯出土軒丸瓦 |
| 図 3 調査風景(22地区) | 図24 中通D—1号窯 |
| 図 4 調査風景(12地区) | 図25 浦ノ原窯跡群『浦ノ原窯跡群』春日市教育委員会、1981 |
| 図 5 調査風景(12地区) | 図26 牛頸石坂窯跡C地点 |
| 図 6 調査状況(7地区) | 図27 1地区地形図 |
| 図 7 考古地磁気サンプリング風景 | 図28 1地区Ⅰ(1—Ⅰ)号窯遺構実測図 |
| 図 8 現地説明会風景 | 図29 1地区Ⅱ(1—Ⅱ)号窯遺構実測図 |
| 図 9 8月5日朝刊の朝日・毎日・フクニチ・西日本・日本経済・読売新聞(順不同)の記事 | 図30 6地区地形図 |
| 図10 福岡平野の主な遺跡 | 図31 6地区Ⅱ(6—Ⅱ)号窯遺構実測図 |
| 図11 諸岡遺跡出土遺物 | 図32 6地区Ⅲ(6—Ⅲ)号窯遺構実測図 |
| 図12 爪形文土器実測図 | 図33 6地区Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ号土坑 |
| 図13 Ⅱ区土壇墓副葬土器実測図『中寺尾遺跡』より | 図34 6B地区地形図 |
| 図14 貨布実測図 | 図35 7地区地形図 |
| 図15 那珂八幡古墳測量図『那珂八幡古墳』より | 図36 7地区Ⅰ(7—Ⅰ)号窯遺構実測図 |
| 図16 妙法寺古墳2・3号墳(S=1/150)『妙法寺古墳群』より | 図37 12地区Ⅱ号窯 |
| 図17 御陵古墳群地形図『御陵古墳群』より | 図38 12地区Ⅷ(12—Ⅷ)号窯遺構実測図 |
| 図18 比恵遺跡第7・13次調査遺構配置図『比恵遺跡群(8)』より | 図39 12地区灰原区画図 |
| 図19 上園遺跡出土遺物実測図『上園遺跡Ⅱ』より | 図40 22地区Ⅰ(22—Ⅰ)号窯遺構実測図 |
| 図20 春日地区遺跡群惣利北遺跡3号土壇『春日地区遺跡群Ⅳ』より | 図41 22地区Ⅱ(22—Ⅱ)号窯遺構実測図 |
| 図21 御笠地区遺跡SB01実測図『御笠地区遺跡』より | 図42 22地区Ⅲ(22—Ⅲ)号窯遺構実測図 |
| | 図43 22地区Ⅳ(22—Ⅳ)号窯遺構実測図 |
| | 図44 23地区地形図 |
| | 図45 23地区(23—Ⅰ)号窯遺構実測図 |
| | 図46 6地区出土蓋杯(蓋)の口径・器高比 |
| | 図47 ヘラ記号の種類と個数 |
| | 図48 12地区出土蓋杯(蓋)の口径・器高比 |
| | 図49 18地区出土蓋杯口径別個体分布表 |

図50 19・20・22地区出土蓋杯口径別個体分布表

図51 在銘片拡大図

図52 在銘片拡大図

図53 ハセムシ窯の考古地磁気測定結果

図54 ハセムシ窯の年代区分(A・B・C)と考古地磁気測定結果

図55 福岡県、大阪府、石川県からの8世紀頃の考古地磁気測定結果の年代ごとの平均値

目 次

表1 遺物整理作業工程表

表2 6地区出土器種一覧

表3 6地区出土蓋杯(蓋)の形態分類

表4 天井部とつまみの形態の組み合わせ

表5 12地区出土器種一覧

表6 天井部とつまみの形態の組み合わせ

表7 つまみの形態と口径(22地区)

表8 つまみの形態と口径(18地区)

表9 つまみの形態と口径(20地区)

表10 牛頸窯跡群内の窯跡の規模比較

表11 牛頸窯跡群の窯体規模と生産器種

表12 ハセムシ地区各窯の全長と主軸方向

表13 各試料の熱残留磁気測定結果

表14 牛頸ハセムシ窯の考古地磁気測定結果

表15 考古地磁気による年代区分と考古学による推定年代との対比

表16 福岡県、大阪府、石川県からの8世紀頃の考古地磁気測定結果の年代ごとの平均値

図 版 目 次

- カラー図版 1 12地区全景（上空から）
カラー図版 2 12地区遠景、Ⅶ号窯、Ⅹ号窯
カラー図版 3 12地区Ⅲ号窯、Ⅳ号窯
カラー図版 4 12地区Ⅴ号窯
カラー図版 5 1地区Ⅱ号窯、Ⅱ号窯煙道部
カラー図版 6 6地区遠景、Ⅰ号窯
カラー図版 7 22地区Ⅰ、Ⅱ号窯、Ⅳ号窯、Ⅲ号窯
カラー図版 8 1地区Ⅰ号窯およびⅢ号窯灰原、23地区全景

- 図版 1 遺構実測図 6地区Ⅰ（6—Ⅰ）号窯遺構実測図
図版 2 遺構実測図 6地区灰原セクション実測図
図版 3 遺構実測図 12地区Ⅰ（12—Ⅰ）号窯遺構実測図
図版 4 遺構実測図 12地区Ⅲ（12—Ⅲ）号窯遺構実測図
図版 5 遺構実測図 12地区Ⅳ（12—Ⅳ）号窯遺構実測図
図版 6 遺構実測図 12地区Ⅴ（12—Ⅴ）号窯遺構実測図
図版 7 遺構実測図 12地区Ⅵ（12—Ⅵ）号窯遺構実測図
図版 8 遺構実測図 12地区Ⅶ（12—Ⅶ）号窯遺構実測図
図版 9 遺構実測図 12地区Ⅸ（12—Ⅸ）号窯遺構実測図
図版10 遺構実測図 12地区Ⅹ（12—Ⅹ）号窯遺構実測図
図版11 遺構実測図 12—Ⅴ・12—Ⅸ号窯灰原セクション実測図
図版12 遺物実測図 1—Ⅱ号窯下層床面、1—Ⅲ号窯上方灰原灰層中〔A〕、〔B〕、
1—Ⅲ号窯下方灰原灰層中〔右〕、〔左〕、灰原採集遺物
図版13 遺物実測図 1—Ⅱ号窯下層床面、1—Ⅲ号窯上方灰原灰層中〔A〕、
1—Ⅲ号窯下方灰原灰層中〔右〕、〔左〕、灰原採集遺物
図版14 遺物実測図 1—Ⅲ号窯上方灰原灰層中〔A〕、〔B〕、下方灰原灰層中〔右〕、〔左〕、
灰原出土遺物
図版15 遺物実測図 6—Ⅰ号窯窯体内埋土、終ベース上、6—Ⅱ号窯たちわり
6—Ⅱ号窯窯体内埋土、6—Ⅲ号窯上方灰原セクションベルト出土遺物
図版16 遺物実測図 6地区A区下方灰原、最下段灰原出土遺物
図版17 遺物実測図 6地区下方灰原、最下段灰原、A区下方灰原出土遺物

- 図版18 遺物実測図 6地区最下段灰原、A区下方灰原、B区下方灰原出土遺物
- 図版19 遺物実測図 6地区最下段灰原、A区下方灰原、B区下方灰原、C区右灰原灰層出土遺物
- 図版20 遺物実測図 6地区最下段灰原、A区下方灰原出土遺物
- 図版21 遺物実測図 6地区最下段灰原出土遺物
- 図版22 遺物実測図 6地区A区灰原、最下段灰原、C区右灰原灰層中、B区下方灰原出土遺物
- 図版23 遺物実測図 6地区最下段灰原、A区下方灰原、B区下方灰原出土遺物
- 図版24 遺物実測図 6地区灰原、A区下層灰原出土遺物
- 図版25 遺物実測図 6地区最下段灰原、A区灰原出土遺物
- 図版26 遺物実測図 6地区最下段灰原、A区下方灰原出土遺物
- 図版27 遺物実測図 6地区最下段灰原、A区下層灰原出土遺物
- 図版28 遺物実測図 6地区灰原、A区下層灰原、最下段下層灰原、B区下方灰原出土遺物
- 図版29 遺物実測図 6地区A区下方灰原、C区灰原灰層、最下段灰原、灰原出土遺物
- 図版30 遺物実測図 6地区最下段灰原出土遺物
- 図版31 遺物実測図 6地区灰原出土遺物
- 図版32 遺物実測図 6地区灰原、最下段灰原出土遺物
- 図版33 遺物実測図 6地区灰原出土遺物
- 図版34 遺物実測図 7—I号窯焚口床面上、床下、灰原採集遺物
- 図版35 遺物実測図 12—I号窯焚口終ベース上、灰原採集、表採、12地区灰原f出土遺物
- 図版36 遺物実測図 12—Ⅲ号窯燃燒部埋土、焚口落ち込みC区、前面灰原第1黒色土層、前面灰原d—f間土手、灰原y、
12—Ⅶ号窯窯体内埋土、最終ベース上、灰原採集、
12—Ⅴ号窯焼成部還元層出土遺物
- 図版37 遺物実測図 12—Ⅳ号窯窯体内埋土、燃燒部終ベース、灰原、灰原土手（主軸）I層、灰原h、12—Ⅶ号窯灰原m、12地区SK02土坑、12地区灰原出土遺物
- 図版38 遺物実測図 12—Ⅴ号窯燃燒部還元層、燃燒部灰層、灰原採集遺物
- 図版39 遺物実測図 12—Ⅸ号窯灰原y、x、窯体内埋土、焚口右、灰原土手出土遺物
- 図版40 遺物実測図 12地区灰原a～c、j、f、v、12—Ⅷ号窯最下段灰原出土遺物
- 図版41 遺物実測図 12地区灰原f、最下段下層灰原出土遺物
- 図版42 遺物実測図 12地区Ⅴ、Ⅵ号窯灰原、最下段下層灰原、灰原b出土遺物
- 図版43 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版44 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物

- 図版45 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版46 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版47 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版48 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版49 遺物実測図 12地区最下段下層灰原、最下段上層灰原出土遺物
- 図版50 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版51 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版52 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版53 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版54 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版55 遺物実測図 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版56 遺物実測図 22—I号窯窯体内埋土、焚口上層灰層、22—II号窯窯体内埋土、燃烧部
内上層灰層、22—III号窯窯体内埋土、22—IV号窯窯体内出土遺物
- 図版57 遺物実測図 22—III号窯窯体内埋土出土遺物
- 図版58 遺物実測図 22—III・IV号窯灰原左下区、22—SK01土坑、22—IV号右土坑、22—III
号窯右土坑、左下灰だまり出土遺物
- 図版59 遺物実測図 22—III・IV号窯灰原右上区、右下区出土遺物
- 図版60 遺物実測図 22—III・IV号窯灰原右下区出土遺物
- 図版61 遺物実測図 22—III・IV号窯灰原右下区出土遺物
- 図版62 遺物実測図 22—III・IV号窯灰原右下区出土遺物
- 図版63 遺物実測図 22—III・IV号窯灰原右下区出土遺物
- 図版64 遺物実測図 22—III・IV号窯灰原右下区出土遺物
- 図版65 遺物実測図 22—III・IV号窯灰原右下区出土遺物
- 図版66 遺物実測図 22—III・IV号窯灰原左下区出土遺物
- 図版67 遺物実測図 22—III・IV号窯灰原出土遺物
- 図版68 遺物実測図 23—I号窯窯体内床面直上、23地区灰原出土遺物
- 図版69 遺構写真 各地区調査前（伐採中）の状況
- 図版70 遺構写真 1地区I号窯全景、たちわり後
- 図版71 遺構写真 1地区II号窯全景、たちわり後
- 図版72 遺構写真 6地区I・II・III号窯遠景
- 図版73 遺構写真 6地区III号窯遠景、6地区I号窯遠景
- 図版74 遺構写真 6地区I～III号窯全景、灰原セクション、6地区I号窯煙道たちわり、
6地区III号窯煙道たちわり、灰原セクション

- 図版75 遺構写真 7地区全景、7地区Ⅰ号窯遠景
- 図版76 遺構写真 12地区全景、12地区Ⅵ号窯近景
- 図版77 遺構写真 12地区Ⅰ号窯全景、Ⅰ号窯遺物出土状況
- 図版78 遺構写真 12地区Ⅱ号窯全景、12地区Ⅹ号窯全景
- 図版79 遺構写真 12地区Ⅲ号窯全景、たちわり後
- 図版80 遺構写真 12地区Ⅳ号窯全景、たちわり後
- 図版81 遺構写真 12地区Ⅴ号窯窯体内セクション、セクション除去後
- 図版82 遺構写真 12地区Ⅴ号窯全景、たちわり後
- 図版83 遺構写真 12地区Ⅵ号窯近景、右側壁
- 図版84 遺構写真 12地区Ⅶ号窯全景、たちわり後
- 図版85 遺構写真 12地区Ⅸ号窯全景、たちわり後
- 図版86 遺構写真 22地区全景、Ⅰ・Ⅱ号窯
- 図版87 遺構写真 22地区Ⅱ号窯
- 図版88 遺構写真 22地区Ⅲ・Ⅳ号窯灰原セクション、遠景
- 図版89 遺構写真 22地区Ⅲ号窯全景、Ⅳ号窯全景
- 図版90 遺構写真 22地区Ⅲ・Ⅳ号窯重複状況、Ⅱ号窯左側壁
- 図版91 遺構写真 23地区全景、Ⅰ号窯焚口近景
- 図版92 遺物写真 1—Ⅲ号窯灰原採集、下方灰原灰層中〔右〕、上方灰原灰層中〔A〕、
上方灰原灰層中出土遺物
- 図版93 遺物写真 1—Ⅲ号窯上方灰原灰層中〔A〕、下方灰原灰層中〔左〕、上方灰原灰層中、
灰原、1—Ⅱ号窯下層床面出土遺物
- 図版94 遺物写真 6地区A区下方灰原、最下段灰原出土遺物
- 図版95 遺物写真 6地区A区下方灰原、最下段灰原出土遺物
- 図版96 遺物写真 6地区A区下方灰原、B区下方灰原、最下段灰原出土遺物
- 図版97 遺物写真 6地区A区下方灰原、C区右灰原灰層、最下段灰原出土遺物
- 図版98 遺物写真 6地区A区下方灰原、C区右灰原灰層、最下段灰原出土遺物
- 図版99 遺物写真 6地区B区下方灰原、C区右灰原灰層中、最下段灰原、灰原出土遺物
- 図版100 遺物写真 6地区最下段灰原出土遺物
- 図版101 遺物写真 6地区A区下方灰原、最下段灰原、灰原出土遺物
- 図版102 遺物写真 6地区最下段灰原、灰原出土遺物
- 図版103 遺物写真 6地区最下段灰原出土遺物
- 図版104 遺物写真 6地区最下段灰原、7地区Ⅰ号窯焚口床面上、灰原採集遺物
- 図版105 遺物写真 12地区Ⅰ号窯焚口終ベース上、灰原採集、Ⅲ号窯焚口落ち込みC区、前面

灰原第1黒色土層出土遺物

- 図版106 遺物写真 12地区Ⅲ号窯焚口落ち込みC区、Ⅲ号窯前面灰原第1黒色土層、Ⅶ号窯灰原採集、Ⅸ号窯灰原土手、灰原A、灰原採集遺物
- 図版107 遺物写真 12地区灰原A、灰原B、灰原J、V・Ⅵ号窯灰原、Ⅶ号窯最下段灰原、最下段下層灰原出土遺物
- 図版108 遺物写真 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版109 遺物写真 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版110 遺物写真 12区Ⅸ号窯灰原 χ 、最下段灰原出土遺物
- 図版111 遺物写真 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版112 遺物写真 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版113 遺物写真 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版114 遺物写真 22—Ⅲ号窯窯体内埋土出土遺物
- 図版115 遺物写真 22—Ⅲ号窯左下灰だまり、22—Ⅲ・Ⅳ号窯灰原、右上区、右下区出土遺物
- 図版116 遺物写真 22—Ⅲ・Ⅳ号窯灰原右下区出土遺物
- 図版117 遺物写真 22—Ⅲ・Ⅳ号窯灰原右下区出土遺物
- 図版118 遺物写真 22—Ⅲ・Ⅳ号窯灰原右下区出土遺物
- 図版119 遺物写真 22—Ⅲ・Ⅳ号窯灰原右下区、左下区出土遺物
- 図版120 遺物写真 22—Ⅲ・Ⅳ号窯灰原左下区、灰原出土遺物
- 図版121 遺物写真 6地区最下段灰原出土遺物
- 図版122 遺物写真 6地区最下段灰原出土遺物
- 図版123 遺物写真 6地区最下段灰原出土遺物
- 図版124 遺物写真 12地区最下段下層灰原、6地区最下段灰原出土遺物
- 図版125 遺物写真 6地区最下段灰原出土遺物
- 図版126 遺物写真 6地区最下段灰原出土遺物
- 図版127 遺物写真 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版128 遺物写真 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版129 遺物写真 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版130 遺物写真 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版131 遺物写真 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版132 遺物写真 12地区最下段下層灰原出土遺物
- 図版133 遺物写真 12—Ⅲ号窯灰原土手主軸(e~g)Ⅳ層、6地区最下段灰原出土遺物
- 図版134 遺物写真 12地区最下段下層灰原、Ⅸ号窯埋土、6地区最下段灰原出土遺物
- 図版135 遺物写真 12地区最下段下層灰原、6地区最下段灰原、12—I・Ⅱ号窯下方灰原出土遺物

第1章 調査経過

1. 調査に至る経過

ハセムシ窯跡群の発掘調査は㈱西洋環境開発の計画する宅地造成工事に先立つ調査として、同社から大野城市教育委員会への委託事業として計画、実施されたものである。昭和62年7月から8月に行った発掘調査は大谷女子大学中村浩助教授に協力を依頼し、その指導のもと同大学はもとより、九州大学、早稲田大学学生の参加を得て実施したものである。この期間には、第16、17、18、19、20の各地区の窯跡などの調査が行われた。やがて引き続きそこでの出土遺物の整理作業を大谷女子大学資料館で行った。この間の調査成果は、『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅰ』1988として刊行された。

この調査に引き続いて昭和62年11月に市教育委員会が第22地区の発掘調査を実施した。さらに翌63年2月から6月にかけての期間に、第12地区、23地区の各々調査を行った。これらの調査によって、12、18、19、20、22、23地区の各々調査が完了した。これによって計画地域内の分布調査で遺構、遺物の確認が行われながら未調査の地区は第1、2、6、7、8の5地域になったのである。昭和63年度についても、昨年同様大谷女子大学をはじめとする大学の学生の参加が得られたので、比較的近接して所在する1、2、6、7地区をその対象とすることにした。調査は7月、8月に行った。とくに第12地区灰原から漢字を刻んだ須恵器甕などの破片が確認されたことから、当該部分の再調査を行った。さらに6地区の灰原下層部分については、時間的制約から一部未調査部分があったので、市教育委員会が9月から10月に継続して調査を行った。

なお今後の残された問題は二点ある。その第一は第8地区の調査である。これについては、遺跡が民家の近くであり、土砂流出の危険があるため造成工事の開始以降、しかるべき防災工事を待って行いたいと考えている。さらに今後調査対象とした以外の場所については全面伐採後、重機による試掘調査によって対応を考慮したいと考えている。

最後に遠路お越し頂いた中村先生をはじめ、大谷女子大学学生諸姉、早稲田大学、九州大学の学生諸氏、地磁気の測定をお願いした福井大学教授中島正志先生、㈱夏原技研夏原信義氏、宮崎義信氏に心から感謝したい。また調査経費の全額負担をはじめ最大限の協力をいただいている㈱西洋環境開発、㈱鹿島建設の関係者をはじめ、種々便宜を図って頂いた地元牛頸地区の皆様にも厚く感謝する次第である。

調査体制は以下のとおりである。

大野城市教育委員会 教育長

久野 英彦

同	教育部長	助村 浩靖（63年）
同	社会教育課長	船越 美直（62年）
同	社会教育課長	岡部弥之助（63年）
同	社会教育課長補佐	青木 克正
同	社会教育課主査	高橋 裕司
同	社会教育課技師	舟山 良一
同	社会教育課技師	向 直也
同	社会教育課技師	徳本 洋一
同	社会教育課嘱託	下村 精一
同	社会教育課嘱託	秀嶋 和子

現地調査

（発掘調査） 大谷女子大学

助教授 中村 浩
 学生 恩地 志江・山口弘美子
 南 美千子・池辺巳智代
 宮崎 知子・寿崎めぐみ
 西村 典子・西岡 直
 安井かをり・吉岡 幸子
 吉川由里子・松本 美紀
 早稲田大学 学生 余語 琢磨・風間 栄一
 西山 伸一

九州大学

大学院生 朴 廣春
 研究生 朴 賢珠
 学生 高久 健二

（考古地磁気測定）

福井大学

教授 中島 正志
 学生 谷崎 有利・林 昌代

夏原技研

夏原 信義
 宮崎 義信

遺物整理（ただし現地調査と重複するものは除く。）

大谷女子大学資料館

館長 小川 修三
 職員 海住 智子
 嘱託 広田 実
 大谷女子大学 卒業生 永通佐知子
 同 学生 多数。

2. 調査の経過

昭和62年11月から第22地区の発掘調査を開始した。表土を重機によって除去したところ4基の窯跡を確認した。左側から順にⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ号窯跡と命名した。Ⅰ、Ⅱ号窯跡についてまず調査をおこない、次いでⅢ、Ⅳ号窯跡に取り掛かるように計画して実施した。

Ⅰ、Ⅱ号窯跡は、やや規模が大きな窯跡であったが、焚口下方に見られるはずの灰原が自然流出によって殆ど遺存しておらず、調査は比較的順調に進展した。一方、Ⅲ、Ⅳ号窯跡については下方にかなりの灰原が残されており、多数の遺物が出土した。さらに窯体の切り合い関係からⅢ号窯からⅣ号窯の順に造られたことが明らかになった。灰原に設定したセクションでは、これらの関係を明確にすることはできなかった。

昭和63年2月から6月にかけては、第12地区の調査を実施した。調査着手前には窯跡の数量は少ないのではないかという予想もあったが、重機で表土除去を行ったところ次々と窯跡が確認された。2基の窯跡を除いて、6基が、ほぼ同じレベルに構築されており、さらに調査の進展に伴って掘削途中で放棄されたものや、実際には使用されていなかったと見られるものなどが検出され、合計10基を数えるに至った。

灰原は重複が著しく、各々対応する窯跡の判断に苦しむという状態であったので、まず平板測量によって簡単に位置関係の確認を行った。さらに適宜区分けを行って各々の区域の遺物の取り上げを実施した。とくに灰原中央部は大きく崩れ落ちて谷底に1m以上の厚さに再堆積した状況であった。従って上方部分での作業を、よりやり易くするためにも優先的に掘り上げることにした。これらの作業を通じて、灰原が谷に沿ってかなり流れ込んでいる様子が明らかになった。しかし作業は、当該部分が余りにも狭あいであり、作業も困難であったため遺物の最も集中している部分のみの掘り下げを行うことになった。ここから漢字を刻んだ甕の破片が出土したため、後日完掘することになった。なおこの地区の調査は年度かわりの期間に該当し、このため実測作業などの人員確保が容易ならず、かつ灰原の遺構的な複雑さなどから当初予期した以上の期間を要することになった。

これら62年度からの継続調査が一段落した63年6月末には、新たな調査のスタートが切られた。既に触れたように、7月から8月に調査を予定した地区は、1、2、6、7地区である。6月末からまず6地区の表土除去を開始した。しかし天候に恵まれず、7月中旬の本格的調査開始までには、その対象部分のうち1地区および6地区の一部が完了していたのみで、7地区については用地問題の未解決も重なり、その表土除去が開始されたのは7月下旬になっていた。

調査は6地区、1地区を並行して実施することにした。6地区では同一斜面に3基の窯跡が並んで検出されており、さらに近接して土坑が2基確認された。これらは北側からⅠ、Ⅱ、Ⅲ号窯跡とし、土坑はⅣ、Ⅴ、Ⅵ号土坑とした。まず窯跡の各々について窯体内にセクションを

設定し、それらの窯が廃棄されたものか、放棄したものかの判断を行った。これに引き続いて各窯跡の精査検討を行い、写真撮影、実測図の作成などの工程を経て、壁の重複状態の検討のためたちわりを行った。これらから複数の操業が確認されたものがあり、とくにⅢ号窯跡では下層に主軸を同じくする窯跡が確認されたのは、その成果の一端である。

これら窯跡、土坑が位置する斜面と相対する斜面に窯跡1基が存在することが確認された。これは灰原と窯跡の位置関係から不自然な部分に須恵器が散布することから調査したものである。大半が自然流出によって失われており、僅かに床と壁のごく一部が確認出来ただけであった。これについては6B地区として、既述の窯跡とは区分している。

灰原は、窯跡の下方に混在したかたちで堆積していた。出来るかぎり遺物の採集に努めたが、排出土砂の置場所の関係から必ずしも当初の意図とは異なり、一部未掘部分を生じさせてしまった。

1地区は、6地区からわずかに遅れて着手したが、調査の進行状態からいうと、ほぼ同時とでもいえるものである。隣接して民家が所在することもあり、これに対する配慮から一部着手しなかった部分もあるが、それは防災上の最小限の範囲である。表土は重機によって除去し、窯体部分のみの調査となった。丘陵上部には窯跡の確認がなく、北部の民家の造成によって失われたと見られる灰原のみの遺存であったⅢ号窯跡と、窯体の下方部分を道路によって削平されたⅠ号窯跡は一部重なって検出された。とくにⅢ号窯跡の場合は灰原の前庭部と考えられる部分であり、比較的遺物の出土量は多かった。これらの一部はⅠ号窯の内部にまで及んでいる。Ⅰ号窯については、削平部が露呈していたこともあり、他の窯跡のような精査は困難であった。なお灰原は道路の下層となっており、かつ用地外に及んでいることもあり、調査は実施しなかった。

既述2基の窯跡と同一丘陵同一斜面に位置してはいるが、大きく離れて確認されたⅡ号窯跡は、道路によって一部削平されてはいるものの窯体部分は焚口までの大半が良好に遺存していた。従って調査手順は、他の窯跡と同じく窯跡内セクション設定、検討にはじまり、たちわりに終わるという工程をたどっている。灰原については焚口下方に拡がっているのは当然であるが、道路によって削平され、かつ耕作地への影響を考慮して当該部分の調査は断念した。

Ⅱ号窯の煙道上部では、溝状の煙道が奥壁に連なっているという独特の構造をしており、注目に値する。さらに床面には急傾斜に対応するための段が設定されており、窯体構造上興味あるものである。

6地区、1地区の調査が行われているのと並行して2地区の表土除去を行った。しかし残念ながら当初予期した遺構の確認はなかった。また遺物についても須恵器破片が若干量採集されたが、いずれも摩耗痕があり、混入物の可能性が濃いものと考えられた。

7地区については、ようやく用地問題の解決を見、7月末から伐採、表土除去を開始した。

しかし当該地区の下方に隣接する池の問題もあり、土砂の流入に注意しながらの作業であったため、当初予定以上の時間を要することになった。

窯跡は丘陵裾部から1基検出されたが、灰原の大半は池の中に含まれるという状況であった。窯跡そのものも当該地域で通有の小型のもので、この点本体調査は容易に進展した。丘陵中腹部には土坑が1基検出され、同時に調査を行った。

これら一連の今年度当初予定の窯跡調査と共に、12地区出土遺物整理中に確認された文字を刻んだ甕の破片の収集のため12地区の再調査を実施した。この結果は、後述するごとく大量の文字を伴う資料を採集することが出来た。

この作業によって得られた資料などの重要性に鑑み、記者発表を8月4日に市役所において行った。これには九州歴史資料館倉住靖雄氏の同席を得て行った。当日のテレビ報道、翌日の新聞各紙の報道は一面トップという扱いが目立ち、これに伴って一般の関心も多いに高まってきた。やがて今回の調査が一段落する8月6日に一般の方々を対象とした現地説明会を開催した。これには天候にも恵まれたこともあり、考古学ファン300名以上が参加した。この時には担当した中村および市教育委員会、参加学生全員が対応にあたり、参加者の質問応答はじめ各地区の案内を行った。とくに研究者の参加も多く見られ、見学者の中には市長の顔もあった。

この現地説明会を一応のくぎりとして調査は終息を迎えたが、なお12地区、6地区の未調査部分については出来るかぎり速やかな対応が望まれていた。これを受けて63年9月から10月に市教育委員会が担当して、12地区の灰原の再々調査を行った。これは重機を用いてかつての排出土砂を含めて分割し、さらにそれらの内部の遺物採集を人力によって検討するというものであった。しかし湧水が多く、かつ既に触れたように、谷部の狭あいな部分から作業は困難をきわめた。しかしこの甲斐あって「和銅六年」の文字が刻まれた破片が採集されたのである。

次いで6地区の灰原についても、12地区と同様の方法を用いて遺物の採集作業を実施した。これによって土鈴、硯などの未検出の遺物が採集され、新たな知見を加えることになった。これらの調査完了後は、土砂の不用意な流出を防ぐため重機を用いて該当地域の整地を行い調査作業を完了した。

3. 遺物整理の経過

昭和62年7月、8月に出土した遺物については、既に報告書を刊行しており、一応の終息を見ている。しかし同じく昭和62年度内に実施された22地区、12地区の遺物の整理は、62年度には行っていない。従って今回遺物整理の対象となったのは、22地区、23地区、6地区、12地区、7地区、1地区の各遺構からの出土遺物である。

遺物整理作業は、水洗の一部を除いて大半は大谷女子大学資料館で行った。その手順は、他

の地域の整理作業と同じく、先ず水洗によって付着土などを洗い落すことに始まり、次いで出土地などの注記作業を行う。この際の注記作業であるが、本来はすべての遺物に対して行うべきものであるが、細片化したものについてすべて行うには人員確保および時間に限界があり、一定程度以上の遺存状態のものに対してのみ実施することにした。さらに出土層位などが記録されていないものについてはゴム印によって注記に替えたものもある。このように注記が完了した遺物については、さらに厳密に言えば注記作業中も含めて接合作業を行う。これは破片と破片を接合することによって完形品に近づけるための作業であり、これによって接合された同一固体には1個の注記を行えば良いことになる。接合作業によっても完全な形状が復元出来ない遺物のうち代表的な器種あるいは形状のものについて復元作業を行う。これは欠けている部分を、石膏によって補填し、本来の完全な形状に復元するものである。これの対象となるものは少なくとも左右対称となるもので、かつ一面が残されているものである。この復元作業に先立って、原寸による実測作業を行う。この対象遺物は、器種ごとにあるいは窯体内遺物はすべてをピックアップした。さらに同一器種にあっても口径、器高などに差異が見られる場合は、各々実測するようにした。これによって完成した図面は、レイアウト、トレースを経て図版として印刷されるのである。図版として編集した遺物については、各々の代表的なものについて観察検討の結果を表にまとめた。これが後述する観察表である。

復元作業によって石膏補填が行われた遺物については、色付けの後、写真撮影をおこなう。これは同じく図版を構成する重要なものであり、とくに重要なものについては細部写真も撮影した。同時に遺構写真についても遺物整理の期間中に、図版構成用の引き伸ばし焼付けを行った。遺構実測図についても同様な手順を踏む必要がある。すなわち先ず、原図から図版構成に相応しい縮尺の範囲にレイアウトを行い、それをトレースして印刷原版とするのである。

この他にも幾つかの作業内容、工程はあるが一応の手順は記述したと思う。なお各地区ごとに実施した遺物整理の工程をまとめたが、表1に示したので参照されたい。

作業内容	1988年7月	8	9	10	11	12	1989年1月	2	3
水洗									
注記									
接合・復元									
写真撮影									
実測									
レイアウト 製図									
原稿作成									
個別検討等									
印刷・校正									

※ 個別検討は、遺物の種々な観察および図版との対照などの作業である。

表1 遺物整理作業工程表

4. 日誌抄

昭和62年（1987）

- 11月5日 22地区ユンボ掘削開始。
- 6日 ユンボ掘削。作業員入る。器材搬入。テント設営。
- 7日 ユンボ掘削。清掃。
- 9日 ユンボ掘削。清掃。
- 10日 ユンボ掘削。清掃。左側よりⅠ～Ⅳ号とする。Ⅰ号窯跡、Ⅱ号窯跡掘り始める。Ⅱ号は煙出し部床面まで出す。
- 11日 Ⅰ号窯煙出し部は残りがよい。Ⅱ号窯2／3は掘り上がる。一部壁を補修している。ユンボ掘削。
- 12日 Ⅰ号窯跡、Ⅱ号窯跡掘り終える。写真撮影。ユンボ掘削。
- 13日 Ⅰ、Ⅱ号窯跡割付。Ⅰ号から実測を開始。Ⅲ、Ⅳ号窯跡掘る。Ⅳ号は天井部が少し残る。Ⅲ号の方が古い。Ⅲ、Ⅳ号窯右の土坑掘り始める。
- 14日 Ⅰ号窯跡平面図終了。Ⅲ、Ⅳ号窯右の土坑土手を残して掘り終える。
- 16日 Ⅱ号窯跡平面図土器を書き入れて終了。Ⅲ、Ⅳ号窯跡灰原土手を残して掘り進む。
- 17日 Ⅰ号窯跡断面見通し図終了。Ⅱ号窯跡縦断面見通し図終了。Ⅲ、Ⅳ号窯跡灰原ほぼ掘り終える。
- 18日 Ⅱ号窯跡横断面図作成。Ⅰ、Ⅱ号窯跡舟底状ピット写真撮影。Ⅲ、Ⅳ号窯跡写真撮影。灰原土手断面実測。
- 19日 灰原土手をはずす。Ⅲ、Ⅳ号窯跡写真撮影。
- 20日 Ⅲ、Ⅳ号窯跡右のピット掘り始める。
- 21日 22地点周辺の試掘調査。
- 24日 22地点周辺試掘調査。
- 25日 Ⅲ、Ⅳ号窯跡右ピット掘る。下のピットは灰層の上に褐色土を埋めている。従って上のピットはⅣ号窯、下のピットはⅢ号窯に属すると考えられる。
- 26日 Ⅰ、Ⅱ号窯たちわり。Ⅲ、Ⅳ号割付。
- 28日 Ⅰ、Ⅱ号窯たちわり。Ⅲ、Ⅳ号窯跡平面実測。
- 30日 Ⅲ、Ⅳ号窯跡平面図実測。エレベーション開始。たちわり、Ⅰ、Ⅱ号窯終了。
- 12月1日 Ⅲ、Ⅳ号窯跡。エレベーション終了。たちわり用水糸張り。雨のため昼で作業中止。
- 2日 Ⅲ、Ⅳ号窯跡たちわり。写真撮影。実測。Ⅳ号窯跡の赤化が深部まで及んでいる。地形測量除いて今日で終了。

昭和63年（1988）

2月22日 今日から開始。ユンボ掘削。

24日 ユンボ掘削。まだ窯跡は検出されない。

25日 器材搬入。テント設営。ユンボ掘削。掘削後の清掃。

26日 ユンボ掘削。清掃。窯跡が7基ぐらいあると予想される。

3月1日 ユンボ掘削。作業員は午後から。

2日 ユンボ掘削。清掃。窯跡は8基ぐらいあると予想される。

3日 清掃。根おこし。

4日 ユンボ掘削。清掃。写真撮影。

5日 ユンボ掘削。

7日 ユンボ掘削。

8日 ユンボ掘削。最下段の灰原掘ることにする。

9日 最下段灰層掘り進む。I号窯掘り始める。ユンボ掘削。

10日 I号窯を掘る。天井部はほとんどない。燃焼部と焼成部の境付近に完形土器が多い。床よりだいぶ浮いて蓋が5枚並べて

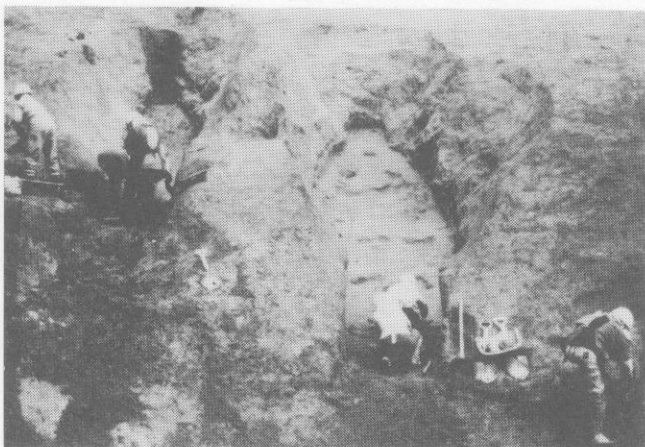


図1 調査風景（22地区）

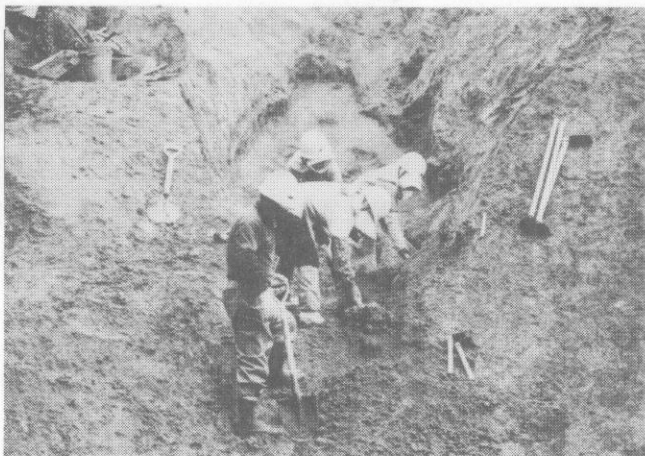


図2 調査風景（22地区）



図3 調査風景（22地区）

出土。Ⅱ～Ⅳ号窯を掘り始める。最下段灰層1m以上の深さで土器は極めて多い。ユンボ掘削。

11日 Ⅰ号窯跡掘り終わる。写真撮影。Ⅱ～Ⅳ号窯跡掘る。ユンボ掘削。

12日 雨後の片づけ。Ⅲ、Ⅳ号窯跡を掘る。ユンボ掘削。

16日 Ⅱ～Ⅳ号窯跡本体掘り。終了に近づく。Ⅲ号窯の左側壁に径20cmぐらいの側道がある。Ⅱ号窯が崩れた埋土中に掘り込まれているのでⅡ→Ⅲ号であることがわかる。ユンボ掘削。

18日 Ⅱ～Ⅴ号窯跡を掘る。

Ⅱ号窯跡上方の溝状の落ち込みは排水溝か。ユンボ掘削。

19日 Ⅱ～Ⅳ号窯跡清掃。写真撮影。Ⅴ号窯跡最終床面上までだいたい出す。Ⅴ号窯跡左右の土坑掘り始める。左側をSK01、右側をSK02とする。ユンボ掘削。

23日 Ⅵ号窯跡、Ⅶ号窯跡を掘る。SK01、SK02、土手写真撮影。

24日 Ⅵ号、Ⅶ号窯跡を掘る。Ⅵ号窯は煙道付近の天井部が残る。煙道は長い。床面近くにはほとんど遺物が少ない。Ⅴ号窯、SK01、SK02、Ⅵ号窯跡、Ⅶ号窯跡写真撮影。

28日 Ⅶ号窯跡、清掃、写真撮影。Ⅸ号窯跡、粗掘り。Ⅴ号窯跡主軸決め。小トレンチを入れる。写真撮影。右側を掘る。

29日 Ⅴ号窯跡主軸右側掘る。前庭部がくぼむ構造である。Ⅸ号窯跡を掘る。

30日 最下段灰原を掘る。

31日 Ⅸ号窯掘り。Ⅴ号窯右半分掘り終える。SX02、Ⅶ号窯、Ⅷ号窯割り付け。



図4 調査風景（12地区）



図5 調査風景（12地区）

- 4月4日 IX号窯を掘る。極めて深い。I～Ⅲ号窯跡割り付け。小トレンチ設定。
- 5日 IX号窯跡粗掘り。IV号窯割り付け。
- 6日 IX号窯掘りあがる。写真撮影。灰原平板測量。区分けをするため土器をとりあげる。VI号窯、IX号窯割り付け。
- 9日 灰原を平板測量。I～V号窯跡灰原掘り。IX号窯跡灰原トレンチ設定。ユンボ掘削（23地点）
- 11日 IX号窯トレンチ掘削。右下部で円面硯出土。BM移動。I～IV号窯灰原土手観察。IX号窯の灰原と思われる所から長頸壺片出土。
- 13日 雨後の処理。灰原土手を残して掘り始める。Ⅲ号窯→V号窯の関係か。
- 14日 I、VI、Ⅶ、IX号窯灰原セクション写真撮影。実測。VI号窯左側土坑状のものがあ
ると思って下げ始めたところ窯の可能性がでてきた。I、Ⅱ号窯下のうすい灰原掘
り始める。
- 15日 VI号窯左側は窯跡となった。→X号窯。Ⅲ、IV、V号窯灰原実測。IX号窯灰原実測。
- 16日 IX号窯灰原セクション実測。実測が終わった土手からはずし始める。X号窯掘りあ
げる。空焚き後廃棄したものだろう。
- 19日 Ⅲ、IV、V、IX号窯縦断面セクション実測。
- 20日 Ⅲ～V号窯灰原土手セクションはずし始める。Ⅷ号窯実測。
- 21日 Ⅲ～V号窯の灰原土手はずし。Ⅲ～V、X号窯写真撮影。
- 22日 Ⅲ、IV号窯割り付け。V号窯半分。I号窯実測。I号窯上方の焼土坑を掘る。南半
分はなく、小さい。壁はよく焼けているが、底は赤変していない。須恵器2片出土。
23地点ユンボ掘削。
- 23日 I号窯跡実測。V、VI、X号窯割り付け。
- 25日 VI、IX、X号窯割り付け。V号窯右の土器溜実測。Ⅶ号窯実測開始。
- 26日 V号窯右土坑実測。Ⅲ、IV、VI、X号窯実測。
- 27日 I、IV、VI、IX号窯跡実測。
- 28日 I、V、IX号窯実測。I号窯は断面見通し。V、IX号窯は平面図。
- 30日 VI、Ⅶ、Ⅷ号窯エレベーション。
- 5月6日 Ⅲ、IV、VI、X号窯実測。Ⅱ、VI号窯断面見通し。
- 9日 IV、X号窯実測。
- 21日 現地説明会準備。14時から現地説明会。約70名参加。
- 23日 土器運搬。
- 24日 IV、VI、IX号窯跡実測。
- 25日 実測。

- 26日 Ⅲ号窯跡実測。
- 27日 Ⅲ号窯跡実測。
- 28日 北コミュニティーセンターの収蔵庫へ土器運搬。
- 30日 Ⅲ、Ⅴ号窯跡実測終了。Ⅳ、Ⅸ号窯跡たちわり。
- 31日 Ⅳ、Ⅸ号窯跡たちわり。
- 6月4日 Ⅶ号窯跡、SK02実測。Ⅳ、Ⅴ、Ⅸ号窯跡たちわり。
- 6日 SK02実測終了。SK01平面実測終了。Ⅰ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅶ号窯跡たちわり。（Ⅴ号窯跡はほぼ終了）
- 7日 SK01、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ号窯跡実測。Ⅵ号窯跡は焚口部両側に石を用いて補強している。写真撮影後はずしてみることにする。Ⅱ号窯跡は焼成部上部床面下に灰層があり、更にピットがある。何のためか。Ⅰ、Ⅲ、Ⅶ、Ⅸ号窯跡たちわり。
- 10日 Ⅵ、Ⅶ号窯跡実測終了。Ⅸ号窯跡舟底状ピットを除いて終了。Ⅵ、Ⅸ号窯跡たちわり。写真撮影。全景、Ⅰ、Ⅲ～Ⅶ号窯跡。
- 11日 Ⅰ号窯跡上部のピットを掘る。写真撮影。実測。Ⅸ号窯跡舟底状ピットを掘る。写真撮影。実測。12地点終了。
- 13日 12地点から23地点へ器材運搬。テント設営。23地点清掃開始。窯跡2基あると考えていたが、1基は灰のつまったピットかもしれない。
- 14日 窯跡掘り終わる→写真撮影。土坑掘り終わる→写真撮影。全体清掃→全体写真。
- 15日 割り付け。BM移動。Na22→Na23。実測終了。試掘。一部移動。
- 16日 地形測量。50cmコンタ。たちわり。
- 17日 地形測量終了。窯跡たちわり後の実測。テント撤収。Na23地点終了。
- 30日 6地区表土除去作業開始。急斜面のため機械を頂部まであげるのに苦労している様子であった。伐採された樹木は、いずれも雑木で植林された痕跡は見られない部分であった。
- 7月1日 6地区表土除去続行。
- 2日 6地区表土除去続行。
- 3～12日の間に6地区および1地区の表土除去が一応完了。
- 13日 本格調査開始。6地区遺構検出開始。丘陵北上部で合計3基の窯跡が並んでいるのを確認。さらに炉跡1基を確認。なお遺物の出土状況から対面丘陵にも窯跡の存在が考えられる。
- 14日 1地区の調査開始。遺構検出作業。2基の窯跡と1基の灰原を確認。北側の窯跡をⅠ号窯跡、南をⅡ号窯跡、と命名する。なお灰原はⅢ号窯跡とする。Ⅰ号窯跡窯体内セクションの設定。内部からの遺物はいずれもⅢ号窯灰原のものである。

- 6 地区遺構検出作業続行。
- 15日 6 地区遺構検出作業続行。Ⅰ、Ⅱ号窯跡窯体内セクションの設定。なお北からⅠ、Ⅱ、Ⅲ号窯跡と呼称。Ⅰ号窯跡窯体内セクション写真撮影、実測。
1 地区Ⅱ号窯跡窯体内セクションの設定。他遺構検出作業続行。
- 16日 6 地区Ⅱ号窯跡窯体内セクション写真撮影、実測。Ⅲ号窯跡窯体内セクションの設定。窯跡周辺清掃作業。下方灰原遺物採集。
1 地区Ⅰ、Ⅱ号窯跡窯体内セクションの除去。遺構検出。Ⅲ号窯灰原遺物採集。遺構検出作業。
- 17日 6 地区反対斜面伐採開始。Ⅰ、Ⅱ号窯跡窯体内セクション実測。除去。遺構検出。
1 地区Ⅰ、Ⅱ号窯跡写真撮影。割り付け作業。12地区の遺物採集作業。灰原のみではあるが調査が完了後であり、機械力によらねばならない状況であった。
- 18日 6 地区反対斜面伐採作業。1 地区Ⅰ、Ⅱ号窯跡実測開始。6 地区窯跡検出作業。12地区遺物採集。
- 19日 6 地区反対斜面伐採作業。1 地区Ⅰ、Ⅱ号窯跡実測。6 地区Ⅰ、Ⅱ号窯跡実測。12地区遺物採集。
- 20日 6 地区反対斜面伐採作業。1 地区Ⅰ、Ⅱ号窯跡実測。6 地区Ⅰ、Ⅱ号窯跡実測。12地区遺物採集。
- 21日 6 地区反対斜面伐採作業。1 地区Ⅰ、Ⅱ号窯跡実測。6 地区Ⅰ、Ⅱ号窯跡実測。12地区遺物採集。
- 22日 6 地区反対斜面伐採作業。1 地区Ⅰ号窯跡たちわり作業。Ⅲ号窯跡前庭部ピットを確認。当該部分にセクションを設定し、観察を行う。遺物は今回調査域では最も遡るものである。
6 地区灰原検出作業。12地区遺物採集。
- 23日 6 地区各窯跡実測作業続行。12地区遺物採集作業。
- 24日 1 地区平板測量作業。6 地区各窯跡実測作業続行。12地区遺物採集作業。
- 25日 1 地区平板測量作業。6 地区各窯跡検討作業。12地区遺物採集作業。6 地区灰原遺物採集作業。7 地区伐採作業。
- 26日 1 地区平板測量作業。6 地区灰原遺物採集作業。6 地区平板測量作業。7 地区伐採作業開始。2 地区遺構検出作業。12地区遺物採集作業。
- 27日 1 地区平板測量作業。6 地区灰原遺物採集作業。6 地区平板測量作業。7 地区伐採作業。2 地区遺構検出作業。12地区遺物採集作業。
- 28日 1 地区平板測量作業。6 地区灰原遺物採集作業。6 地区平板測量作業。土坑検出作業。7 地区伐採作業。実測割り付け、実測作業 2 地区遺構検出できず。

29日 6地区灰原遺物採集
作業。6地区平板測
量作業。土坑検出作
業。7地区伐採作業。
実測、のちたちわり
開始

30日 6地区平板測量作業。
たちわり（煙道部）
写真撮影。各地区ビ
デオ撮影を行う。

7地区伐採完了、表
土除去作業。

31日 6地区反対斜面の窯
跡検出、写真撮影、
実測。1地区たちわ
り実測（Ⅱ号窯跡）。
7地区表土除去作業。

8月1日 6地区灰原遺物採集、
土坑検出作業。7地
区窯跡検出、遺物採
集。1地区たちわり
実測（Ⅱ号窯跡）。

2日 6地区Ⅲ号窯跡下層
窯の検出作業。灰原
の検討。7地区窯跡
検出。1地区たちわ
り実測（Ⅱ号窯跡）。

3日 6地区灰原検討作業、
土坑検出作業。実測
作業、7地区窯跡実
測、灰原セクション
実測。

4日 7地区窯跡実測作業。



図6 調査状況（7地区）



図7 考古地磁気サンプリング風景



図8 現地説明会風景

平板測量。6地区灰原セクション実測。窯跡実測作業。

5日 7地区窯跡実測作業。平板作業。6地区灰原セクション実測。考古地磁気サンプリング。

6日 7地区全景写真撮影。現地説明会（参加者約300名）。器材搬収。

以降、遺物を大谷女子大学資料館へ搬入し、そこで遺物整理作業。

大野城の窯跡群で初出土

「調」納税裏付け

片に「和銅」奉明記

として納める

銘文入り大甕片出土

納税者の名、年号刻む

初8世紀
順
経済実態知る手掛かり

大野城の窯跡群で初出土の「調」納税裏付け片に「和銅」奉明記として納める。銘文入り大甕片出土。納税者の名、年号刻む。初8世紀順。経済実態知る手掛かり。

銘文入り須恵器片出土

8世紀の納税申告書

片朝廷への献上を実証

大野城市・ハセムシ窯跡群

大野城市・ハセムシ窯跡群。8世紀の納税申告書。片朝廷への献上を実証。銘文入り須恵器片出土。

須恵器

8世紀から税に

大野城市 重要な陶片へ 破片に詳細な文字

須恵器に「和銅」刻む

「納税」示す最古級資料

大野城市。須恵器に「和銅」刻む。「納税」示す最古級資料。8世紀から税に。大野城市。重要な陶片へ。破片に詳細な文字。

図9 8月5日朝刊の朝日・毎日・フクニチ・西日本・日本経済・読売新聞（順不同）の記事

第2章 位置と環境

1. 概 観

ハセムシ窯跡群は牛頸窯跡群の一支群で、群中でも南部に属する。牛頸窯跡群は大野城市大字牛頸、上大利を中心に北は春日市、東は太宰府市の一部を含む九州最大規模の窯跡群で、福岡平野の南側周辺部に存する。福岡平野は西南部を背振山塊、東部を月隈丘陵に限られ、北は博多湾に面する。中央部を那珂川、御笠川が北流する。御笠川の支流の一つに牛頸川がある。流れは短いが流域には多くの遺跡があり、上流域の低い丘陵の連なる一帯が牛頸窯跡群である。博多湾まで直線で13km、太宰府政庁跡まで4kmの地点である。

福岡平野及びその周辺は埋蔵文化財の宝庫として知られているが、周辺の山裾部と、那珂川、御笠川に挟まれた細長い低丘陵上（那珂台地）に立地するものが多い。

先土器時代について見れば、石器の出土した遺跡は比較的多くあげられるが、明確な包含層、遺構の検出されたものは少ない。主なものでは諸岡遺跡、井尻B遺跡、野多目拈渡遺跡、門田遺跡、柏原遺跡等である。これらはナイフ形石器文化期、細石刃文化期のものである。

縄文時代もそれほど良好な遺跡は見当たらない。しかし、西南部に位置する柏原遺跡では草創期・早期・前期のまとまった土器が出土している。また、門田遺跡でも押型文・爪型文等の資料が見られる。遺構が確認されなくとも押型文等の破片出土は各地で知られているので、当該期にも人々が生活していたことは明らかである。晩期になると水田跡が確認された板付遺跡が知られる。低台地上の環濠集落に近接する低湿地での発見であった。この時期を弥生早期とする説も出されている。

弥生時代の福岡平野を簡単に記述するのは容易ではない。板付遺跡では環濠や袋状竪穴から夜臼式土器と板付式土器が混在して発見されている。那珂台地の先端部には比恵遺跡群、板付遺跡の近くには朝鮮系無文土器の出土した諸岡遺跡がある。那珂台地は春日丘陵へと続くが、その先端部は須玖岡本遺跡である。調査は適宜行われており、近年甕棺から細型銅剣が出土した。また、近くの須玖永田遺跡からは小型仿製鏡の鋳型が発見され注目をあびた。春日丘陵はまさに弥生の宝庫で、伯玄社、一の谷、大谷、大南など著名な遺跡が多い。この周辺では青銅製品はもちろん鋳型も多く出土していて、奴国の有力者の下で集中的な青銅器生産が行われていたことを考えさせる。弥生時代の遺跡は東部月隈丘陵及びそれに連なる低台地にも多く知られている。宝満尾遺跡、金隈遺跡、中・寺尾遺跡等である。また、御笠川流域の低位面でも貨布を出した仲島遺跡が知られている。

時期、性格によらず網羅的に遺跡名をあげたが、弥生時代の福岡平野は中国史書に言う奴国

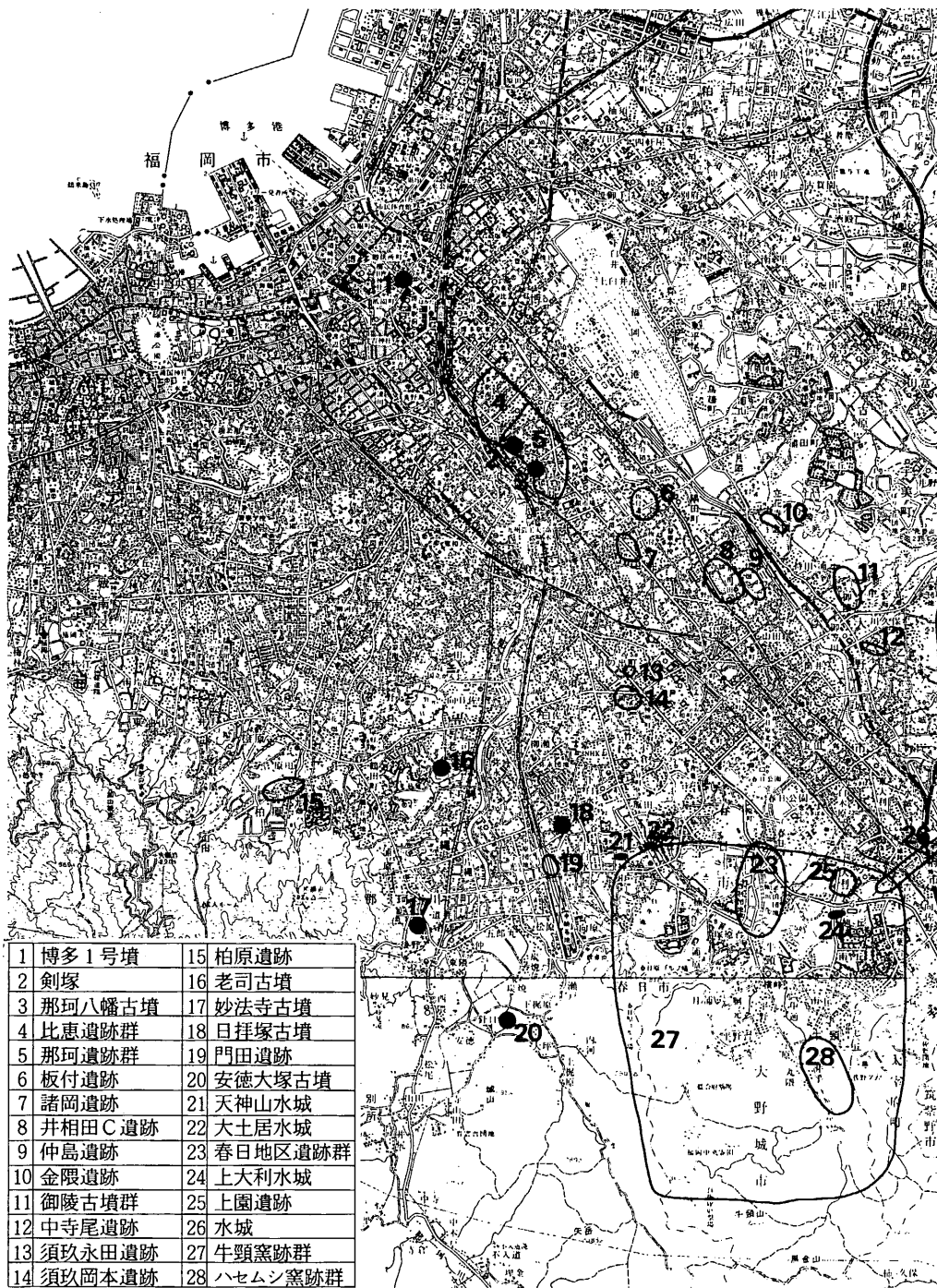


図10 福岡平野の主な遺跡 (1/10万)

の範囲と考えられる。しかし、牛頸には弥生時代の遺跡が知られていない。

古墳時代では、那珂川流域の両側に多くの前方後円（方）墳が知られ、福岡平野の支配層の奥都城が主にその一帯であったことがわかる。那珂台地上の那珂八幡古墳は撥型墳丘を持ち、主体部から三角縁神獣鏡を出し、最古式の古墳として注目される。また上流左側の妙法寺古墳は前方後方形をし、やはり三角縁神獣鏡を出している。その他安徳大塚、老司古墳、日拝塚などが首長墓系列の古墳として知られるが、博多の市街地の下から見つかった博多1号墳は5世紀前葉の築造で全長60～65mと推定される前方後円墳である。また、那珂八幡古墳よりやや上流右岸でも5世紀末葉と推定される井尻B1号墳が発見され、周囲には低墳丘の古墳らしきもののもの埋葬施設が多数あり、古墳時代初頭に墳墓群が形成され始めたらしい。他に古墳時代前期の低墳丘墓群としては那珂川上流域の炭焼き、油田、井河古墳等、東側月隈丘陵に位置する大野城市御陵古墳群がある。また5世紀代の古墳として上記以外にあげられるものは那珂川右岸の原古墳群、御笠川右岸の笹原古墳などである。後期の群集墳ではやはり那珂川上流右岸の観音山古墳群、月隈丘陵の持田ヶ浦古墳群、乙金古墳群があり、前2者は百基以上の群である。古墳時代の集落については那珂台地上、那珂川上流域、御笠川流域に多く知られるが、牛頸に集落、古墳が形成され始めるのは5世紀後半で、須恵器生産が始まるのは6世紀中頃である。筑紫の国造磐井の乱の後であるのは関連があるものと考えられる。

歴史時代に入れば、大宰府を抜きにして福岡平野の歴史は語れない。現在の政庁跡は白村江以後のもので、前身は那津官家としてもっと博多湾の近くにあったと考えられるが、その候補地として最も有力だったのは地名から見ても福岡市三宅（那珂川西岸）であった。しかし、そこから北に3kmの那珂台地上の比恵遺跡群の調査で整然とした柵、倉庫群（6世紀後半～7世紀前半代）が検出され、我然注目をあびることとなった。西暦663年白村江での敗退以後、唐・新羅の侵攻にそなえ平野部には水城を、大野山には大野城を築いて大宰府の防衛に当たることになる。奈良時代になると西国一の都会となって中央から多くの官人が来たことは周知の事実である。牛頸でも7世紀後半奈良時代の小型の窯が他の時期の窯跡に比べて圧倒的に多く見られる。製品の大半は大宰府へ貢納されたものであろう。

後述するように今回の調査では和銅6年と刻まれた須恵器片が出土したが、それには「筑前国奈珂郡手東里」の地名が見える。倭名類聚抄によれば筑前国には怡土、志摩、早良、那珂、席田、御笠、糟屋、宗像、遠賀、鞍手、穂波、夜須、上座、下座、嘉麻など15郡が記され、那珂郡には田来、日佐、那珂、良人、海部、中島、三宅、山田、板曳の郷名が見える。牛頸は御笠郡内に含まれると考えられていたが「奈珂郡」と刻まれているからにはその考えを見直すべきなのか、それとも他地域からの依頼によるものなのか検討しなければならない。また「手東里」は現在のどこに当たるのかも考えていかなければならない。更に文字の中には「筑紫前国」と刻まれたものもあるが、文献上筑前国の初見は『続日本紀』文武天皇2年（698年）3月条、

筑後国の初見は『日本書紀』持統天皇4年(690年)10月条で筑紫国が筑前国・筑後国に分かれたのは7世紀最末期頃と考えられていた。従って和銅6年(713年)はそれから相当時間を経過しているにもかかわらずなぜそのような書き方をしたのかも検討していかなければならない問題である。

福岡平野に展開する遺跡について概観したが、以下各時代にわたって主要な遺跡のいくつかについて概略を記したい。

2. 各時代の主要遺跡

1) 先土器時代

諸岡遺跡

所在地 福岡市博多区諸岡

那珂川と御笠川にはさまれ、那珂台地の東側にある独立丘陵上に立地する。昭和10年代から遺跡として知られ、工事等によって多数の甕棺、貝輪、細形銅剣が出土している。発掘調査によって、先土器時代～中世の遺跡であることが判明した。弥生時代前期末の土器(板付Ⅱ式)

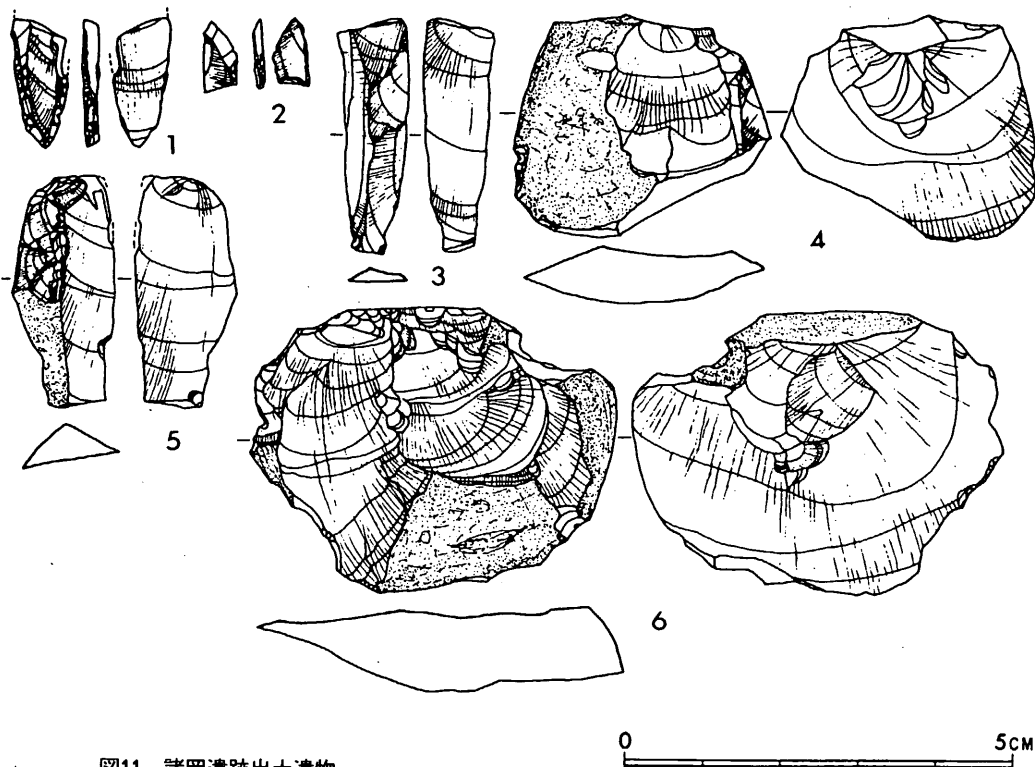


図11 諸岡遺跡出土遺物

『板付周辺遺跡調査報告書』より

と無文土器が共伴して出土したことは注目される。

さて、先土器時代の遺物はC区・D区の調査中Aトレンチ鳥栖ローム層から出土した。A、B、Cの3群に分けられるが、時期差はない。腰岳産の黒耀石を素材とし、ナイフ形石器、台形石器、削器、彫器、Uフレイク、石核などの組成からなるナイフ形石器群である。ナイフ形石器と台形石器の共伴が注目され、これはナイフ形石器文化最終末に属し、細石器文化に先行する遺跡である。さらにC・D区の北、諸岡館跡の調査でも石器が出土しているが、報告書は両地区間の出土遺物に同一性と相異性のあることを指摘している。

<参考文献>

『板付周辺遺跡調査報告書』(1) 福岡市教育委員会 1974

『板付周辺遺跡調査報告書』(2) 同上 1975

『諸岡遺跡—第14・17次調査報告』同上 1984

門田遺跡

所在地 春日市大字上白水

那珂川の右岸、春日丘陵上の標高31m前後の位置に立地する。2つの台地とそれにはさまれた谷部とからなり、台地は門田、辻田、谷部は谷地区と呼ぶ。先土器時代～古墳時代の遺構が検出されている。

先土器時代の包含層はB11区で確認された。細石刃器を含んでいる。3層は暗茶褐色のローム層で細石刃核、細石刃、スポール、使用痕のある剥片が、4層は灰褐色粘土層で細石刃、剥片が、5層は白色粘土層でナイフ形石器の基部1点が出土している。これより、細刃器の文化層とナイフ形石器の文化層が層位的に分けられた。また、半舟底形細石刃核を有する文化層が確認された。

<参考文献>

『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第3集 福岡県教育委員会 1977

2) 縄文時代

柏原遺跡

所在地 福岡市南区柏原

福岡平野の西を限る油山山塊の裾部にあたり、樋井川上流域の丘陵と沖積地に分布する遺跡群である。河岸段丘に立地するA-2、E、F、K遺跡で草創期に属する撚糸文土器、刺突文土器、条痕文土器などが竪穴状遺構などから出土している。また、前記遺跡に加えてA-1、M遺跡で早期の土器が竪穴状遺構などから出土している。F、K遺跡では炉跡も検出されている。更に、A-2、D、E、K、L遺跡では前期の縄式土器が出土した。中期～晩期の良好な遺跡は存在しなかった。福岡平野でこれだけまとまって縄文時代の遺物、遺構が出土、検出さ

れたことはないので重要な遺跡である。

<参考文献>

『柏原遺跡群 I』福岡市教育委員会 1983

『 同上 IV』 同上 1987

『 同上 V』 同上 1988

門田遺跡

所在地 春日市大字上白水

先述したように、門田、辻畑の2つの台地とそれらにはさまれた谷部からなる遺跡であるが、縄文時代の遺物は谷地区から出土している。弥生時代前期の段階で両台地が削平され、本来包含層に存した遺物が谷地区へ流れ込んだものと思われる。従って残念ながら原位置を保っていない。谷地区で検出された大溝Ⅰからは草創期に属する爪形文土器が2個体、V字溝からは型式不明の櫛目状土器、前期の曽畑式土器、晩期に属する鉢などが出土している。

<参考文献>

『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第11集 福岡県教育委員会 1979

3) 弥生時代

板付遺跡

所在地 福岡市博多区板付

御笠川左岸の微高地上にある。台地は長さ約500m、幅100～150mで東南から西北に横たわる独立した低い丘陵である。大正6年に中山平次郎氏によって銅剣・銅鉾出土遺跡としてはじめて紹介された。戦後になって日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会の発掘調査が1951～54年に行われた。この調査によって環濠、貯蔵穴、井戸が検出され、夜臼式土器と板付Ⅰ式土器との共伴が確認された。また1968～69年の調査で環濠が径100m内外の楕円形をなすことがほぼ確認された。現在では長径110m、短径80mと想定されている。また、1971～74年の調査では、台地西側の沖積地が調査され、前期の矢板列をはじめ台地上に居住した人々によって経営されたであろう水田が検出された。更にF-7a、7b調査区では板付Ⅰ式土器と夜臼式土器共伴の時期の水田とその下層から夜臼式土器単純の時期の水田が検出され、稲作開始期の遺跡としてますます重要性を帯びることになった。現在整備に向けての調査が開始されている。

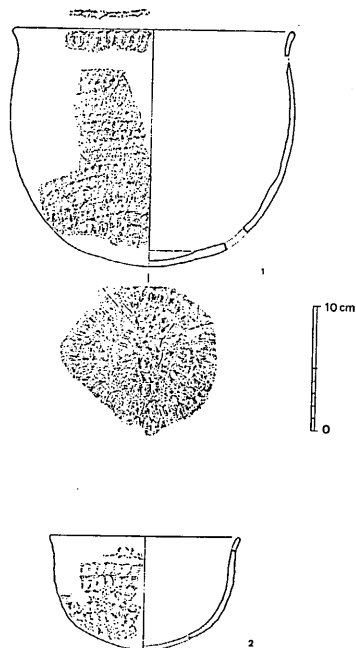


図12 爪形文土器実測図

『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第11集より

<参考文献>

『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編 1961

『板付一市宮住宅にともなう発掘調査報告書』福岡市教育委員会 1976

『板付周辺遺跡調査報告書』(1)～(13) 福岡市教育委員会 1974～1987

須玖岡本遺跡

所在地 春日市大字須玖

春日丘陵北端部に位置する。明治32年(1899)、台地中央部の支石墓とみられる大石の下、甕棺から30余面の前漢鏡をはじめ銅剣・銅矛・ガラス璧などが発見された。正式な発掘調査は昭和4年(1929)、京都大学によって行われている。その際も甕棺11基、細型銅剣1本が見つかった。昭和37年(1962)、九州大学の調査では甕棺19、銅戈・細型銅剣・鉄刀・ガラス勾玉・小玉が出土した。54年(1979)には福岡県教委が、61年(1986)には春日市教委が調査を行い、後者では細型銅剣1本が出土している。その他、工事等によって多くの青銅製品、鋳型等の出土が伝えられるが、それらの所在については明らかではない。甕棺の分布については、大石のあった周囲には少なく、やや離れて群集しているようである。また、近年遺跡の北東に位置する須玖永田遺跡から仿製鏡の鋳型片が出土して、岡本四丁目遺跡から出土した小銅鐸鋳型とも考え合わせれば須玖岡本遺跡、及びその周辺の弥生時代における重要性が再認識させられる。

<参考文献>

『筑前須玖史前遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告 1930

『福岡県須玖岡本遺跡』福岡県教育委員会 1963

『須玖岡本遺跡』福岡県教育委員会 1980

『須玖岡本遺跡』春日市教育委員会 1980

『須玖永田遺跡』春日市教育委員会 1987

※その他春日市教育委員会平田定幸氏ご教示

中・寺尾遺跡

所在地 大野城市大字中

御笠川中流右岸の低位段丘上に立地する。独立丘陵の観を呈するが四王寺山塊から伸びた丘陵の先端部にあたる。弥生時代前期から古墳時代にわたる墓地と集落遺跡であるが、特に弥生時代前期～中期中頃までの土坑墓群と甕棺墓群が有名である。土坑墓と前期の甕棺には小壺が副葬されていたので前期でも前半は土坑墓、後半は甕棺墓、そして中期は甕棺墓と時期によって違いのあることが明らかになった。また2次、3次の調査によって弥生時代中期の集落、古墳時代の集落の存在も明らかとなった。

更に、谷をはさんだ東側の丘陵上には森園遺跡がある。変電所によって大きく削られている

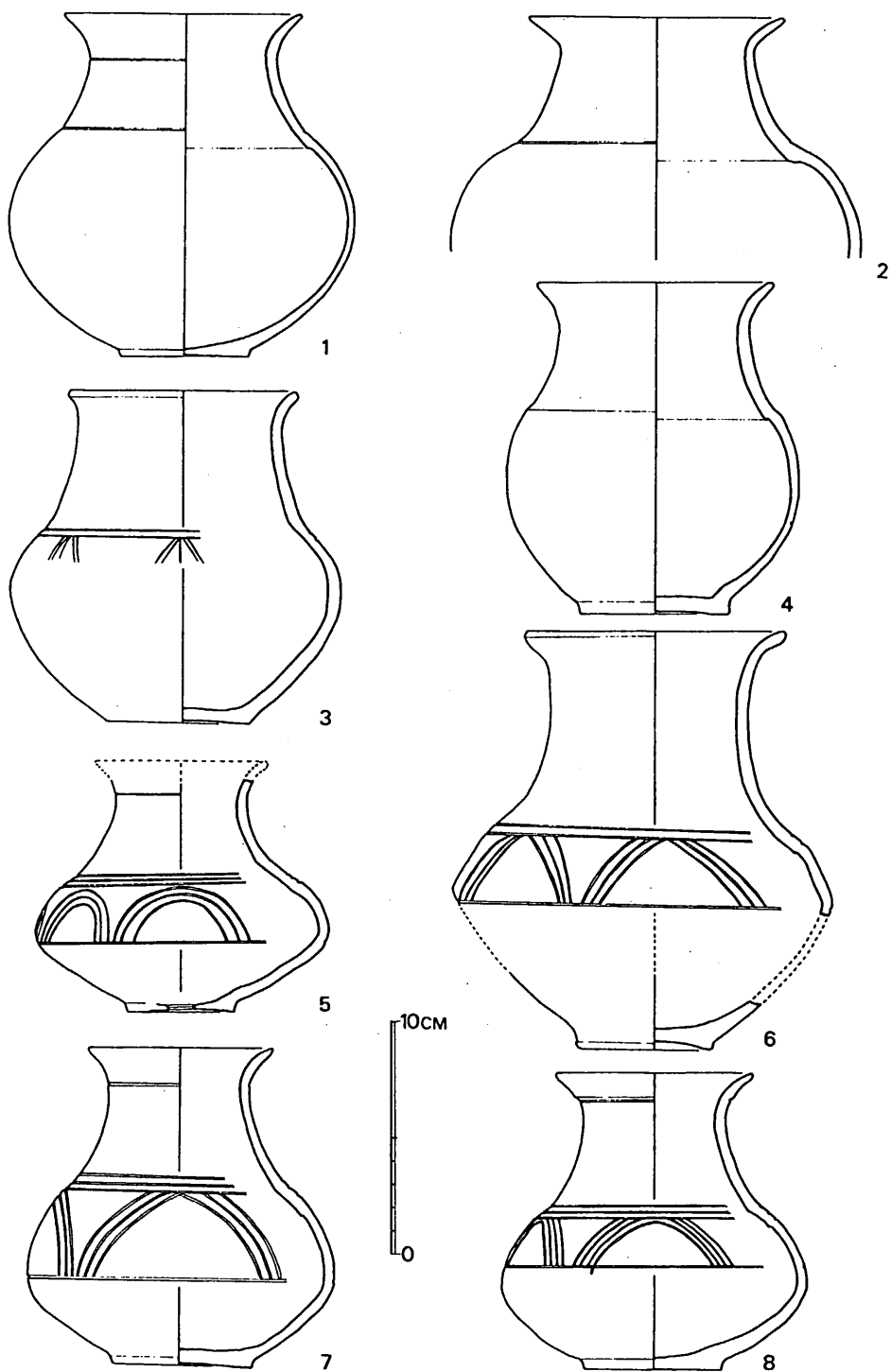


図13 II区土墳墓副葬土器実測図『中寺尾遺跡』より

が弥生時代中期の住居跡24軒と甕棺墓44基、土坑墓8基、木棺墓3基、箱式石棺墓3基が調査されている。また、中・寺尾遺跡がのる丘陵の延長線状にあるヒケシマ遺跡でも中期の甕棺1基と集落の一部を検出している。

<参考文献>

『中・寺尾遺跡』大野町教育委員会 1971

『中・寺尾遺跡』大野城市教育委員会 1977

仲島遺跡

所在地 大野城市仲畑、福岡市博多区井相田

御笠川中流左岸の沖積地に立地する。かつてはしばしば洪水に襲われた水田地帯にあり、遺跡の立地には不適當と思われていた場所である。昭和53年福岡市教育委員会によって発見され、大野城市でも昭和54年以来継続して発掘調査を実施している。既に土地区画整理事業が終了しており、長方形の小区画ができあがっている。従ってその区画ごとの小規模な調査ということになり、全体的な把握がしにくい状況である。弥生時代から鎌倉時代の遺構までが確認された。弥生時代では中期初頭～後期の遺構が検出されている。住居跡も相当数検出されているが、溝も数条あり、環濠集落になる可能性をもつ。また遺物の点では後代の遺構や包含層からではあるが貨布、青銅製鋤先、銅鏃、銅鏡片、銅鉾鋳型片などが出土しているが、本来弥生時代に属するものと思われる。拠点的とまで言えるかは疑問であるが、重要な遺跡であることはまちがいない。

<参考文献>

『仲島遺跡』Ⅰ～Ⅶ 大野城市教育委員会 1980～1988

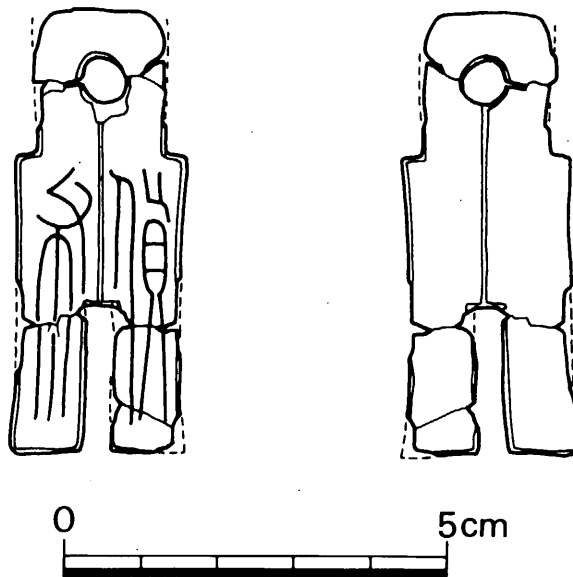


図14 貨布実測図

4) 古墳時代

那珂八幡古墳

所在地・福岡市博多区那珂大字宮の脇

福岡平野の中部の那珂台地上に立地する。那珂川と御笠川が最も接近する場所である。付近には比恵遺跡群、那珂遺跡群が広がる。古墳としてはすぐ北に6世紀後半代の築造と考えられ

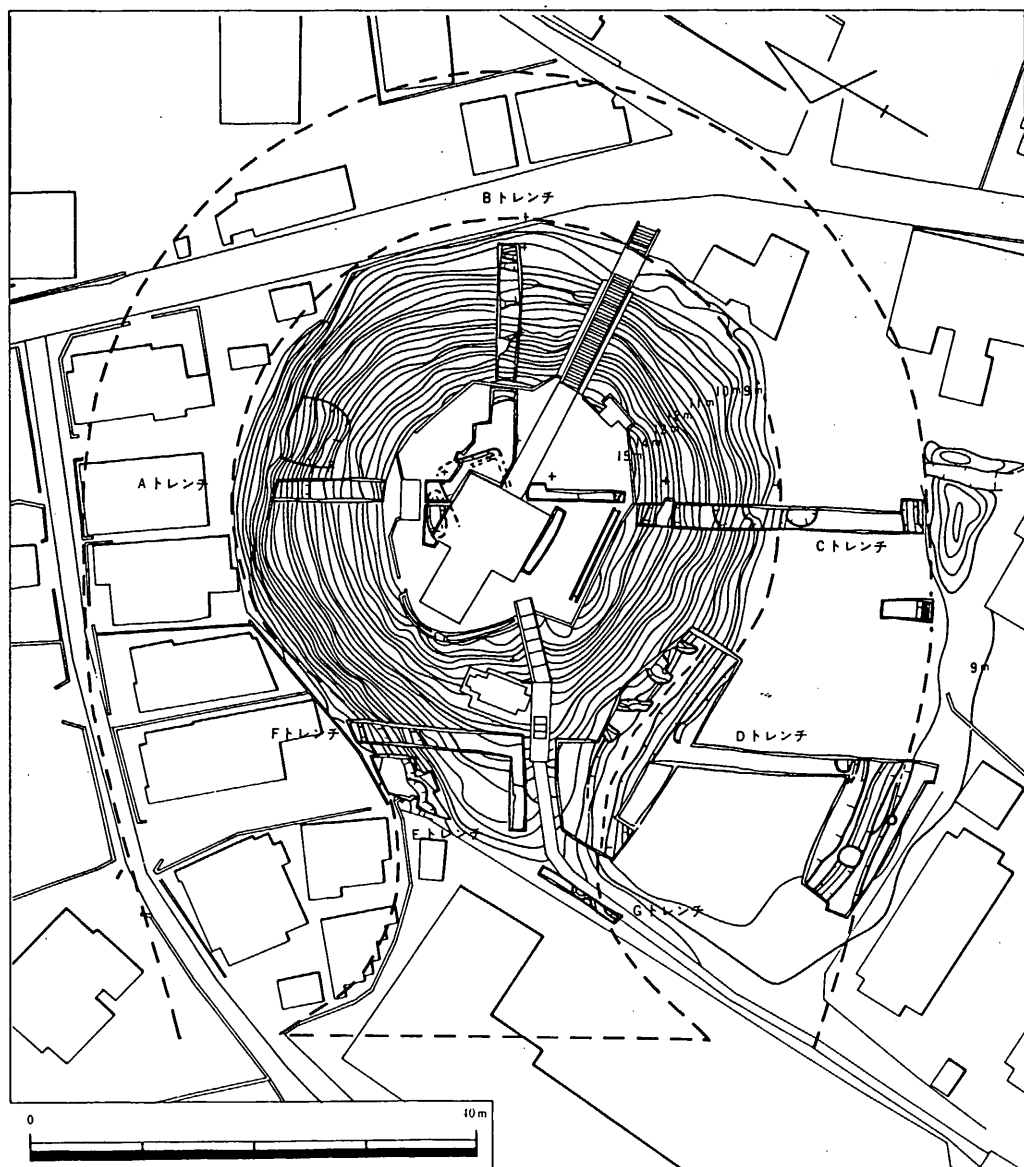


図15 那珂八幡古墳測量図『那珂八幡古墳』より

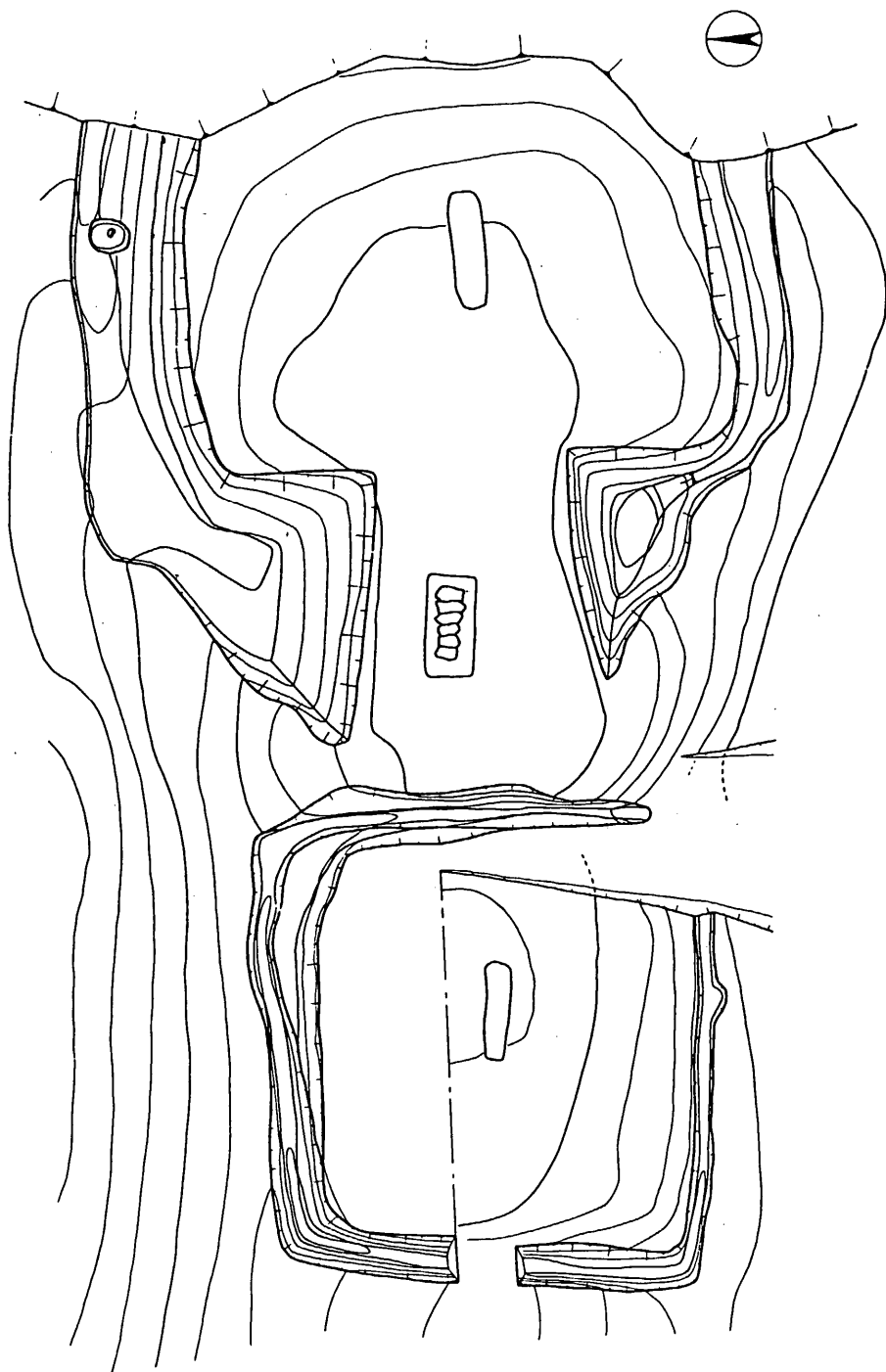


図16 妙法寺古墳2・3号墳(S=1/150)『妙法寺古墳群』より

る剣塚古墳、那珂台地の更に北に博多1号墳、南には5世紀後半の井尻B1号墳などが知られる。那珂八幡古墳は前方部が宅地化によって削られているため明確ではないが、撥形を呈する前方後円墳で、推定全長75m、後円部径48～50m、後円部の周溝底からの比高差6.5m、前方部との比高差4.5mを測る。後円部墳頂部には2基の主体部が検出された。1号主体部は八幡宮の社殿のため構造、規模を明確にできなかったが、2号主体部は割竹形木棺墓で、南壁に接して三角縁五神四獣鏡の出土を見た。他には同じく2号主体部から硬玉製勾玉1、碧玉製の管玉2点、ガラス製小玉1点、第2主体部上位から土師器高杯3点、器台1点が出土している。報告者はこの土師器を布留式土群併行期の土器と考えている。周溝は不明確ながら前方部を除く三方に巡る盾形が推定できる。このように、本古墳は箸墓古墳と同形状をとり、古墳時代初頭に位置づけられる可能性の大きい古墳である。

<参考文献>

『那珂八幡古墳』福岡市教育委員会 1986

妙法寺古墳群

所在地 筑紫郡那珂川町大字恵子

那珂川中流域左岸で標高47mほどの低丘陵上に立地する。付近には油田古墳群、大万寺前古墳、イボリ古墳等バラエティに富んだ古式古墳が密集している。北には老司古墳、南東には安德大塚、東にはウトロ古墳、天神山古墳、北東には日拝塚古墳など前方後円墳、前方後方墳が多く、福岡平野の奥都城である。2号墳は低い盛土を持つ前方後方墳で、全長18m、後方部一辺11.5m、くびれ巾4m、前方部先端巾6m、周溝巾1.5m、最大比高差2m、くびれ部深さ1m、主軸方向N-85°-Eである。主体部は後方部中央に割竹形木棺（第1主体部）、前方部に箱式石棺（第2主体部）があった。前者からは三角縁六神四獣鏡、勾玉、管玉、丸玉、鉄斧、鉈、刀子が、後者は棺外から鉄鎌が出土した。3号墳は10.3×9.5m（溝の外側まで）の方墳で木棺を主体部に持つ。主体部から遺物は出土しなかった。年代については、2号墳、3号墳周溝からの出土土師器から柏田Ⅱ期、4世紀後半～5世紀前半に考えられている。2号墳第1主体部、3号墳、2号墳第2主体部の順に造られたと考えられている。ただし、絶対年代については、論者によってよりさかのぼる場合もある。

<参考文献>

『妙法寺古墳群』那珂川町教育委員会 1981

御陵古墳群

所在地 大野城市大字中

御笠川右岸の月隈丘陵西側に位置する。月隈丘陵自体標高100～150mと低いが、そこから西あるいは西南に向けて小丘陵が多く派生している。そしてそれらには弥生時代の甕棺墓や古墳が多く立地している。御陵古墳群もそれらの1つで、昭和56年～57年（1981～1982年）にかけ

て発掘調査を行った。調査した丘陵は2つで北丘陵、南丘陵と称した。2つとも基部が切れていて独立丘陵の観を呈していた。南丘陵では6基の古墳と1基の木棺墓が検出された。このうち2号墳、4号墳、6号墳が古式の古墳で、特に6号墳の場合、墳頂部とやや下がった地点の2ヶ所からそれぞれ箱式石棺墓、木棺墓が検出された。前者の棺外から鉄製鍬先、棺内から鉄鍬が、後者の棺内から長宜子孫内行花文鏡片、ひすい勾玉、鉄剣が出土した。6号墳を破壊して6世紀後半代に横穴式石室を持つ1号墳が造られているため墳形が不明であるが、前方後円墳の可能性もある。北丘陵では8基の古墳が検出された。8号墳は6世紀後半～7世紀頃の横穴式石室を持つ古墳であるが、その他は割竹形木棺、箱式石棺、石蓋土坑墓、土坑墓、組合式木棺墓、甕棺墓、など多様な主体部を持つ古式古墳である。また、石塚山古墳と同関係を持つ三角縁四神四獣鏡が御陵古墳出土鏡として大野城市教育委員会に保管されているが、これは南丘陵の更に南の丘陵から出土した可能性がある。古式の群集墳として重要な遺跡である。

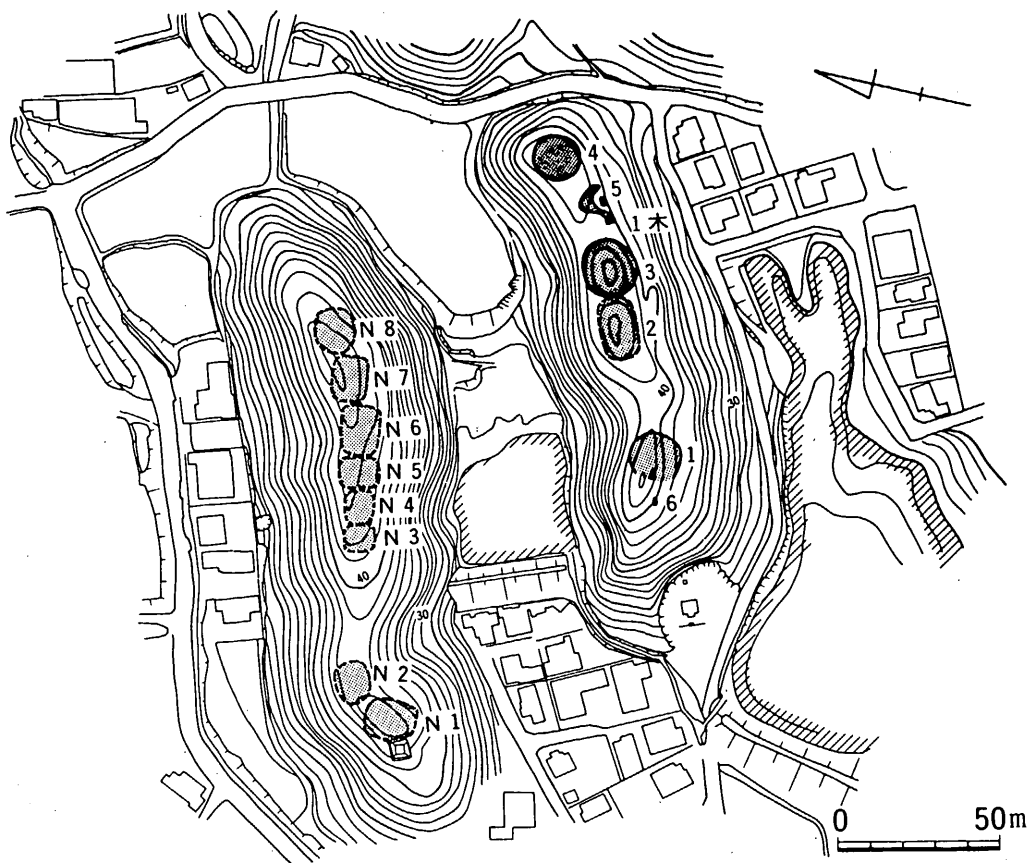


図17 御陵古墳群地形図『御陵古墳群』より

<参考文献>

『御陵古墳群』大野城市教育委員会 1984

観音山古墳群

所在地 筑紫郡那珂川町大字中原

那珂川上流域の右岸で観音山の西から北にかけての斜面に立地する。付近には古式の前方後円墳である安徳大塚、炭焼古墳群、北には前方後方墳を盟主とするウトロ古墳群がある。合計260基以上が全部で12の支群に分かれて分布している。それらは6世紀前葉～7世紀中葉まで少しづつ時期を変えて形成されている。新幹線車両基地、都市計画道路、病院、区画整理事業等の事前調査によって100基を越える古墳が調査されている。新幹線車両基地の建設に先だつ調査では(中原支群第Ⅲ群)、古墳どうしの切り合いや墓道の迂回状況などから単位群を求めている。都市計画道路や病院建設に伴う中原支群第Ⅳ群の調査では39基の古墳が検出され、小石室、竪穴系横口式石室、横穴式石室が見られ、立地等も含めA・B2群に分けられている。そしてこれらは時期を異にしているという。

<参考文献>

『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第5集 福岡県教育委員会 1978

『観音山古墳群』那珂川町教育委員会 1980

『観音山古墳群』 同上 1982

『観音山古墳群』 同上 1986

比恵遺跡群(那津官家候補地)

所在地 福岡市博多区博多駅南4～6丁目

那珂台地北端部に位置する。西側を那珂川、東側を御笠川が流れる。博多駅のすぐ南にあって、既に市街化され、元の地形を可視的にとらえることは不可能である。再開発事業に先だつての調査が17次にわたって行われ、多大の成果を収めている。この一帯では先土器時代ナイフ形石器文化期の遺物が出土していて、その頃から人が住み始めたことがわかる。弥生時代には福岡平野の拠点集落に成長したと考えられている。第6次調査では中期前葉の甕棺内から細形銅剣が出土した。そして弥生時代後期には環濠集落となった。古墳時代になると遺跡は台地全域に広がり、那珂遺跡群と分けるのが困難な状況となる。6世紀後半になると大規模な掘立柱建物群、柵列が造られる。第7・8・13次調査地点で検出されているのがそれである。第8次調査では7棟の総柱建物と柵状遺構が検出された。柵状遺構は、隅丸長方形の布掘りの掘り方、1.2m間隔に3本の柱を据えたものを一組としたもので、12間分、延長37.2mにわたって検出された。建物は3間×3間の総柱で5棟と2棟に分けられる。第7・13次調査はそれらから300mほど離れた場所で行われ、全長26.6mの9×2間の東西棟建物と、その両側にとりつき北に延びる柵状遺構が検出された。これらの遺構の年代については明確な資料に欠くが、6世紀後

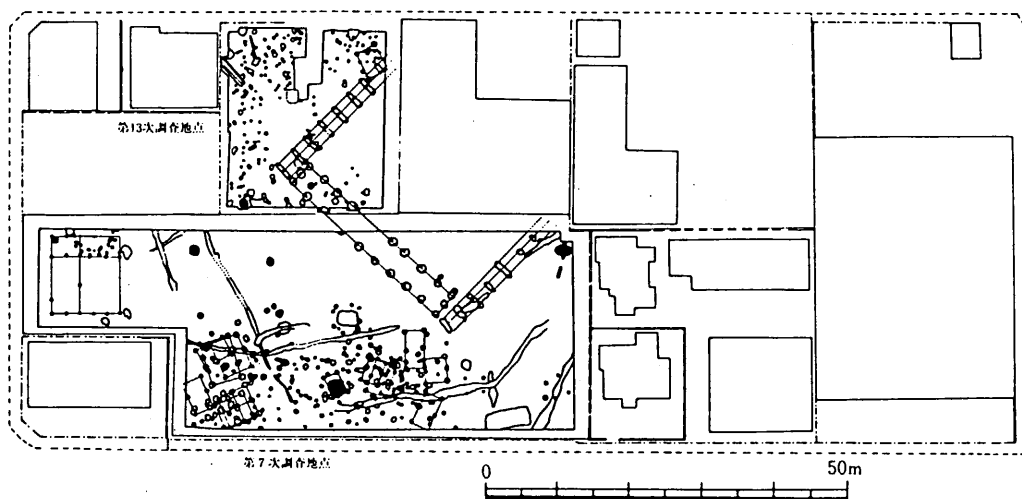


図18 比恵遺跡第7・13次調査遺構配置図『比恵遺跡群(8)』より

半から7世紀後半頃と考えられている。建物群の性格としては「那津官家」の有力な候補と考えられるのではなかろうかとされている。

<参考文献>

『瑞穂』日本住宅公団 1980

『比恵遺跡―第6次調査・遺構編』福岡市教育委員会 1983

『比恵遺跡―第8次調査概報』同上 1985

『比恵遺跡―第7次調査』同上 1985

『比恵遺跡―第6次調査・遺物編』同上 1986

『比恵遺跡―第9・10次調査報告』同上 1986

「比恵遺跡―第11次調査」『中部地区埋蔵文化財調査報告Ⅱ』同上 1987

『比恵遺跡群(8)』同上 1988

柳沢一男「福岡市比恵遺跡の官衙的建物群」『日本歴史』第465号 1987

仲島遺跡

所在地 大野城市仲畑

先述したように弥生時代～鎌倉時代の複合遺跡である。古墳時代の遺構としては竪穴住居跡、大小の溝、井戸等が検出されているが、多数あるピットも一部はこの時期になる可能性を持つ。当該期の遺構で注目されるのは大溝と呼んでいる溝である。上端幅約3m、底部幅0.8m、深さ1.5～1.7mを測るものである。調査が部分的であるため詳細は不明であるが集落をとり囲む可能性もある。内側に当たる側壁が2段掘りされている部分がある。遺物は下層からは6世紀後半、上層からは奈良時代のものが多く出土している。また、馬歯が何地点かで出土している。

この溝はどのような性格を持つものなのかは今後の調査に期待したい。また、4世紀代と考える土師器を出土した溝、5世紀前半代のものと思われる井戸や竪穴住居跡も検出されている。

上園遺跡

所在地 大野城市大字上大利

御笠川の支流である牛頸川はその源を牛頸山に発するが、牛頸山からは北に向けていくつかの丘陵が派生している。そして、その丘陵は小支谷をいくつも抱え、多くの窯跡が築かれることになった。丘陵と丘陵の間は谷として川と狭い平地部となっている。上園遺跡は、牛頸川の流れる谷とは丘陵をはさんで東側に位置する。小河川である平田川の造り出した河岸段丘上に立地する。牛頸に入るには北の春日から牛頸川添いに入る谷と、大野城市から平田川ぞいに入る谷と、東側の太宰府から入る佐野の谷とがあるが、それらの中央の谷に位置すると言えよう。上園遺跡に調査の手が加えられたのは昭和60年（1985年）からである。以前から須恵器片、土器片の散布地として知られていたが、発掘調査の結果、古墳時代後期、平安時代の集落であることが判明した。まだ調査範囲が狭いため、古墳時代では4軒の竪穴住居跡が検出されただけであるが、1軒が5世紀後半、3軒が6世紀中頃のものである。後者は九州の須恵器編年でⅢA期（陶邑Ⅱ型式第1～2段階）のものであるが、この時期は牛頸で須恵器生産が開始された時期に当たる。また、住居跡出土遺物を見ると須恵器生産と密接なつながりのある集落と考えられ、今後の調査に期待するものが大きい。

＜参考文献＞

『上園遺跡Ⅰ』大野城市教育委員会 1986

『上園遺跡Ⅱ』同上 1987

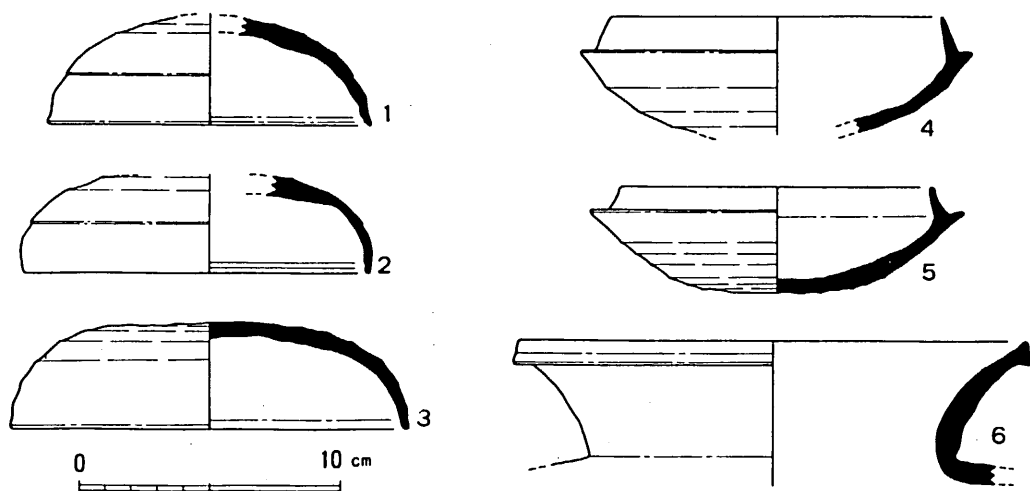


図19 上園遺跡出土遺物実測図『上園遺跡Ⅱ』より

春日地区遺跡群

所在地 春日市大字春日

牛頸川中流域に当たり、土地区画整理事業に先だって調査された遺跡群の総称である。縄文時代から平安時代までの遺構が知られる。縄文時代の遺構はそれほど検出されなかった。弥生時代では前期の住居跡、貯蔵穴群、木棺墓等が見られる。しかし、中・後期には甕棺墓、石蓋土坑墓が少し見られる程度である。古墳時代に入っても牛頸に窯が築かれるようになるまで決して遺跡は多くない。しかし、それ以後は牛頸窯跡群の範囲にとり込まれ、窯跡は6地点29基、集落は7地点と極端に多くなる。中で、16地点円入遺跡は5世紀、6世紀中頃の竪穴住居跡が

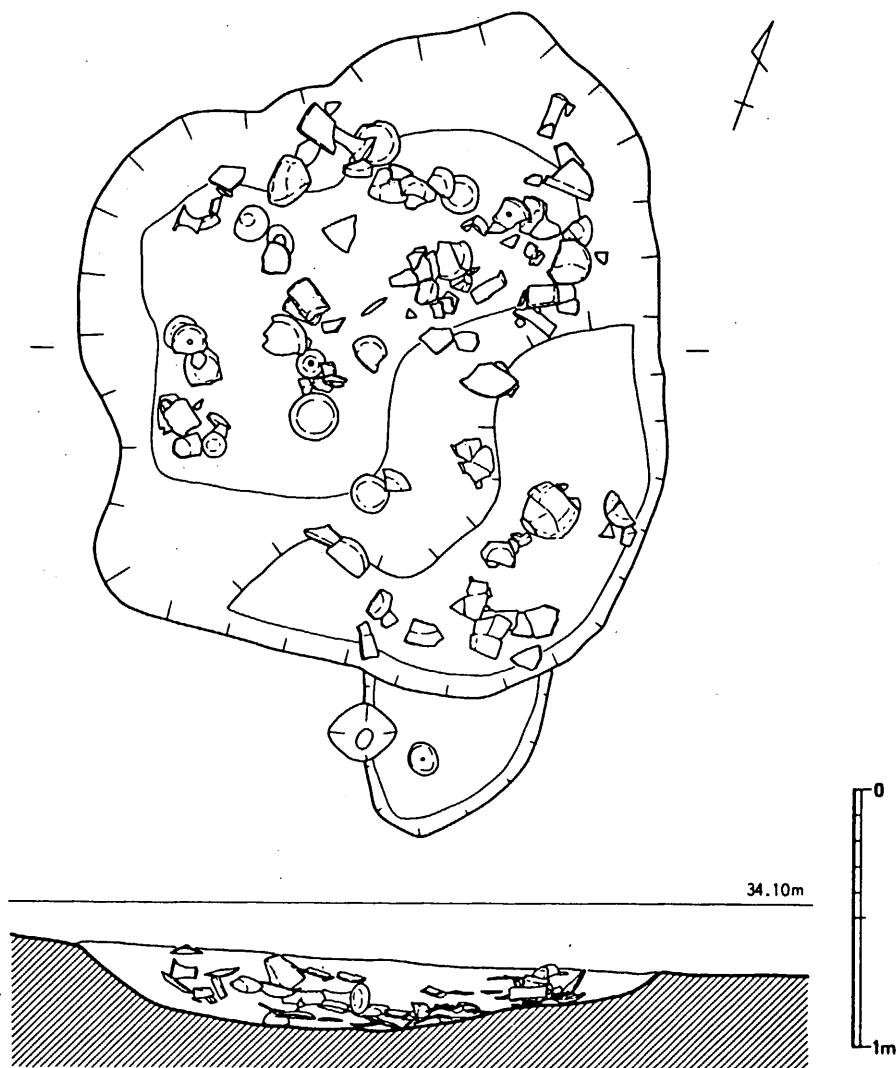


図20 春日地区遺跡群惣利北遺跡3号土坑『春日地区遺跡群Ⅳ』より

検出され、牛頸窯跡群成立前と成立頃の集落であることがわかった。また10地点惣利西遺跡では15軒の住居跡が検出されたが、居住に不適当な急斜面に立地すること、土師器より須恵器が多いこと、焼け歪みや溶着したものが多いことなどから須恵器生産に深く関与していたことが想定されている。その他、牛頸窯跡群と関連の深いものが多く今後の検討がまたれる。

＜参考文献＞

『春日地区遺跡群』Ⅰ～Ⅴ 春日市教育委員会 1982～1987

5) 歴史時代

御笠地区遺跡（^{あしきうまや}蘆城駅家比定地？）

所在地 筑紫野市大字吉木及び阿志岐

福岡平野の範囲からはずれるが、太宰府の南、宝満山に源を発する宝満川流域の狭長な平野部に位置する。県営圃場整備に伴い広範囲な発掘調査が行われたが、そのうちA地区のA—I区では住居跡2、掘立柱建物9、土坑2、溝状遺構3条が検出された。掘立柱建物は孫庇のつく2間×5間の建物を始め、総柱建物も含む。桁行方向に違いが見られるので何棟かず時期

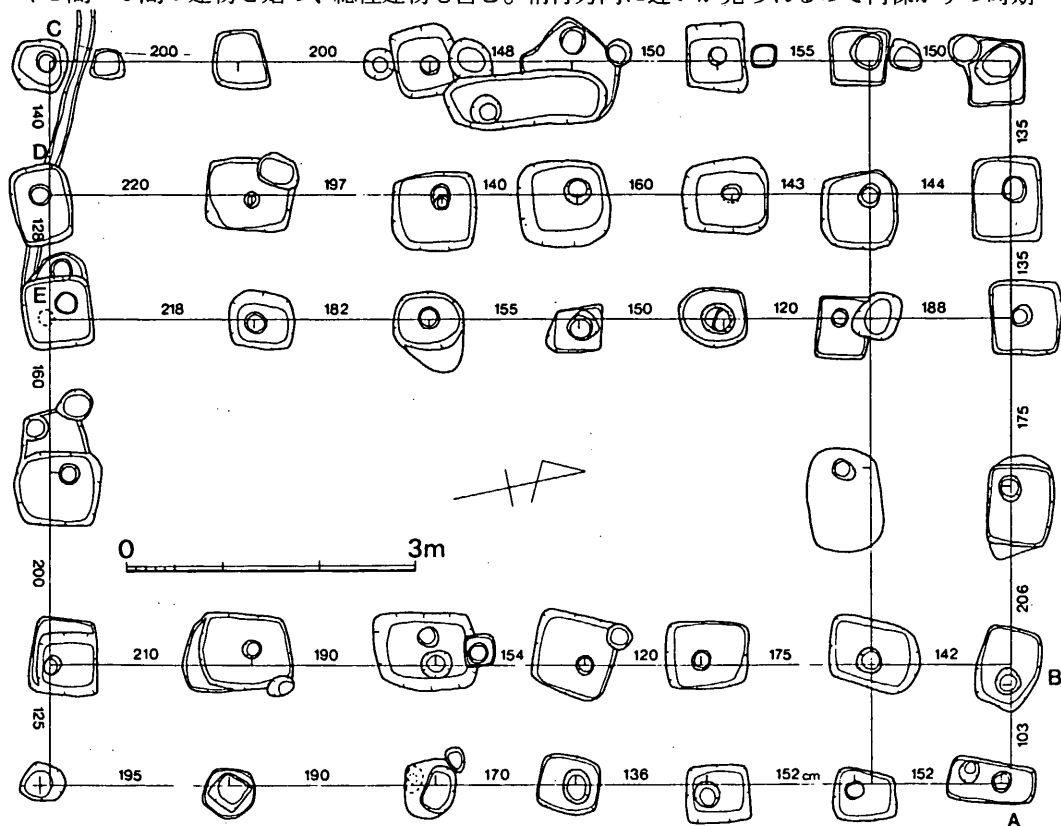


図21 御笠地区遺跡SB01実測図『御笠地区遺跡』より

を変えて建てられたものであろう。柱穴出土遺物は7世紀後半～8世紀のものである。これらの建物について、報告者は蘆城の駅家と強い関連があるものと考えている。蘆城は大宰府から米の山峠を越えて筑豊方面へとぬける官道の最初の駅家の所在地である。ただこの駅家は『令義解』や『延喜式』には見えず『万葉集』に収められた神亀・天平年間の9首の歌によってのみ、その存在が知られるものである。そして、ここは交通制度上の駅としてよりも、むしろ好景の地にあって大宰府官人達の宴の場としての性格が強かったらしい。

<参考文献>

『御笠地区遺跡』筑紫野市教育委員会 1986

井相田C地区

所在地 福岡市博多区井相田2丁目

仲島遺跡の西方300mに位置する。新聞社や中学校の建設に伴って広範囲な調査が行われている。I次調査では42棟の建物、4基の竪穴住居跡、3基+αの土坑墓、46基の土坑、1条の大溝、その他溝や柵列、畑等が検出された。そして、報告者は8世紀前半～10世紀初頭までVI期に分けて集落の構造を考えようとしている。2次調査では奈良時代～平安時代の遺構として掘立柱建物2、竪穴住居4棟、井戸2基、土坑6基、溝5条などが検出されたが、他に鎌倉時代の遺構として青磁碗を出土した土坑墓、更に室町時代の池、溝、水田が検出された。そして池からは大量の柿経（こけらきょう）が出土している。井相田C遺跡は間に浅い谷をはさんで仲島遺跡と接している。調査によって同一の遺跡として考える必要がでてきた。仲島遺跡では一般の集落のものとは考えられない奈良時代の井戸が検出されたり、人面墨書土器が出土したりしている。公的な施設を考える必要があろう。

<参考文献>

『井相田C遺跡Ⅰ』福岡市教育委員会 1987

『井相田C遺跡Ⅱ』同上 1988

『仲島遺跡Ⅰ～Ⅶ』大野城市教育委員会 1980～1988

(舟山良一)

第3章 牛頸窯跡群研究史

1. はじめに

牛頸窯跡群において初めての本格的な発掘調査が行なわれたのは、昭和43年のことである。それからまる20年が経過した現在、その編年と生産をめぐる諸考察がいかに成立し展開したかをふり返ることによって、牛頸窯跡群研究の“越し方行く末”を考えてみる時期が来ているのではないだろうか。研究史の目的がその批判と継承にあることは論をまたないが、ここでは網羅的に過去の調査・研究を取り上げることによってそのながれを概観してみたい。

研究史の構成は調査・研究の画期を意識したかたちとし、また後半には各窯跡群の概要を報告書に即してまとめ、研究の一助として付した。なお時期区分・絶対年代等の記載は、基本的に個々の文献における報告に従っている。

2. 研究前史

(1) 須恵器研究の展開

九州地方における須恵器の編年の研究の端緒をひらいたのは、1953年刊行の『對馬』¹⁾である。樋口隆康氏は、後期古墳に普遍的にみられる須恵器が編年研究の尺度として最も適当なものであるという観点から、西日本地域の古墳から出土する須恵器についての4期分類を提示された。この影響は九州にとどまらず、須恵器編年の体系化に対する最初の試みとして大いに評価されている。

その後、樋口氏は1958年刊行の『世界陶磁全集』において再び須恵器編年を取り上げられ、先の編年が全国的大綱を示すにとどまった点を指摘し、地域を九州・中国・畿内・中部以東の4つに分けたうえで、新たに5期編年を提唱されている²⁾。また同書において、かねてより窯跡出土資料を編年の材料とすべきことを主張されていた森浩一氏は³⁾、和泉河内窯（陶邑他）の資料を用いて古墳時代を中心とした5期ないし6期区分の編年を発表された⁴⁾。これに対し、檜崎彰一氏も猿投西南古窯跡群出土遺物を用いた4期区分の平安時代の須恵器編年をまとめられている⁵⁾。これらの研究によって、地域に即した須恵器研究と窯跡出土資料を重視する方向が確立したといっていよい。

1959年には『世界考古学体系』第3巻が刊行され、横山浩一氏による古墳時代を中心とした4段階9様式の編年が発表された⁶⁾。このなかでは飛鳥寺・川原寺出土須恵器を資料として、実年代の比定もなされている。これによって、古墳などの消費遺跡出土遺物による須恵器の編

年は、ほぼ完成の域に達したといえる。奈良時代以降の編年は、1961年刊行の『世界考古学体系』第4巻において、楢崎彰一氏がすでに公表されていた猿投山窯跡群出土の資料を中心に、3段階8様式の区分を示されている⁷⁾。以降、須恵器の編年および諸研究は、陶邑・猿投を中心として進展していくことになる。

(2) 九州地方の動向

このような研究の展開を受けて、九州地方における須恵器の研究も進展をみせはじめる。1959年以降の小田富士雄氏らによる「九州古式須恵器集成」⁸⁾や三島格氏による「肥後の須恵器資料」⁹⁾は、編年の基礎として、まず資料の充実をはかったものである。

編年の研究では、1960年に原口長之氏が発表された肥後における編年試案¹⁰⁾や、1964年の小田富士雄氏による豊前の編年試案¹¹⁾がその最も早いもので、九州地方をさらに細分した古代の国単位での地域編年の確立を目的としている。後者において小田氏は、窯跡資料の重要性を意識されながらも、この時点において九州地方の須恵器窯跡の調査がほとんど行なわれていなかったことから、『對馬』にはじまる古墳出土品を中心とした編年方法を準用された。ここで、「窯跡調査が進んでくるにつれて、それらの資料を加えて随時補足修正してゆく方法」が提唱されている点は重要である。樋口編年を踏襲するかたちで提示されたこの5期区分編年(V期はA・Bに2分)は後の九州における須恵器編年の基盤となり、現在に至るまでその影響は少なくない。また絶対編年の基準として、継体天皇の21年(527)に反乱を起こし、翌年誅せられた筑紫国造磐井の墓に比定される岩戸山古墳の須恵器を、Ⅱ期に比定されている点も注目すべきものであろう。

(3) 窯跡編年の成立

畿内においては、田辺昭三氏によって1966年に『陶邑古窯址群』Ⅰ¹²⁾が刊行され、以降の窯跡出土資料の編年的研究に大きな影響力をもつこととなった。

九州地方における窯跡出土資料を用いた編年(以後、窯跡編年と略す)の嚆矢は、1968年からにはじまる福岡県八女市所在八女窯跡群の調査である¹³⁾。1969年刊行の『塚ノ原窯跡群』において、小田富士雄氏は前述の豊前の編年試案に準ずるかたちで、Ⅲ～Ⅵ期の窯跡編年(ただしⅣ期はブランクのまま)を示された。編年の進展としては、Ⅲ期がA・Bに区分され、Ⅴ期から高台を付した杯・ⅤBを分離、Ⅵ期を設定したうえでA・B・Cに3区分したことがあげられる。この報告は、九州における窯跡編年の端緒として大いに評価されるべきものである。また実年代として、Ⅲ期を6世紀中葉から後半に及ぶ時期、Ⅴ期を6世紀終末から7世紀前半にかけての時期、Ⅵ期を7世紀後半台を中心とする時期にそれぞれ比定されている。しかし、その根拠が必ずしも明らかにされていない点は今後にまちたいと思う。

八女窯跡群の調査は1971年に終了し、1972年刊の『立山山窯跡群』では八女古窯跡群の総括が行なわれた。編年に関しては、真野和夫氏によって各期のメルクマールおよび器種のセット

関係が明らかにされ、また新たに蓋の口縁の屈曲によってⅦ期をA・Bに区分されている。Ⅳ期は資料の欠如から空白のままとされ、ⅢB期に宝珠つまみ付の杯蓋が含まれている点は注意を要する。また小田氏は窯体構造・立地条件の時期的変化について触れ、Ⅲ・Ⅴ～ⅥB・ⅥC期をそれぞれの単位として窯体が小型化していくこと、Ⅲ期半ばより窯跡が山腹から尾根近くの高所に移動していくこと等を示唆されている。さらに氏は、八女古窯跡群で生産された須恵器の流通範囲が広くみても筑後地域をこえるものではない点を指摘し、須恵器生産者集団が筑紫国造のもとで季節的に生産に従事する家父長制的な世帯共同体を形成していたという見解を示されている。この見解は須恵器生産の政治的背景に言及したものとして注目されよう。

一連の八女窯跡群の報告においては、上記以外にも、古墳との需給関係・埴輪生産の問題・考古地磁気による年代推定などに関する考察が行なわれており、当時の研究の水準を示すものである。ここにおいて筑後地域の須恵器編年が一応の確立をみたため、以後の九州地方における須恵器編年は、ほとんどがこれを踏襲することになる。

3. 牛頸窯跡群における研究

(1) 研究の成立

ところで、牛頸窯跡群における須恵器研究はどのように始まり、また展開したのであろうか。中山平次郎氏によって牛頸に須恵器窯址が存在することが確認されたのは、大正時代のことである。その蒐集資料は現在九州大学に保管されており、小田富士雄氏によって8世紀に比定されているが¹⁴⁾、以後昭和40年代にいたるまで研究の空白期が続くことになる。

1966年の小田氏による「九州地方古代窯址地名表」¹⁵⁾にその名前が掲載され、再び窯跡群の存在が注目されて以降、高度成長期の影響を受けた宅地造成の波が牛頸窯跡群一帯にも押し寄せるようになり、開発を前提とした調査が急速に進むことになった。同年には、福岡県教育委員会により分布調査が実施され、以後の窯跡群調査の基礎となっている¹⁶⁾。

翌年刊行の『日本考古学』Ⅵ巻¹⁷⁾において、小田氏は奈良時代以降急激に増加して大群集を形成する筑前の窯跡として、宗像郡宗像町河東字須恵・筑紫郡大野町牛頸の二つを挙げ、両者を『延喜式』に記載された筑前国における須恵器調納を実際におこなった生産地として比定されている点は重要である。

開発が進むなかで、1968年6月には福岡県教育委員会の渡辺正気・柳田康雄両氏により、牛頸窯跡群における本格的発掘調査としては初めて大浦窯跡群の調査が行なわれた。大浦2号窯においては、小田編年ⅣB期からⅤ期にかけての須恵器と瓦が同時生産されていたことが明らかになり、出土瓦の年代や造瓦技法のうえからも注目された。この調査の内容は、後に刊行された『野添・大浦窯跡群』¹⁸⁾に併録されることになる。

同年12月国土館大学大川清氏によって、東浦窯跡群の調査が行なわれた。報告書が未刊のためその詳細は不明であるが、調査された3基は3本の煙道をもち後ろ側に排水溝を付設する窯体構造をとり¹⁹⁾、また出土須恵器の時期は小田富士雄氏によってIV期に比定されている²⁰⁾。これら窯からは7世紀前半の須恵器とともに若干の瓦の出土をみているという。

翌1969年小田富士雄・真野和夫氏等によって野添窯跡群の調査が行なわれ、その調査内容は後述する1970年刊行の『野添・大浦窯跡群』に収録された。

同1969年12月には、再び大川氏によって大谷窯跡群が調査された。未報告ではあるが、1971年発行の『大野町の文化財』第2集²¹⁾によってその概略を知ることができる。確認された6基のうち4基についての調査が行なわれ、そのうち2基は3本の煙道、1基は6本の煙道と焚口側面の石組をもつ特異な窯体構造をしている。前者からは6世紀後半から7世紀前半と思われる須恵器が出土し、また後者は7世紀後半から8世紀初頭のもので大宰府との需給関係が指摘されている。

1970年に刊行された『野添・大浦窯跡群』²²⁾は、牛頸窯跡群の重要性を学会に紹介するとともに、筑前における須恵器編年の嚆矢として以後の研究に与えた影響の大きさの点で、特に重要なものである。真野氏による牛頸窯跡群の須恵器編年は、先行調査されていた八女窯跡群に比べIV期の資料が得られた点が特徴的で、窯跡出土資料を使ったⅢA～V期の編年図が提示されるとともに、新たにIV期においてA・Bの小区分がなされている。また大浦2号窯が瓦陶兼業窯として注目されることから、V期にみる生産の画期が瓦生産の開始と結び付いていること、瓦の始源が畿内と異なり寺院の造営と必ずしも関係のないこと、などの見解が小田氏によって提示されている。その他にも、窯体構造や立地条件の時期的変容についての考察など興味深い報告が行なわれており、ここにおいて牛頸窯跡群の研究は本格的な成立をみたといっていよう。

(2) 研究の展開

1971～72年にかけて、大野城市教育委員会は遺跡分布地図作製のため牛頸地区の踏査を行い、70数基が確認された。この調査に伴い、新たに発見された窯跡から採集された遺物の一部が、1974年に『九州考古学』²³⁾に紹介されている。採集地は現在のハセムシ窯跡群内と思われ、遺物は奈良時代に属するものと考えられている。

1972年、福岡県教育委員会によって上平田窯跡群の調査が行なわれた。その内容は1980年刊の『牛頸中通遺跡群』²⁴⁾に収録されることになる。

同年8月に坂詰秀一氏によって調査された平田窯跡は、1974年刊行の『筑前平田窯跡』²⁵⁾において報告された。坂詰氏は窯構造の変化についてふれているほか、ヘラ記号を認識材料として大宰府近辺への供給を関連づけたうえ、供給範囲把握の一方法として提示されている。

同年10月には、福岡県教育委員会によって向佐野・長浦窯跡の調査が実施され、1975年「向

佐野・長浦窯跡の調査」²⁶⁾として報告された。亀井明德氏は、この時点の牛頸窯跡群においては小田氏が八女古窯跡群で編年されたⅦ期とされる資料が少なく、Ⅴ期以前のものに比してその編年が明確ではないことに言及し、ⅥB・Ⅶ期該当の近在消費遺跡および窯跡から出土した資料を使用して歴史時代Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3期区分編年を提唱された。また大宰府出土の須恵器から実年代を求め、Ⅰを7世紀後半、Ⅱを8世紀前半から後半、Ⅲを9世紀を中心とした時代に当てている。生産遺跡である牛頸窯跡群と消費遺跡である大宰府の深い関連に注目し、歴史時代における筑前地方独自の編年を示されたことは、当該窯跡研究上の一つの画期である。

この時期の畿内で注目されるのは、1976・77・78年に刊行された『陶邑』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ²⁷⁾において、中村浩氏が従来の田辺氏による陶邑編年を継承しながらも、同一の窯において複数回の操業があることから、窯跡名を型式名とすることに疑問を呈し、床式編年を提唱されたことである。これによって窯跡編年の細分化は、頂点に達したといえる。消費地の編年としても、1978年に刊行の『飛鳥・藤原宮調査報告』Ⅱ²⁸⁾に、西弘海氏による飛鳥Ⅰ～Ⅴの編年が提示され、窯跡編年とは様相を異にする実態が明らかにされた。これらの研究は、以後の須恵器編年に大きな影響力をもつことになる。

1976年から77年にかけて、立正大学坂詰秀一氏により小田浦窯跡群の調査が行なわれた。報告書は未刊であるが、その概要は1977年の『大野城市の文化財』第9集²⁹⁾、および1978年発表の「福岡県小田浦窯跡の調査」³⁰⁾によって知ることができる。調査された4基のうちA-1・2、B-1号窯は、多孔式煙道や排水溝状の施設をもつ特異な構造をしており、また焚口部周辺のピットから小屋掛け施設の存在が推測されるなど注目すべきものである。両書のなかにおいて上野精志氏は、牛頸窯跡群をその地形から5支群に大別する見解を示された。月ノ浦から小田浦・大谷・石坂を中心とした平野川の両岸丘陵地帯を平野川支群、牛頸川両岸の中通や道ノ下・ハセムシ・東浦などを牛頸川支群、野添・上大利・大浦・平田などの一帯を上大利支群、牛頸丘陵北端地帯を春日支群、太宰府町に含まれる大佐野・長浦などを大佐野支群とするものである。支群のとらえ方は須恵器工人の使用経路を谷道とするか尾根道とするかによって異なるが、川の流路を中心としたこの分類は、それまでの小字名による分類に比べ合理的なものといえるだろう。

1977年発表の「御笠川東岸における須恵器の編年について」³¹⁾において、酒井仁夫氏は御笠川西側に位置する牛頸窯跡群に対して、東岸にある古墳・窯跡・住居址から出土した資料によって、小田編年をベースとしたⅡ～Ⅵ期の編年を発表された。小田編年ⅥB・Cは大宰府都府楼跡において共伴するとの指摘は、窯跡編年を消費地において検証したものとして注目される。また陶邑や飛鳥・藤原宮などの畿内編年との対応によって実年代を比定、Ⅰ期を5世紀後半から終末、Ⅱ期を6世紀前半、ⅢA期は6世紀中葉に、ⅢBは6世紀後半、Ⅳ期は6世紀末、Ⅴ期を7世紀初頭から前半に、ⅥA期を7世紀前半代とされている。先の亀井明德氏の歴史時

代における編年とあわせ、両者とも純粋に窯跡出土の資料によって構成されるには至っていないものの、野添・大浦窯跡で提示された編年の欠を補い、筑前編年の概略が明らかになったと
いって過言ではない。

(3) 調査の増加

この頃より開発を伴う調査が急増し、窯跡の発掘も、現在に至るまで年間数地点づつの割合で進行する状況をむかえた。これによってもたらされた資料は膨大な量となっており、その整理・研究が当面の課題となっている。

牛頸窯跡群で生産された須恵器の需要先としては、1978年に木下修氏が観音山古墳群出土の資料において、各窯跡群の出土遺物との比定をされている³²⁾。

1978年度調査、翌年刊行の『神ノ前窯跡』³³⁾では、模骨や成形台を使用せず土器の製作技法を用いて作られた瓦の出土が報告され、小田編年ⅣAの須恵器との共伴関係から、大浦2号窯よりさらにさかのぼる6世紀末の九州における瓦の初源をしめすものとして注目された。また酒井仁夫氏は、この時点で従来の九州の須恵器編年の扱いに関して、研究者の間に相違が生じていることを指摘されている。

小田富士雄氏は1979年の『世界陶磁全集』³⁴⁾において、それまでの九州における須恵器編年の成果を、陶邑を中心とする畿内編年と対照させながら総括されている。なかでは1期から9期にいたる編年が提示されているが、各々の窯跡群における特殊性等はあまり考慮されていないため、従来の編年観を大きく進展させるものではなかった。

1980年に刊行された『牛頸中通遺跡群』³⁵⁾において、1972～73・79年調査の中通古墳群・同窯跡群・上平田窯跡の報告が行われた。中通古墳群が須恵器生産者集団の支配者層のものであるという指摘は重要で、また古墳出土の須恵器はそのセット関係が良好な点から、窯跡出土の資料同様に等閑視できないものである。副島邦弘氏は、正式調査の開始後10年間の回顧として研究史をまとめられ、さらに窯体構造を6世紀後半までのA、6世紀後半から7世紀前半頃のB、7世紀後半以降のBに3分類し、その変化と工人集団の関係について考察されている。また工人集団による古墳の築造は、その集団内部に階層分化が生じた結果、工人集団の位置が部民制から分離され族長層の枠からもはみ出した傍証とする見解は、牛頸窯跡群の須恵器生産者集団の在り方について論じたものとして意味深い。

1979年調査、80年刊行の『宮ノ本遺跡』³⁶⁾では1号火葬墓から出土した買地券が報告され注目をあつめた。3基の窯跡の出土遺物から、小田編年ⅥC期の杯蓋に関して若干の検討が行なわれている。

同79年調査80年刊の『牛頸平田窯跡』—D地点—³⁷⁾においては、灰原中より生焼けの杯蓋40個20セットの検出が報告され、舟山良一氏によってヘラ記号の検討が行われた。ロクロの回転は全て時計回りとなるが、記号の施し方の違いが認められることから、一つのヘラ記号が複

数の工人によって共有されているとの考察は、工人集団の構成を考えるうえで一つの手掛かりとなるものであろう。このヘラ記号に関してはさらに山田元樹氏による検討が行なわれ、1988年に発表されている³⁸⁾。

春日市側では、市教育委員会によって1977・78年に初めて窯跡の調査が行われ、81年に『浦ノ原窯跡群』³⁹⁾の刊行をみた。ここでは、小田編年ⅣB～Ⅶ期の良好な窯跡出土の資料が報告されている。また同窯跡群中では、須恵器生産と関連する可能性が高いと思われる掘立柱建物を伴う竪穴状遺構が検出され、須恵器・土師器と共に瓦も出土しており注目される。平田定幸・佐藤昭則の両氏は8基の窯跡における須恵器生産の推移を3期に区分、浦ノ原1期を小田編年のⅣB・Ⅴ期、2期をⅥ期、3期をⅦ期に比定され、実際の出土資料と小田編年が必ずしも適合しない理由を、地域性もしくは各窯個々の特殊性に求められている。また窯の立地が時期が下がるにつれ高位置に移動していくことが報告されており、ほかにも出土瓦に関してその製作技法の多様さから、丸山康晴氏によって試作段階のものではないか、との見解も示されている。

同81年、他に80・81年調査の『牛頸平田窯跡』—E地点—⁴⁰⁾が刊行された。

また同年、春日市教育委員会によって惣利西・春田平田の両遺跡の発掘調査が実施された。未報告ではあるが、狭小な尾根や急斜面に須恵器工人に関連の深い住居址が検出されたことが知られている⁴¹⁾。

1982年、1978・79年調査による『春日地区遺跡群』Ⅰ⁴²⁾が刊行され、惣利窯跡群1号窯の発掘成果が報告されている。

1980・81年調査、82年刊の『牛頸中通遺跡群』Ⅱ⁴³⁾において舟山良一氏は、中通古墳群の築造と追葬状態から須恵器工人の組織についての考察を行なっている。また切りあい関係の認められるD—1・D—2窯跡の出土資料の検討から、小田編年ⅣA・ⅣB期について一系列的な型式差をもとめて単純に先後関係とすることへの疑問を提示されている点も興味深い。

同82年、81年調査の『牛頸平田窯跡』—F地点—⁴⁴⁾が刊行された。舟山氏は、牛頸窯跡群の窯跡数がⅢB期から急に増えること、同古墳群の造営がⅢB～ⅣA期にかけて開始されたこと、ⅢA～Bにかけて福岡平野周辺に複数の窯跡が築かれていたこと、等の理由から須恵器生産がⅢB～ⅣA期にかけて牛頸に地域的に統一され始めたとの見解を提示されている。

同82年、春日市教育委員会によって春日平田北遺跡の発掘調査が行なわれ、15基の須恵器窯跡ほか住居址、古墳等が検出されている。また牛頸川治水ダムの建設に伴い牛頸川上流が広範囲にわたって開発の対象となり、福岡県教育委員会により同年から86年に至るまで井出・道ノ下・足洗川・笹原・長者原の各窯跡群の発掘調査が行なわれた。その成果の一部は、1988年に『牛頸窯跡群Ⅰ』として刊行された⁴⁵⁾。

1979・80年調査の惣利窯跡群2～9号窯は、1983年刊行の『春日地区遺跡群』Ⅱ⁴⁶⁾に収録

された。窯跡に近接して須恵器工人の工房跡とみられる住居址が検出された点は、注目に値する。また9号窯では、数次に及ぶ床面の検討からⅣA・ⅣB期を先後関係とするに足る資料が報告され、『牛頸中通遺跡群』Ⅱにおける報告との関係が問題となっている。

同じ1983年に西村康氏は、器形の変化、器種の交替、窯分布・窯体構造の変化に着目し、地方窯における生産の変遷を検討する対象として、牛頸窯跡群をとりあげられている⁴⁷⁾。まず支群について言及され、地形と窯分布から新たな支群区分を設定された。①牛頸川の谷では大牟田池・惣利・春日平田の窯をあわせた群、②牛頸平田・東浦・中通・ハセムシ・城ノ山・原・井出をあわせた群、③平野川沿いの谷の畑ヶ坂・胴ノ元・月ノ浦・小田浦をあわせた群、④この谷の北の谷に分布する浦ノ原・後田をあわせた群、⑤野添・大浦の谷ではこの2窯跡群に筑前平田・上平田を加えた群、⑥御笠川をのぞむ丘陵では神ノ前・尊田・長浦・向佐野・宮ノ本を合わせた群、⑦平野川谷奥の大谷・石坂をあわせた群、⑧牛頸川谷奥の道ノ下・長者ヶ原・笹原・足洗川をあわせた群、の8つである。これは、前掲の上野精志氏の分類に④、及び8世紀の窯のみが集中する⑦・⑧を付け加えたものとみてよい。西村氏は、①・②・④・⑤・⑥の各支群における操業の在り方が共通することから、生産開始直後から同一集団に属する工人が各群に分かれて生産する形態を推測されるとともに、それが奈良時代初頭においてくずれる点を指摘されており、示唆に富んでいる。また、窯経営において各種技法が混在することから、その技術が陶邑からの直輸入ではなく、すでに生産を開始していた北九州の複数の地からもたらされたとする見解も注目される。牛頸窯跡群の総合的把握に、新しい視点を提供するものであろう。

同83年、春日市教育委員会によって春日平田西遺跡の発掘調査が行なわれ、須恵器窯跡4基のほか住居址等が検出された。

続く1984年には、太宰府市教育委員会による宮ノ本窯跡群5基・篠振窯跡群2基の調査、春日市教育委員会による春日平田遺跡（古墳時代の住居址）・春日平田南遺跡（窯跡1基・古墳）の調査が行なわれている。

1985年には、81年度調査の『春日地区遺跡群』Ⅲ⁴⁸⁾が刊行され、同Ⅱ書に関連の深い6～7世紀の住居址群が報告された。これらは丘陵急斜面に占地し、遺物の殆どが須恵器で不良品を含むこと、多くの住居址で粘土が検出され12号住居址のようにピットに貯蔵した例もみられることなどから、須恵器工人の工房としての機能が注目される。また住居址からは瓦の出土をみており、共伴する須恵器の年代観から大浦2号窯・月ノ浦窯跡・神ノ前2号窯出土の瓦等との比較が行なわれている。

同85年、1983年調査の『牛頸石坂窯跡』—C地点—⁴⁹⁾が刊行された。ここでは8世紀代の資料が報告され、舟山良一氏により大宰府出土記年木簡の共伴資料⁵⁰⁾との比較がなされている。また、杯の法量の分布が、唐尺の4・5・6寸に適合する可能性を示唆されていることも

注意を要する。

さらに同年、『牛頸地区遺跡群』I⁵¹⁾の刊行をみた。このなかにおいては、IV～V期の須恵器とともに鷗尾片・軒丸瓦・軒平瓦が出土した82年度調査の月ノ浦1号窯、ほか83・84年調査の小田浦C—1・D—1・F—1・2号窯が報告されている。

同じく85年には、春日市教育委員会による春日平田地区の調査によって須恵器窯1基が、また大野城市教育委員会の調査によって小田浦窯跡群7基が検出された。

1985・86年度調査、86・87年刊行の『上園遺跡』I⁵²⁾・II⁵³⁾においては、牛頸窯跡群における須恵器生産の開始期とみられるⅢA～B期の集落址が報告され、焼け歪みをもつ須恵器や粘土塊が検出されていることから、春日地区と同様に須恵器工人に関連するものとして今後の調査検討が待たれる。

1986年には大野城市教育委員会により、後田窯跡群16基、野添窯跡群3基の調査が行なわれた。

1987年には、86年度調査の『野添窯跡群』⁵⁴⁾が刊行されている。13号窯跡からは瓦が出土し、時期的にも距離的にも近い大浦2号窯との関係が示唆されている。

同年、春日市教育委員会によってウトグチ瓦窯跡2基の調査が行なわれた。

1988年山田元樹氏は、前掲『牛頸平田窯跡』—D地点—における舟山氏のへう記号に関する考察をうけて工人組織について検討を加えられ、へう記号は工人同志の識別のためではなく、一つの窯を共同で営む複数の工房間の識別に利用された、との見解を示されている⁵⁵⁾。

舟山良一氏は同年刊行の『季刊考古学』24号において、牛頸窯跡群における現時点の問題としてⅢB～Ⅳ期の編年・窯構造・瓦陶兼業窯の3点をあげられている⁵⁶⁾。

同88年『牛頸』⁵⁷⁾・『牛頸窯跡群』I⁵⁸⁾の刊行をみた。前者においては87年調査のハセムシ窯跡群、後者は82～85年度の牛頸川治水ダム建設に伴う井出・足洗川・道ノ下窯跡群の調査についての報告がなされている。

同年、大野城市教育委員会によって井出窯跡群3基の調査が行なわれた。

以上、時間をおって記述してきたが、—3章(3)調査の増加—以降の部分は煩瑣になるため、既報告のものに関してはそれら報告書の刊行年度を中心に構成し、調査年度を併記するにとどめた。御諒承を乞う次第である。

4. 各窯跡群概要

牛頸窯跡群における各支群の名称は小字名を使用しているが、これが合理的でないことは度々指摘されている。本来この項においては、地域ごとの構成を試みるべきところであるが、未だ

新たなグルーピングに関する成文をえていないため、おもに報告の年次、名称区分に従ってその概要を記すこととした。

大浦窯跡群

大野城市上大利字大浦に所在する。福岡県教育委員会により調査され、2基の窯跡が検出された。両窯とも上半部が削平されておりその全長は不明であるが、最大幅が2m以上あることから長大なものと考えられている。1号窯と2号窯の前庭部は重複しており、遺物も1号窯は小田編年Ⅲ期後半からⅣ期後半、2号窯はⅣ期末からⅤ期のもので前後関係が認められる。2号窯の第1次床面からは、宝珠つまみが付され内面にかえりをもつ杯蓋とともに平・丸瓦が検出され、その叩き目が甕片と共通することからも、7世紀初頭の瓦陶兼業窯として多くの問題を提起している。

野添窯跡群

大野城市上大利字野添に所在する。小田富士雄・真野和夫両氏および福岡県教育委員会によって調査が行なわれ、確認された5基の窯跡のうち6・9号窯の2基が発掘された。6号窯は部分的な調査でその全容は明らかではないが、全長10m内外の地下式と推測されている。床面の重なりから7次にいたる操業が確認されているが、その遺物は小田編年ⅢA期にほぼおさまるものとされ、短期間の操業と思われる点が特徴的である。9号窯は全長10mの地下式で、煙り出しが隅角プランを呈している。遺物はⅢB期とされている。4・5号窯からは若干の遺物が採集され、いずれも低い高台を伴う杯を中心とした8世紀代(Ⅶ期)のものである。

その後、6号窯の南方200mほどの地点において、大野城市教育委員会により4基の窯跡が確認され、うち11・12・13号窯の3基が調査された。いずれも大きく削平を受けておりその全長は明らかではないが、12号窯は最大幅1.9m、残存長5.2mをはかり、床面には製品を安定させるためと思われる小さな窪みをもつ。遺物は11・12号窯ともにⅢB期のもので、12号窯の方がより古いものとされている。13号窯からはⅣ～Ⅴ期の須恵器とともに瓦が検出され、その造瓦技法が大浦2号窯と近似している点が興味深い。

東浦窯跡群

大野城市牛頸字東浦に所在する。国土館大学の大川清氏によって4基の窯跡が確認され、3基の調査が行なわれた。3本の煙道と排水溝をもつタイプの窯で、Ⅳ期を中心とした遺物とともに、女瓦・男瓦・熨斗瓦等の出土もみている。

大谷窯跡群

大野城市牛頸字大谷に位置する。確認された6基の窯跡のうち4基が大川清氏により調査され、全て地下式であった。遺存状態の良い3基のうち2基は3本の煙道と排水溝をもち、その遺物によって6世紀後半から7世紀前半に位置づけられている。1基は一回り小型で6本の煙道をもち、焚口側面が石で組まれる全国的にも例をみないものである。7世紀後半から8世紀

初頭の時期と考えられている。

平田窯跡群

大野城市牛頸字平田に所在する。調査は立正大学坂詰秀一氏を中心として行なわれ、7基以上の窯跡が確認されたが、そのうちA地点1基、B地点3基の計4基が発掘された。A-1号

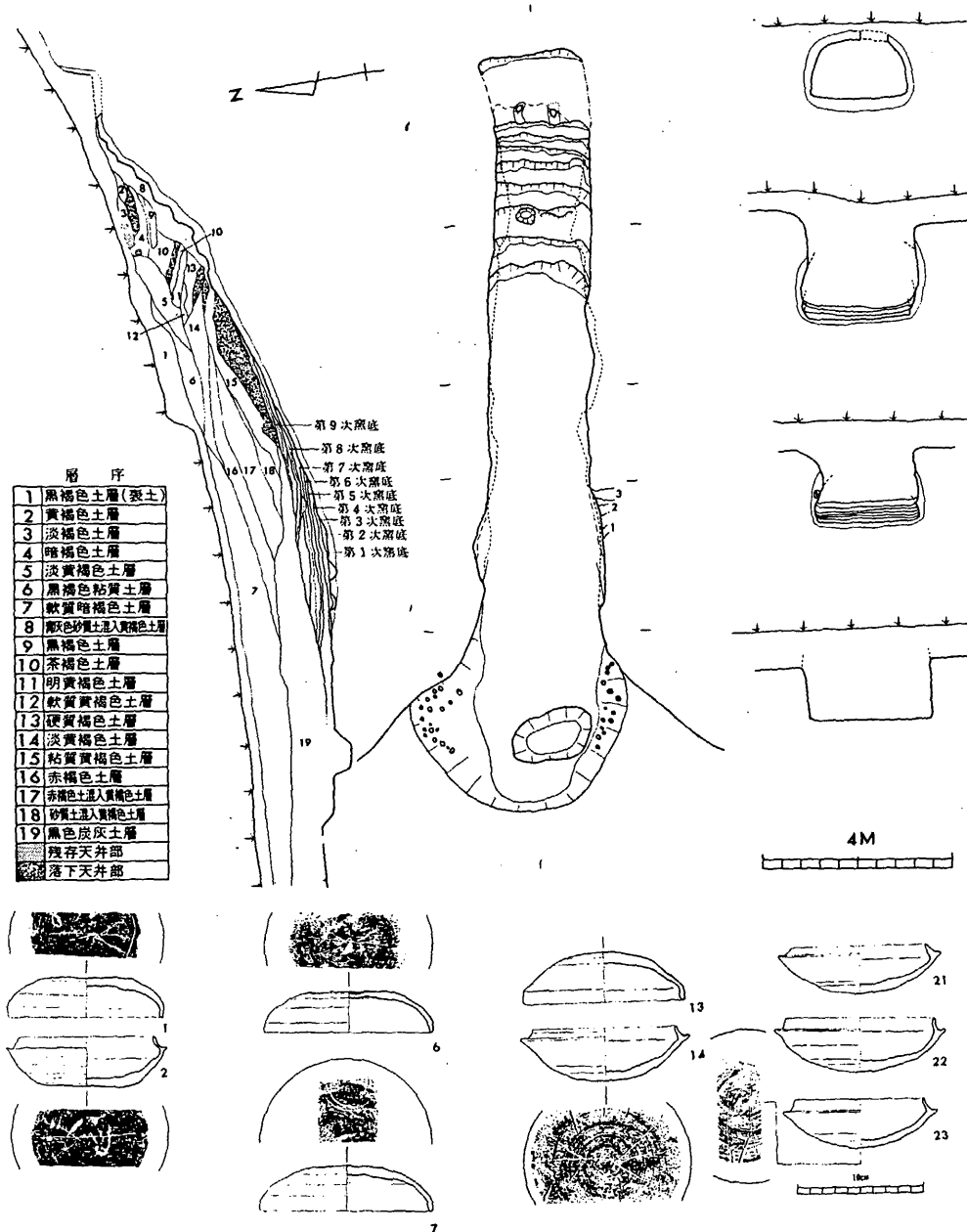


図22 平田窯跡群の遺構及遺物『筑前平田窯跡』雄山閣出版、1974

窯は全長16mの地下式で、焼成部上半の床面が階段状を呈しているのが特徴的である。煙り出しはわずかに底部が残存し、上下2段にわたる5～6個の煙道の存在が推測されている。また焚口部両側面のピットから、屋根状の施設が付設されていた可能性が高い。床面には9次の操業が認められ、6世紀後半の窯における集中的な生産がうかがえる。B地区の1～3号窯はいずれも大きく削平を受けておりその原形は不明であるが、半地下式と考えられている。1・2号窯では、A—1号窯同様焚口周辺にピットが検出され上屋の存在が予測された。遺物はいずれも7世紀代のものと位置づけられているが、1号窯の灰原の上に2号窯の灰原が堆積していたことが報告されている。

この調査の後、さらに大野城市教育委員会によってD地点1基、E地点2基、F地点1基の窯跡が発掘されたが、いずれも削平を受けており完存するものはなかった。D—1号窯は、上部が失われているものの残存長12mをはかる地下式である。床は5面まで確認され、製品を安定させるための凹みやスサ入りの粘土塊が検出された。出土した遺物はⅢB～Ⅳ期のもので、また灰原中からは焼成不良の蓋杯20セットが大甕片を被せたかたちで検出されており、ヘラ記号の役割を考察する資料として注目されている。一部のみ遺存するE—1号窯からはⅣB～ⅥA期の遺物が、窯体がすでに失われているE—2号窯の灰原からはⅣ期の資料が検出されている。F—1号窯も遺存状態は悪く全長は不明である。ⅢB～Ⅳ期の須恵器群が出土している。

長浦窯跡

太宰府市向佐野字長浦に所在し、福岡県教育委員会によって窯跡1基が調査された。全長3.3mの小型のもので、2時期の床面が確認された。遺物は小田編年ⅥA期のもので、時期的には大宰府への供給が始まる時期にあたる貴重な資料とされている。

向佐野窯跡群

太宰府市向佐野字前田に所在する。福岡県教育委員会によって3基の窯跡が確認され、うち1号窯の調査が行なわれた。いずれの窯体も著しく破壊されており、2・3号窯は遺物の採集のみが行なわれている。3基の遺物は、ほぼ近接した時期の資料として歴史時代Ⅱ期に位置づけられている。

小田浦窯跡群

大野城市牛頸字小田浦に所在する。調査は坂詰秀一・上野精志両氏を中心に行なわれ、A地点2基、B地点2基が発掘された。A—1号窯は全長16.9mの地下式で、多孔式煙道に排水溝を伴うものである。床面の重なりによって11次にわたる操業が確認され、6世紀後半から末葉の遺物が検出されている。A—2号窯は下段に3本、上段に1本の煙道が検出され、本来5本の煙道をもつと推定されている。空焚き中に崩落しそのまま放棄されたようで、ほとんど遺物を伴わない。B—1号窯は全長18mをはかる長大な地下式で、焼成部右側中央付近に溝状遺溝をもつ特異な構造であった。12次におよぶ床上げが認められ、1次床面の下には船底状ピット

が検出されている。6世紀末から7世紀前半に比定される。7世紀後半に位置付けられるB-2号窯は、全長3.7mと小型化したものでやはり地下式であった。

大野城市教育委員会による調査も行なわれ、C-1・D-1・F-1・2号窯の4基が発掘された。C-1号窯はVI期に編年される極めて小型の窯で、全長1.65mをはかる。D-1及びF-1号窯は、IV期に特徴的な排水溝を伴う多孔式煙道をもつ大型の窯で、前者は5孔、後者は3孔と考えられている。床の重なりは少なく、製品を安定させるための小さな凹みが多く設けられている。

神ノ前窯跡群

牛頸窯跡群の東北端、太宰府市吉松字神ノ前に位置する。

太宰府町教育委員会

が調査した2基は、

ともに削平を受けて

おりその全長は明らかでない。

1号窯は

3回にわたる床の作り

替えがみられ、船

底状ピットが検出さ

れた。その生産の中

心はIVB期である。

2号窯は改窯が比較

的少なく、IVA期の

須恵器とともに無文

の軒丸瓦などが検出

されている。ロクロ

ないしは回転台を使

用した瓦の製作技法は土器に共通するもので、大浦2号窯出土資料に比べ技法的に異なり、時期も若干先行するものと考えられる。

中通窯跡群

大野城市中通・入道堂に所在する窯跡群である。12基以上の窯跡が確認されており、A-1・2、B-1・C-1・D-1・2号窯の6基が大野城市教育委員会によって調査された。A群の両窯はともにIV期のもので数次にわたる改窯をうけており、また船底ピットや小さい凹みを

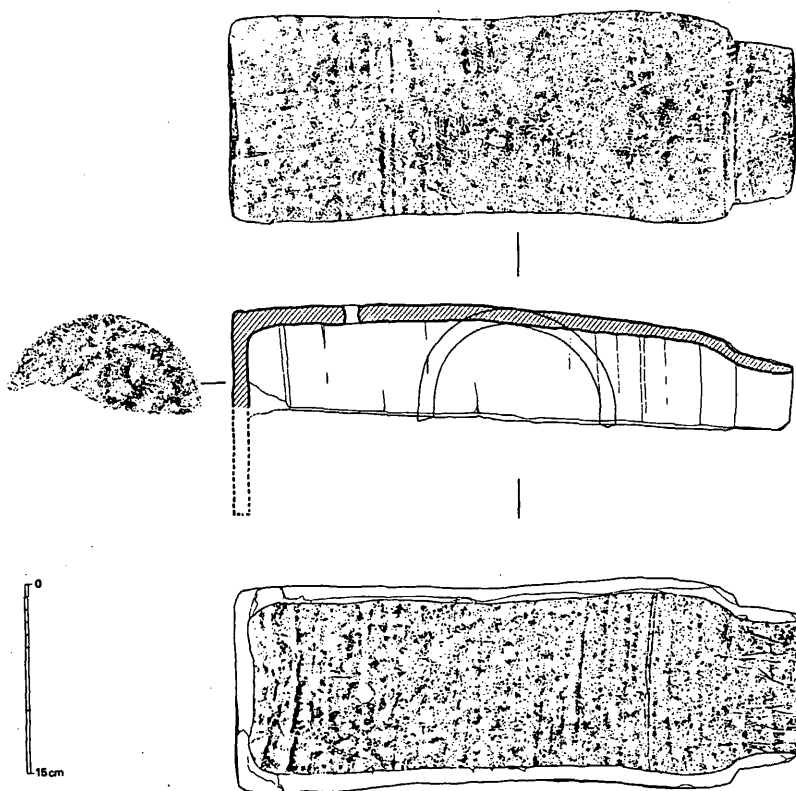


図23 神ノ前2号窯出土軒丸瓦

『神ノ前窯跡』太宰府町教育委員会 1979

有する当該期特有のものである。2号窯は4孔の煙道と排水溝をもつ全長16mのもので、各床面出土の蓋杯によってIV期のなかにおける矮小化の傾向が認められる。B-1号窯も同様の構造をとり、全長16.9mで3個の煙道をもつ。2回の操業でA群に移行するものと考えられている。C-1号窯も6世紀後半に比定されており、4個の煙道と排水溝が検出されている。D群の2窯は切り合い関係が認められ、D-1号窯の煙出し部を埋めてD-2号窯が構築されている。両窯とも焼成部上位の床面に凹みを持ち、煙道に排水溝が付設されるIV期特有のもので、1号窯は5枚以上、2号窯は4枚の床面が検出された。D-1号窯からはIVB期の、D-2号窯からはIVB~V期の遺物が出土している。通常IV期における時期差は蓋杯の大小によってとらえられるが、後出のD-2号窯からD-1号窯より大形の蓋杯が出土している点が問題となっている。

上平田窯跡群

大野城市牛頸字上平田に位置し、4基の窯跡が調査された。1・3・4号窯は削平をうけており、その全長は不明である。2号窯は3つの煙道に排水溝をとまう地下式で、構造的にはIV期タイプのものである

が、全長は6.5mと小型化している。窯跡群の時期は7世紀後半から8世紀前半に比定されており、小田編年VI期における変化をとらえることが可能である。

宮ノ本窯跡群

太宰府市向佐野字宮ノ本に所在する。太宰府町教育委員会により3基の窯跡が調査された。いずれも削平等の理由により全長が不明であるが、2・3号窯はともに3m前後の地下式と推定されている。窯の改修もみられず、短期間の操業であることがうかがえる。時期的には、1

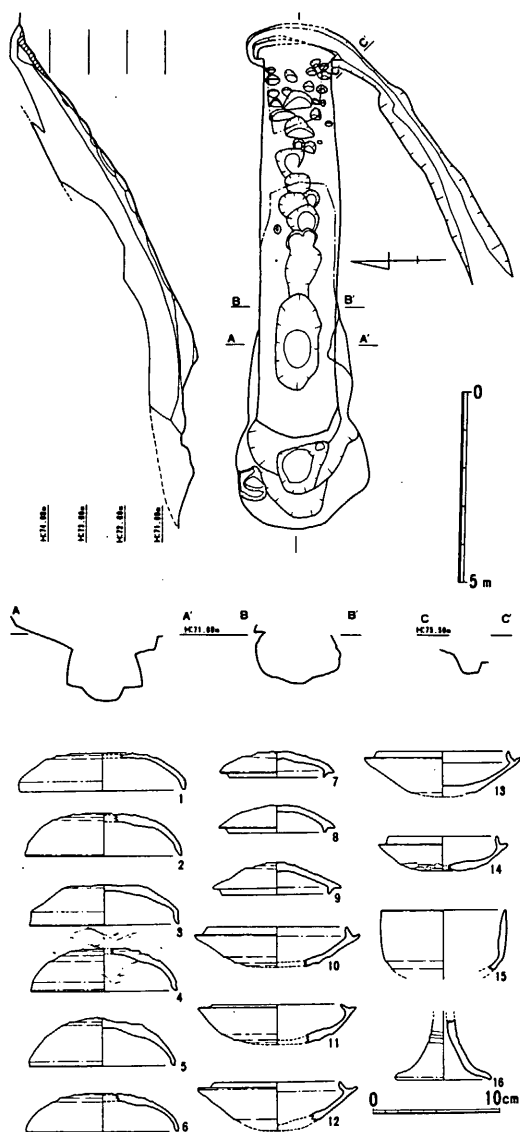


図24 中通D-1号窯

号窯体が小田編年のVI b期、2・3号窯がVI c期に相当する。この時期には数型式が混在する例が多いなかで、一括の資料を示す良好な資料と考えられる。

浦ノ原窯跡群

春日市下白水字浦ノ原に所在する。春日市教育委員会によって調査が行われ、B地区より8基の窯跡、A地区より須恵器生産に関連する可能性の高い竪穴状遺構が検出された。1・2・5・6・7号窯の一群は、集中する立地や窯の構造からほぼ同時期のものと推測され、全長は一番長い1号窯で3.2m、最小の7号窯で2.7mと小型化している。いずれも地下式で、1・2・

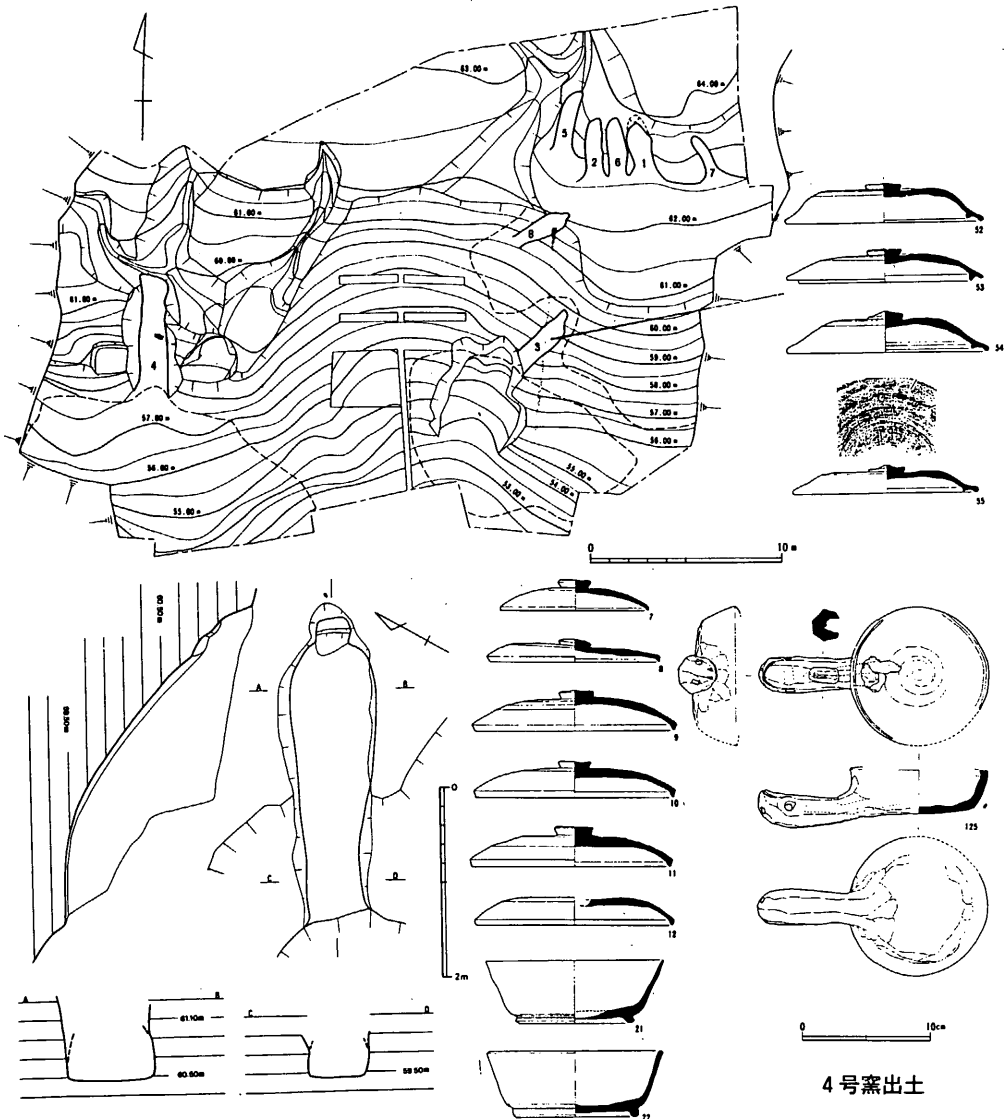


図25 浦ノ原窯跡群『浦ノ原窯跡群』春日市教育委員会 1981

5号窯の焼成部では粘土の置き台が使用されていた。焼成回数は少なく、6号窯は未使用である。遺物は浦ノ原3期として、8世紀前半以降に位置づけられている。3号窯の全長は不明であるが、やはり小型の地下式窯で、遺物は7世紀中頃から8世紀初頭にあたる浦ノ原2式に分類されている。4号窯は浦ノ原窯跡群中最長の地下式で、2度にわたる床面の修理がみとめられる。遺物は大型の須恵器や瓦が検出され、浦ノ原1～2式に分類されている、瓦は2式にともなうもので、その製作技法が多様な点から7世紀後半代の試作品と考えられている。8号窯は全長3.1mをはかる地下式で、短期間の焼成と考えられている。遺物は2式②段階に分類され、蓋内面のかえりが消滅する前後の資料である。A地区の竪穴状遺構は、斜面を削りだした作業場的なもので6個の柱穴をともなう。須恵器と共に平瓦の出土をみている。

惣利窯跡群

春日市春日字惣利に所在する。春日市教育委員会により、9基の窯跡と須恵器生産に関連すると思われる4軒の住居址および3つの竪穴状遺構が調査された。1号窯は上部を失っているものの、残存長12.3mをはかる地下式で、焚口部から斜めにのびる排水溝をもつ点が特徴的である。5回以上の床上げが確認されているが、遺物はⅢB～ⅣA期に比定されるもので明確な型式差は認められない。1号窯より南東に200mほど離れた斜面の惣利遺跡地区では、4軒の住居址と3つの竪穴状遺構が検出され、おおむね6世紀後半のものとされている。2号住居址南側の粘土ピット、4号住居址内検山の多量の粘土や、土師器にたいして須恵器の出土量があるかに多い点などから、春日地区において須恵器窯業が開始された時期の関連遺跡と推測されている。またこの遺構群と重なるように8世紀代に比定される2～5号窯が検出された。4号窯は全長2.9mを測る地下式で、灰原のみ遺存する2・3号窯、削平を受け遺存状態の悪い5号窯と同様、比較的短期間の操業と考えられている。惣利東遺跡地区では丘陵の東斜面に6～8号窯が、西斜面に9号窯が検出された。6～8号窯はいずれも全長3m以下の地下式と推測され、床上げのみられない焼成部には粘土塊による焼き台が遺存していた。遺物はほぼ同時期のものと考えられ、8世紀後半に比定されている。9号窯は全長5m以上と推測され、煙道上方にC字状の深い排水溝を伴うタイプのもので、5回以上の床上げが確認されている。遺物はⅣ～Ⅴ期のものとされ、第二次床面上と考えられる遺物と最終床面上の遺物の比較によって、Ⅳ期のなかにおける蓋杯の大小・調整手法の相違が時期差として捉えられている。

石坂窯跡群

大野城市牛頸に所在し、牛頸窯跡群内でも最も西南の奥まった地点にあたる。7世紀後半から8世紀代の小型の窯跡が20基以上存在するとみられているが、このうち大野城市教育委員会によってC地点1・2号窯の調査が行なわれている。C—1号窯は全長約4.6mをはかる胴張り型のもので、燃焼部と焼成部の境の側壁に石を用いている。焚口付近には相対するようにピットが検出され、簡単な覆屋風の建物の存在が予想された。遺物は8世紀中頃から後半に比定さ

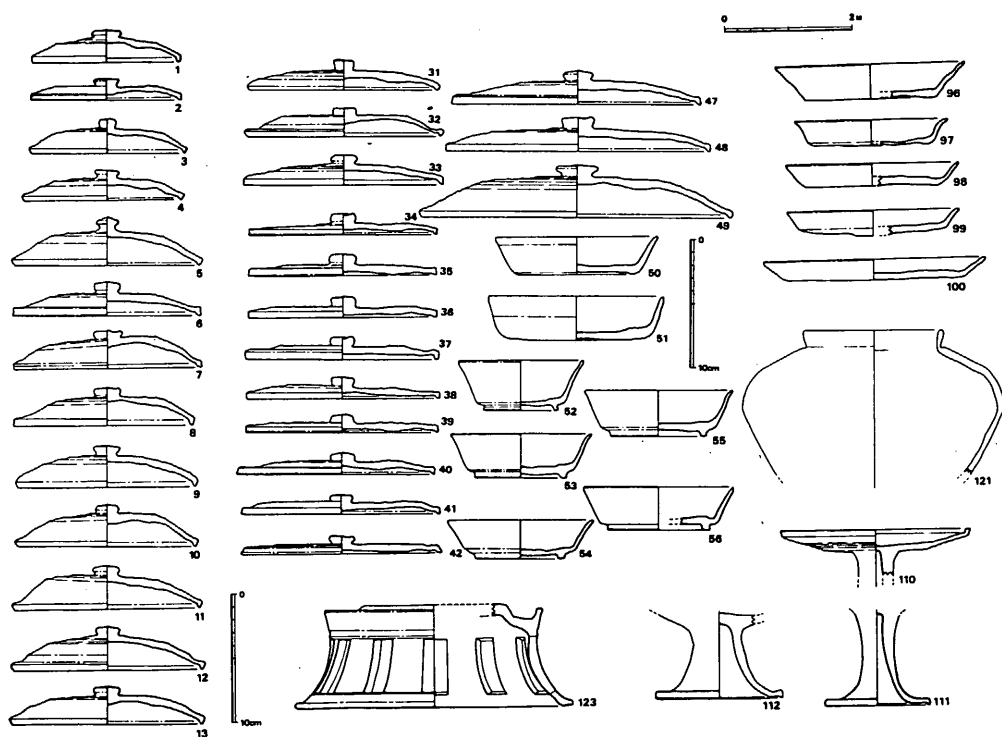
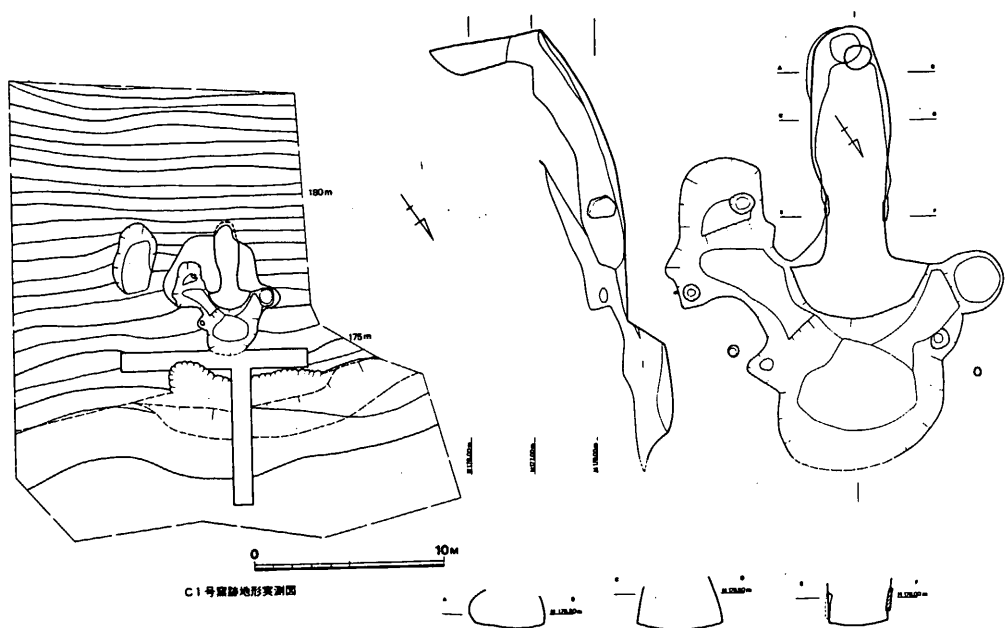


図26 牛頭石坂窯跡C地点
『牛頭石坂窯跡—C地点』大野城市教育委員会 1985

れている。C-2号窯は灰原のみの調査で、その遺物は1号窯とほぼ同一時期と思われる。両窯出土の杯の法量分布が、11~12cm、14~15cm、18cmの3類に集中することから、唐尺との対応が考えられている。

月ノ浦窯跡群

大野城市牛頸字月ノ浦に所在する。2基の窯跡が確認されているが、調査された1号窯の窯体はすでに失われていた。灰原からはIV期~V期の須恵器とともに軒丸瓦・平瓦・鷗尾が出土しており、7世紀前半ないしそれ以前のものと考えられている。

5. おわりに

以上いささか冗慢であるが、研究のながれを概観してみた。最後に、牛頸窯跡群研究の現状にみられる幾つかの問題点について、簡単にふれておきたい。

牛頸窯跡群の須恵器編年は、八女窯跡群および『野添・大浦窯跡』における小田富士雄氏の研究を踏襲するかたちで行なわれてきた。安易に畿内編年を流用することなく、地域に即した編年確立を目指された小田氏の姿勢は、大きく評価されねばならない。しかしながら、小田氏の提唱された、古墳出土の資料による編年に「窯跡の調査がすすんでくるにつれて、それらの資料を加えて随時補足修正してゆく方法」⁵⁹⁾が、1970年代初頭の八女窯跡群において一応の確立をみたあと、九州の各窯跡群出土資料によるより詳細かつ主体的な編年研究については、あまり進展をみせていないように思われる。

牛頸窯跡群においては、1970年の『野添・大浦窯跡』において、小田氏が提示された編年の欠を補うかたちで、1972年の亀井明德氏による歴史時代資料の編年、1977年の酒井仁夫氏らによる御笠川東岸における編年などが行なわれ大きな成果をあげている。しかし、1979年以降の調査の急激な増加にともない当該期の資料が多く検出されるに至り、より窯跡出土の資料に即した編年の提示が待たれるところであるが、1980年末の現在において「牛頸編年」と呼べるものが成立をみしていない点は残念である。小田編年の各型式が各窯跡群の研究者によって恣意的に使用されている場合もみられる現在、牛頸窯跡群における須恵器生産の実態により即した画期的の設定と、新たな編年観確立への試行錯誤が望まれよう。

また編年以外にも、生産者集団の系譜・構造・居住地の解明、須恵器の製作技法・消費地への流通に関する諸問題など、須恵器をめぐる広範な研究課題が残されているが、どの点も緒についたばかりといえる。このうち特に牛頸窯跡群の場合、その供給地として大宰府が特定できることは、他の窯跡群にみられない特徴といえよう。牛頸窯跡群の発掘成果と大宰府出土資料の比較検討は、亀井明德・森田勉氏らによってなされているものの、大宰府の調査における上層遺構保存のため、奈良時代以前に關しての資料が乏しいことから、現状ではあまり進捗をみ

せてはいない。この点についての研究の進展も、今後大いに期待されるところである。

窯跡の総数600基と推測され、その量、質とも陶邑・猿投と並び、大須恵器窯跡群の一つとされる牛頸窯跡群において、研究開始後20年を経た現在も調査報告書以外の研究活動が不活発であることは、その資料の豊富さに比して惜しまれることである。今後の当該窯跡群研究の更なる進展を期待して結びとしたい。

(余語琢磨)

- 註 1) 水野清一・樋口隆康・岡崎 敬『對馬』東方考古学叢刊乙種第六冊 1953
2) 樋口隆康「須恵器」『世界陶磁全集』1 1958
3) 森 浩一「須恵器」『古代学研究』11 1955
4) 森 浩一「和泉河内窯址出土の須恵器編年」『世界陶磁全集』1 1958
5) 檜崎彰一「猿投山須恵器の編年」『世界陶磁全集』1 1958
6) 横山浩一「手工業生産の発展」土師器と須恵器『世界考古学体系』3 日本Ⅲ 古墳時代
1959
7) 檜崎彰一「土器の発達」土師器と須恵器『世界考古学体系』4 日本Ⅳ 歴史時代 1961
8) 小田富士雄他「九州古式須恵器集成」(一)～『九州考古学』7・8～ 1959～
9) 三島 格「肥後の須恵器資料」(一・二)『熊本史学』21・22.25 1961・63
10) 原口長之「肥後の須恵器編年試案」『西日本史学会10周年記念論文集』1960
11) 小田富士雄「九州の須恵器序説」一編年の方法と実例(豊前の場合)一
『九州考古学』22 1964
12) 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 1966
13) 小田富士雄他『塚ノ原窯跡群』八女古窯跡群調査報告Ⅰ 1969
小田富士雄他『菅ノ谷窯跡群』八女古窯跡群調査報告Ⅲ 1971
小田富士雄・真野和夫他『立立山窯跡群』八女古窯跡群調査報告Ⅳ 1972
14) 小田富士雄・真野和夫・柳田康雄『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財報告 第43集 1970
15) 小田富士雄「九州古代窯址(須恵器・瓦)地名表(第一稿)」『九州考古学』29・30 1966
16) 文化財保護委員会編『全国遺跡地図』一福岡県一 1968
17) 小田富士雄「古代・中世窯の地域的特質—九州—」『日本の考古学』Ⅵ 1967
18) 前掲 14) 書
19) 大野町教育委員会『大野町の文化財』2 1971
20) 前掲 14) 書
21) 前掲 19) 書
22) 前掲 14) 書
23) 横田賢次郎・川述昭人・酒井仁夫「福岡県大野城市牛頸における奈良時代窯跡」
『九州考古学』49・50 1974
24) 副島邦弘・舟山良一他『牛頸中通遺跡群』大野城市文化財調査報告書第4集 1980
25) 酒詰秀一編『筑前平田窯跡』1974
26) 亀井明德・高橋章・酒井仁夫「向佐野・長浦窯跡の調査」
『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅵ 1975

- 27) 中村 浩他『陶邑』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 大阪府文化財調査報告書第28・29・30輯 1976・77・78
- 28) 西 弘海「藤原宮西方官衙出土土器の編年と西方官衙についての考察」
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ 1978
- 29) 大野城市教育委員会『大野城市の文化財』9 小田浦窯跡特集号 1977
- 30) 酒詰秀一・上野精志「福岡県小田浦窯跡の調査」『考古学ジャーナル』146 1978
- 31) 川述昭人・酒井仁夫・岩瀬正信「御笠川東岸における須恵器の編年について」
『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XⅦ 1977
- 32) 木下 修「須恵器について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』5 1978
- 33) 酒井仁夫・高橋章・石松好雄『神ノ前窯跡』太宰府町文化財調査報告書第2集 1979
- 34) 小田富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁全集』2 日本古代 1979
- 35) 前掲 24) 書
- 36) 山本信夫他『宮ノ本遺跡』太宰府町の文化財第3集 1980
- 37) 舟山良一他『牛頸平田窯跡』—D地点— 大野城市文化財調査報告書第5集 1980
- 38) 山田元樹「須恵器窯業生産の様相解明にへう記号が果たし得る役割の検討」
『九州考古学』62 1988
- 39) 平田定幸・佐藤昭則・丸山康晴他『浦ノ原窯跡群』春日市文化財調査報告書 第11集 1981
- 40) 舟山良一他『牛頸平田窯跡』—E地点— 大野城市文化財調査報告書第7集 1981
- 41) 丸山康晴・平田定幸『春日地区遺跡群』Ⅱ 春日市文化財調査報告書第14集 1983
- 42) 丸山康晴・平田定幸『春日地区遺跡群』Ⅰ 春日市文化財調査報告書第12集 1982
- 43) 舟山良一他『牛頸中通遺跡群』Ⅱ 大野城市文化財調査報告書第9集 1982
- 44) 舟山良一他『牛頸平田窯跡』—F地点— 大野城市文化財調査報告書第8集 1982
- 45) 池辺元明・川述昭人他『牛頸窯跡群』Ⅰ 福岡県文化財調査報告書第80集 1988
- 46) 前掲 41) 書
- 47) 西村 康「陶邑・猿投・牛頸」—須恵器生産の進展—『文化財論叢』1983
- 48) 丸山康晴・平田定幸他『春日地区遺跡群』Ⅲ 春日市文化財調査報告書第15集 1985
- 49) 舟山良一『牛頸石坂窯跡』—C地点— 大野城市文化財調査報告書第14集 1985
- 50) 九州歴史資料館『太宰府史跡』昭和58年度発掘調査概要 1983 昭和59年度の同概報(1985)
では、年代観の修正が行なわれている。
- 51) 舟山良一『牛頸地区遺跡群』Ⅰ 大野城市文化財調査報告書第16集 1985
- 52) 舟山良一『上園遺跡』Ⅰ 大野城市文化財調査報告書第18集 1986
- 53) 舟山良一『上園遺跡』Ⅱ 大野城市文化財調査報告書第21集 1987
- 54) 舟山良一『野添窯跡群』大野城市文化財調査報告書第22集 1987
- 55) 前掲 38) 書
- 56) 舟山良一「須恵器の窯跡群」—九州—『季刊考古学』24 1988
- 57) 中村 浩他『牛頸』—ハセムシ窯跡群発掘調査報告— 大谷女子大学資料館報告書第18冊 1988
- 58) 前掲 45) 書
- 59) 前掲 11) 書

第4章 遺跡の調査

1. 調査の概観

牛頸ハセムシ窯跡群のうち今回の造成予定地域内に含まれている1、2、6、7、12、16、17、18、19、20、22、23地区の発掘調査を昭和62、63年度の二年度にわたって実施してきた。既に16、17、18、19、20地区については報告書を刊行し、成果の公表を行ってきた。本書は、その第二冊目にあたるが、また前回に行わなかった各種の検討事項についての総合報告をも兼ねている。この詳細は後述（第5章）するので、ここでは対象地区のうち未報告の1、2、6、7、12、22、23地区の遺構について報告する。

これらのうち2地区は遺構の確認がなかったが、他はいずれも窯跡が検出されている。7、23地区はいずれも1基のみの所在であったが、1、6、12、22地区は複数の窯跡が確認されている。それら各地区の窯跡数は、1地区3基、6地区4基、7地区1基、12地区10基、22地区4基、23地区1基で、この他土坑などが、6地区、7地区、12地区、22地区などで確認されている。

これら調査地区の窯跡で注目されるものは、1地区ではⅡ号窯跡、12地区ではⅧ号窯跡などがある。1地区Ⅱ号窯跡は、牛頸窯跡群の特定時期に見られる特徴的な構造を踏襲しているものであり、今回の対象地域内ではⅢ号窯跡に続いて時期的に遡るものである。

12地区Ⅷ号窯跡は、窯の掘削段階の途中で放棄したと見られるもので、いわゆる未完成の窯である。このような例は陶邑窯跡群（大阪府）などでもわずかに知られているのみで、窯体構築技術を考える上での好資料といえるだろう。またⅩ号窯跡は、窯体構築は完成しており、一応の形はなしているものの焼成作業を行った痕跡を認めないものである。このような例も陶邑では一例知られているが、同一場所での例ではない。これも先のⅧ号窯跡と同様、技術史上注目されるものである。

窯跡の分布状況からは、62年度調査の18号窯跡では、大規模な窯跡を中心に中型、小型のものが周囲を取り巻くように位置していたのが印象的であったが、今回の場合も12地区で同様な傾向が観察された。すなわち東側斜面には、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ号窯跡の5基が所在するが、うちⅤ号窯跡のみが大型のものである。また西側斜面にはⅥ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ号窯跡の5基があり、うちⅨ号窯跡が大型のものである。このように群集すると大型の窯跡が含まれるという状況は、単に偶然なのかあるいは何等かの意味があるのか問題である。昨年度調査の20地区では大型、小型各1基が所在していた例があり、6地区では小型のものが4基、23地区では同じく3基が分布していることが明らかとなっている。20地区を除いてはいずれも小型のものであ

る。窯の規模が一体時期的なものであるのかあるいは他の要因によるものなのか、周辺地域の例を含めて検討しなければならないだろう。なお12地区では遺物の検討から見ると時期的に開きがあり、幾つかの段階の操業が考えられる。

また窯跡の所在する同一地域に土坑が検出される場合が多い。これは昨年度の18地区、20地区でも同様の状況が観察されており、特別なものという印象はない。しかし操業とどのような関連を持っていたのか、あるいは果たして窯と同時期なのかどうか、あるいは用途は等々興味は尽きないものがあり、本書で解決可能な範囲を超えている場合もある。

ともあれ以下に各地区の調査の結果について記述することにする。

2. 各地区の調査

(1) 1地区の調査

① 分布の状況

今回の宅地造成計画地域の北端部に該当する。平野中学校の南に向かって派生した丘陵の先端、西側斜面中腹に位置する窯跡群である。丘陵の先端部は中学校校地造成によって大きく削平され、現状では比高差約20m前後をはかる崩面を形成している。この崩面部分に灰原の痕跡を残すのがⅢ号窯跡である。窯本体部分は既に削平されており、検出することが出来たのは前庭部および灰原である。さらにこの灰原が丘陵斜面に沿って下方に広がっている。この上方斜面に位置するのがⅠ号窯跡である。当該丘陵地域への植林などの便宜のために取付けられている小径によって窯体の焼成部下半分を削平された状態で確認された。また本窯跡の南部、東部共に道路造成時の削平あるいは自然崩落が見られ、旧状を損なっていた。

Ⅰ号窯跡の南東29mには、同じく窯体焚口部下方を小径によって削平されたⅡ号窯跡が位置する。窯跡の焚口両方向はⅠ号窯跡の場合程ではないが、道路造成時の削平が見られた。なおⅢ号窯跡を除く、いずれの灰原についても小径下層および下方部分に位置すると考えられたが、耕作地あるいは水関係の問題もあり、調査は行わなかった。

② 須恵器窯跡

1) 1—I号窯跡

(位置と状況)

調査開始時点では既に窯体下方が削平された状態であった。検出部下端部の標高は77.14m前後である。本来は標高78～76mをはかる丘陵斜面中腹に築かれた地下式の小型の登窯であっ

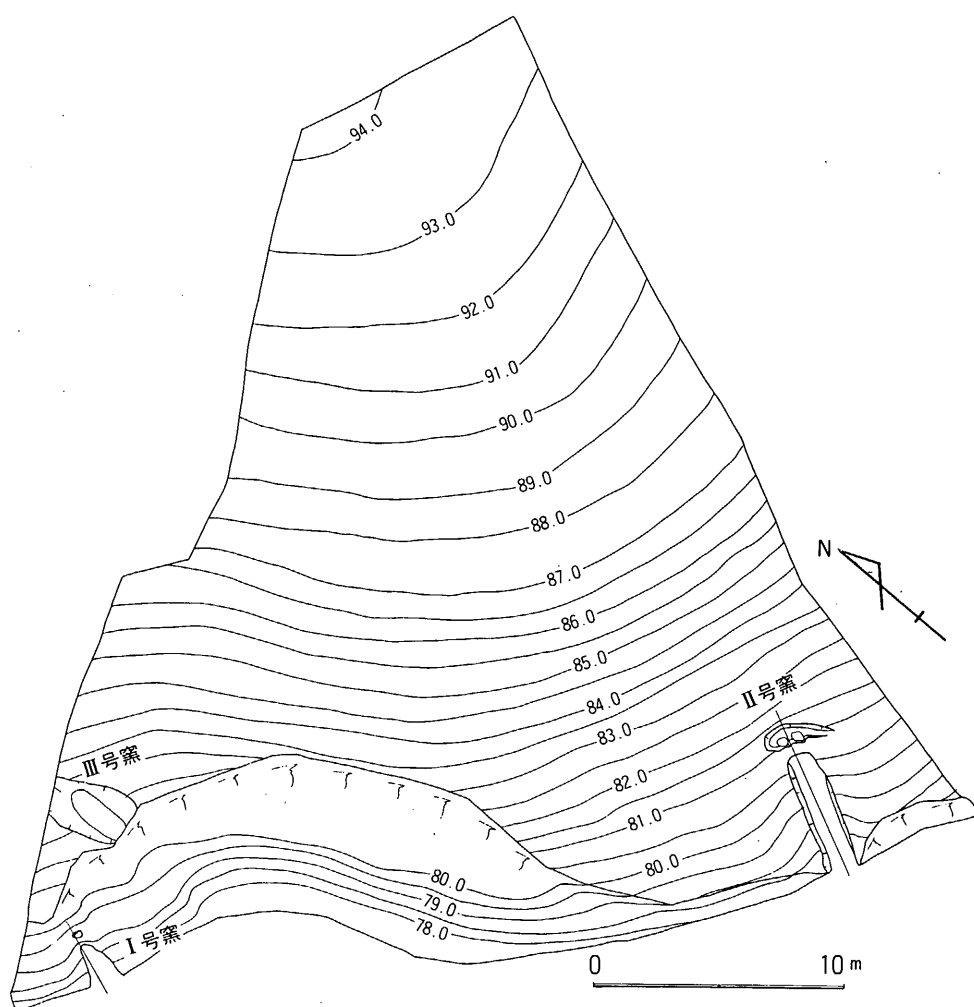


図27 1 地区地形図

たものと考えられる。残存全長は2.4mで煙道から焼成部および燃焼部の一部を含む部分の遺存である。主軸方向はN-31°-E、床面最大幅は、焼成部で1.15m、床面傾斜は33°を各々はかる。

(窯体の構造)

A、焚口・燃焼部

焚口は既に削平され現存しない。燃焼部は傾斜変換点と残存部先端との延長が0.57m、幅1.2mをはかる。両側壁および床面の遺存状態が不良ではあったが、床面に貼り床が用いられていることはかろうじて看取することができた。

B、焼成部

主軸上での床面の延長は、1.7m、最大幅1.1m、床面傾斜33°を各々はかる。床面の基底線

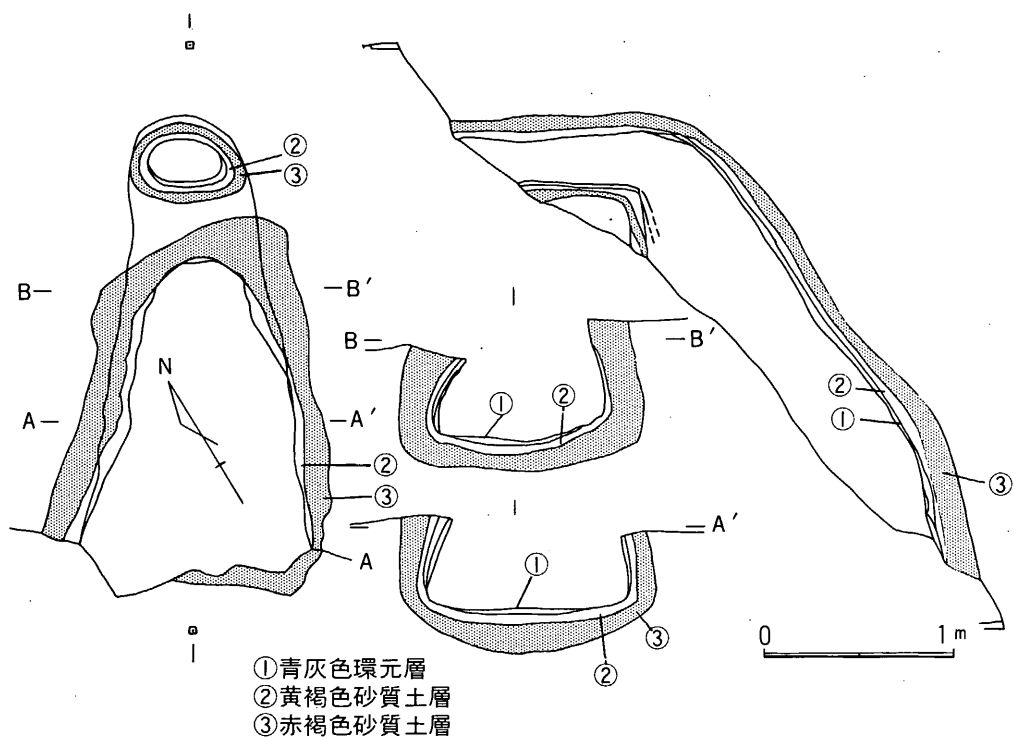


図28 1地区Ⅰ（1-I）号窯遺構実測図

は奥壁から焚口に向かって僅かに拡がっていく傾向をもつ。天井部は奥壁近くで残っており、床面からの高さ0.55m前後をはかる。たちわりA-A'では、貼り床は1枚、側壁の貼り壁は右1、左2枚である。さらにたちわりB-B'では貼り床1枚、側壁のうち右は剥落、左は貼り壁2枚を各々数える。

C、奥壁・煙道部

奥壁のたちあがりは、焼成部床面と125°前後をはかる。奥壁部床面には貼り床、壁が1枚見られる。煙道部は、ほぼ直立して上方へのび、その延長は1.1m、径0.26mをはかる。築造当初の状態は現状とは異なると思うが、少なくとも現存部分からは余り大きな開きはなかったものと思料される。

（前庭部・灰原）

いずれも小径によって削平されており、確認出来なかった。なお灰原は丘陵下方部分に所在するものと考えられるが調査は種々の事情から実施していない。

（遺物）

窯体内から相当数の須恵器が採集されたが、いずれもⅢ号窯跡に伴うものであり、本窯跡に伴うものはごく少量であった。器種は蓋杯が見られる。小型器種の焼成に用いられた窯と考えられる。

（中村）

2) 1—II号窯跡

(位置と状況)

1—I号窯跡の南東に位置する花崗岩のバイラン土を掘り抜いて造られた地下式の登窯である。窯跡は標高77.5mから81.5mの等高線に、ほぼ直交する形で造られている。主軸方向はN—35°—E、焚口から煙道部までの全長は5.7mをはかる。天井部は既に崩落していたが、床面及び煙道部の残存状況は良好であった。床面の平面形は焼成部で、やや膨らみ、最大幅1.3mをはかるほかは煙道部まで、1.1mではほぼ一定の幅で続く。

(窯体の構造)

A、焚口・燃焼部

焚口の幅は、現存端部で1.22mをはかり、左右の焼土の先端は右側（南）が約28cm長い。焚口から傾斜変換点までは主軸上で1.8mをはかり、床面傾斜は水平に近い。当該部分の床基底線は長方形を呈し、焚口で僅かに広がっている。この部分のたちわりを観察すると、灰層をはさんで上下に各1層の床面が見られ、補修によってかさあげが行われていたことがわかる。下層床面での焚口幅は、1.1mをはかる。すなわち上層部の焚口幅と異なるのは、補修に伴いこの部分を広げたものと見られる。両側壁は固く焼き締まっているが、その重なりは見られず各1枚を数えるのみである。従って床の補修に伴う壁のそれは見られなかった。

B、焼成部

傾斜変換点から奥壁部まで主軸上での延長（水平距離）は2.8m、斜距離で3.6mをはかる。床面傾斜は、窯体中位までは35°、上位（奥）では50°とさらに傾斜を増しながら奥壁煙道部へと続く。焚口から上位に2.8mの部分から奥には階段状にピットあるいは落ち込みがつくられており、製品の配置の安定をはかっている。

たちわりA—A'の観察では、貼り床、貼り壁が各々1枚が確認された。なお床、壁ともに固く焼け締まっている。

C、奥壁・煙道部

奥壁部には2本の煙道を穿った多孔式で、その横断面はかまぼこ形を呈する。内壁は各々固く焼け締まっている。煙道の延長は0.5m、孔の幅は右が0.48m、左が0.5mをはかる。この煙道は、主軸に直交するかたちで設定された溝に連なっている。この溝の幅は0.65～0.4mで、その延長は2.85mになる。煙道部の直上の部分の溝の壁は赤く焼固しており、やや外れた部分ではその痕跡は見られなかった。

(灰原・前庭部)

小径によって削平された部分および丘陵下方に広がっていると考えられるが、調査の対象にはできなかった。

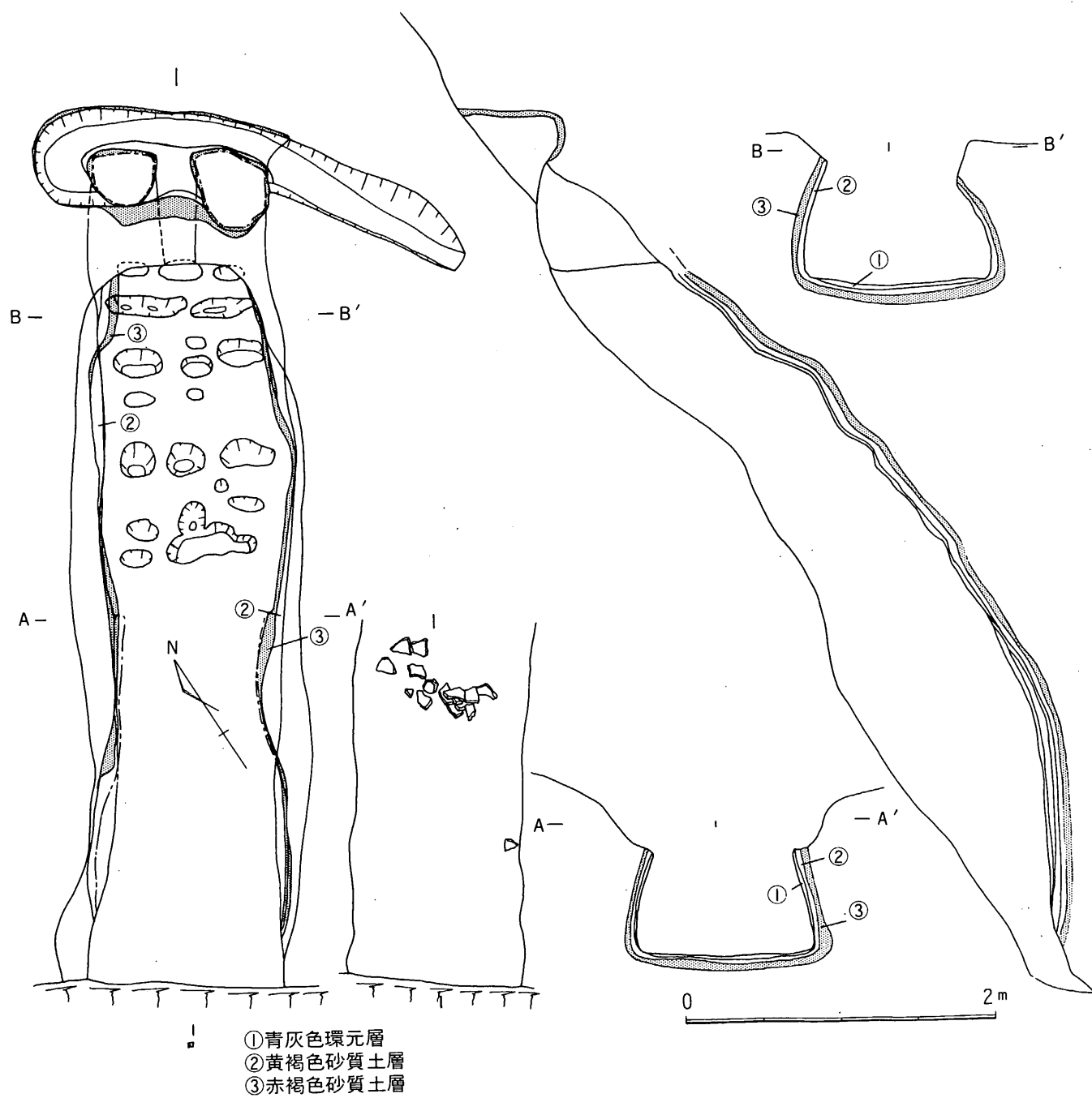


图29 1地区Ⅱ(1—Ⅱ)号窯遺構実測図

(遺物)

いずれも窯体内からの遺物で、燃焼部下層床面上に残されていた蓋杯、甕などがある。出土量はきわめて少ない。

(高久健二)

3) 1—Ⅲ号窯跡

(位置と状況)

1地区の北部域、標高82.0～83.0mをはかる南斜面中腹に位置する。窯跡本体は中学校の造成工事によって既に削平されており、前庭部およびこれに伴う灰原のみが確認された。灰原の灰の堆積状況および前庭部の状態から考えると、検出部からさほど離れていない部分に焚口があったものと考えられる。従って調査は、灰原の堆積状況の検討と前庭部の観察しか行えなかった。

(前庭部・灰原)

東西幅2.1m、南北残存長3.6mをはかる比較的大きな凹地を形成している。これは窯跡前方によく見られる前庭部ピットの状況を示しており、当該例もその典型的な1つであろう。南端部分を削平されており、旧状の全景は想定出来ない。しかし内部の状態から、現存部から余り離れない部分に端部が求められるだろう。

灰原は、前庭部ピット内に堆積した灰層が中心で、さらに丘陵斜面に沿って下方のⅠ号窯跡内にまで及んでいる。しかし時期的な前後関係から見るとⅡ号窯体内に当該灰層が見られるのは矛盾する。おそらくⅠ号窯跡廃棄後に開放されていた煙道部から流入したものであろう。なお前庭部ピット内の灰層の堆積状況は、表土部分(2.5Y4/1黄褐色粘質土)の6cmに続いてレンズ状に30cmの灰層(N1.5/0黒色炭灰土)、さらに下層にも20cm前後の灰層(5Y2/1黒色炭灰層)が見られる。また丘陵斜面に沿っての層の状況は、表土層(2.5Y4/1黄灰色粘質土)、包含層(2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土、10YR5/8黄褐色粘質土)、さらに灰層(5Y2/1黒色炭灰土)が続く。なお地山層は、10YR6/8明褐色粘質土である。包含層内の遺物は余り多くはなかった。

(遺物)

いずれも須恵器である。時期的には複数の段階のものが見られる。器種には蓋杯、高杯、提瓶、平瓶、壺、甕などがある。とくに蓋杯には、多種多様なヘラ記号が認められる。

(中村)

(2) 2地区の調査

(位置と状況)

1地区の南約110mの丘陵裾部で遺物が採集されたことから、当該地点にも窯跡の存在が推定されていた。対象と考えられ表土除去を行った部分の標高は115mから127.5mの範囲である。

丘陵斜面は当該地域の窯跡所在部分に比較して相当緩やかな斜面である。調査は全面的な表土除去によって遺構、遺物の検出に努めたが、標高121.5m部分の中央部で長径2.2m、短径1.2mの不整形な土坑を検出したが、他の遺構は何等検出されなかった。また遺物についても表土除去時に須恵器破片（甕）を採集したのみであった。

従って当該2地区には窯跡は存在しなかった。また検出された土坑についても、人為性を認めるには疑問もあり、あるいは自然の落ち込み、例えば木の根の痕跡などとも考えられる。当初分布調査の際に採集された遺物は他の場所からの移入品の可能性があると考えられる。

（中村）

(3) 6地区の調査

① 分布の状況

2、7地区に向かって開口する谷の南奥部に分布する窯跡群である。今回の宅地造成予定地域の中央部に該当する。さらに12地区は、当該地区窯跡群が所在する丘陵と北に派生する同一丘陵であり、6地区附近で大きく東西に分離するいわゆる基部に位置する。

現状は丘陵尾根部の標高は125m前後をはかり、窯跡は120～117m前後をはかる丘陵部分に位置する。この部分にはⅠ、Ⅱ、Ⅲ号窯跡が所在し、尾根部には土坑Ⅳ、Ⅵが各々位置する。また南側斜面中腹標高121m前後には土坑Ⅴが見られる。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ号窯跡に伴う灰原は、いずれも丘陵下方へ落下しており、谷部に最大1m前後の堆積を認めた。

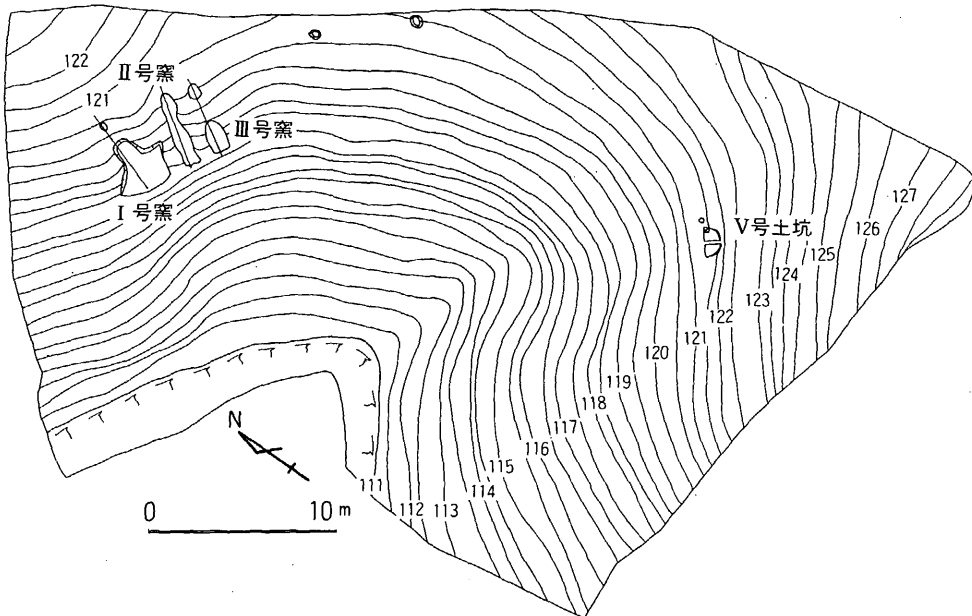


図30 6地区地形図

さらに西側丘陵中腹からは、大半が自然崩落によって失われた窯跡が確認された。(6B-I号窯跡)しかしこれに伴う灰原は、明確に関連を明らかにすることができなかった。

② 須恵器窯跡

1) 6-I号窯跡

(位置と状況)

6地区の北斜面に残る3つの登窯のうち、最も西方に位置する窯で、窯体の規模は最も小型である。斜面の屋根よりに存在し、焚口の標高は、約118.3m、窯体の全長2.5m、最大幅0.95mを測る。主軸方向は、N-21°-Eで、等高線にほぼ直交している。また、2号窯、3号窯と比較して特徴的なことは、大きな前庭部が残存していることである。窯体の残存状態は良好で、構築方法は、黄褐色の地山を掘り抜いた地下式である。

(窯体の構造)

A. 焚口・燃焼部

焚口の幅は0.8mを測り若干、外に開いている。焚口端部から傾斜変換点まで、主軸線上の長さは0.85m、傾斜変換点での幅は、0.9mである。焚口から燃焼部にかけては、一様に黄褐色半還元層、その下に赤色酸化層が見られた。傾斜変換点付近にたちわりA-A'を設定し、床や側壁の状態を観察したが、その結果、床については、ほとんど補修のあとが見られないが、側壁については、右側壁に1枚の補修のあとが見られた。なお、燃焼部までの床面は、約9°のゆるやかな傾斜を持つ。

B. 焼成部

主軸線上における焼成部の長さは1.7m、最大床幅0.9mを測る。床面の傾斜は、中央部で若干へこむものの、増しており、傾斜角は、奥壁から1.1mのところ約30°を測る。床面プランは、燃焼部から焼成部へ移るにつれて若干、外に膨らんでゆき、その際、左側壁が焚口から0.6m奥壁へ向かった所で、外にゆるやかに張り出している。左右側壁は、約0.9mの幅で奥壁へ向かい、奥壁から約0.6m手前で、逆八の字形に徐々に狭まる。なお、焼成部には、天井部が遺存していたため、たちわりを設定できなかった。床や側壁の状態は観察できなかった。天井までの高さは、奥壁から0.8mのところ、0.55mを測る。

C. 奥壁、煙道部

奥壁と煙道部は、原形をよく残しており、ほぼ、直角の傾斜角を持つ。煙道の直径は、0.26m、残存高は、1.2mを測る。奥壁及び煙道部は一枚で、黄褐色半還元層、その下に赤褐色酸化層が見られ、奥壁から煙道部にいたる0.9mの間には、青灰色還元層も見られた。煙道部は上端で、若干外にひらいている。

(前庭部)

前庭部は、主軸線上の長さ2.2mを測り、3つのテラスに区分できる。1つは、焚口の手前に広がり、主軸線上の長さ0.7m、最大幅2.4mを測る。1つは、焚口の左側に位置し、主軸線上の長さ1.1m、最大幅1.5mを測る。1つは、灰原に最も近い所に位置し、主軸線上の長さ1.3m、最大幅4.1mを測る。高低関係は、焚口手前のテラス、焚口より左側に広がるテラス、灰原に最も近いテラスの順となる。灰原に最も近いテラスと、焚口より左側に広がるテラスには、炭灰層が多量に堆積しており、それは比較的よく踏み固められていた。この2つのテラスは、前庭部として作られたものの、窯の操業により出た炭灰により、埋もれてしまい、その機能が一時停止したと思われる。しかし、最終的には、堆積した炭灰層の表面を硬化面とし、再び前庭部として使用したのではないかとと思われる。設定した、たちわりからは、焚口付近から、灰原の方向にかけて、炭灰層に花崗岩バイラン土の流れ込みが見られ、焚口から、0.3m手前には0.2×0.1の楕円形ピットも見られた。これは、焚口付近が、一度除去されたのち、新しく作り直されたと考えられる。なお、最終ベース下の炭灰層を除去中、Ⅱ号窯の窯体左側壁が、Ⅰ号窯の炭灰層の上に乗っていることが、認められた。このため、Ⅰ号窯が先行するものと思われる。

(灰原)

灰原は、焚口から斜面の下方に広がっているが、確実にⅠ号窯のものとしては、最終ベース下の前庭部の上に堆積している。主軸線上に2.5mを測り、焚口から1.7mの所で厚さ約0.5mを測る。

(遺物)

灰原より、蓋、杯を中心とした遺物が、多数出土した。

(西山伸一・朴 賢珠)

2) 6-Ⅱ号窯跡

(位置と状況)

6地区の北東側丘陵の急斜面上腹部に位置した三つの窯の中、中央の登窯である。窯体は、すでに自然流出によって、上部の煙道部と下部の前庭部の一部分が失われており、天井も残存していない。窯体の主軸上の全長3.3m、最大幅は焼成部にあり1.36m、床面傾斜角度38°、焼成部の一番上端の標高は約120mをそれぞれ測る。主軸方向はN-35°-Eである。

(窯体の構造)

A. 焚口・燃焼部

焚口幅は1.1m、傾斜変換点までの長さ0.88mである。そして、焚口端部左側には花崗岩石が置かれている。燃焼部床の基底線は八字形にひらき、床面には黒色灰層の2cm前後の堆積が、傾斜変換点の附近まで認められる。たちわりB-B'では壁・床ともに1枚のはりかべが見ら

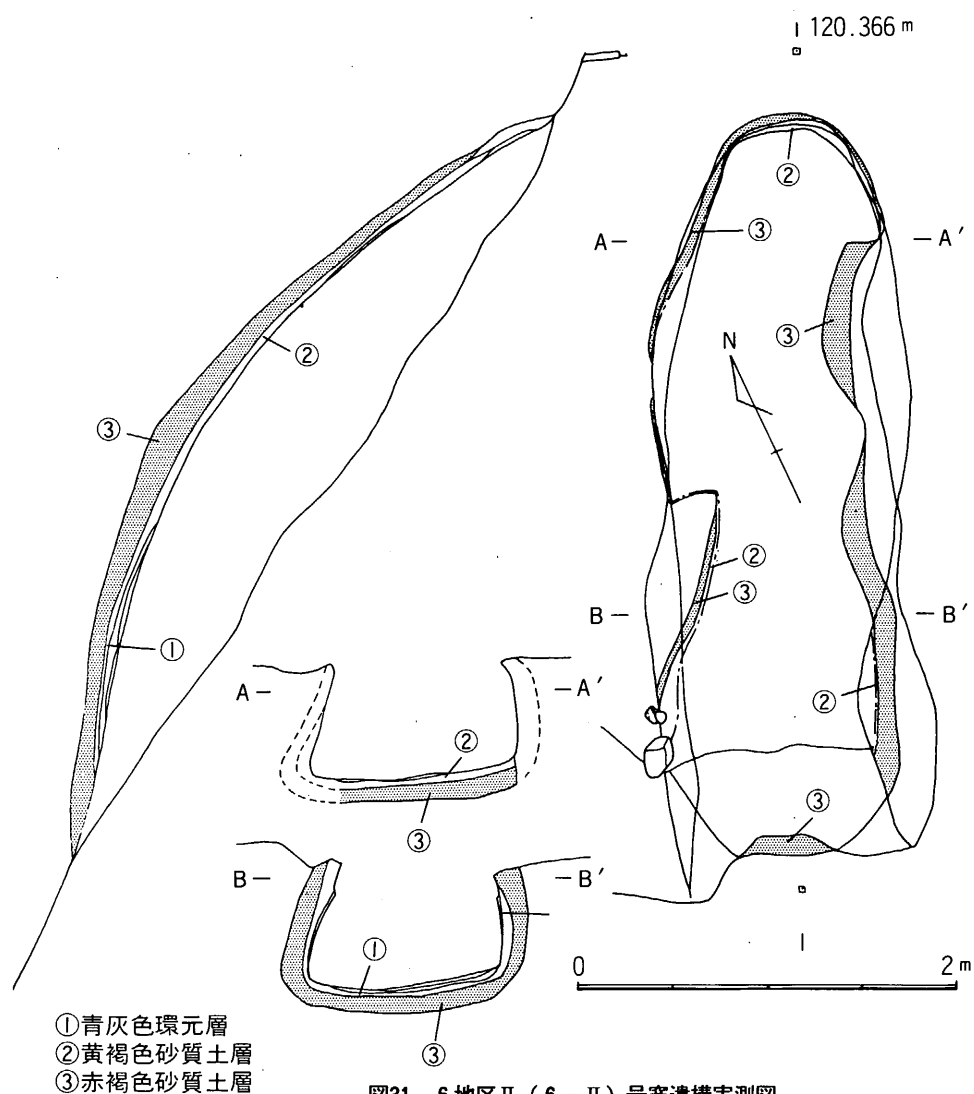


図31 6地区Ⅱ（6-Ⅱ）号窯遺構実測図

れる。

B. 焼成部

主軸線上長さ2.4m、最大床幅1.36mである。床面傾斜は奥へ行くほど増しており、傾斜角度は 41° 、窯尻との比高差は2.18mを測る。床面の基底線は、傾斜変換点附近からゆるやかにその幅を増し、やがて少し狭くなりながら奥壁につづく。たちわりA-A'を設定して下層の検討を行った結果、床は2枚で、第2次焼成時に焼成部補修がなされたと考えられる。

C. 奥壁・煙道部

すでに自然浸食、流出のため失われており、実態は把握できない。

（前庭部）

前庭部末端は機械により削られ、前庭部全体は不明である。主軸線上残存長0.6m、下方は焚口幅より広いが、横の6-I号窯の灰がこの窯の前庭部に及んでいるために東側の範囲は不明である。主軸をはさんで両側に約5cmの灰層がみられる。

(灰原)

前庭部の前が急傾斜であるために自然流出により、灰原は傾斜距離約3.5m下に形成されている。しかし、6-II号窯の灰と思われるのはあまり見あたらない。(朴 廣春)

3) 6-III号窯跡

(位置と状況)

6地区北斜面に位置し、この地区においては、最も規模が大きい窯で、II号窯とほぼ平行に構築されている。この窯体の大きな特徴は、燃焼部から焚口にかけてが、一度大幅に改築されていることである。以下、最終ベースの窯体をIII-A、下方窯体をIII-Bとする。なお燃成部、煙道部は、III-A、III-Bとも共用している。III-Aは、焚口標高11.7m、窯体の全長3.8m、最大幅1.17mを測る。III-Bは、焚口標高116.9m、窯体の全長4.6m、最大幅1.17mを測る。主軸方向は双方とも、N-32°-Eである。窯体の残存状態は双方とも、比較的良好で、構築方法は、地山を掘り抜いた地下式である。

(窯体の構造)

A. 焚口・燃焼部

① III-A

焚口末端幅0.7m、傾斜変換点までの主軸線上の長さ1.5m、傾斜変換点での幅1.0mを測る。床幅は、焚口付近で狭く、奥に進むにつれて若干外に広がっている。右側壁は主軸線上ほぼ平行なのに対し、左側壁は、焚口から奥壁に向かうにつれて外に広がっている。焚口から燃焼部にかけては、一様に黄褐色半還元層、その下に赤色酸化層が見られた。燃焼部でのたちわりから観察すると、左右側壁には張り壁が各一枚見られ、床面には、張り床が存在したと思われるが、残存状態は不良であった。

② III-B

焚口末端幅1.4m、傾斜変換点までの主軸線上の長さ2.3m、傾斜変換点での幅1.0mを測る。焚口は若干八の字形に広がっており、焚口から奥壁へ0.3m向かった所で、右側壁が内に張り出している。燃焼部の床幅は、焚口付近で広く、奥に進むにつれて徐々に狭まり、焚口から0.9mの所から再び徐々に広がる。焚口から燃焼部にかけては、一様に半還元層、その下に酸化層が見られた。窯体縦断たちわりから、床面上に、炭灰を含む、黄褐色の地山が堆積しており、この上にIII-A窯体の床面が存在したと思われる。

B. 焼成部

焼成部及び煙道部は、焚口と燃焼部の改築とは関係なく共用されている。焼成部は奥壁までの主軸線上の長さ2.0m、最大床幅1.17mを測る。床面は、若干天井部に向かって膨らみながら傾斜を増している。傾斜角は、奥壁から1.4mのところで約45°を測る。床面プランは、燃焼部から若干、外に張り出ししながら中央部で床幅が最大となり、奥壁に向かうにつれ徐々に狭まっている。そして奥壁から0.6mのところで直角に内へ入りこんでいる。なお、焼成部には、天

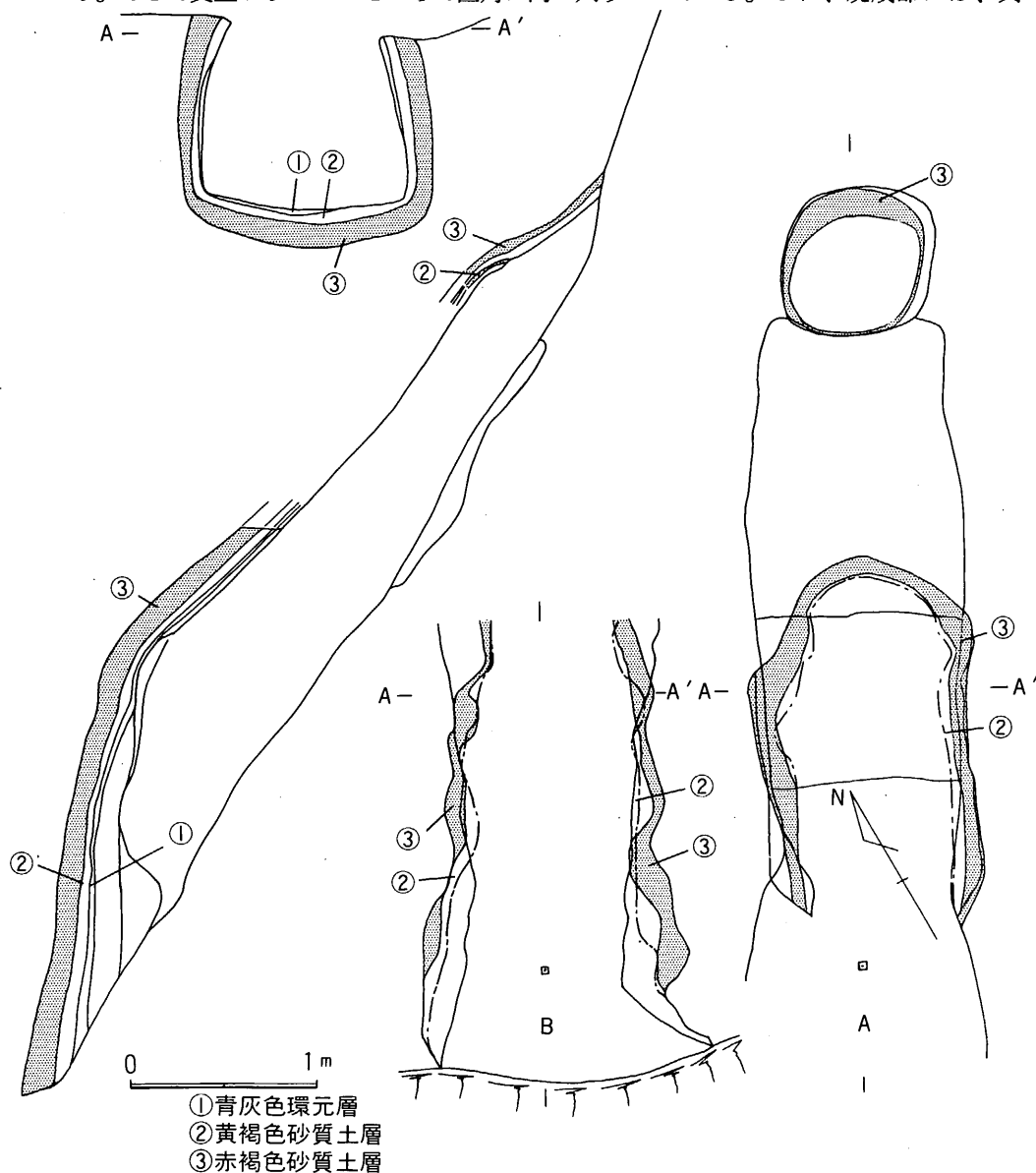


図32 6地区Ⅲ(6-Ⅲ)号窯遺構実測図

井部が遺存していたため、たちわりを設定できなかった。それゆえ、床や側壁の状態は観察できなかった。天井の高さは、奥壁から1.3mのところまで0.7mを測る。

C. 奥壁・煙道部

煙道部は直径0.8m、残存高0.4mを測る。奥壁と、それに近い床面には、一枚の補修のあとがみられ、奥壁及び煙道部には、黄褐色半還元層、その下に赤褐色酸化層が見られた。

(前庭部)

最終ベースにおいて、前庭部は、下方窯体上に焚口からゆるやかな八の字形に広がる。前庭部の大きさは、堆積している炭灰層から、主軸線上の長さ0.8m、最大幅1.2mを測る。下方窯体においては、焚口付近から先が失われており、当該部分については検出できなかった。

(灰原)

最終ベース、下方窯体の灰原はそれぞれの焚口から下方の斜面に広がるが、それぞれ、かく乱、自然流失などにより明確に検出できなかった。

(西山)

③ 土坑およびその他の遺構

1) 6 地区下方灰原

6 地区に存在する 3 窯跡下方に広がる傾斜面に堆積している。灰原の範囲を確認するため、Ⅱ号窯の下方から谷の方に延長した縦断セクション (A-A')、それに直交する形で横断セクション (B-B') を設定した。また、3 窯跡の先後関係を確認するため、Ⅰ号窯とⅢ号窯の下方から谷の方に延長し、B-B' と直交させたセクションを設定した。斜面は西部分が若干谷状にくぼんでいるため、灰原は、やや西側に偏右する形で黄褐色の地山の上に堆積している。

セクション A-A' の観察によると、黒色炭灰層の上に灰黄褐色土層、黒褐色粘質土層の順に堆積している。灰層は、A-A' が B-B' と直交する点より尾根の方向へ水平距離で約 2.0 m の所から谷の方に向かって堆積が見られる。

セクション B-B' においては、黄褐色の地山の傾斜に沿って西の方に大きく流されているのがわかる。最も厚い所で 0.4m を測り、東側には地山、パイラン土の流れ込みが見られた。セクションは、地山の上に黒色炭灰層、灰黄褐色土層の順に堆積している。

セクション B-B' に広い範囲で見られる、やや多くの焼土粒及び須恵器を含む黒色炭灰層は、おそらくⅠ号窯のものではないかと推定される。これは、位置的に見ても、Ⅰ号窯の直下に最も厚く堆積していることや、Ⅰ号窯直下の縦断セクションから、前庭部に堆積している炭灰層と、ほぼ同じ炭灰層であること、そしてセクション A-A' から、近接するⅡ号窯にはそのような炭灰層が見られないことからそのように考えられる。一方、Ⅲ号窯直下の縦断セクションにおいて、ほぼⅢ号窯から出たと思われる灰黄褐色土層が見られるが、これはⅡ号窯直下のセクション A-A' にも見られ、さらにセクション B-B' において先ほどのⅠ号窯から出たと

思われる黒色炭灰層の上に堆積している。このことから、Ⅲ号窯から出た灰は、西の方へ流されて堆積しており、Ⅰ号窯はⅢ号窯に先行すると思われる。なお、Ⅱ号窯については、両側にある窯跡直下のセクションとセクションA-A'間の灰を除去する際、観察が充分でなかったことと、Ⅱ号窯の灰層がほとんど失なわれていたため、灰原から他の窯跡との先後関係を判断するのは困難だった。

灰原の炭灰層中からは多量の須恵器（杯身、杯蓋を中心に高杯、鉢、長頸壺、蹄脚碗など）が出土した。また土師器も少量出土した。下方灰層の下には、遺構は何ら認められなかった。

（西山）

2) 6-Ⅳ号土坑

Ⅲ号窯の東上方約8.0m、Ⅵ号土坑に隣接して位置する。長径約0.80m、短径約0.60mのやや不整な円形プランを呈しており、深さ約0.20mを測る。土坑内セクションは上層より、明黄褐色土層（10YR 6/6）、暗黄褐色砂質土層（10YR 4/3）となっている。暗黄褐色砂質土層の下層には多量の炭化物と焼土を伴う黒褐色土層（10YR 3/1）がみられたが、焼け締まっていたはいなかった。

遺物は検出されなかった。

この土坑の性格は、大きさや他の土坑に比べて炭化物や焼土が多く出土することから、焚火の跡、または、炉の跡と考えられる。

（風間栄一）

3) 6-V号土坑

Ⅲ号窯の東南約20.0mに単独で位置する。長径約1.70m、短径約1.20mの半円形プランを呈しており、深さは約0.20mを測る。この土坑の埋土は黄褐色粘質土層（10YR 5/6）の単層で、炭化物と焼土を微量に含んでいたが、焼け締まっていたはいなかった。また、微細な石英粒を含んでいたが、これは地山の花崗岩の風化作用にともない流れ込んだものと思われる。遺物は埋土中央付近より蓋杯片が出土している。

この土坑の北側下端から直径約0.40mの円形プランを呈した浅いピット

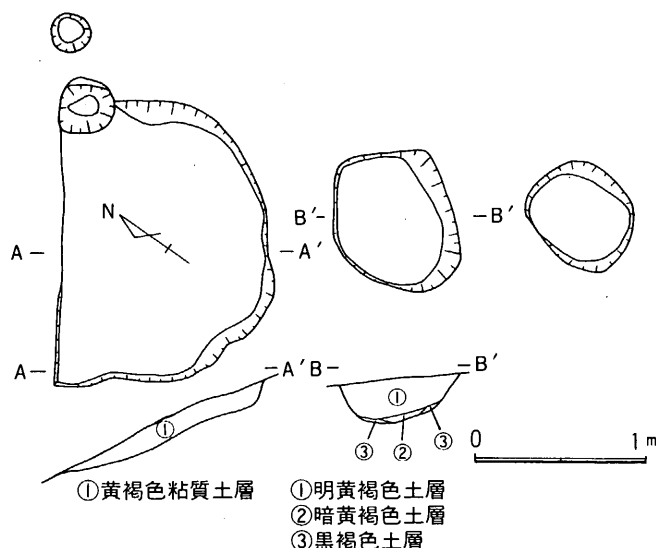


図33 6地区Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ号土坑（左から6-V、6-Ⅳ、6-Ⅵ号土坑）

が検出された。このピットは土坑を掘りこんで作っている。またそれに隣接して北側約0.20mに直径約0.20mの円形の浅いピットが位置している。新旧関係は切り合いがないため不明である。遺物は何も検出されなかった。

この土坑は同一斜面ではあるが、窯が検出されていない位置に窯より遠く離れて構築されている。この点はこの土坑の性格を考えるうえで、注目に値するだろう。(風間)

4) 6-VI号土坑

Ⅲ号窯の東上方、Ⅳ号土坑に隣接して位置する。直径約0.60mのやや不整な円形プランを呈しており、深さは約0.20mを測る。炭化物および焼土の出土はなく、焼け締まってもいなかった。この土坑での火の使用は考えられない。

遺物は埋土中下方より蓋杯が数点出土している。

この土坑は窯に隣接して尾根上に位置している。出土遺物より窯と同時期の遺構とみられるところから、窯に伴う何らかの施設と考えられる。また、谷添いからは何の遺構も検出されおらず、その点からも尾根道の利用が想起されよう。(風間)

(4) 6B地区の調査

① 須恵器窯跡

1) 6B-I号窯跡

6B地区の北方寄り、標高約119mに位置する。窯体の大部分および灰原は自然流失によって失われており、赤色酸化層を呈する焼成部床面と左側壁の立ち上がりがわずかに確認された。窯体の全長・最大幅はともに不明であるが、主軸方向は $W-24^{\circ}-S$ 、床面傾斜角は 38° と推定された。遺物は当該部分からは検出されなかった。(余語琢磨)

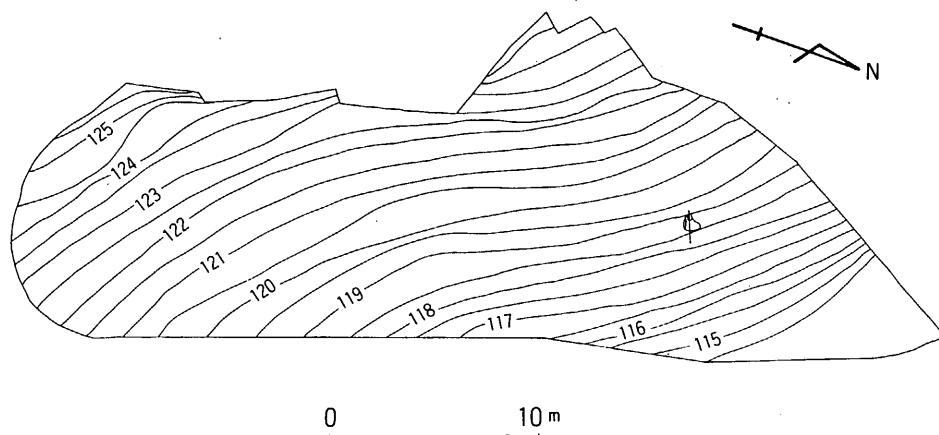


図34 6B地区地形図

(5) 7地区の調査

① 分布の状況

谷の開口部近くに形成された溜池の上方丘陵斜面裾に位置する窯跡1基と土坑1基とから構成されている。丘陵斜面は急傾斜で、尾根部は狭く、当該部分は他の地域と異なり明らかに谷道を利用していたと推定される。窯跡の立地する標高は74.5mから76.5m前後で、現状の丘陵では裾部に位置する。なお裾部は溜池のため水がたまっており、灰原については十分な調査が行えなかった。恐らくは当該池内にも幾分かの堆積が見られると思われる。

② 須恵器窯跡

1) 7-I号窯跡

(位置と状況)

花崗岩パイラン土を掘り抜いて作られた地下式の登窯であり、標高71m～76mの等高線にやや斜交して位置する。窯の主軸方向はN-70°-Wで、主軸長は3.0mを測る。天井及び壁面はかなり崩壊しているが、床面の残存状況は良好である。床面幅は焚口から主軸方向に水平距離0.8mの所で狭まり0.7mを測り、1.5mの所で最大となり最大幅は1.0mを測る。そこから再び狭まりながら奥壁に至る。また、焼き台が焼成部より20数個、窯体外より10数個出土した。

(窯体の構造)

A. 焚口・燃烧部

焚口から主軸方向で0.9mの所に傾斜変換点があり、ここまでが燃烧部と思われる。床面の傾斜はほぼ水平であり、焚口での床幅は0.9mを測る。燃烧部に設定したたちわり (B-B')

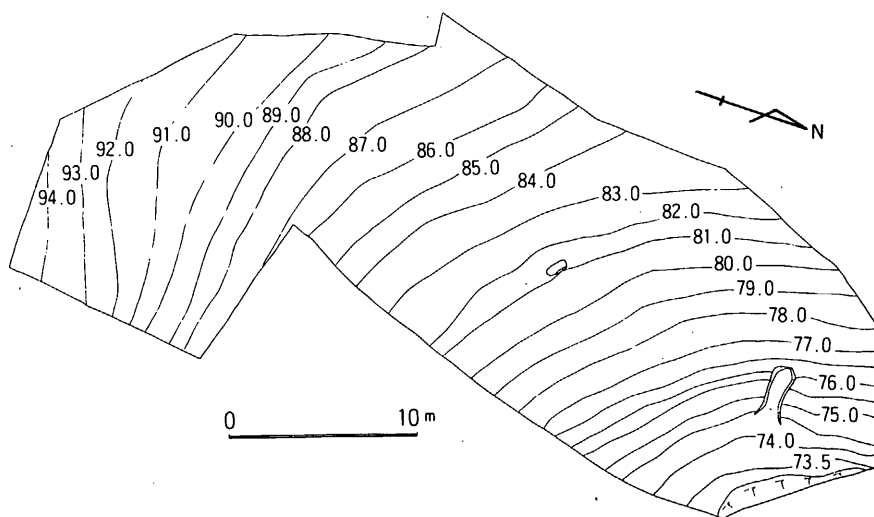


図35 7地区地形図

により、貼り壁が1枚確認された。

B. 焼成部

傾斜変換点から奥壁までが焼成部であり、床面長は主軸方向に水平距離で1.8m、斜距離で2.1mを測る。床面の傾斜は約 30° で奥壁へと続く。床面の幅は傾斜変換点から奥へ0.6mの所で最大となり、最奥部では幅0.4mを測る。貼り壁は壁面が崩壊しているため、確認できなかったが、たちわりの観察から貼り床が1枚見られた。焼き台は主に焼成部前面から集中して出土したが、すべて床面より少し浮いた状態であった。

C. 奥壁・煙道部

崩壊しているため、詳しい形状はわからないが、奥壁は床面からほぼ垂直に立ちあがり煙道

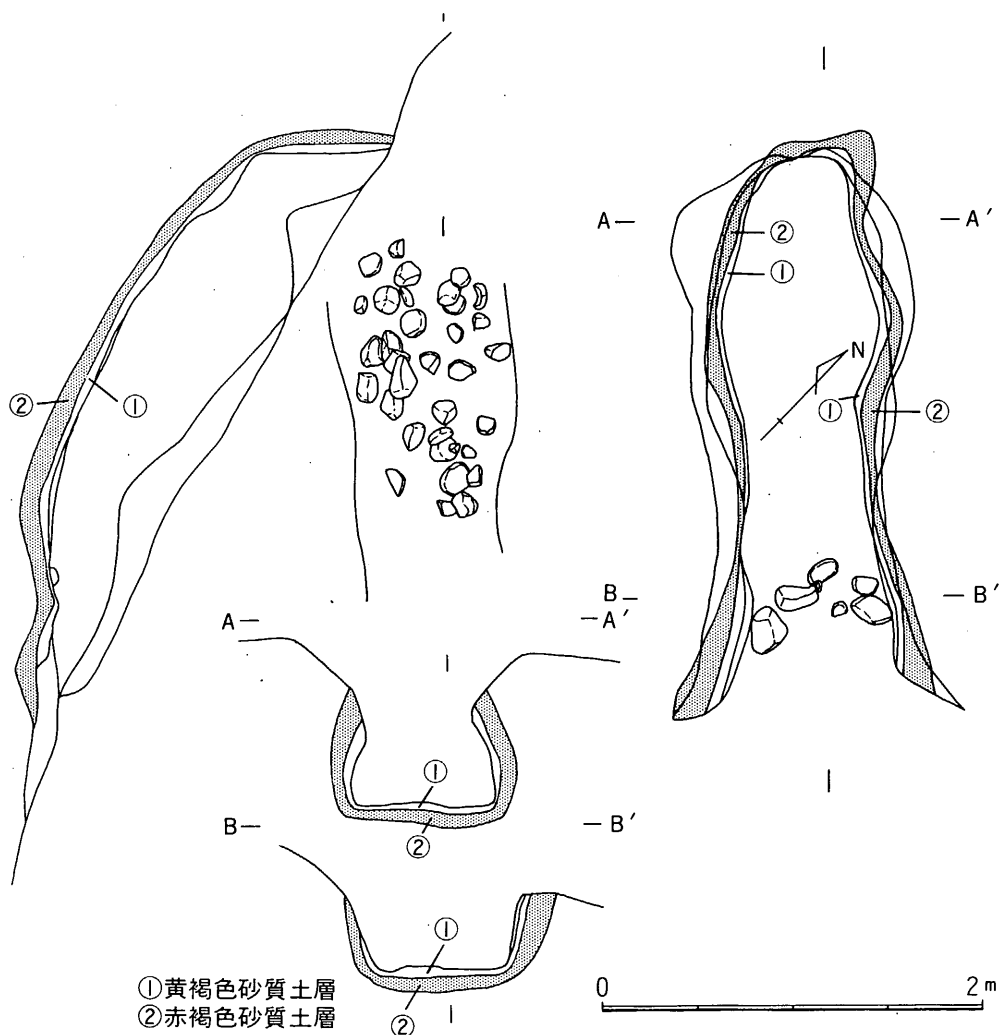


図36 7地区I(7-I)号窯遺構実測図

部へとつながる。奥壁、煙道部長を合わせて0.7mを測る。奥壁は固く焼き締まっている。

前庭部

焚口から平面八字形に広がり、主軸方向で0.6mを測る。表面には燃焼部から掻き出したと思われる灰が0.1mほど堆積しているのが見られた。前庭部前方の灰層を取り除いた後、その下から0.9m×0.5mの平面楕円形を呈する土壌が検出された。

灰原

斜面との関係上、主軸よりやや北側に片寄って流れ落ちている。また、灰の堆積が二層確認され、層の厚さは厚い部分で上層0.2m、下層0.3mを測る。

遺物

窯体内から杯蓋、灰原から杯蓋、高杯、甕等が出土した。(高久)

③ 土坑

1) 7-Ⅱ号土坑

I号窯の上方、南西へ約13mに位置する土坑である。長軸約1.45m、短軸約0.55mの、両短辺が丸みをおびた長方形状を呈し、山側からの深さ約0.35mをはかる。長軸は斜面の等高線にほぼ平行する方向をとる。土坑内の床面直上には12cm程の厚さに炭灰が堆積し、その上を地山の風化によって流れ込んだバイラン土が覆っていた。床面はわずかに焼け締まり、また山側の壁面は赤色酸化、いわゆる赤焼けの状態を呈していることから、この土坑が火の使用に供せられたことがうかがわれた。遺物は検出されなかった。(余語)

(6) 12地区の調査

① 分布の状況

12地区は、今回の造成計画地域の北東部に該当する。平野中学の東に接して、現南ヶ丘団地に向かって開く大きな谷の中位付近から、東に短く派生した谷に面した丘陵斜面中腹部に形成された窯跡群である。窯跡の立地する標高は92.0mから101mをはかる。

この部分の丘陵は北から東へと大きく内彎するが、その北側斜面と東側斜面に窯跡5基づつが各々分布する。すなわち東側には、I号窯跡からV号窯跡、北側ではVI号窯跡からX号窯跡である。さらに詳しく見れば、東端からI、II、III、IV、V、X、VI、VII、VIII、IX号窯跡である。調査の手順に従って命名したものであり、必ずしも順序良くはなっていない。

窯跡の主軸方向は、その位置する斜面によって規制されているが、各斜面にあっても微妙に

差異を認めるものもある。東側斜面（以下東群と呼称）ではⅠ、Ⅲ号窯跡、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ号窯跡の方向が各々近似している。また北側斜面（以下北群）ではⅥ、Ⅶ、Ⅸ号窯跡、Ⅷ、Ⅹ号窯跡、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ号窯跡が各々近い。窯の規模ではⅤ、Ⅸ号窯跡が大きく、Ⅰ、Ⅳ、Ⅹ号窯跡が小型に分類される。

窯跡の詳細は次項を参照されたいが、特筆すべき事項としては製品焼成を行っていない窯と掘削途中の窯が検出されたことである。また灰原は本来焚口下方に広がっているのが普通である。しかし牛頸窯跡群の場合は丘陵斜面が急であることもあり、大半が下方の谷に落ち込んでいる。従って混在した灰原中遺物の区分のため、平板測量によって一応の目安をたてて遺物採集を行った。（図39参照）

窯跡以外には、土坑が2ヶ所検出された。とくに窯跡前庭部に伴うものは別として、全く別個に設置されたものもある。

以下各遺構について記述する。

② 須恵器窯跡

1) 12—Ⅰ号窯跡

（位置と状況）

12地区の北部に位置し、Ⅱ号窯跡の北側に隣接する形で存在している。窯体主軸方向は、N-103°-W、主軸上の残存長3.1m、床面最大幅は燃烧部分にあり0.9m、焚口部における標高は約96.1mをそれぞれ測り、傾斜変換点を境として燃成部よりもやや右側に屈曲する形をしている。また、焚口部から燃烧部にかけては直線的に広がり、傾斜変換点を境として焼成部へは膨らむ形で広がっている。等高線に直交する小規模な登窯である。

（窯体の構造）

A. 焚口・燃烧部

焚口部の床面最大幅は約0.9m、傾斜変換点までの主軸上における長さ0.65m、燃烧部と焼成部のなす角度150°をそれぞれ測る。床面は、ほぼ水平である。

この部分からは、杯身・杯蓋および焼き台などの遺物が原位置から流れ込むような形で最終床面上に堆積していた。さらにこれらの遺物の上に杯蓋のみが重なった状況で出土していた（図版第77参照）¹⁾。

B. 焼成部

主軸上における長さは2.45m、床面傾斜角は30°である。たちわりA-A'では壁・床ともに補修の痕跡は認められなかった。

この部分からは、床面直上より杯身・杯蓋がそれぞれ出土しており、上半部分には、焼き台があった。

C. 奥壁・煙道部

焼成部と奥壁のなす角度は 97° であり、焼成部壁が次第に狭くなる形をとって奥壁へと続き、さらには煙道部へと続いている。煙道部の上部は既に消失していた。

なお主軸上のたちわりにより、この部分において青灰色の還元層の下位に炭化物の層がみられ、さらにその下に赤色酸化層が形成されていた。またこの赤色酸化層の下位には、長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.55mの楕円形を呈する2段掘りのピットを検出した。

前庭部

焚口部にはほぼ接するように、長軸2.5m、短軸2.2m、深さ0.5mの不整形の土坑が形成されており、炭化物をはじめとしたⅠ号窯に伴うと考えられる諸遺物を包含していた。

灰原

前庭部における不整形の土坑から下方約2mの位置に、若干の灰層の堆積がみられたものの層的に断続しており、隣接する各窯跡を考え合わせるとⅠ号窯に帰属するものか不明である。

(中島恒次郎)

註1) 当該時期におけるこのような例としては、牛頸窯跡群の道ノ下11号窯跡において燃焼部に杯蓋のみを重ねた状態で出土している。

福岡県教育委員会(1988)『牛頸窯跡群Ⅰ』

2) 12—Ⅱ号窯跡

(位置と状況)

Ⅰ号窯跡の東南部3.5mの同一斜面、標高96.5mから97m前後に位置する登窯跡である。主軸上の全長2.9m、幅1.35m、主軸方向はN— $131^{\circ} 34' 40''$ —Wを各々をはかる。焚口から奥壁部まで遺存しているが、煙道部は崩落のため現存しない。全体に焼成度合いが不良で高温に至っていない可能性もある。

(窯体の構造)

A、焚口・燃焼部

焚口の幅は0.62m、両側側壁の先端は右が約10cm長い。傾斜変換点までの主軸上での延長は0.9m、床面傾斜は 7° と緩やかである。床の幅は0.65m前後でほぼ一定している。貼り床、貼り壁は認められない。

B、焼成部

主軸上の延長は2.0m、最大幅1.35m、床面傾斜は 33° をはかるが、焚口側は比較的なだらかなではあるが、中位から弓形に登る。たちわりA—A'での観察では床、壁ともに焼け締まった痕跡を認めることは出来なかった。なお床面基底は奥壁に向かって広がっていき、逆台形状をなす。

C、奥壁・煙道部

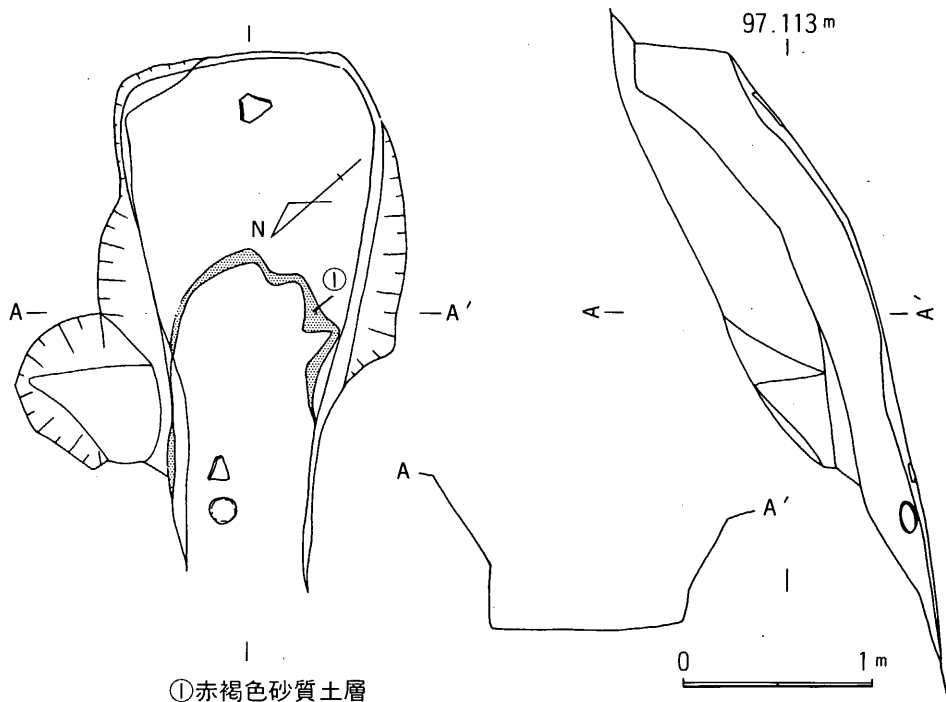


図37 12地区Ⅱ号窯

焼成部床面と奥壁の立上り角度は 60° をはかる。また最も焼け締まっている部分にもかかわらず全くその痕跡を認めない。煙道部は崩落のため遺存しない。しかし調査中に円筒形のものを確認しており、それが煙道であった可能性がある。

(前庭部・灰原)

焚口前方部に僅かな平坦部は見られるが、殆ど自然崩落によって失われている。灰原についても同様であり、窯体部分の観察では、それが存在するかどうか分からない。

(遺物)

明らかに本窯跡の焼成であると断言できるものは見られない。いずれも流入品と考えられる。

(舟山)

3) 12—Ⅲ号窯跡

(位置と状況)

I号窯跡の東南6m、II号窯跡の東2.2mの同一丘陵同一斜面に位置する中規模の登窯である。窯跡は95.6から99.1mをはかる標高部分に構築されている。焚口から煙道部まで、ほぼ完全に残っているが、前庭部、灰原は大半が流出している。

全長4.55m、最大床幅1.15m、主軸方向N— $117^\circ 8' 40''$ —Eをはかる。

(窯体の構造)

A、焚口・燃烧部

焚口幅1.2mをはかり、ラッパ状に拡がっている。両端の側壁は左が0.3m長い。傾斜変換点までの主軸上での延長は0.9m、床面傾斜はほぼ平坦である。また焚口部が拡がっているほかは床面基底線は、ほぼ一定である。

B、焼成部

主軸上の延長は2.9m、最大幅1.15m、床面傾斜は 31° をはかる。床面は僅かに弓形に登り、奥壁に至る。この部分に設定したたちわりA—A'では床、側壁ともに1枚を数えるのみであった。全体にあまり強く焼かれていないという印象を与える。とくに還元焼固した部分が確認出来ないのはそれを証左する。とくに焼成部上位では左側壁に大きな孔が穿たれており注目される。この孔の径は0.4mで奥壁から約1mの部分である。この孔については横くべという追加の焚口の可能性と煙道の両者が考えられるが、状況から後者の可能性が濃い。

C、奥壁・煙道部

焼成部床面と 69° の角度でたちあがっている。とくに左側（北西）へ溝が連なっている。これはⅠ地区Ⅱ号窯跡（Ⅰ—Ⅱ）でも見た溝と同様な用途を果たすものと考えられる。すなわち煙道の延長としてこの溝があり、上方へ煙を逃すのではなく横方向へ逃したものと考えられる。煙道の径は0.6mの円筒形をなし、その延長は0.85mをはかる。

(前庭部・灰原)

焚口前方に拡がる平坦部は、段をもちながら下がる。残存長は主軸長で1.8mをはかるが先端部では自然流出のため失われている。

灰原は焚口前方部から灰層の堆積が認められるが、Ⅳ、Ⅴ号窯跡のものと重複している部分が多く、その区分はかなり困難である。あえていえばC区灰原の遺物は当該窯跡のものと見て大過ないだろう。

(遺物)

灰原部分からの出土遺物が多量に見られる。器種は蓋杯、などがある。 (舟山)

4) 12—Ⅳ号窯跡

(位置と状況)

Ⅲ号窯跡の南東0.6mに接して位置する小型の登窯である。焚口付近の標高は96.4mをはかり主軸上の全長2.8m、最大幅0.95m、主軸方向はN— $128^{\circ}31'$ —Wを各々はかる。

(窯体の構造)

A、焚口・燃烧部

焚口はハの字に開き、その最小幅は0.7mをはかる。焚口先端部の焼土の状況は左が30cm前

後長い。

傾斜変換点までの主軸上の延長は0.6m、幅は0.7～0.8m前後をはかる。床面傾斜はかなり緩やかで除々に登っている。置台、遺物が傾斜変換点から下方にも見られるが、これらはいずれも上方から落下してきたものと考えられる。

B、焼成部

主軸上の延長2.2m、最大幅0.95mをはかる。床面傾斜は31°で弓形状に上方へ登る。床面基底線は中央が大きく膨らむ形状を呈している。焼成部床面には置台、遺物が配置されており、当該施設の利用があったものと考えられる。なお置台は粘土の塊を馬蹄形に成型したものをしている。さらに甕の破片が散乱しているが、これも置台として用いられた可能性が強いと思われる。たちわりA—A'、B—B'ともに床面、貼り壁の痕跡は確認されなかった。

C、奥壁・煙道部

焼成部床面とは80°の角度で奥壁はたちあがる。奥壁のたちあがりの高さは35cm前後である。

(前庭部・灰原)

焚口から前方にハの字形に広がっている平坦面がある。床は還元焼固しており、当該部分で燃焼行為が行われたものと考えられる。なお先端部は20cm前後下がっており傾斜面をなす。

灰原は自然崩落によって前庭部先端から失われており、旧状は想定出来ない。また灰原の灰層はⅢ、Ⅳ号窯跡のものが重複している。

(遺物)

蓋杯をはじめ皿、壺、などが見られ、量も多い。

(関連施設)

窯跡の右側に土坑が位置しており、内部からは遺物および灰が検出されている。

Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ号窯前面灰原

Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ号窯の前面の緩やかな斜面に広がっているものの、灰原の大半は、自然崩壊にともなって消失していた。Ⅱ号窯に伴う灰原は、大部分が流失もしくは崩壊に伴って消失しており、南北セクションにおいて北部に僅かに残るだけであった。Ⅲ号窯の灰原は、窯体内埋土がよく残っており、Ⅲ号窯埋土の下位に焚口部から下方に堆積している黒色灰層(Ⅶ・Ⅸ層)がⅢ号窯単独の灰原と考えられる。ところで、このⅢ号窯窯体内埋土の上位には後で述べるⅣ・Ⅴ号窯灰原の流れ込み層が堆積しており、さらに上位に黒色灰層がのっている。この黒色灰層は、Ⅲ号窯窯体内から堆積していることから、Ⅲ号窯よりも上方にある窯跡の灰層の堆積が考えられ、この黒色灰層中に須恵器・甕の破片が多いことからⅤ号窯の灰層の流れ込みと考えられる。Ⅳ号窯に帰属すると考えられる灰原は、自然崩壊に伴う消失ならびにⅣ号窯焚口部南側にある落込み部分にⅤ号窯の灰層と混在する形で堆積していると考えられ、Ⅳ号窯単独の灰原としては明確な形で捉えることはできなかった。落込み部分に流れ込む形で堆積している層は、

堆積物の粒径から5つの層群¹⁾に分けることができ、甕・杯身・杯蓋・長頸壺等の破片、窯壁片、多量の炭化物等が包含されていた。(前田直子・中島恒次郎)

註1) 下位から上位に向けて、堆積物の粒径が粗粒→中粒→細粒といった上方細粒化傾向を認識し、細粒から粗粒へと再び変わる分層線を境として、粗粒から細粒への土層変化をまとめて1グループ(層群)とした。すなわち、このグループは自然界における流れ込みの堆積時間の同時性を示している。

庄司力偉(1971)『堆積学』

5) 12—V号窯跡

(位置と状況)

IV号窯跡の南3.5m、標高98.4m前後をはかる同一丘陵上位斜面に位置する比較的規模が大きな登窯である。奥壁から焚口、前庭部まではほぼ認められ、良好な遺存状況を呈している。主軸上の全長6.3m、最大床幅1.5m、主軸方向N—159°21'20"—Wをはかる。

(窯体の構造)

A、焚口・燃焼部

焚口の幅は、1mをはかり、焚口の狭小になった部分から外側に、両側壁が「く」の字に開いている。

傾斜変換点までの延長は1.2m、床幅は0.95～1.15mで、床面の傾斜はきわめてゆるやかである。当該部分から焼成部にかけて舟底状ピットが床面下層に認められる。なおたちわりA—A'の観察では、貼り床、貼り壁ともに認められない。

B、焼成部

主軸上での延長は4.7m、最大床幅は1.5m、床面は直線的に上方へ登り、その角度は30°前後をはかる。焼成部下方には舟底状ピットが床面下層に認められ、その延長は2.35m、幅1.0m、深さ0.4mをはかる楕円形をなす。たちわりB—B'では貼り床、貼り壁ともに認められない。また焼成部上位に設定したたちわりC—C'での観察でも同様に貼り床、貼り壁ともに認められなかった。

C、奥壁・煙道部

焼成部床面と奥壁とのたちあがりの角度は83°をはかる。煙道部の延長は0.6m、平面形は崩落のため失われたが、0.7～0.5mの楕円形をなし、右側に曲がっていることがわかる。

(前庭部・灰原)

前庭部は最大2.2m、「ハ」の字に拡がっている。また焚口前方には3.4～2.0m、深さ0.5mの土坑状の落ち込みが所在する。内部からは炭、灰、遺物が出土した。

灰原は、前庭部および土坑とその下方に拡がる。灰層はⅢ、Ⅳ号窯跡と重複する。

(遺物)

蓋杯・皿・甕をはじめ多数の須恵器が採集されている。とくに大型器種の焼成が行われていたものと見られる。

(関連施設)

燃焼部から前庭部にかけての左側に平坦面を造り出しており、ここから焼き台、甕片が出土した(SK01土坑)。

また反対側の右側には、窯体とやや離れて浅い不整形の土坑があり、炭・灰とともに多くの甕片が出土した。(舟山)

6) 12—VI号窯跡

(位置と状況)

V号窯跡の西9m、さらに東にはX号窯跡が接して所在する。北向き斜面の標高96~98m前後に位置する、やや小型の登窯である。主軸上の延長は4m、最大床幅1.25m前後をはかり、焚口から奥壁まではほぼ残存している。主軸方向はN—178°21′—Eをはかる。

(窯体の構造)

A、焚口・燃焼部

焚口の幅は0.8mをはかり、左右の焼土の先端は右が約20cm長い。傾斜変換点までの延長は0.7m、床幅は0.85~1.05m、床面はほぼ平坦である。傾斜変換点の両側壁部には0.5~0.4mの自然石を配置し、その上部に粘土を貼付する。なお当該部分に設定したたちわりA—A'によると1次焼成窯では、石を配置しておらず、この窯の廃棄後配置されたものと見られる。

B、焼成部

主軸上の延長は0.7m、床幅は1.25m、床面傾斜は平均しており、33°を各々はかる。床面の基底線は下方に向かって徐々に広がっている。傾斜変換点前後には径0.75~0.4m、深さ0.1mをはかる楕円形の舟底状ピットが設置されている。

奥壁近くのたちわりB—B'では天井部が遺存しており、窯体内空間の規模を看取することができる。ちなみに床から天井までの高さは0.6mをはかる。

C、奥壁、煙道部

焼成部床面と奥壁とのたちあがりの角度は78°で、煙道の延長1.1m、上端は径0.5×0.6mの円形をなす。なお上端部では二段掘りの痕跡を認める。

(前庭部・灰原)

焚口前方に僅かな平坦部を認める。さらに2.0m×1.5mの不整形な形の土坑が、前方に位置する。なお土坑内からは炭、灰の堆積が見られ、遺物も多数出土している。

灰原は前庭部の上部に堆積しているが、灰層を除くと大半が自然崩落のため検出されなかつ

た。

(遺物)

いずれも前庭部などからの採集遺物である。器種には蓋杯などがある。(舟山)

7) 12—Ⅶ号窯跡

(位置と状況)

Ⅵ号窯跡の東2mの同一丘陵同一斜面、標高96m前後に位置する中規模の登窯である。主軸上の全長5.15m最大床幅1.3m、主軸方向N—176°57'20"—Eを各々はかる。天井部を失っているが、焚口から煙道部までほぼ遺存している。

(窯体の構造)

A、焚口・燃焼部

焚口の幅は1.2m、焼土の先端部は削平されており検出時の遺存部先端が焚口となるかどうかはわからない。しかし周囲の状況から、ほぼこれに近い部分に焚口が求められるだろう。

傾斜変換点までの延長は1.2m、床幅は1.15mをはかり、床面はほぼ平坦である。なお傾斜変換点近くから焼成部にかけて舟底状ピットが設定されている。

B、焼成部

主軸上の延長3.95m、床幅1.35m、床面傾斜は32°を各々はかる。床面の基底線は中央部が大きく膨らむ形状をなす。焼成部下位には2.4×1.0m、深さ0.2～0.3mをはかる舟底状ピットが見られる。また床面には中央部付近に粘土塊から構成される置台が2個残されており、当該窯でこれらの使用があったことがわかる。

C、奥壁・煙道部

焼成部床面と奥壁との立上り角度は84°、煙道部延長は1mをはかる。煙道部は自然崩落によって旧状を大きく損なっており、僅かに残存部から0.7×0.6mの円形の煙道であったことが想定されるに過ぎない。

(前庭部・灰原)

既に記述したように、前庭部は自然崩落によって失われており存在しない。ただし灰原での遺物、灰の堆積はこれらに比較して多く、灰層はⅣ号窯跡のものと重複して所在する。なお灰原の区画ではm、n、o、p、sがこれに該当する。

(遺物)

蓋杯などの器種が見られるが、いずれも焚口前方の灰原からのものである。(舟山)

8) 12—Ⅷ号窯跡

(位置と状況)

Ⅶ号窯跡の東1.5m、同一丘陵同一斜面の標高96.6m前後をはかる部分に位置する小型の窯

である。主軸上の全長2.1m床幅は0.75m、主軸方向はN-78°21'-Wを各々はかる。なお当該遺構は、B-本来窯を構築し操業する予定で作業されたと見られるが、途中で岩に遭遇し、その途中で放棄したものである。従って他の窯跡に比較して充分な窯体構造をなしていない部分も見られる。

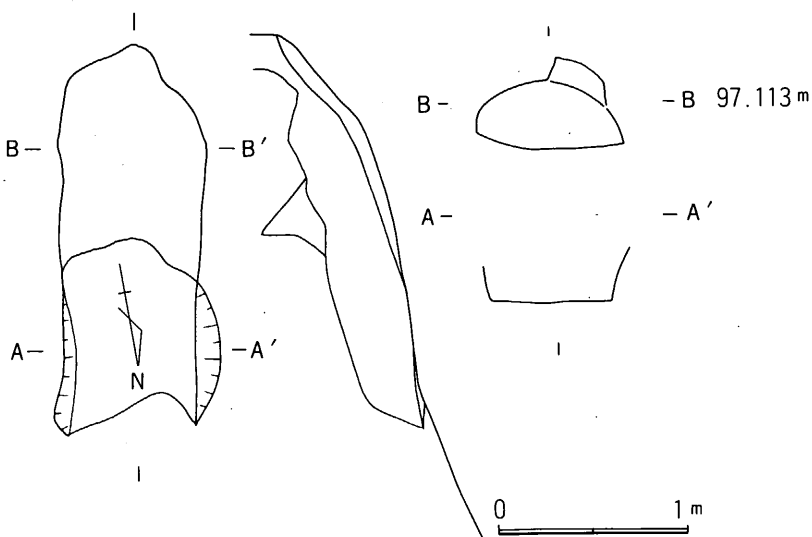


図38 12地区Ⅷ(12-Ⅷ)号窯遺構実測図

A、焚口・燃烧部

焚口と考えられる部分の幅は0.6m、傾斜変換点までの延長は0.55mをはかり、床面はほぼ平坦である。たちわりA-A'での観察でも当然のことながら床、壁の重複は認められなかった。また熱を受けた痕跡も認められなかった。

B、焼成部

奥壁に到達するまでに構築を放棄しており、当初の予定は知る由もないが、現状での延長は1.55m、床幅0.75mをはかる。床の基底線は上方に向かって、やや広がっていく、床面傾斜は17°でなだらかに登っている。たちわりB-B'では天井部までの高さが約0.4mであり、かなり狭い。

C、奥壁・煙道部

認められないとしてよいだろう。

(舟山)

9) 12-Ⅸ号窯跡

(位置と状況)

Ⅷ号窯跡の東2m、12地区の最も南東部、さらに標高92~95mと丘陵斜面下位に位置する特徴的な大型の登窯である。主軸上の全長7.05m、最大床幅1.5m、主軸方向N-175°24'40"-Wを各々はかる。焚口から煙道部までは残っており、良好な遺存状態であった。

(窯体の構造)

A、焚口・燃烧部

焚口の幅は1.05m、傾斜変換点までの主軸下の延長は1.4m、最大床幅は1.1mをはかる。床

面の傾斜は殆ど見られず平坦に近い。また両側壁に柵状の平坦部を認めるが、その用途は不明である。

B、焼成部

主軸上の延長4.95m、最大床幅1.5m、床面傾斜はほぼ平均して登りその角度は24°前後をはかる。床面の基底線は焼成部中央が大きく膨らみ上下で狭くなるという状況を呈している。また下方から燃焼部にかけて舟底状ピットが設定されている。その延長は2.3m、幅0.7m、深さ0.3mを各々はかる。とくに床面下層の赤色酸化層が厚いのが特徴的である。たちわりB—B'では貼り壁が右で1枚見られるほかは、床面も1枚ずつである。さらにたちわりC—C'では大きく床面が段をなしているが、床、壁の重複は認められない。なお当該床面と現地表面とは約3m前後あり、相当深く掘り込んで窯が構築されていることがわかる。

C、奥壁・煙道部

焼成部床面と奥壁とのたちあがり角度は73°で僅かに内傾している。煙道部上面は自然崩落のため失われているが、幅0.6m前後の円形をなし、延長0.7m以上をはかるものであったことが推定される。また左側側壁から径0.3mの階段状の孔が設置されており、煙道のバイパス的なものと考えられる。

(前庭部)

窯体の前方に平坦部が認められ、一定の作業が行える場所が確保されている。その延長は1mを超える。また灰原は丘陵斜面に焚口から扇形に拡がっている。この窯跡に関連する灰原はt、u、v、w、x、yの各地区がある。

(遺物)

前庭部および灰原からのものが多く、蓋杯をはじめ長頸壺・皿・甕など多種多様なものが出土している。量も窯との直接的な関連が濃いものとしては12地区で最も多い。

IX号窯下方灰原

IX号窯下方の急斜面ならびに下方の谷部に堆積している。IX号窯主軸に沿う土層セクションからみて上方に堆積している黒色灰層は、IX号窯前庭部からの流れ込みによる堆積層である。一方、下方の谷部に堆積している灰層も途中で層の断絶があるものの、斜面が、IX号窯の主軸を稜線として両側へ落ちる地形を呈しており、堆積層中における遺物や各種包含物が地形に沿う形で堆積していることから考えてもIX号窯に伴う灰層と考えられる。堆積状況は、上方に堆積している黒色灰層は、花崗岩風化生成物（地山）上に単一層として堆積している。下方に堆積している黒色灰層は、堆積物の粒径区分から3つに区分できる層群（グループ）に分けることができ¹⁾、3回の流れ込みが想定できた。しかし最下層のグループを除いては、各土層グループ内において普遍的に破損の少ない遺物破片を包含しているというわけではないことから、IX号窯の操業回数を示すとは考え難い。

（中島恒次郎・前田直子）

註1) Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ号窯前面灰原 註1)と同じ。

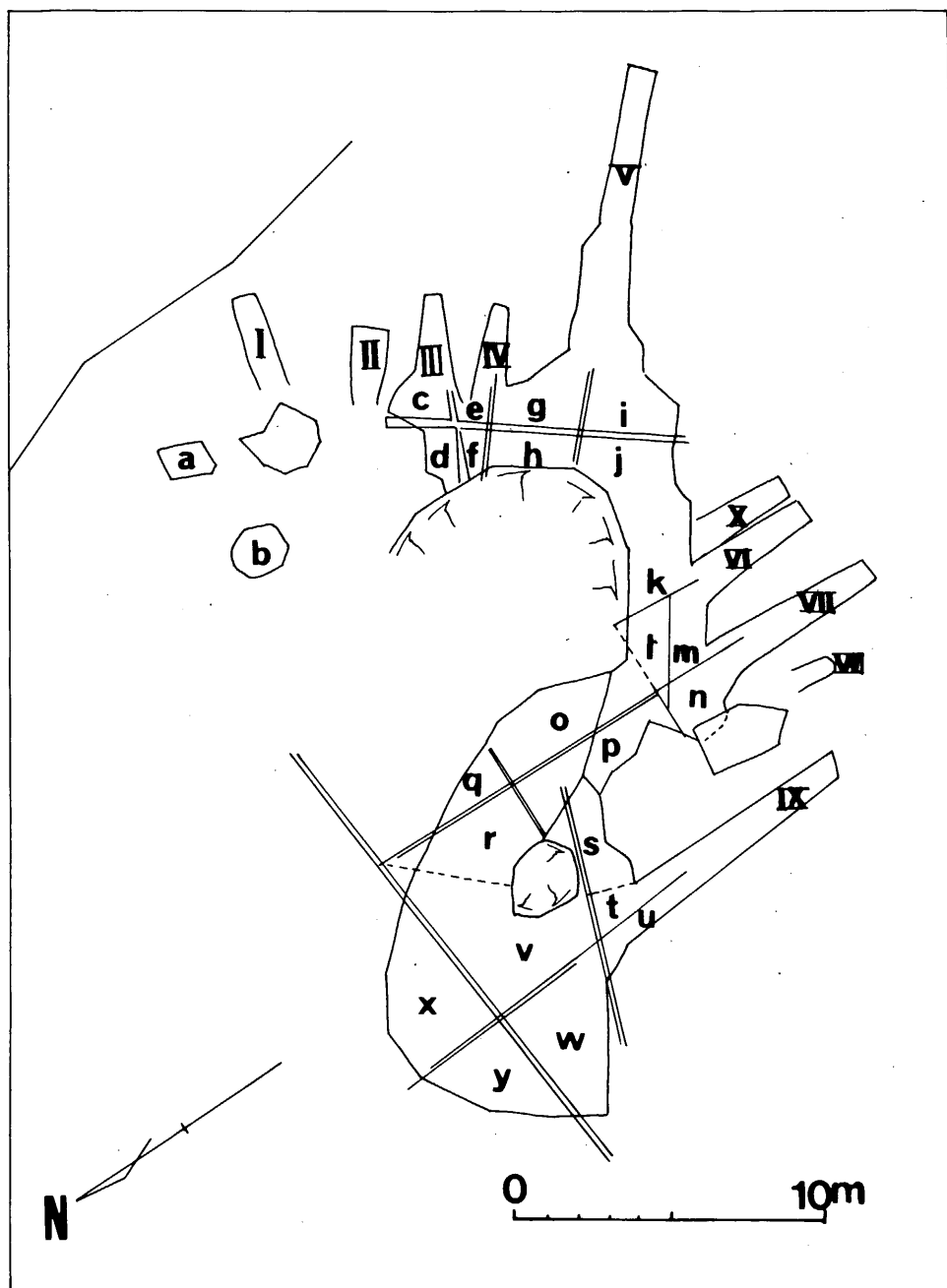


図39 12地区灰原区画図

10) 12-X号窯跡

(位置と状況)

VI号窯跡の左側にあるが、VI号窯に伴うと考えられる土坑を調査中に判明したものである。床面、壁面ともに熱による凝固は見られず、床面にうすく炭層が広がる状態であった。このため空焚きの最中もしくは直後に崩壊したものではないかと考えられる。土坑に切られているため規模等は不詳であるが、現存長2.7m、最大幅0.9m、主軸方向はN-173°51'-Wをはかる。また、それぞれの部分を判明するのは困難である。

(窯体の構造)

床面は全体が強く弓状を呈して登る。燃焼部と焼成部の境は不明瞭である。また、煙道も判別は不可能であった。上部が排煙溝状に削平されている。

(前庭部・灰原)

前庭部は削平されている。また灰原は前述の理由のため形成されなかったと思われる。

(遺物)

本窯跡で須恵器は焼成されなかったと考える。ただ埋土中には須恵器が少量含まれていた。

(舟山)

(7) 22地区の調査

①分布の状況

22地区は造成計画区域の南東部に該当する。北側の団地に向かって開く大きな谷の上流へさかのぼり、東の支谷に入りこんだ部分で、比較的低い尾根から北へ広がる斜面の中腹に位置する。窯体の立地する標高は125mから132mをはかる。4基の窯跡が検出されたが、向かって左側(南側)から右に向かってⅠ～Ⅳ号窯とした。Ⅰ号窯、Ⅱ号窯が比較的接近して築かれ、やや距離を置いてⅢ号窯・Ⅳ号窯が築かれている。前者はやや大きめの窯で、後者は小型である。また、前者では灰原がほとんど流失していたが、後者ではそれが見られた。Ⅲ号窯・Ⅳ号窯は切り合いが見られ、Ⅲ号窯→Ⅳ号窯の順で造られたことがわかる。

窯跡以外では土坑が4ヶ所検出された。そのうち2基は窯体から離れて作られていた(SK O1、SK O2)。

②須恵器窯跡

1) 22-I号窯跡

(位置と状況)

4基の中では最も南側に位置し、標高122.7mから132m前後に位置する登窯跡である。主軸

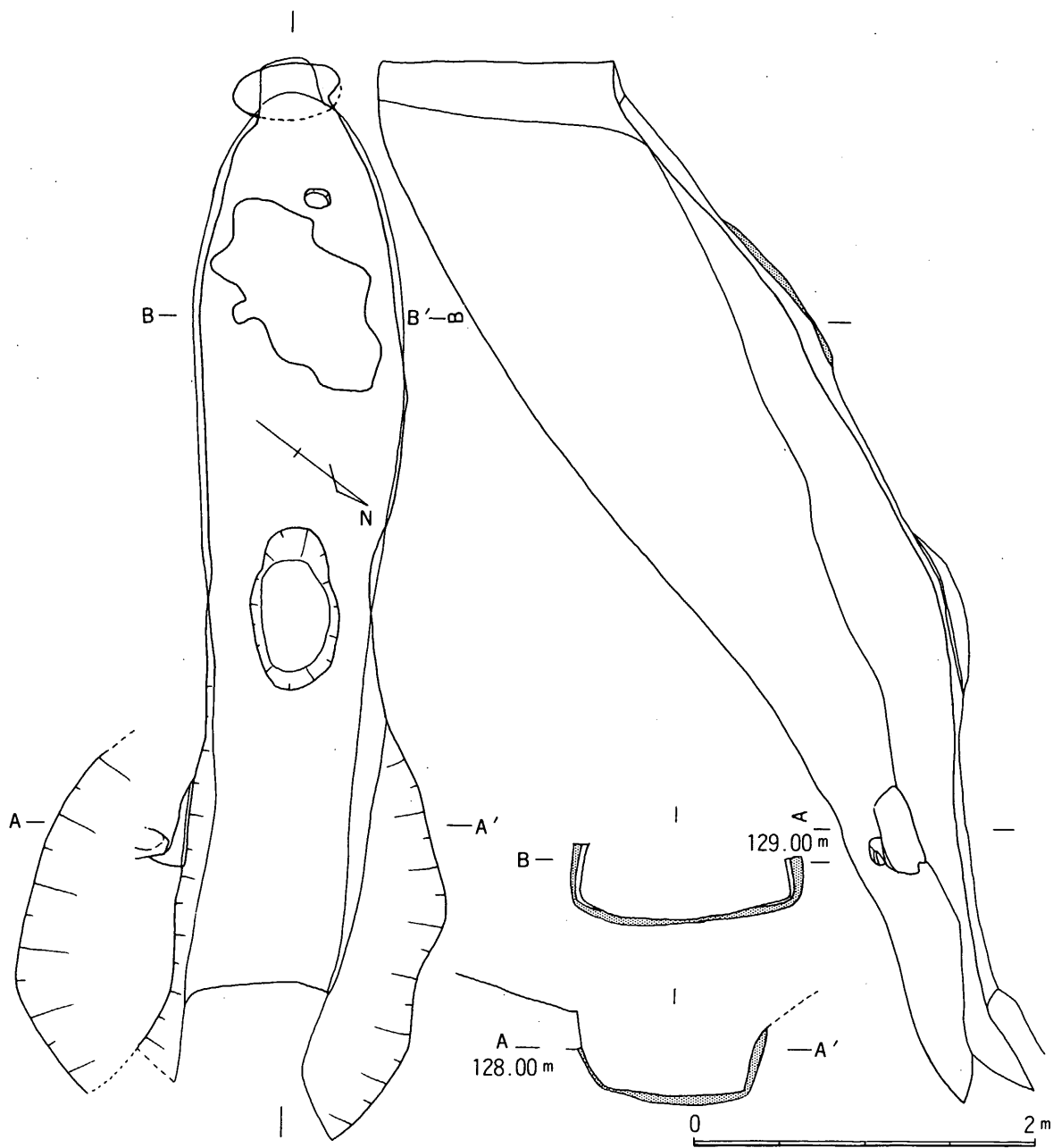


图40 22地区 I (22-I) 号寨遺構実測図

上の全長4.8m、最大幅1.2m、主軸方向はN-127°8'40"-Eをはかる。前庭部先端部が崩壊している。

(窯体の構造)

A、焚口・燃煙部

焚口の幅は0.8~0.9m、傾斜変換点までの主軸上での延長は1.4m、床面はほぼ平坦である。平面形を見るとやや湾曲している。また左壁やや上位に石を用いている。これは当初からのものであろう。

B、焼成部

主軸上の延長は3.2m、最大幅1.2m、床面傾斜角は33°をはかる。床はあまり弓形にならず直線的である。貼り床、貼り壁は認められない。下位に0.9m×0.5m、深さ0.2mの舟底状ピットが検出された。焼成時には埋められている。

C、奥壁・煙道部

奥壁は水平面に対しほとんど垂直に立ち上がる。崩壊のため全体は残っていなかったが、煙道は上端で0.6×0.4m、長さ1.4mをはかる。また床面も若干の平坦面を造り出している。

(前庭部・灰原)

わずかに傾斜する部分があるが、燃焼部とはほぼ同じ幅で続き広くない。灰原は窯体前面下方にわずかに残る程度である。

(遺物)

それほど多くはなく、器種には蓋杯がみられる。

2) 22-II号窯跡

(位置と状況)

I号側の右(北側)にあり、その間は2mしか離れていない。I号よりやや下がる場所で、標高は122.9mから131m前後に位置する。主軸方位はN-126°22'-EとほとんどI号窯と近い向きである。全長6.3m、最大幅1.9mをはかる。前庭部先端部が崩壊している。

(窯体の構造)

A、焚口・燃焼部

焚口の幅は0.8~1.1m、主軸上の長さ1.3mをはかる。床面はゆるやかに傾斜する。また平面的にはやや湾曲している。

B、焼成部

主軸上の延長は4.2m、最大幅1.9m、床面傾斜角は32°をはかる。床面断面はゆるやかな弓形を描くが直線に近い。平面的には左右対称ではなく、全体的に湾曲している。床面には製品を安定させるための凹みがいくつかある。また置台にしたと推定される粘土塊があった。燃焼

部との境付近で甕を中心にした須恵器片が集中して検出された。その下から1.3×0.6mの不整形をした舟底状ピットが検出された。焼成時には埋められている。なお、貼り床、貼り壁は認められない。

C、奥壁・煙道部

奥壁部付近はやや張り出した形をしている。煙道は調査時の掘削の際崩壊したが、円筒形をしたものであった。

(前庭部・灰原)

前庭部は左側で0.5mほど残存しているが、その先は崩壊している。灰原は消失している。

(遺物)

窯体内から甕・蓋杯・皿・甕が出土している。

3) 22—Ⅲ号窯跡

(位置と状況)

Ⅱ号窯の北約9mに位置し、Ⅳ号窯から切られている。標高125.8~128m付近に位置する。主軸上の全長3.6m、最大幅1.3m、主軸方向はN-123°42'20"-Eをはかる。

(窯体の構造)

A、焚口・燃烧部

焚口の幅は0.85~0.95m、傾斜変換点までの主軸上の延長は0.8mをはかる。床面はゆるやかな傾斜を持つ(5°)。両壁に石を用いているが、当初からのものである。その他、貼り床、貼り壁は認められない。

B、焼成部

主軸上の延長は0.8m、最大幅1.3m、床面傾斜角は32°をはかる。床はゆるやかな弓形に登る。平面的には胴張りで奥壁近くもそれほどすばまらない。貼り床、貼り壁は認められない。燃烧部との境付近に0.6×0.3mの楕円形をした舟底状ピットが検出された。深さは10cmに満たない。

C、奥壁・煙道部

煙道は調査中半壊したが、0.6×0.3mの楕円形で深さ0.95m認められた。ほとんど垂直に立ち上がる。

(前庭部・灰原)

前庭部は平坦面が燃烧部に続いて少しあり、その先は土坑状に掘り込まれている。灰層はその土坑状の部分から下方に広がり、Ⅳ号窯の灰層と判別できない状態で灰原を形成している。その範囲はおおよそ5m四方である。灰層の深さは約20cmである。

(遺物)

灰原を中心に比較的多く出土している。器種には蓋杯・皿などがある。



图41 22地区Ⅱ（22—Ⅱ）号窑遗址实测图

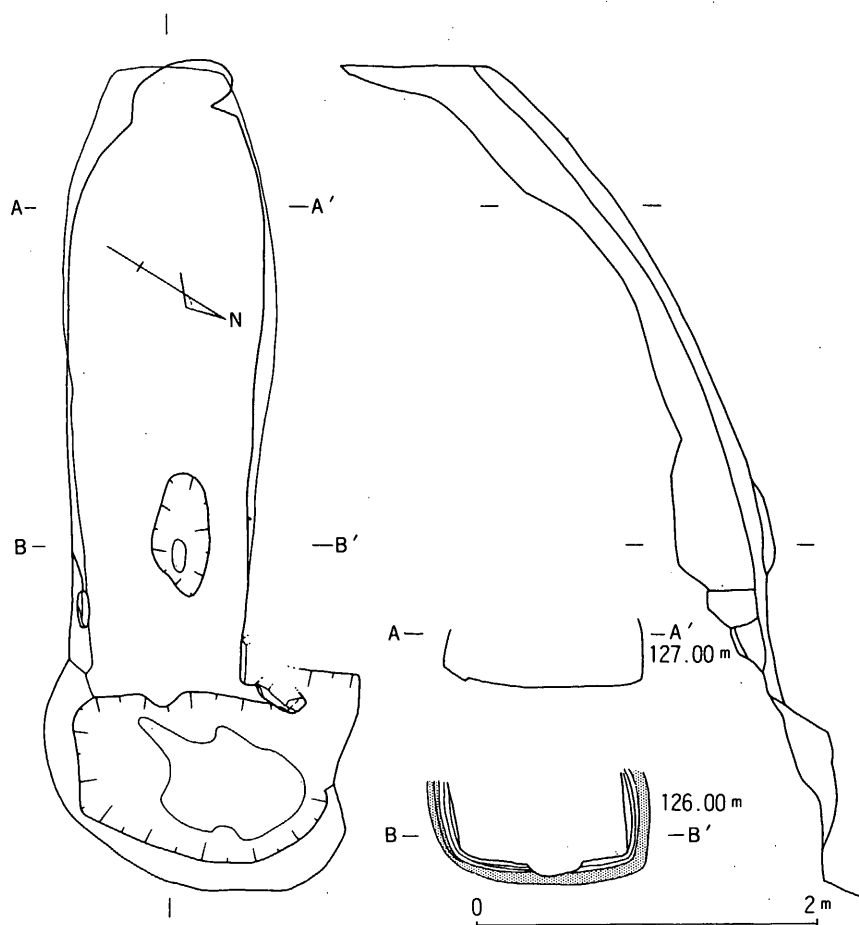


図42 22地区Ⅲ（22-Ⅲ）号窯遺構実測図

4) 22-Ⅳ号窯跡

（位置と状況）

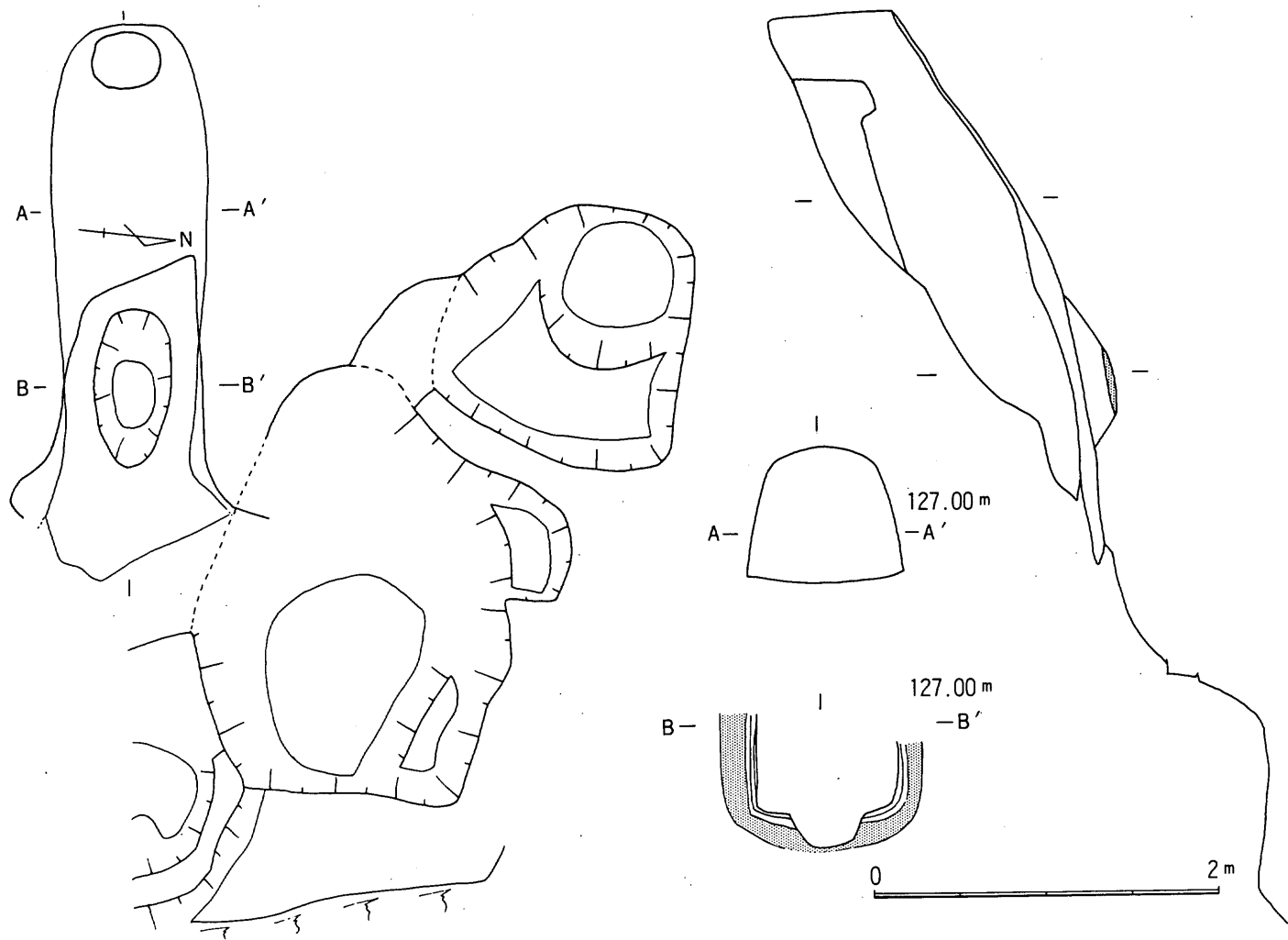
Ⅲ号窯のすぐ北側にあって、Ⅲ号窯を切っている。標高126.3mから128.2m前後に位置する登窯である。主軸上の全長3.1m、最大幅0.9m、主軸方向N-96°17'-Eをはかる。焼成部上半は天井が残る。また、右側（北側）に接して2基の土坑がある。両者とも炭・灰・須恵器片で満たされているが、下側の土坑はいったん埋め戻されている。このことから下の土坑はⅧ号窯、上の土坑はⅣ号窯に属するものと考えられる。

（窯体の構造）

A、焚口・燃焼部

焚口の幅は0.7～1.0m、傾斜変換点までの主軸上の延長は1.0m、床面の傾斜はゆるやかである。貼り床、貼り壁は認められない。

图43 22地区IV (22-IV) 号燕遗址实例图



B、焼成部

主軸上の延長は2.1m、最大幅0.9m、床面傾斜角度は32°をはかる。やや弓形に登る。平面的には細長い楕円形状を呈する。天井部が残り、その高さは中央部で0.9m、煙道部近くで0.6mをはかり、煙道部との境付近は段をなす。燃焼部との境付近に0.9×0.45m、深さ0.2mの楕円形の舟底状ピットがある。貼り床、貼り壁は認められないが、たちわりの断面を見ると赤変部の厚いことに気づく。

C、奥壁・煙道部

奥壁が水平面となす角度は87°とやや内傾している。煙道は上端で0.4×0.3m、深さ0.7mである。

(前庭部灰原)

燃焼部との境が不明確である。やや平坦面があってその先は掘り込まれ0.9mほど下がる。灰層はこの部分から下方に見られ、Ⅲ号窯の灰原と区別ができない。

(遺物)

灰原を中心に比較的多い。器種は蓋杯・高杯・皿・長頸壺・鉢などである。(舟山)

(8) 23地区の調査

①分布の状況

23地区は、今回の造成計画地域の南東部に該当する。22地区と小尾根をはさんで相対する位置になる。造成計画中央の大きな谷から派生した小支谷に面する南向きの急斜面に形成された窯跡である。複数の窯跡を予想して表土を広くはぎ取ったが、検出されたのは1基だった。窯跡の立地する標高は133.0mから135.3mである。

②須恵器窯跡

1) 23—I号窯跡

(位置と状況)

南向きの斜面の中位よりやや下位に単独で築かれている。主軸上の全長は2.45m、最大幅0.95m、主軸方向はN-15°54'54"-Wをはかる。前庭部は崩壊している。燃焼部両壁に二個ずつ石を用いている。これは当初から設置したものと考えられる。

(窯体の構造)

A、焚口・燃焼部

焚口の幅は0.75m、傾斜変換点までの主軸上の延長は0.5mをはかり、床面の傾斜はゆるやかである。床の幅は奥へ行くにつれて少しずつ広がる。両壁の石は断面から見て当初から設置されていたものと考えられる。その他、貼り床、貼り壁は認められない。

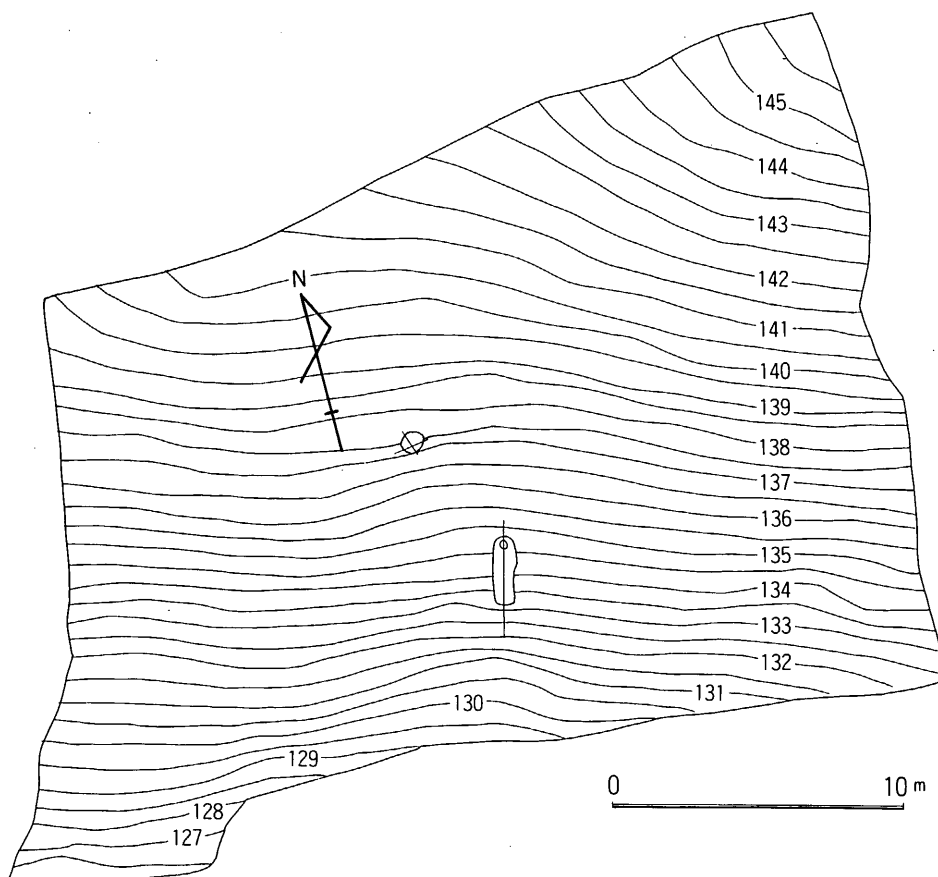


図44 23地区地形図

B、焼成部

主軸上の延長は1.95m、最大幅0.95m、床面傾斜 25° をはかる。わずかに弓形に登る。平面形から見ると、各部位ともそれほど幅が変わらず奥壁まで続く。たちわりは行わなかったが肉眼観察では貼り床、貼り壁は見られない。

C、奥壁・煙道部

奥壁が水平面となす立上り角度は 82° をはかる。煙道の延長は0.6m、上端は径 0.3×0.25 mの円形をなす。

(前庭部・灰原)

前庭部は崩壊している。また灰原も窯体前面下方にわずかに遺存するだけである。

(遺物)

少量出土している。器種には蓋杯・皿・鉢・壺などがある。

（関連施設）

窯体上部で円形のピットが検出された。灰・炭が認められたが遺物の出土はなかった。

（舟山）

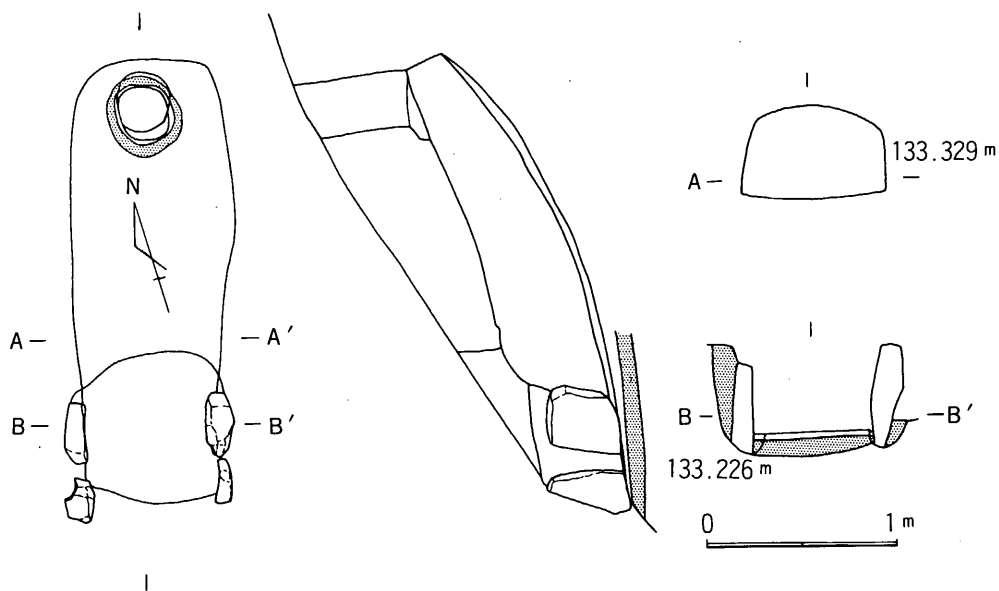


図45 23地区 I（23-I）号窯遺構実測図

第5章 遺 物

1. 概 観

出土遺物の殆どは須恵器であり、ごくまれに土師器が含まれていることがある。これら土師器は、当該出土窯跡で焼成されたものではなく、工人らの関係者によって持ち込まれた彼ら自身の日常生活に伴うものであると考えられる。またそれらの年代は、各窯跡の操業期間中のことであると見られるが、その時期が各地区のどの窯跡のどの段階に対応するのかは想定できない。

須恵器については、数量が余りに多いため個別に観察あるいは考察した結果を示すのは困難であるが、各窯跡単位では可能である。それについては後述する。なお須恵器については、できるかぎり実測図によって示すこととし、その形式的に代表すると見られるものについては、良好な遺存状態のものを選んで検討を加えた。これについても本文中に文章化して記述すると長くなるので、観察表として一括して掲載しているので参照されたい。

以下、昨年度実施分を含めて各窯跡ごとに若干の検討を加えたいと思う。

2. 各窯跡出土遺物の検討

① 1地区出土遺物について

a. 須恵器

器種と出土量

1地区ではⅠ、Ⅱ、Ⅲ号窯跡が所在していたが、前二者に伴う遺物はきわめて少なく、後者に伴うものが本稿での対象となる。

器種には蓋杯、高杯、杯、鉢、壺、提瓶、甕などがある。出土地区は、すべてが灰原・前庭部からの遺物である。なお時期的には複数のものが含まれているが、窯跡本体が失われているため、対応する窯体が単独か複数かは不明である。

—蓋杯—

図化できた当該器種についてみれば、蓋杯の蓋が30点、杯が28点である。このうちたちあがりを伴う杯は23点、これに伴う蓋は22点である。これらの蓋の口径は12～14cmで、12cm前後が圧倒的に多い。器高は3.0～4cmで、3.5cm前後が最も多く見られる。杯は口径9.5～11cmで10cm

前後が最も多い。器高は1.5～4cmで、3.5cm前後が最も多く見られる。これらは当該遺物内で量的に最大のものであり、次いでかえりを伴う蓋と高台を伴わない杯との組合せとなる。蓋の口径8.5～10cm、器高3～3.5cmで、天井部のつまみの形状が、乳頭状のものと扁平なものとがある。かえりの長さはほぼ同じであり、時期差は殆どないものと考えられる。これらに伴う杯は、口径9.5～11cm、器高4～4.5cmをはかり、底部には高台を伴わない。これは和泉陶邑窯跡群では、きわめて短期間のことであり、その編年Ⅲ型式1段階の特徴に良好に対応している。

なお口径13cm、器高3.3cmをはかる蓋が1点採集されている。これのかえりはかなり退化しており、またつまみも扁平であり、時期的にはさらに下降するものと見られる。ただし同例のものが採集されていないこともあり、あるいはⅡ号窯跡からの流入品の可能性もある。

また蓋杯については、ヘラ記号を伴うものが多く、この点6地区採集遺物とともに、後に検討する。

—高杯—

図化可能なものは2点（59、60）であり、完形品は見られなかった。口径9.5cm、器高8cm前後に復元される比較的短い脚を伴う無蓋の高杯である。形状の特徴からたちあがりを伴う蓋杯の時期とは平行しないだろう。

—提瓶—

口頸部と体部の破片であり、全体を復元することが出来ない。口径5.5cmをはかるもの（63）と8.8cmをはかるもの（65）とがあり、両者は大きさが異なっている。前者はたちあがりを伴う蓋杯、後者はかえりを伴う蓋杯に各々伴うものと考えられる。

—壺・鉢—

長頸壺の口頸部の破片が唯一図化できたもの（64）である。とくに検討するだけの材料がない。

鉢は口径14.5cm、器高6.5cm以上のもの（62）が1点、図化できたものである。時期的には、かえりを伴う蓋杯に伴う可能性が濃い。

—甕—

採集された破片数は多数をかぞえるが、図化できたものは2点（66、67）である。前者は口径41cm以上の大型の甕であり、後者は22cm前後と小型のものである。時期などの判断は困難であるが、少なくとも前者はかえりを伴う蓋杯の時期に平行する可能性が濃い。

② 6地区出土遺物について

a. 須恵器

器種と出土量

総数59449点の破片が採集されている。その内訳は表2に示した如くであり、器種には蓋杯、

	蓋	高台杯	高杯	杯	身	鉢	皿	甕	壺	そ の 他						不明
最下段 灰 原	17022	5113	1203	1195	329	296	113	1054	464	托 9	平瓶 1	こしき 1	特殊 1	脚 3	蹄脚 の足	23162
A 区 灰 原	2733	760	319	238	355	52	24	125	65							1075
B 区 灰 原	103	35				3		5	1							13
C 区 灰 原	423	114	29	40	1	6	3	12	3						1	129
D 区 灰 原	840	320	44	45	7	11	5	43	18							983
表 採	205	76	4	15		2	2	21	4							64
I号窯 灰 原	6	3						1	1							
窯体内	1															
Ⅲ号窯 灰 原	17	7							1							
窯体内	5	2	3													13
IV 号 土 坑	2															
窯体内終ベース	1															
上方灰原中央 セクションベルト中	6	1						1								
たちわり中	22	1		4												
第6号 土 坑			5						1							
合 計	21386	6432	1607	1537	692	370	149	1261	557	9	1	1	1	3	1	25439

表 2 6 地区出土器種一覧

高杯、杯、皿、鉢、壺、甕などがある。特殊な遺物としては平瓶、甗、鈴、硯などがあるが、量的には極めて少ない。出土地区では圧倒的に灰原が多く、遺物の大半を占めている。このため窯別に遺物を対応させることが困難な場合が多い。

— 蓋杯 —

器種についてみれば、蓋杯の蓋が21386点と圧倒的に多いのが特徴的である。これに対応する杯は高台を伴うもの6432点、伴わないもの1537点を合計しても7969点であり、蓋の半数にも満たない。これは別に検討した2／3以上の残存度で蓋と杯の比が155：22であることも関係ある。すなわち杯が細片となっている確立が高く、かつ蓋の破片が見分けやすく、杯の破片が見分けにくいという単なる整理作業上の問題に帰することができるかもしれないが、一応の結果として提示しておきたいと思う。

ともあれ蓋杯の器種合計は29356点で、全体の49.38%に達する。さらに不明分を除くと80.4%にも達する。これは当該窯跡での生産器種の大半が蓋杯であったことを物語っており注目される。次に蓋の口径、器高による分布を見ると図示したようになる(図46)。これによって、8～12cm前後の口径、2～3cmの器高をもつものが最も多いことがわかるだろう。

また蓋の形態について、形状把握が可能なものについて観察を行った。またこれらは無作為

出土地区・層	合 計	天 井 部 の 形 態			合 計	つ ま み の 形 態			
		A	B	C		A	B	C	D
A 区 灰 原	1820	1107	562	151	357	196	118	25	18
B 区 灰 原	4	0	1	3	2	2	0	0	0
C 区 灰 原	192	74	65	53	11	0	2	6	3
D 区 灰 原	512	189	257	66	49	25	9	6	9
たちわり中	16	6	7	3	1	0	1	0	0
最下段灰原	10582	5565	3483	1534	968	377	363	105	123
表 採	37	9	21	7	9	3	1	1	4
合 計	13163	6950	4396	1817	1397	603	494	143	157

表 3 6地区出土蓋杯(蓋)の形態分類

UHZ 6	合 計	A-A	A-B	A-C	A-D	B-A	B-B	B-C	B-D	C-A	C-B	C-C	C-D
最下段灰原	419	40	148	12	7	21	38	57	23	5	14	47	7
A地区灰原	121	19	47	2	3	5	24	7	2	1	6	4	1
B "	2								1				1
C "	11		1	1			1	2	2			3	1
D "	3		1									1	1
表 採	3	1	1										1
合 計	559	60	198	15	10	26	63	66	28	6	20	55	12

表 4 天井部とつまみの形態の組み合わせ

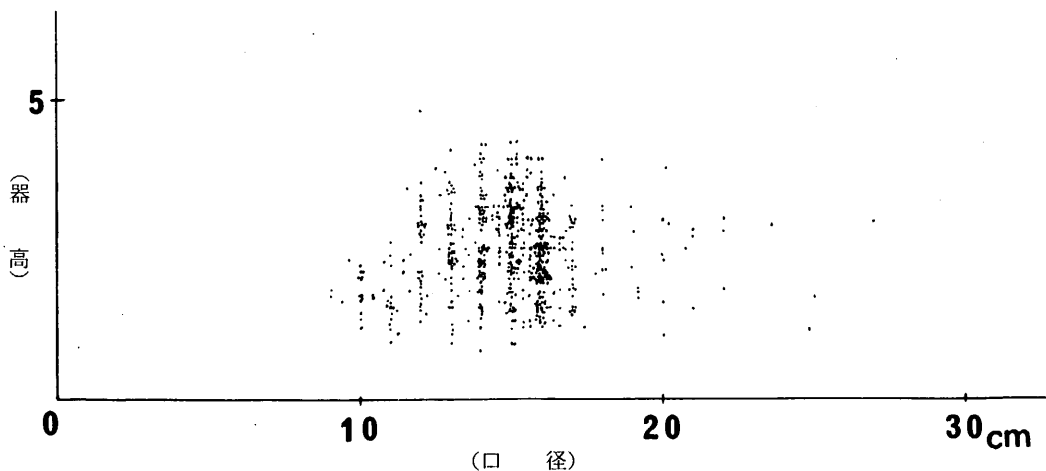


図46 6地区出土蓋杯(蓋)の口径・器高比

に遺存度によって抽出しており、ほぼその傾向は把握され则认为。その形状とは、A—口縁端部内面にかえりを持つもの、B—かえりを持たずに天井が丸いものと、C—かえりを持たずに平らなものに分類した結果は、A—6950, 952点、B—4, 396点、C—1, 817点を数えた。これによって当該窯跡では、時期的に最も後行すると考えられる形態のものが多く生産されていたことがわかる。

次に天井部中央に見られるつまみの形状についても同様に観察すると以下ようになる。まず形状からA—中央が高くなっているもの、B—中が高くなっているのはAと同じであるが、両端が中央より高いもの、C—中央が平坦に近いもの、D—中央がくぼんでいるものの四種類に区分した。数量はA—603点、B—492点、C—137点、D—154点である。さらに天井部とつまみの形状の組合せを見ると、天井部Aでは、つまみA—60点、B—198点、C—15点、D—10点となり、この形状ではA、Bの組合せが多いことがわかる。また天井部Bでは、つまみA—26点、B—63点、C—66点、D—28点となり、B、Cが多いことがわかる。さらに天井部Cでは、つまみA—6点、B—20点、C—55点、D—12点となりCが多い。

A—Aの組合せの口径平均は7.47cm、器高は3.17cmであり、以下A—B、口径7.15cm、器高2.78cm、A—Cでは、口径7.03cm、器高2.88cm、A—Dは、口径7.35cm、器高2.62cmとなる。さらにB—Aでは、口径6.38cm、器高2.1cm、B—Bでは、口径6.91cm、器高1.73cm、B—Cでは、口径7.46cm、器高2.4cm、B—Dでは、口径7.35cm、器高1.35cm、C—Aでは口径4.9cm、器高2.4cm、C—Bでは、口径8.0cm、器高2.23cm、C—Cでは、口径8.15cm、器高2.17cm、C—Dでは、口径7.9cm、器高1.7cmを各々はかる。これらは2/3以上遺存しているものについて観察したものである。

—高杯—

口径30～32.5cm、22～25cm前後、15～17cm前後の大中型3つの形態がある。すでに見たように量は、1607点と他地区よりはるかに多く出土している。

口径30～32.5cmの大型のものは、杯端部は大きく「く」の字に曲げられており、内傾する平面をなすものが多い。脚部の特徴も近似しており、時期的にも近接あるいは同時期と見て大過ないと考えられる。口径22～25cm前後のものでは、杯端部が平面のもの、丸く仕上げるものがあり、前者は先の大型のものに共通するが後者は別個な感を与える。さらに口径15～17cm前後では、杯部が深く、端部が丸いものが大半で、これらはほぼ同時期と見て大過ないものであり、大型のものは時期的に先行するものと考えられる。

—杯・皿—

口径19～22cm前後、器高2～3.5cmをはかる扁平な皿、口径13～14cm、器高3～4cm前後をはかる高台を伴わない杯がある。前者は149点、後者は1537点の破片が採集されている。皿は底部を含めて全体に丸みのあるものと、底部が平らな角ばったものがあるが、両者の比率は

わずかに後者が少ない。また杯では、いずれも底部が平らで口径に比して器高の深いものと、やや浅いものがある。杯では後者が時期的に後出段階のものと考えられる。

—鉢—

鉄鉢（仏鉢）形のものといゆる鉢形のものがある。両者の形状の差は明らかであり、とくに説明を要しないだろう。前者の器形で通常見られる表面に対する丁寧なヘラ磨き調整は観察出来ないものが多い。出土量は370点で、完形品に想定するとかなり少なくなる。形状に大きな差がみられないことから、両者共に短期間の生産であったと考えられる。

—壺—

長頸壺が見られるが短頸壺は確認されていない。前者には口径15cmの大型のものと12～13cm前後の中型のもの、さらに7.5～8cm前後の小型のものまで少なくとも三種類以上の形態が見られる。端部や体部の特徴から複数以上の時期の重なりが推定される。量的には557点と余り多くはないが、長期間にわたって少数量が生産されていたことがわかる。

—甕—

口径22～30cmをはかる比較的小型の甕が採集されている。量は449点と少なく、大量生産は行われていなかったことがわかる。

—硯—

蹄脚硯、亀形硯の破片が各1個体分採集されている。灰原の相当下層から採集されていることから、時期的には当該地区の初期段階に相当するものと考えられる。

—その他—

6地区灰原からは、以上紹介したほかに鈴が1点採集されている。これは手づくねで作られたと見られ、ロクロの使用は認められない。小型器形であり、製品として搬出を目的に生産されていたのかどうかは、むしろ否定的である。

蓋杯の蓋天井部、杯体部の中央部あるいは一部分に円孔を穿ったものが見られる。とくに焼成段階以前のもの（1229）と焼成後のもの（1228、1230、1236）がある。とくに後者については焼成前、調整後の可能性があるものも含まれている。これらはいずれも本来は器種から転用されたものであり、焼成作業に伴う置き台の可能性が濃いと考えられる。しかし置き台としては馬爪状の粘土塊が他の窯跡（7地区）で確認されており、窯体内でも遺存している。当該例については、いずれも灰原での採集であり、具体的には用途、使用法については言及出来ないのが現状である。

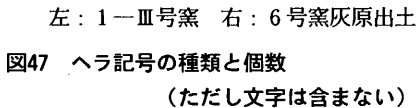
b. 土師器

灰原から1点採集されている。器種は甕と見られる。体部外面には粗い刷毛目調整が認められ、内面には縦方向のヘラ削りが認められる。焼成良好で赤褐色を呈し、胎土は粗で白色砂粒を多く含む。

今回の調査において、1—Ⅲ号窯灰原灰層中と6地区灰原灰層中で、ヘラ記号をもつ遺物が確認された。表 はヘラ記号の種類と器種別の個数についてまとめたものである。表示したものは記号の全容が判明するものだけに限定し、破片のため部分的にしかわからないものは省いた。

6 地区では三基の窯が調査によって確認されているが、各々の窯体内遺物にヘラ記号をもつものがみられないため、それらがどの窯によって生産されたかについては確定できない。

1-Ⅲ号窯出土の「卅」の記号については、横に線を一本引いてから縦に二本線を引くという筆順と、先に縦二本線を引いてから横に一本線を引くという二通りの筆順がみられる。これは「卅」のへう記号を用いた人物が複数である可能性がある。同じへう記号を複数の人物が



用いたと考えられる例は、牛頸平田窯跡D-1 窯出土遺物にもみられる。しかし、今回の牛頸ハセムシ窯跡群の調査では、ヘラ記号の資料が少なく、工人問題まで考えることは、困難である。^(註1)
(安井かをり)

註1 『牛頸平田窯跡-D地点-』 大野城市教育委員会 1980

③ 12地区出土遺物について

a. 須恵器

器種と出土量

総数51,176点の破片が採集されている。その内訳は表5に示した如くであり、器種には蓋杯、高杯、杯、皿、鉢、壺、甕などがある。

出土地区は大半が灰原からのものであるが、一部には窯体内あるいは周辺からのものがある。これらの窯体および周辺のものについては先に示した表5を参照されたいが、これらによって一応各窯体の遺物が推定されるだろう。以下、各器種ごとに記述する。

—蓋杯—

蓋の総出土破片数は17,052点、杯では高台を伴うもの6,049点、伴わないもの1,076点を数える。蓋杯の組合せを考慮すると蓋が倍以上の破片数が見られるが、破片としたものの大半が杯の可能性があり、これを合計すると17,939点となりほぼ同数になる。すなわち基本的に蓋杯は両者がセットで生産されていたことがわかる。

蓋について天井部の形状をA—天井部が丸く、内面にかえりを伴うもの、B—天井部が丸く、かえりを伴わないもの、C—天井部が平らに近く、かえりを伴わないものの三種に区分し、その量を示すと以下ようになる。A—578点、B—8,668点、C—3,508点である。この区分は既に6地区でも行っているが、時期を反映したものといえる。これをさらに窯跡別に見ると表の如くとなり、Aについてはごく少数を除いて窯跡からの出土はなく、灰原の下層部分からのものである。Bでは、X号窯跡を除く殆どで採集されている。さらにCでは、II、III、IV、V、VI、IX号窯跡から各々採集されている。このうちVI、IX号窯跡が顕著である。

次につまみについて四種類に区分し、その量を示すと以下の如くである。まずAは、中央が高くなっているもの、BはAに近似するが、中央部が両端より低いもの、Cは中央が平坦に近いもの、Dは中央が大きくくぼんでいるものである。各々の量は、A—282点、B—189点、C—125点である。この形状のうち时期的に最も後出段階のものは、Dであり、先行するものはAと考えられる。しかし表6でこれら天井部の形状とつまみのそれとの対応関係を見ると、必ずしも良好な対応関係を示しておらず、むしろそこからは一定の傾向を把握するにとどまる。すなわち天井部AとはつまみA、B、Dがあり、Aが最も多い。天井部BとはA、B、C、Dの

	蓋	高台杯	高杯	杯	身	鉢	皿	甕	壺	そ の 他								不明
最 下 段 灰 原	13737	4896	364	909	396	186	429	2890	360	瓶 1	罐 1	甕 5	瓦 2	浴 12	土 2	釜 1	陶 1	14251
I号窯 灰 原	237	86		32				12	1								1	100
窯 体 内	14	20		11	6													7
終ベース	22	9	2	4	1			69										6
附 近	30	17				1		5										38
II号窯 窯 体 内	15	6		1				3										1
附 近	64	35		4	12		2	22	19									17
III号窯 灰 原	112	20		9	1		1	24	4									97
窯 体 内	18	13			2		2	9	1									14
そ の 他	206	53	1	40				7	17	4								93
IV号窯 灰 原	386	89	16	5	66		41	60	17									1022
窯 体 内	96	39		4	2	1	5	13	1									135
そ の 他	6	2	1	4				2	3									
V号窯 灰 原	42	49	2	13			3	67	2									81
窯 体 内	71	8	7				1	78	78									63
そ の 他	8	3						10										11
VI号窯 灰 原	214	46	2	1	4		1	23	6									317
窯 体 内	169	7			1	4		18	8									144
そ の 他								1										
VII号窯 灰 原	138	68			6	3	1	69	2									97
窯 体 内	161	10		13	4	1		33										65
終ベース	2			1				5										
VII号窯 灰 原	145	71	1			12		36										8
附 近	20	3	1		8			9	3									
IX号窯 灰 原	364	109	3	14	22	1	2	132	3								1	345
窯 体 内	104	65	1		2	3	1	28	3									67
X号窯 窯 体 内	3							12	3									
そ の 他	93	69				22		13	5									64
灰 原 a	9	6																5
灰 原 b	22	5						12										41
灰 原 c	24	4			2		3	2										24
灰 原 d	26	17			3		11	15										42
灰 原 e	14	5		5	4		3	3										2
灰 原 f	24	14			5		4	6										17
” トレンチ	3	3						1										
” 南北セクション	4	6							1									1
灰原g 上 層	32	13	7		1			16	1									64
” 下 層	21	6					1	9	2									9
灰 原 h	170	85	1				23	46	3									17
灰 原 j	125	43			20	6	78	4										37
灰 原 p	6	1						10	1									17
灰 原 r	66	28	1					5	1									2
灰 原 u	3	4					4	1										
灰 原 v	23	16	2	6	4		2	4									3	57
灰 原 x									1									
灰 原 y	3																	
合 計	17052	6049	412	1076	572	240	627	3795	530	1	1	5	2	12	2	1	6	17378

表 5 12地区出土器種一覧

UHZ 12	合計内	A-A	A-B	A-C	A-D	B-A	B-B	B-C	B-D	C-A	C-B	C-C	C-D
最下段灰原	219	2	1		1	20	37	29	39	16	15	35	20
最下段上方灰原	17					1	2	3	7		1		3
I号窯灰原	2					1			1				
窯体内	1								1				
終ベース	8					1	4		2	1			
附近	1					1							
II号窯附近	1							1					
III号窯灰原	4						4						
窯体内	2												2
IV号窯灰原	13					2	2	1	2	2	2	1	1
窯体内	3					1			2				
その他	1								1				
V号窯灰原	1					1							
窯体内	1						1						
VI号窯灰原	6							1	1	2	1	2	
VII号窯灰原	1						1						
窯体内	1												
IV号窯灰原	3						1		2				
灰原a～y	12					2	2		4			3	1
V、VI号窯灰原	1								1				
VII、VIII号窯灰原	2					1					1		
合 計	300	2	1	0	1	31	54	35	63	21	20	41	27

※ 左側のアルファベットは天井部の形態、右はつまみの形態。

表6 天井部とつまみの形態の組み合わせ

つまみが対応するが量的には、D、B、A、Cの順となる。

また蓋についてのみではあるが、口径と器高について分布を図示したものが、図46である。これによって口径では、14～19cm、器高では1.5～3cmの間に分布するものが大半であることがわかる。既に口径の分布について時期的な関連があるとの指摘もあり、この点今後の検討課題であろう。

杯では高台を伴うもの6,049点、伴わないもの1,076点が確認されている。高台を伴うものについて見れば、その伴う位置の問題がある。すなわち底部端から内方の中央に近い部分に高い高台を貼付するものが古く、端部に近く低いものほど新しくなる。これは和泉陶邑での状況と同じである。

ところで高台を伴う杯の口径平均は、15.7cm、器高2.1cmである。さらに窯跡窯体内および灰原が限定される遺物の平均では、Ⅰ号窯跡では口径13.0cm、器高3.84cm、Ⅲ号窯跡では、口径13.58cm、器高4.54cm、Ⅳ号窯跡では、口径13.48cm、器高4.16cmを各々はかる。この他にも該当する資料が出土しているが、量的には少なく平均値を求めるには問題があるので省略に従う。

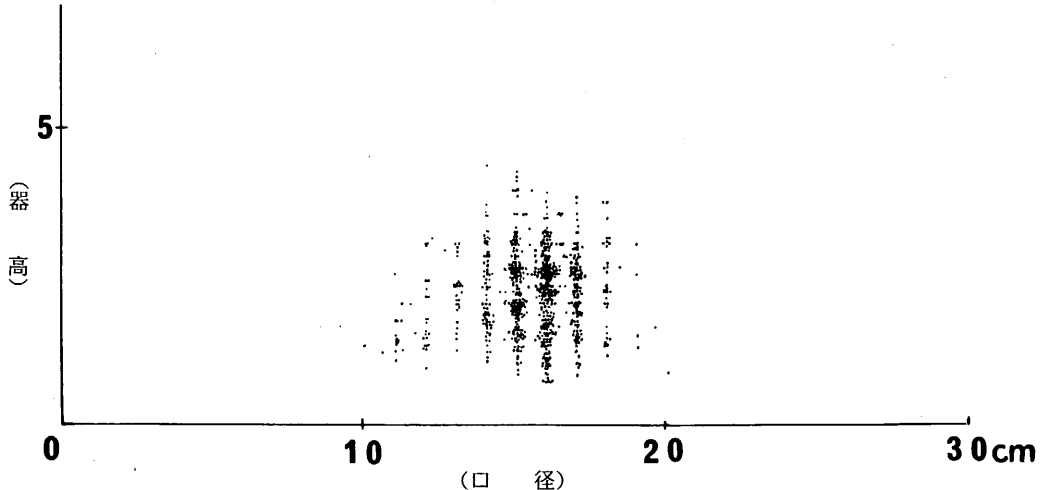


図48 12地区出土蓋杯(蓋)の口径・器高比

—高杯—

出土総破片数は414点と余り多くはない。その形状は、口径14.5～16cm前後、器高7.5～9.5cmをはかる比較的小型のもの(772～777)と、口径26cm、器高18.5cm前後の大型のもの(790～800)とがある。前者は形式的に古式であり、後者は新しい段階に対応するものである。この状況は既に見た6地区と同様である。

—杯・皿—

蓋杯に組合せられるものとは異なり、蓋を伴わない器種である。出土量は杯が、1,074点、皿が630点である。口径は、12～16cm前後、器高は4.5～5.5cm前後をはかり、口縁部の形状にS字状に彎曲するもの(616、617)や外反するもの(620、622など)がある。また皿では口径12～22cm、器高2～4cm前後とまとまりを欠いている。さらに形状も底部が丸いものから平らなものまであり、口縁部も角ばっているものや丸いものなど多種多様である。底部の調整が特徴的なもの(757、760)があるが、この手法は蓋杯でも見られるものである。(1225、1226)

—鉢—

出土破片数は237点と多くはない。仏鉢形のものと同縁部が外反する形状の鉢とがある。前者は量的には少なく、後者が比較的多い。

—壺—

出土破片数は432点と多くはない。長頸壺(565、802～808)と短頸壺(780)がある。後者

はきわめて少ない。

— 甕 —

出土破片数は6,795点を数えるが、大きさからいうと量的には少なくなる。口径19～20cmの小型のものから、口径40cmを超えるものまで多種多様なものが採集されている。とくに口頸部外面にヘラ描きで文字を刻んだ例は、一部を除いて大型の器種に見られたものである。なお窯跡の規模から、これら大型品の焼成が可能なものは、V号窯跡とIX号窯跡の2基に限ることが出来よう。しかしいずれの窯跡でこれらが焼成されたかについては議論があり、決着していない。なお文字については後述する。

④ 22地区出土遺物について

a. 須恵器

1、6、12地区と出土総数および器種について見てきたが、本窯跡については、その作業を行っていない。しかし図版、観察表で明らかなごとく、多種多様の器種が生産されており、各々微妙な型式段階の特徴を認めるものもある。

既に各窯跡でも試みたように、当該地区窯跡でも、蓋杯（蓋）のつまみ、および口径について検討を加えた。まず22地区出土蓋のうち口径の計測が可能なものについてのみ計数した。各窯跡別のものと、灰原からのものを図示したのが図50である。また右下の図は灰原のうち全体

単 位 (cm)	A	B	C	D	無	不 明	合 計
9.5～11.0	1				1		2
11.0～12.0			7				7
12.0～13.0	6		10	2	2	2	22
13.0～14.0	6	3	7		4	1	21
14.0～15.0	13	11	18	3	1	3	49
15.0～16.0	18	9	12	8		1	48
16.0～17.0	11	5	8	2		2	28
17.0～18.0	1	1		1			3
18.0～19.0	1	1	1				3
19.0～20.0	2		4				6
20.0～21.0	3						3
21.0～22.0							0
22.0～	1						1
合 計	63	30	67	16	8	9	193

表7 つまみの形態と口径（22地区）

のものとⅢ、Ⅳ灰原のものとを比較して示したものである。トーンで示したものが全体のものである。なお各々の総数はいずれも右端であり、重複している場合はトーンを右に示し、優先している。すなわちトーンとそうでないものが重複する場合には、前者の先端がその実数を示し、後者が少ない場合には前者の途中で先端がくるようになるが、ここではその例はない。

これによってⅢ、Ⅳ灰原のものはⅢ号窯跡の傾向に近似しており、全体ではそのように必ずしもいえない。さらに天井部中央に貼付されたつまみの形状との関連を見ると表7のようになる。ここでいうA、B、C、Dの4種類の形状とは、A—中央が高くなっているもの、B—Aに近似するが、中央部が両端より低いもの、C—中央が平坦に近いもの、D—中央が大きくくぼんでいるものである。表によるとAのつまみに対応する口径は14～15、15～16、16～17cmが多く、Bでは14～15、15～16cm、Cでは14～15、15～16、12～13、16～17cmが多いようである。またDではBと同様14～15、15～16cmが多い。さらにつまみを伴わないものでは、15cm未満のものが多くようである。

⑤ 18地区出土遺物について

18地区については、既に報告書を刊行していることもあり、すべての器種についての検討は行わない。共通の問題である蓋杯についてのみ記述する。

当該地区出土蓋杯のうち観察検討が可能なものについて計数し、図化したものが図49である。この図について簡単に説明を加えておく。まず18地区の各窯跡の蓋杯のうち蓋の総数、この場合は観察可能であった数を示した。これによって口径の分布が理解されるだろう。さらに灰原のうちⅢ、Ⅴ灰原のものと18地区下方灰原のものとを示したのが右下の図である。トーンで示したものは後者、そうでないものは前者である。なお総数はいずれも右端であり、重複している場合はトーンを優先している。すなわちトーンとそうでないものが重複する場合には、前者の先端がその実数を示し、後者が少ない場合には前者の途中で先端がくるようになる。

これらからⅢ、Ⅴ灰原と下方灰原とは口径の分布で差異が見られることが明らかであり、前者は先の窯跡別のものからⅢ号窯跡の傾向が反映しているものと考えられる。また後者では、Ⅰ、Ⅱ、Ⅵ号窯跡の傾向に近いことが指摘できよう。

また蓋の中央に見られるつまみの形状を五種類に区分し、各々計数すると表8のようになる。その形状とはA—中央が高くなっているもの、B—Aに近似するが、中央部が両端より低いもの、C—中央が平坦に近いもの、D—中央が大きくくぼんでいるものである。表によると18地区で最も多い口径は13～14cmで14～15、15～16、16～17が続いている。また12～13、18～19cmの部分もやや多いようである。このうち13～14cmではつまみの形状がAとCが圧倒的に多く、15～16ではBが多い。このように僅かではあるが、つまみの形状と口径の大小が対応している状況が観察できる。またつまみを伴わないものが一部に見られるが、その口径も最も多い13～

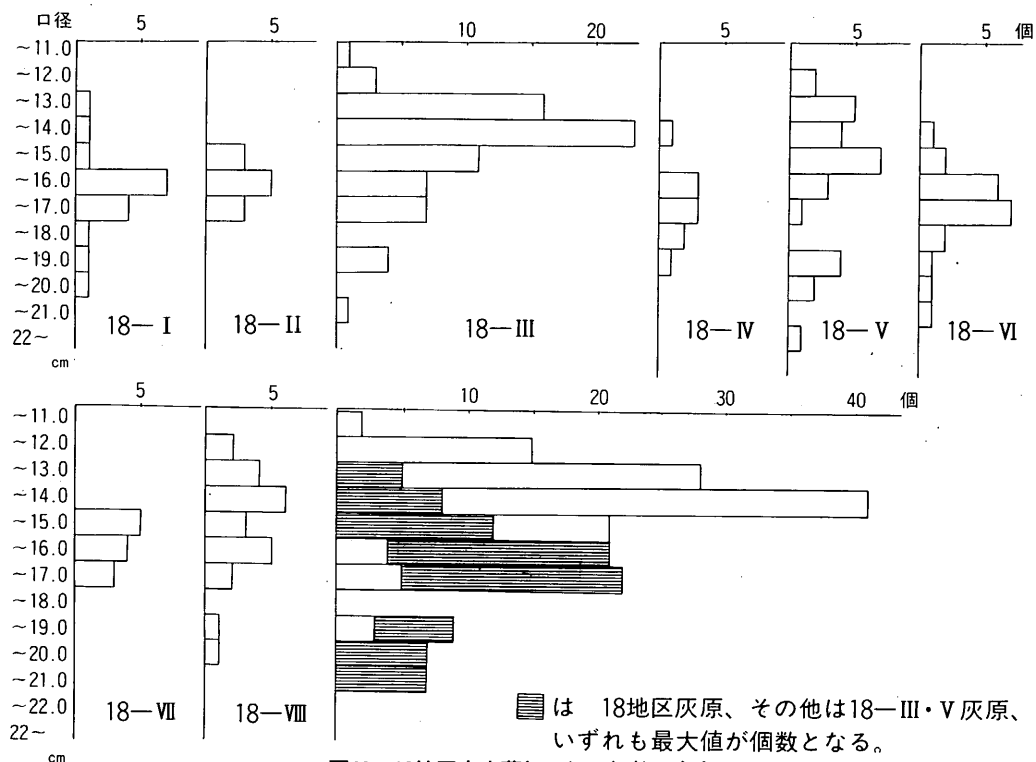


図49 18地区出土蓋杯口径別個数分布表

単位 (cm)	A	B	C	D	無	不明	合計
9.5 ~ 11.0			1	2			3
11.0 ~ 12.0	4	9	3	4		1	21
12.0 ~ 13.0	14	11	9	7	2	2	45
13.0 ~ 14.0	36	14	26	14	4	6	100
14.0 ~ 15.0	19	14	19	7		6	65
15.0 ~ 16.0	19	21	14	7		4	65
16.0 ~ 17.0	17	18	5	10	1	6	57
17.0 ~ 18.0	2	1			1	2	6
18.0 ~ 19.0	7	3	8	2	1	3	24
19. ~ 20.0	2	3	2	2		3	12
20.0 ~ 21.0	5	2	1			1	9
21.0 ~ 22.0						1	1
22.0 ~							0
口径不明	2						2
合計	127	96	88	55	9	35	410

表8 つまみの形態と口径 (18地区)

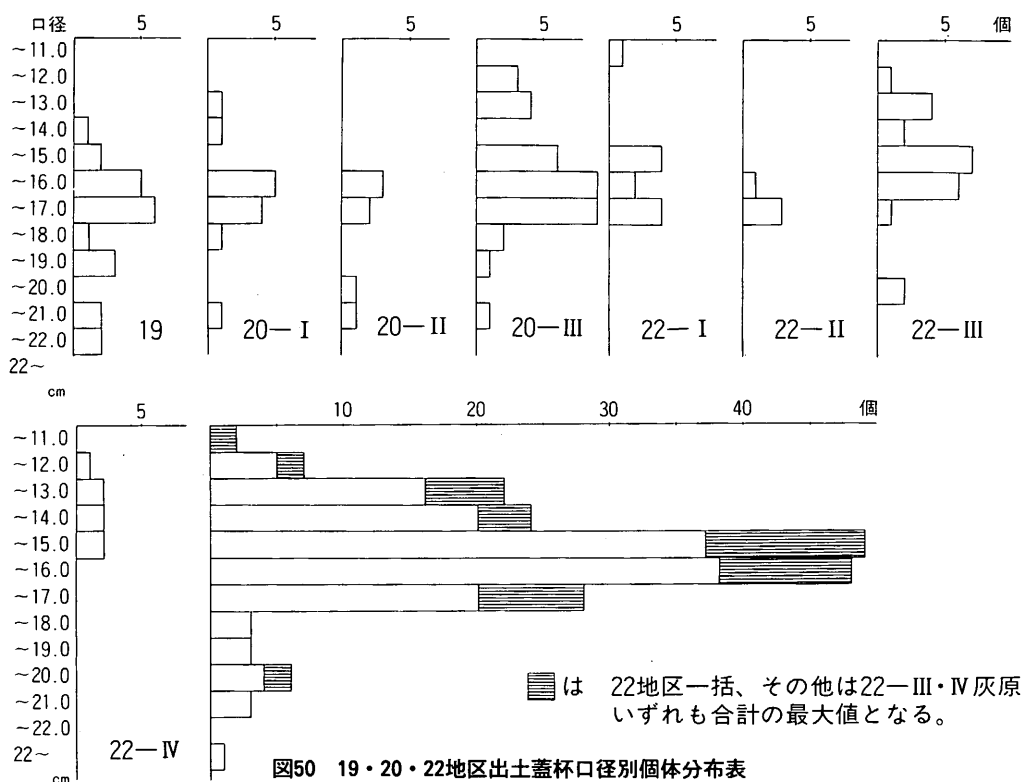


図50 19・20・22地区出土蓋杯口径別個体分布表

単位 (cm)	A	B	C	D	無	不明	合計
9.5 ~ 11.0							0
11.0 ~ 12.0	1				2		3
12.0 ~ 13.0					3	3	6
13.0 ~ 14.0					1		1
14.0 ~ 15.0						7	7
15.0 ~ 16.0	7	3		2		6	18
16.0 ~ 17.0	8			1		9	18
17.0 ~ 18.0	1					3	4
18.0 ~ 19.0						1	1
19.0 ~ 20.0		1					1
20.0 ~ 21.0	2					2	4
21.0 ~ 22.0							0
22.0 ~							0
口径不明	1	1					2
合計	20	5	0	3	6	31	65

表9 つまみの形態と口径 (20地区)

14cmに含まれている。

なお19地区での結果では、口径の分布がやや異なり、16～17cmが最も多く、その前後に広がっているようである。(図50) 19地区では窯跡が1基しか確認されておらず、かつ灰原の遺存も殆ど見られなかったことから、この数値は窯体内遺物のものであると見てよいだろう。18地区ではVI号窯跡の傾向に比較的近いようである。

⑥ 20地区出土遺物について

20地区については、既に報告書を刊行していることもあり、すべての器種についての検討は行わない。共通の問題である蓋杯についてのみ記述する。

当該地区出土蓋杯のうち観察検討が可能なものについて計数し、図化したものが図50である。この図については既に触れたので改めて説明は加えないが、使用可能な資料が少数であったため良好な資料となっていないかもしれないが、大体の傾向は理解できるだろう。

またつまみと口径の関連についても、18地区などと同様に計数しているので表9に示しておく。これについても改めて解説の必要はないだろう。

3. 小 結

以上、今年度調査を実施した地区のうち1、6、12、22地区、さらに昨年度実施の18、19、20地区の出土須恵器について検討を加えてみた。とくに全ての器種についてことごとく検討した1、6、12地区では器種組成などにも言及することができた。しかし23、7地区のようにまったく触れることが出来なかった地区もある。さらに22地区については、一部の調査検討に終わっているというそりはまぬがれないだろう。

蓋杯という最も大量に出土する器種をとりあげ、かつ最も変化が多い蓋に注目して検討を加えてきたのは、なんらかの手法で当該期間の生産の傾向でも把握できればという考えからであった。初期の目的を果たしているかどうかは問題ではあるが、少なくともこの試みが意味あるものであるかどうかは、読者の選択である。牛頸ハセムシ窯跡群という総数500基を超える牛頸窯跡群の一部に接して、ともあれ行った試行錯誤の行動であった。発掘調査と遺物整理が同時進行、かつ同一年度の報告書刊行という強行日程のせいにはしたくないが、遺物整理がいわば時間の経過と共にあることを考えると否定はできない。牛頸窯跡群という有数の遺跡群を前にして十分な検討が行えなかったのは心残りではあるが、逆に大風呂敷を広げずに済んだのは幸いであるかも知れない。

第6章 考 察

1. 窯跡の分布状況とその構造について

(1) はじめに

牛頸窯跡群では既に古墳時代から平安時代に及ぶ各時代の窯跡の発掘調査が行われている。その成果も報告書として公刊されているものが十指をはるかに超えている。これらの内容については興味ある問題が多く含まれており、示唆に富む内容も多い。

しかし窯跡の分布状況や窯体構造に関して、他地域の場合と比較して、相当特徴的なものがあるにもかかわらず充分検討されていない部分が残されているように思われる。従って本項では、窯跡の分布状況及び窯体構造のうち、今般実施した調査で得られた知見を中心として若干の考察を加えてみたいと思う。

(2) 窯跡の分布状況について

①分布の傾向

窯跡の分布は、九州地域ではとくに3基以上の群をなして位置する場合が多いように思われる。これは陶邑あるいは、猿投などでも数基が同一斜面に位置することはある。陶邑の場合ではTG43地区では4基、TK43地区で3基、TG41地区では4基、TG40地区では4基等々、例をあげれば多い。しかしこれらのいずれもが5世紀から7世紀にかけての時期に分類されるものであり、8世紀以降の窯跡の群集は認められない。

一方、九州地域の場合は、北九州市天観寺窯跡群、野間窯跡群、井手ヶ浦窯跡群など6～7世紀に属すると考えられる窯跡の群集所在がある。これらは既述の陶邑などの場合とほぼ同じ範疇で理解することが可能である。しかし牛頸窯跡群の場合は状況が大きく異なってくる。すなわち当該窯跡群のうち6世紀から7世紀のものについては、既述のような3基以上の大量群集は、あまり見られない。反面7世紀末から8世紀の段階には様相が変わる。

浦ノ原窯跡群では8基、井手窯跡群(A-3)では6基、井手窯跡群(B-3)では6基、足洗川窯跡群4基、道ノ下窯跡群(G地区)4基、道ノ下窯跡群(K地区)5基、ハセムシ窯跡群(18地区)7基、ハセムシ窯跡群(20地区)3基、ハセムシ窯跡群(22地区)4基、ハセムシ窯跡群(12地区)10基、ハセムシ窯跡群(6地区)4基、ハセムシ窯跡群(1地区)3基他などが知られている。これらが一体なぜ複数以上の群をなして所在するのか問題である。時期的には大半が8世紀代のものであり、一部7世紀代のものも見られるようである。

これら牛頸窯跡群に見る窯跡の群集現象を、各々の窯跡の規模について比較すると表10の如

名 称	所 在 地	全長	最大 床幅	焚口編	焼成 部長	同幅	傾 斜	備 考
ハセムシ18-I	大野城市牛頸大字ハセムシ	9.4	2.0	1.3	7.3	1.8	21°	} 7 基群在
18-II	"	3.2	1.15	0.95	2.4	1.15	60°	
18-III	"	2.3	0.9	0.6	1.45	0.9	32°	
18-V	"	2.9	1.5	0.8	2.0	1.5	45°	
18-VI	"	3.2	1.0	0.8	2.0	1.0	32°	
18-VII	"	2.45	0.8		1.75	0.8	27°	
18-VIII	"	3.2	1.2	0.95	2.4	1.2	50°	
20-I	"	3.7	0.95	0.9	2.8	0.95	35°	} 3 基群在
20-II	"	2.4	0.9	0.75	2.0	0.9	35°	
20-III	"	8.6	1.8	1.7	6.1	1.8	27°	
井手(A-3)4	大野城市牛頸字井手	7.6	1.5	0.82	4.8	1.5	25°	} 6 基群在
5	"	3.9		1.0	3.0	1.15	40°	
7	"	3.65	1.25	0.85	2.75	1.25	29°	
8	"	4.3	1.1	0.8	2.7	1.1	35°	
9	"	2.8	0.8	0.75	2.05	0.8	40°	
(B-2)23	"	3.5	1.3	1.0	3.0	1.3	29°	
24	"	1.6	0.9	0.7	1.2	0.9	29°	} 6 基群在
25	"	3.1	1.0	0.8	2.6	1.0	27°	
26	"	2.5	1.0	0.8	2.0	1.0	26°	
27	"	3.6	0.9	0.8	2.2	0.9	27°	
28	"	4.0	1.0	0.7		1.0	27°	
足洗川(C)34	大野城市牛頸字足洗	6.5	1.55		5.6	1.55	15°~45°	} 4 基群在
35	"	2.05	1.02		2.05	1.2	10°~30°	
36	"	6.8	1.6			1.4	17°~50°	
37	"	3.0	1.1		3.0	1.1	23°~45°	
道ノ下(K)14	大野城市牛頸字道ノ下	5.4	1.2	0.75	4.6	1.2	24°~36°	} 5 基群在
15	"	3.2	0.8	0.6	2.65	0.8	40°	
16	"	3.25	1.0	0.75	2.4	1.0	35°	
17	"	5.35	1.8		4.45	1.8	33°	
18	"	2.5	0.7	0.72	2.0	2.3	32°	

表10 牛頸窯跡群内の窯跡の規模比較

地区名	窯 跡 数			遺 物 の 種 類	
	大型	中型	小型	大 型 品	小 型 品
ハセムシ18	1	—	6	甕	蓋杯、高杯、壺
20	1	—	2	甕	蓋杯
19	—	—	1		甕杯
井手(A-3)	—	1	4	甕	甕杯
(B-2)	—	—	6		甕杯、鉢
(A-1)	—	—	1		蓋杯、皿、高杯、鉢、盤
(A-2)	1	—	—		蓋杯、皿、高杯
足洗川(C)	—	2	2	甕	蓋杯、皿、高杯
道ノ下(G)	—	—	3		蓋杯、皿
(J)	—	—	1	甕	蓋杯
(K)	—	2	3	甕	蓋杯

表11 牛頸窯跡群の窯体規模と生産器種

くとなる。

これによって明らかになるのは、全長3～4mの小型の窯跡が多いということである。またこれら小型のものばかりでなく、5m前後の中型のもの、10m前後をはかる大型の窯跡も併存するということがある。小型の窯が多く所在するため、複数の窯が同一場所に築造されたということは容易に推定されるところであるが、この中、大型窯の存在を考慮にいれると問題は容易には解決されない。

とすると次に考えられるのは、それらの窯の操業状況についてを条件に加えるといかがであろうか。すなわち複数以上の操業があるのかどうかという問題と、窯の規模によって製品の差、すなわち生産器種の大小などの差があるのかどうかなどである。

この問題に注目してまとめたのが表11である。これによって恐らくは後者の窯の規模によって製品の大小などに差があったことは認められるだろう。これによって外地区の群を見れば、甕などの比較的大きな製品を生産していたと見られる部分には規模の大きな窯跡が所在することがわかる。また大型のものに限らず中型のものでもそれら器種が焼成可能である。従って例えば道ノ下窯跡群(K地区)の場合では、17号窯跡が蓋杯以外の製品を焼成していたと考えられている。ちなみに17号窯跡の全長は5.35mで、同地区には5.4mをはかる14号窯跡が所在する。しかし報告では前者に蓋杯以外の焼成が認められるが、後者には見られない。すなわち同様な規模であっても、必ずしも同様な器種の生産を行っているとは限らないともいえよう。ちなみに両者では最大床幅が前者は1.8m、後者は1.2mを各々はかり、全長以外の規模で大きな差を見せている。

一方、ハセムシ地区では18、20、12の各地区で各々大型の規模のものが認められる。とくに12地区では2基の大型窯跡があり、他地区では各1基が認められる。これらから、小型窯跡3から5基群在する地域では、大型の窯跡1基は所在するということになる。逆に小型窯が単独で位置する例は、ハセムシ19、23地区他で見られるが、大型の窯跡が単独で位置するのは8世紀段階では殆ど見られないということも併せて指摘できる。

以上の分布傾向の観察から、各地区では大型製品と小型製品を生産するため規模の異なった窯が構築されているということが明らかになった。しかし小型窯が多数所在しなければならなかったという背景の解明は未着手である。

これは構築技術の問題があると考えている。すなわち牛頸窯跡群の場合は、ほぼ規模の大小にかかわらず地山を掘り抜いた所謂地下式構造の窯であり、例外なく傾斜度の強い斜面に構築されている。これによって灰原は、必然的に谷の下方に形成されることになり、わざわざ焚口からかきだす必要はなくなる。この状態は調査の結果前庭部の形成が不充分であることと符合する。また地下式構造を採っているのは、地山が花崗岩質でかつ風化の著しい土質であることであろう。すなわち半地上構造や地下式の構造は、もろくてほとんど不可能である。小型窯が大量に構築された背景にも、この地山の土質が大きな影響を与えていたのではないかと考えている。すなわち、大型の窯の場合には、土質の状態から危険度が大きく、それが少ない規模に集中したのはやむをえないかもしれない。さらにいえば、大型器種の焼成という必要最小限度の窯が構築された結果が、既述の分布状況の理解となったものと考えられる。

②窯体の方向

群在する窯跡の窯体主軸方向は、一定している場合と異なっている場合とがある。これについて一定の傾向がないかどうかについて検討を加えてみた。

その例としては、ハセムシ12地区、18地区、浦ノ原地区、井手窯跡群A—3地区、井手窯跡群B—2地区などがある。これら各地区の窯跡の主軸方向は、表12に示した如くである。これによると、いくつかの単

名 称	全 長	主軸角度	備 考
牛頸ハセムシ18—I号窯	9.4m	N—84°—W	7 基群在
18—II号窯	3.2m	N—67°—W	
18—III号窯	2.3m	N—62°—W	
18—V号窯	2.9m	N—78°—W	
18—VI号窯	3.2m	N—78°—W	
18—VII号窯	2.45m	N—97°—W	
18—VIII号窯	3.2m	N—76°—W	
19—I号窯	4.2m	N—58°—E	3 基群在
20—I号窯	3.7m	N—30°—W	
20—II号窯	2.4m	N—28°—W	
20—III号窯	※8.6m	N—20°—W	6 基群在
A—1 1号窯	3.18m	N—5°—E	
A—3 4号窯	7.6m	S—24°—E	
" 5号窯	3.9m	S—25°—E	
" 7号窯	※3.65m	S—6°—E	
" 8号窯	4.3m	S—25°—E	
" 9号窯	2.8m	S—34°—E	6 基群在
B—2 23号窯	3.5m	N—77°30'—E	
" 24号窯	1.6m	N—65°—E	
" 25号窯	3.1m	N—89°30'—E	
" 26号窯	2.5m	N—83°30'—E	
" 27号窯	3.6m	N—76°—E	
" 28号窯	4.0m	N—88°—E	C 34号窯
C 34号窯	6.5m	N—45°—W	

表12 ハセムシ地区各窯の全長と主軸方向

位で方向が近似していることが明らかとなる。例えばハセムシ18地区では、V、VI、Ⅷ号窯跡が、また井手窯跡群（A—3）ではIV、V、Ⅷ号などが各々近似する。これと時期的な関連まで正確に把握出来ないが、少なくとも18地区では同時期としてもよい範疇の遺物が確認されている。従ってあながち方向が近似する同一地区の窯跡の操業時期が近いとしても大過ないかも知れない。

窯跡の分布状況のうち群在する内容、さらにそれらの主軸方向から問題解決の糸口がつかめないかどうかについて考えてきたが、未だ充分な結論を得るところには至っていない。今後の資料の増加を待って再検討したいと思う。

③窯体構造について—和泉陶邑窯との比較—

窯体の構造は、本来須恵器を焼成できるというものであれば、形状的にも大きな差異はないはずである。焚口から煙道までの状態は、規模の大小の差はあったとしても、ほぼ全国的な須恵器窯の構造として特徴的なものは少ないといえる。しかし、和泉陶邑窯での場合と比較すると、とくに目立って特徴が異なる構造のものも存在する。以下、本項では和泉陶邑窯での構造と比較しながら、牛頸窯の窯体構造について考えたいと思う。

先ず、大きく陶邑窯と牛頸窯で異なる点を列記してみよう。

- i、立地する部分が大抵丘陵の中腹あるいは、上部にある。
- ii、立地する丘陵斜面が、ほぼ例外なく急斜面である。
- iii、小型の窯跡が集中して立地する。
- iv、煙道部上方に溝を伴っている窯跡が多い。
- v、各々焼成する器種が窯によって限定されている場合がある。
- vi、前庭部がきわめて狭い。

思いつくままにあげれば以上であるが、このうちiii、vについては前項で記述したので繰り返さない。また i、ii、vi は、ほぼ同様のことであるといって過言でない。すなわち急斜面であるからこそ、前庭部がきわめて狭くなるのであり、丘陵の中腹あるいは、上部に立地することになると考えられる。これは当該丘陵の谷が比較的深く、移動には尾根道を利用した方が容易であるという自然条件にもある。この急斜面に位置するという条件は、そのまま窯の傾斜にはつながらないのも特徴的であろう。

次にivの煙道部上方に溝を伴っている窯であるが、陶邑でも全く例がないわけではない。管見ではTK41、TK305—Ⅱ、MT—Ⅲ、ON3号窯跡などがあり、いずれもⅡ型式に分類される須恵器を出土している窯跡である。これは1000基にのぼるといわれる陶邑全体での数であり、割合的にはごく少数で限られた時期に集中することがわかる。

一方牛頸窯跡群の場合は、ハセムシ1—Ⅱ、18—Ⅰ、12—Ⅲ、井手A—3地区4、道ノ下K地区14号窯跡などが知られており、実数はさらに増加するものと思われる。これらは陶邑にあ

えてあてるとⅡ～Ⅲ型式段階のものであり、時期的には一致しない場合が多い。ところで隣接地域の北部九州で見ると、野間窯跡群1、3号窯跡、井手ヶ浦窯跡群1、2、3号窯跡が各々同一構造をもつものである。

ところでこの構造とは、従来の大半の報告書が「煙り出しに連続して排水溝が設けられて……雨水が窯体内に流れ込まないように工夫した施設」と考えられてきた。しかし注意深く観察すると、排水用の施設であればとくに煙道部に接して設置する必要はなく、少し離れて周囲に巡らせるのが妥当であり、その類例は各地で見られる。これをあえて接して設置したのは、窯体構造と無関係ではないように思われる。その根拠は、例外なく当該例は煙り出しに連続しており、煙道部の先端に当る部分は熱によって赤変あるいは焼固しているものが多いことがあげられる。なお煙道部分の床面よりは、わずかに下げられている場合が多く、これは排水の用を考慮してのものと考えられる。当該溝の上部に天井が架構されていた痕跡は、大半が認められていないことから窯体内空間の部分とは考えられないが、少なくとも当該部分が焼成段階で大きな役割を果たしていたことは疑いないものと考えられる。

なお当該構造を踏襲する窯跡は鳥取県、石川県などでも確認されており、今後この窯体構造から検討が加えられ、新しい事実が明らかになるのを期待したい。

2. 12地区出土の在銘片について

(1) はじめに

12地区からは、10基の窯跡（うち1基は未使用）が調査され、各々相当数の遺物が出土している。その各器種については既に前章で記述しているのでここでは繰り返さないが、とくに注目される遺物として、文字が刻まれた甕および蓋が合計16点余り採集された。これらに刻まれた文字は、蓋に見られるものを除いて、ほぼ同一趣旨の内容から構成されており、当時の社会情勢とりわけ税制を考える資料として貴重である。以下、釈読できた文字について示し、利用に供することにするなお末尾の括弧内は遺物番号であり、これは図版などに対応するものである。また原文はいずれも縦書きであるが、本書の体裁に従って横書きに改めているが他意はない。

(2) 在銘片の文字

【1】三片接合 甕体部にヘラ状工具で文字を刻む。縦14.0cm、横24.2cm、厚さ1.3cm、最下段灰原採集。

筑紫前國奈珂

郡手東里

□ 呂

□ 君

乎万呂

□ 三人奉

并

□ 一僕

販

□ 年

(823)

- 【2】四片接合 甕体部にヘラ状工具で文字を刻む。縦4.9cm、横52.2cm、厚さ1.1cm、最下段灰原採集。

筑紫前國奈珂郡

手東里大神□身

□ □

□ □

并三人

調大賑一僕和銅六□

(827)

- 【3】甕体部にヘラ状工具で文字を刻む。縦6.5cm、横10cm、厚さ11.3cm、最下段灰原採集。

…… (欠損)

□年調大賑

…… (欠損)

(1200)

- 【4】甕体部にヘラ状工具で文字を刻む。縦8.1cm、横11.2cm、厚さ1.6cm、最下段灰原採集。

□奉調大賑一僕

(1201)

- 【5】二片接合 甕体部にヘラ状工具で文字を刻む。縦5.2cm、横6.4cm、厚さ1.3cm、最下段灰原採集。

□國奈珂郡

□里

(825)

- 【6】四片接合 甕体部にヘラ状工具で文字を刻む。縦15.5cm、横31.0cm、厚さ1.3cm、最下段灰原採集。

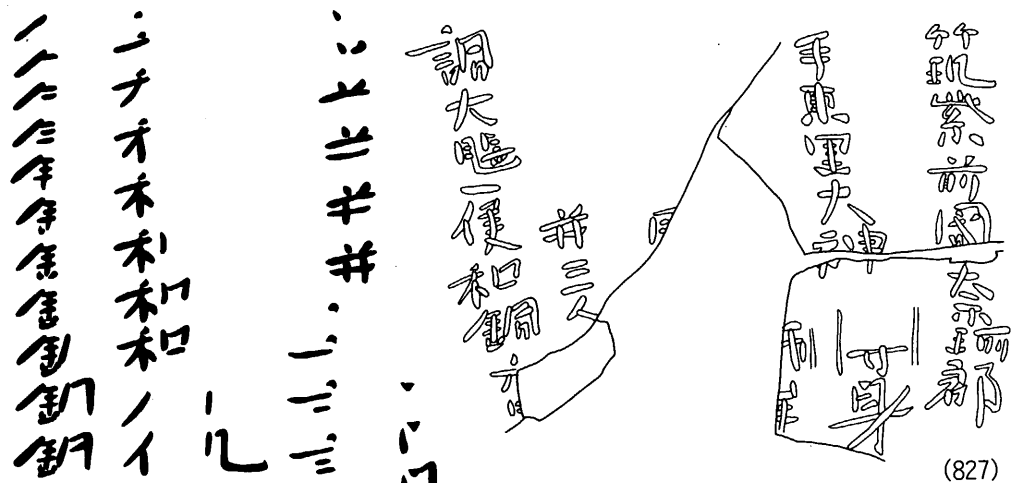
仲郡 □

(820)

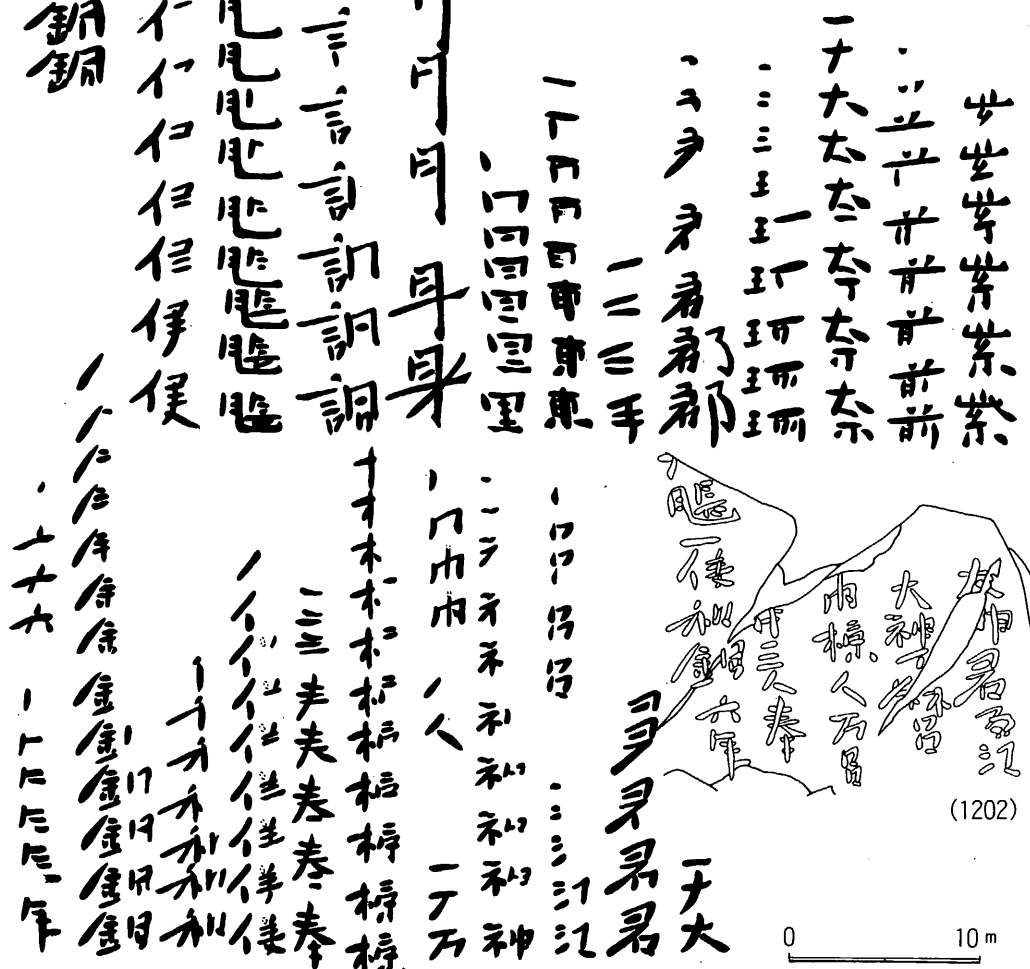
- 【7】二片接合 甕体部にヘラ状工具で文字を刻む。縦10.2cm、横12.4cm、厚さ1.5cm、最下段灰原採集。

筑前國奈□

手□里人



(827)



(1202)

0 10 m

図51 在銘片拡大図

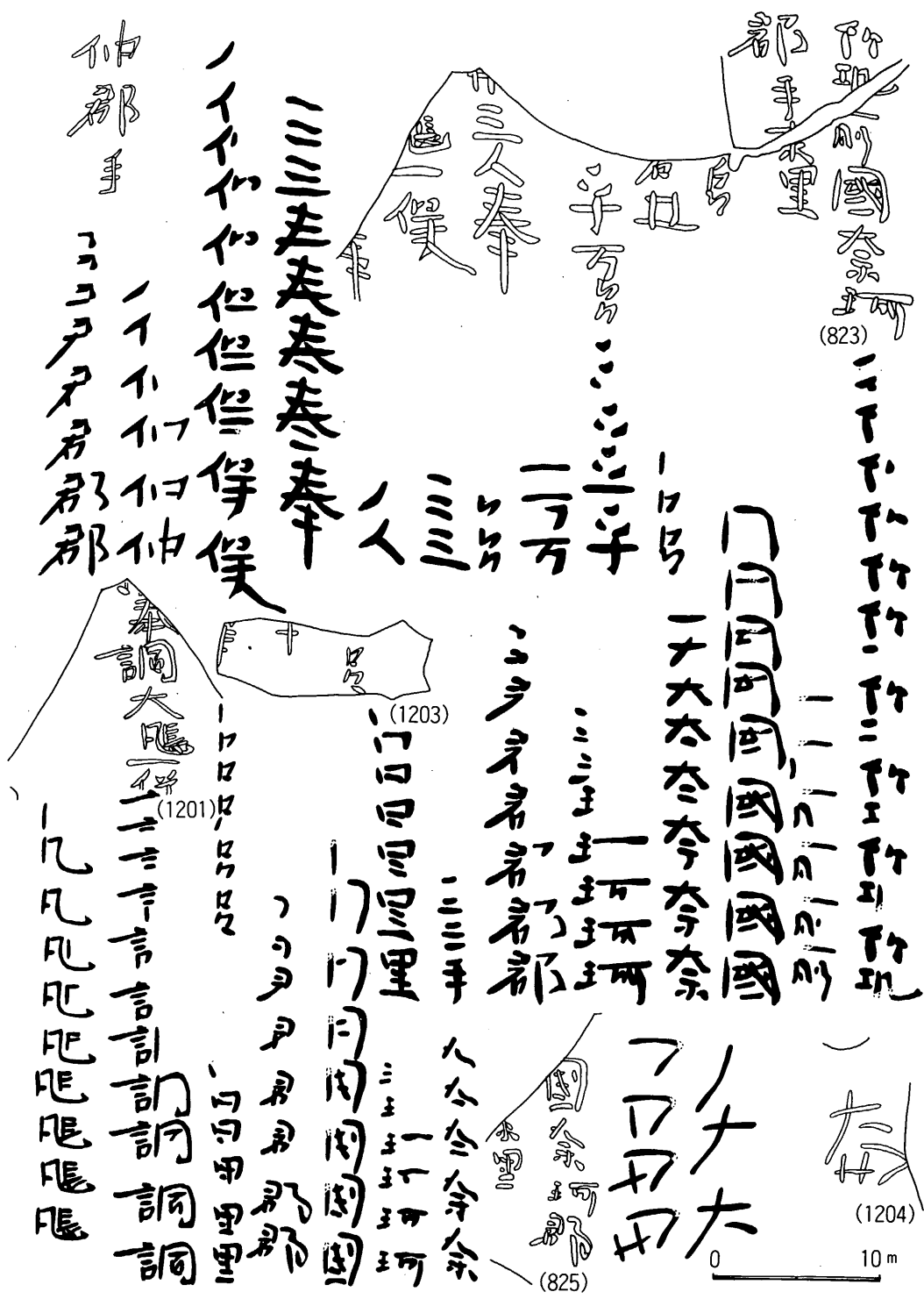


图52 在銘片放大图

大□君百□□

(830)

【8】三片接合 甕体部にヘラ状工具で文字を刻む。縦9.2cm、横13.3cm、厚さ1.3cm、最下段灰原採集。

……（前欠損）

大神君□□

大神□麻呂

内掠人麻呂

并三人奉

□厩一僕和銅六年

(1202)

【9】口縁部のみ残存。甕体部にヘラ状工具で文字を刻む。縦3.9cm、横7.5cm、厚さ1.4cm、最下段灰原採集。

調 □

(829)

【10】甕体部にヘラ状工具で文字を刻む。縦7.2cm、横6.7cm、厚さ cm、最下段灰原採集。

□呂 □□

(1203)

【11】蓋鈕、天井部にヘラ状工具で文字状の記号を刻む。9×9cm、厚さ0.4cm

【12】蓋天井にヘラ状工具で文字を刻む。半径8.2、厚さ0.6cm、約½強欠損、最下段灰原採集。

大田

(1204)

以上、在銘片についてその文字を紹介してきたが、それらのうち筆順が明らかなものについては図示した。（図51、52）ここにかかげた以外の文字は、いずれもこれらと同じ筆順によって書かれているものであり、各々を紹介するのは省略する。

またこれらのうち【6】は、甕の体部に横方向に文字が刻まれており、他のものがいずれも縦方向であるのと対照的である。さらにこの甕は再加熱によって表面の器壁が相当荒れており、他の資料とは若干様相を異にする。

（3）銘文の問題

①記載者について

在銘須恵器片の内容については、幾つかの問題を提供している。例えばその文字が刻まれた段階が明らかに焼成以前の比較的器物が柔らかな段階に行われていることである。すなわちこの段階で文字を刻むことが可能な人間は須恵器工人あるいはそれにかなり近い関係の人物しか出来ないのである。ここではその直接の記載者は須恵器工人であるということにしておきたいが、図示したように文字の筆跡は微妙に異なっており、同一人物のものではないことが明らかである。またこれらの刻まれた時期では、年号を伴っているものについては、当然その年号にある「和銅六年」でよいだろう。しかしこれ以外のものについて見ると果たして、同一年で良

いのかどうかは問題があろう。

すなわち文字を伴う遺物を出土した窯跡が12地区窯跡ばかりではなく、井出A—3地区4号窯跡、ハセムシ6地区窯跡などでも見られることである。とくに後者は形式的には若干先行するものであり、文字を伴っているからすべて同一年次とはいえないのである。しかし6号窯跡での例が、いずれも「定」「大」など一文字であり、伴出する須恵器に見られるヘラ記号と近似する性格にとれなくはない。井出A—3地区4号窯の場合は、わずか一例であり、内容は郡名、人物名である。恐らく国名はあったものと推定されるが、年号等については推定出来ない。これらの記載時期は、12地区窯跡の場合と同様焼成前のある時期ということになろう。従ってこれらの文字の直接の記載者は須恵器工人であったとして大過ないだろう。

記載された人物が、果たして須恵器工人であるのかという問題については、現状では判断することが出来ない。とはいえ調納物に須恵器を出すという行為が行われていることから、須恵器生産と全く関係しない人物とするのは不自然である。

②記載文字の内容

a. 体裁を巡って

これら在銘片は蓋に刻まれたものを除いて、ほぼ同趣旨である。すなわち古代の税制の調として当該須恵器を納めたということを直接刻んでいるのである。その内容を記せば、次のようになろう。

筑紫前國奈珂郡 地名
手東里
大神郡百江 人名
大神郡麻呂
内掠人麻呂
并三人奉調大厖一僕……人数、調納名、量
和銅六年……年月日

すなわち先ず「国名、郡名」とあり、さらに「人名（納税者）、人数、調納物の名称、数量、年月日」と続く。この体裁は、平城京や藤原宮出土木簡にみる体裁と同じである。近似例を平城京出土簡に求めてあげれば次の如くである。

・紀伊國日高部在郷□□矢田部益占調 ・三斗 天平寶□年十月 【18】

・尾張國智多郡番賀郷花井里丸部□麻呂 ・調塩三斗 神龜四年 十月七日 【319】

このほかに近似するものは285、286、287、288、289、292、293、294、295、298、300、318、320、321、322、324、324、325、326、327、328、329、330、331、332、333、334、335、336、337、338、339、341、342、346、347、2193、2246、2247、2248、2249、2178、2185、2176、2177、2077、1952、1953、1949、1950など多数あり、枚挙に暇のないほどである。

これらはいずれも木簡に記載されたものであり、今回検出された須恵器に書かれたものは、同一体裁では確認されていない。わずかに国名あるいは郡名あるいは人名が記載された例は福岡県内をはじめ全国各地で少数例ではあるが、報告されている。

なお先に見た文書の体裁は、賦役令第二条に「凡調皆随近合成 絹絶布両頭及絲綿囊、具注国郡里戸主姓名年月日、各以国印々之」とあり、この規定は、東大寺正倉院の綾、布などに厳密に履行された痕跡が残っている。しかしこれ以外の調納物、すなわち調雑物についての規定は見られない。須恵器は、この調雑物であり、既に見た木簡にあるものも同様である。それらが先の規定に準拠して記載されていることを考えあわせると、今回の在銘須恵器の記載も、明らかにこれに準拠した公文書の体裁であることがわかる。

須恵器本体にこのように記載した例は少なく、まして公文書の体裁を踏襲したものは現在まで知見を得ていなかったものである。また須恵器の調納が開始された時期については明らかではないが、少なくとも平城京などでは和銅年間までは下らないと考えられる。なお本例が、牛頸窯跡群では比較的同時期の資料が多いのにもかかわらず、わずか二箇所でのみ確認されているということは問題であろう。さらにこれに続く時期の窯跡からは、文字を伴う須恵器の確認がなく、本例のみがきわめて特異な存在であるのも注目されるだろう。

b. 地名をめぐる

地名は、国、郡、里の表記をとっていることがまず注目される。国、郡、里表記に関しては既に多くの研究がある。これらによって「国、郡、里」表記は大宝令施行（701）に伴って実施された「評」制から「郡」制の転換、霊龜元年（715）「里」を「郷」と改めるまでの期間に用いられたことがわかる。すなわち在銘片の表記は、大宝元年（701）から霊龜元年（715）までに用いられたものであることがわかる。さらにいえば「和銅六年」（713）という年号は、この間に含まれており全く問題はない。

国名では「筑前国」「筑紫前国」の二つの表記が見られる。前者は大宝令施行によって成立した名称とされており、その国名は『続日本紀』文武天皇二年条に「筑前国宗形」とあるのが初見である。さらに『令集解』賦役令に引く「古記云」で「竺紫国」とある。また民部省式とも記されるが、民部省の成立が持統三年（689）から和銅六年（713）とされていることを考えあわせると、その年代がこの期間内に含まれることになる。また古記が大宝令条文であると考えたと、その年代幅は大宝元年（701）から和銅六年（713）となろう。これは大宝四年（714）の『大宰府移』に「竹志前国」とあることから証左できよう。

このように「筑前国」「筑紫前国」の二つの表記は、本来考えられていた時期よりも下がった段階でも使用されていたことが明らかになった。この背景や波及する問題等については今後の研究に待ちたいと思う。

次に郡名には「奈珂郡」「仲郡」の両者があり、さらに井出A—3地区4号窯の例「那賀郡」

を加えると三例となる。『延喜式』民部上には「西海道 筑前国 怡土 志麻 早良 那珂 席田 槽屋 宗像 遠賀 鞍手 嘉麻 穂浪 夜須 下座 上座 御笠」の15郡の名が見られる。また『和名抄』にも同様15郡の記載がある。ここで見る地名は「那珂」であり、銘文にある奈珂「仲」「那寄」とは異なっている。とくに「仲」一字で表記した例は見られず特異といえよう。

ところで『続日本紀』和銅六年五月条に「甲子、畿内七道の諸国の郡郷の名は、好き字を著け……」とある。風土記編纂に関する記事として広く知られたものであるが、「郡郷の名は、好き字を著け」とあるが、『延喜式』民部上には「凡諸国部内郡里等名。並用二字。必取嘉名。」とある。ここでいう嘉名を用いた例には「紀国」が「紀伊国」「竹郡」を「多気郡」と改めたことが知られている。この例に従うならば、「仲郡」は古い呼称を踏襲していることになり、二文字の各例はこの新しい段階でも矛盾しないことになる。

さらにこれを伴っている遺物自身が再加熱によって亀裂を生じていることがあり、明らかに時期的な前後関係を想定することが可能である。なおこの場合、同一窯でそれらが焼成されていたという前提が必要である。

手東里という地名であるが、『和名抄』郷名には、該当する名称は見られない。すなわち那珂郡には「田来 日佐 那珂 良人 海部 中島 三宅 山口 板曳」の9郷である。これらと音訓での近似性は認めがたいものばかりである。また「東」と釈読している文字が「来」である可能性は充分あり、「田」と「手」が転訛することがあったとすれば、「田来」の可能性もある。

また現在地名で近似するものを探せば、下大利、上大利がある。これらは「simoori, kami ori」と発音されており、「手東里」を「tetoori」と読むと「ori」の部分で共通する。あるいは里から郷に変更された際に、その地名が失われたとも考えられる。なおこの地名に関しては問題が多く、今後の調査研究に待つことにしたいと思う。

c. 人名について

人名については、各須恵器に書かれた名前がいずれも異なっている。また筆跡も異なることから、同一人物によって刻まれたものでないことは明らかである。僅か12点で、その名前等について論ずることはできないが、「大神君」「大神部」「大神□」というように特定の氏族名称が見られる。とくに「大神」関係氏族については、須恵器生産となんらかの関係があるという指摘がある。これは須恵器生産地に「大神」に関連する神社あるいは氏族分布が見られることから想定されている問題であり、この点今後の検討課題であろう。

d. 脹の調納について

これら銘片に共通する調納物は、いずれも「脹」である。この「脹」は『法隆寺縁起資材帳』に「脹」と「脰」「臚」についての記載がある。とくに前二者については法量が記されている。

これらの平均は甕の口径が1尺6寸6分、器高が3尺3寸、甕の口径は1尺2寸8分、器高2尺1寸1分である。すなわち後者の口径：器高の比率は1：1.6となる。

ところで『和名抄』では「甕」と「甕」については以下の記載がある。

甕 本朝式云甕 美加今案音長一音伏見

唐韻 弁色立成云大甕 和名同上

甕 本朝式云甕 佐良介今案所出未詳

弁色立成云浅甕 和名同上

また「新撰字鏡」(8)には「甕、罇、甕

三字毛太比」、「甕 馳偽反 小口嬰、弥加」

とありここでの「甕」は「甕」、「甕」は「缶」と同一物を指しているようである。

一方『延喜式』主計には「

凡左右京。五畿内國……（略）。陶器。八丁池由加。甕各一口。受五石。二丁甕一口。受一石二斗。

缶三口。受五斗。……（以下中略）

凡諸國論調。……（略）。陶器三丁池由加。甕各一口。各受五石。一丁甕二口。各一石五斗。小由加四口。受一石。小甕三口。酒壺六口。缶六口。瓮十二口。爐瓮八口。着乳瓮八口。受三斗。……（以下略）。

とあり、容量から見れば「甕」と「甕」とは明らかに1：4と後者が大きく、その調納量でも1：4ないし1：6で明らかに大きな差が見られる。このように見ると、先に見た『法隆寺縁起資材帳』の記載に錯誤があることが明らかとなり、興味深い、問題の趣旨が異なるので省略する。

ともあれ「延喜式」主計に見るごとく、「甕」1個を調納すれば、3人分の調納量として認められたのである。この点、記載文字に3人で調納する旨記載があり符合する。

(4)結語にかえて一残された問題一

須恵器本体になぜこれらの文字を刻んだのかについてが大きな問題として残されている。

これは通常は波状文や突刺文などの装飾を兼ねた文様以外は施さないものであるはずの器物表面に文字を刻んでいることの不自然さである。さらにその文字が公文書の体裁にかなったものであることから、単なる悪戯的なものではないことが明らかである。しかしこれが通常行われていたのであれば当然のことながら、大宰府をはじめとする各遺跡から出土例が多数報告されているはずである。これが殆どないということは、この行為が通常ではなかった、あるいは長期に継続しなかったということになる。とすると、この文字を直接に刻みつけるという行為

は、賦役令第二条に見る、直接ものに記載するということを忠実に守った結果、このような状況に至ったのではないかということである。なおこの状況は、あくまで知期間に集中し、恐らくは次回の調納時には、行われなかった。すなわちそこでは木簡などが用いられたと考えられる。この点あえていえば、中央からの命令が忠実に守られたということにもなるが、果たして陶邑窯跡群などではいかがであったのだろうか？ちなみに現在のところこれに該当する在銘須恵器は、調査によっては確認されていない。なお個人で採集された遺物には近似例があるようであるが、この点今後の研究を待ちたいと思う。

以上、簡単に在銘須恵器片について紹介と検討を加えてきた。しかし十分な時間をさいて行ったとは云えないものであり、不十分のそしりは免れるべくもない。今後当該資料を中心として益々の研究の進展を願うものである。

第7章 牛頸ハセムシ窯跡群の 考古地磁気推定年代

(その2)

中 島 正 志・谷 崎 有 里・林 昌 代
(福井大学教育学部)
夏 原 信 義・宮 崎 義 信(夏原技研)

牛頸ハセムシ窯跡群の窯床面から、考古地磁気年代推定用の試料を、昭和62年7月29日および63年8月4日と5日に採取した。その熱残留磁気測定結果および年代推定の結果について報告する。62年度に採取した試料の測定結果は中島ほか(1988)で既に報告しているが、年代推定に関しては63年度の測定結果と合わせて再検討を行った。

考古地磁気年代推定の原理と測定方法については、62年度の報告(中島ほか、1988)や中島・夏原(1981)で詳しく解説しているため本報では省略する。

1) 熱残留磁気測定結果

昭和63年度には、牛頸ハセムシ窯跡群の1-I、1-II、6-I、6-II、6-III-A、6-III-B、7-I、12-I、12-II、12-III、12-IV、12-V-12-VI、12-VII、12-IX、22-I、22-II、22-III、22-IV、そして23-I号窯の計20基のそれぞれの窯床から約12個ずつ、計235個の考古地磁気用の定方位試料を採取した。このうちの5個の試料は、運搬途中や試料整形の際に破損したため熱残留磁気を測定できなかった。

熱残留磁気測定は、福井大学教育学部の夏原技研製スピナー磁力計(SMM-85型)で行った。今年度に採取した考古地磁気用試料の熱残留磁気強度はすべて $10^{-2} \sim 10^{-3}$ emuのオーダーであり、窯床からの試料としては通常の磁気強度であった。個々の試料についての熱残留磁気測定結果(偏角:Di、伏角Ii)を表13にまとめた。磁気コンパスで試料の野外(窯跡)での方位を決めたため、磁気測定で得られる偏角は磁北に対するものなので、国土地理院の1980年の偏角分布式から計算した 6.18° Wを用いて、真北に対するものに補正した。表1のDiは補正された偏角である。

牛頸ハセムシ窯跡群の各窯体について計算した偏角と伏角の平均値(DmとIm)、誤差角(α_{95})および信頼度係数(K)を表14にまとめた。窯名の前に*を付けたものは、62年度の測定結果(中島ほか、1988)からの転載である。ただし、62年度の測定結果のうち20-1号窯の上層(20-1 U)については、誤差角が大きく年代推定には適さないため除外した。同表から

明らかなように、ハセムシ窯跡の測定結果は20-1 U号窯を除いて何れも、誤差角が小さく信頼度係数が大きい、測定精度の高いデータになっている。

表14の右端の推定年代については次節で詳しく議論するが、62年度測定分の推定年代は、本報告で再検討が行われすべて改定されたものになっている。

福井大学のスピナー磁力計は、昨年度までは岩石試料専用（直径と高さが24mmの円柱試料）で焼土試料（1辺が35mmの立方体試料）のように大きい試料を測定できなかったため、62年度のデータは富山大学理学部の夏原技研製スピナー磁力計（SMM-85型）で測定したものである。今年度になって福井大学の磁力計も焼土試料が測定できるように改良された。このような事情から表14の測定結果は、62年度分が富山大学、63年度分は福井大学と2つの測定装置によるデータとなっている。改良された福井大学の夏原技研製スピナー磁力計（SMM-85型）の信頼性を確かめるために、昨年度にデータが得られている18-6号窯と18-8号窯について、福井大学で再測定を行った。18-6号窯の再測定結果は $D_m = -13.4^\circ$ (-13.7°)、 $I_m = 56.9^\circ$ (56.4°)、 $\alpha_{\infty} = 1.3^\circ$ (1.5°)であり、18-8号窯については $D_m = -17.0^\circ$ (-17.5°)、 $I_m = 56.7^\circ$ (56.3°)、 $\alpha_{\infty} = 2.2^\circ$ (1.8°)となった。括弧内の数値は、昨年度の測定結果である。このように福井大学と富山大学の磁力計でまったく同一の測定結果が得られたことから、夏原技研製スピナー磁力計（SMM-85型）は信頼度が高い（少なくとも再現性が非常に良い）装置であることが確かめられた。またこの再測定は、同一の試料について約1年の間を置いて行われたものであり、そこで同一の測定結果が得られたことは、これらの試料の熱残留磁気が非常に安定であることを示唆している。

2) 考古地磁気推定年代

ハセムシ古窯跡群の考古地磁気推定年代についての62年度の報告書で、西南日本の地磁気永年変化曲線（広岡、1977）から求めた推定年代は、考古学の推定年代より約100年古くなることを示していた。そして、この時代（8世紀前後）の地磁気分布に大きな地域差がある可能性が高いため、正確な年代推定を行うには九州地方の須恵器窯からの考古地磁気測定結果の蓄積が必要であることを指摘した。ハセムシ古窯跡群において、昨年8基の窯からの測定結果に加えて、20基の窯から新たな測定結果が得られたこと、また考古学でもかなり正確な推定年代が得られていることから、九州の8世紀の地磁気の方角に関して昨年度よりはるかに進んだ議論ができる段階にきた。

図53は62年度（上図）と63年度の測定結果（下図）を示したもので、各窯体についての平均方向（表14）をシュミット・ネットに投影している。同図には、シュミット図（円）上で平均方向（黒丸）が分布している部分だけを表示している。円の中心とNを結ぶ直線は真北（偏角 $= 0^\circ$ ）を示し、黒丸と円の中心を結ぶ直線と真北との間の角度がその平均方向の偏角（ D_m ）

である。その直線上で円周から黒丸までの長さが伏角（Im）とほぼ比例していて、円周上は伏角 = 0° 、円の中心で伏角 = 90° であり、図には伏角 = 30° と伏角 = 60° になる位置を円弧で示している。点線は広岡（1977）による西南日本の地磁気永年変化曲線である。同図から明らかなように、62年度の測定結果は永年変化曲線のAD600年からAD700年の部分の近くにあるため、この曲線を基準に年代推定をすると昨年度の報告書のように650年頃ということになってしまう。しかし、考古学の発掘調査が進み8世紀の古窯跡群であることが確実となってきたため、地磁気分布の地域差を早急に明らかにし、考古地磁気推定年代についての再検討を行うことが我々考古地磁気測定者にとっての緊急の課題となってきた。63年度の測定結果は測定数が多く、この測定結果だけで曲線が描けそうな分布をしている。伏角の浅いものは永年変化曲線のループになった部分の内側に入り込み、8世紀の変化曲線より約 3° 西にずれている。このずれが8世紀の近畿地方と九州地方の地磁気分布の地域差であると推定しても良さそうである。そうすると残る問題は、伏角が 60° 以上で変化曲線から約 4° 深い方に離れた所に集中している測定結果をどう解釈するかである。この伏角の深くなるグループは、偏角値にかなり幅があるが伏角が深い時は少しの方向変化でも偏角は伏角と比べて大きく変化するため、ほぼ同じ時代のものとして良い。このグループはハセムシ窯跡の中では最も古い時代に属し、伏角が浅くなるほど時代が若くなると仮定すると、方向変化はスムーズにつながる。そこで、62年度と63年度の測定結果を、伏角値を基礎に同じ磁気方向とみなせる3つのグループに分けた(図54)。このグループ分けと大谷女子大学の中村浩助教授による考古学からみた推定年代との関係を表15に示す。伏角が浅くなるほど年代が若くなるとみれば、考古地磁気と考古学の推定年代は非

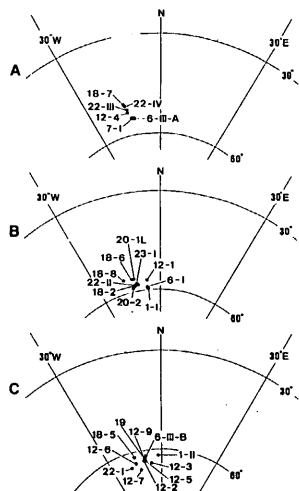


図53 ハセムシ窯の考古地磁気測定結果

上図は昨年度の測定結果（中島ほか，1988）、下図は今年度の測定結果。点線は広岡（1977）による西南日本の地磁気永年変化曲線、600、700などの数値は年代(AD)。

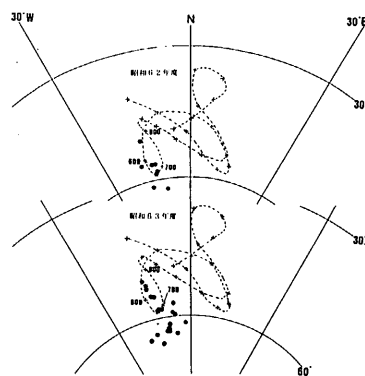


図54 ハセムシ窯の年代区分（A，B，C）と考古地磁気測定結果

年代区分A，B，Cは、表3のグループA，B，Cに対応している。

常によく一致し、上の仮定は正しいことになる。磁気方向から2つに区分したグループAとBは、考古学では8世紀中から後期と一括されている。反対に、グループCは考古学で8世紀前半と7世紀末に区分されたが、磁気方向からは年代差を識別できない。

上の3つのグループについて磁気方向のグループ内平均を求め図55の左図に示した。同図の中図は、Shibuya (1980) がまとめた大阪府泉北丘陵の陶邑からの8世紀頃の測定結果を、推定年代と磁気方向の類似性から3つのグループに分け、それぞれのグループについての平均方向(黒丸)と誤差角(楕円)を示したものである。平均方向に付けた数値はそれぞれのグループの年代の中央値であり、点線は広岡(1977)の永年変化曲線である。同図の右図は、広岡ほか(1988)による石川県小松市の古窯(戸津古窯跡群など)からの測定結果を同様に6つのグループに分けたものである。

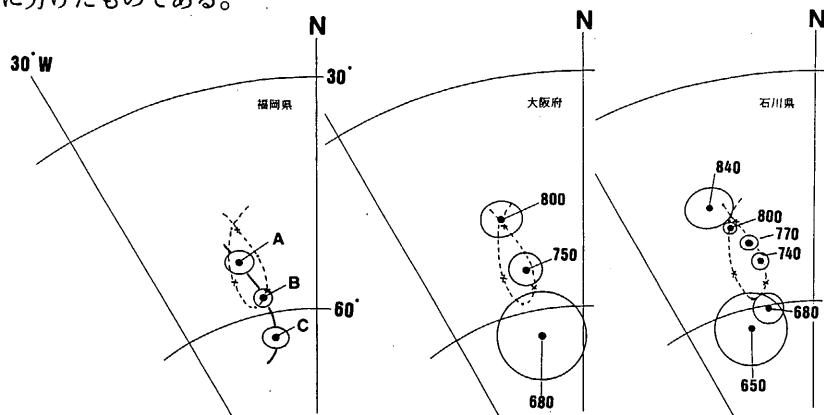


図55 福岡県、大阪府、石川県からの8世紀頃の考古地磁気測定結果の年代ごとの平均値

表3の各地域のデータをシュミット・ネットに投影したものである。点線は広岡(1977)による西南日本の地磁気永年変化曲線。福岡県(左図)のA、BとCを結ぶ実線を九州地方の8世紀頃の地磁気永年変化曲線として年代推定を行った。大阪府は中図、石川県は右図である。

図55の大阪府と石川県のデータは距離的に近いことから予測されるように方向変化はほとんど同じ傾向を示し、その特徴として、7世紀末は伏角が永年変化曲線より深くなっている。そして、大阪府と石川県のどちらも8世紀のデータは永年変化曲線とよく一致している。ただし、大阪府の750年のデータは永年変化曲線より少し伏角が深い。これらのことから西南日本の永年変化曲線の750年より古い年代の部分はもう少し伏角の深い方に(図55では下の方へ)引延ばした方が良いように思われる。そのように変化曲線を変更すれば、7世紀末から750年にかけては地磁気の方角変化のスピードが早く、750年前後から徐々に遅くなりながらその変化が極端に遅くなる9世紀へと方向変化の軌跡を描くことになり、それほど無理な変更ではないと思われる。

表13 各試料の熱残留磁気測定結果

(1) 1-I号窯

試料 No	偏 角 Di (°E)	伏 角 Ii (°)
F 501	-8.0	62.4
F 502	-5.4	61.3
F 503	-7.6	59.5
F 504	-6.3	59.7
F 505	-4.6	61.3
F 506	-5.1	60.4
F 507	-4.6	59.4
F 508	-8.5	58.4
F 509	-4.4	55.2
F 510	-7.9	57.5
F 511	-2.7	60.6
F 512	-8.6	56.4

(2) 1-II号窯

試料 No	偏 角 Di (°E)	伏 角 Ii (°)
F 516	-5.6	60.9
F 517	-3.0	61.2
F 518	-1.4	59.8
F 519	0.7	62.4
F 520	0.0	60.8
F 521	-1.4	61.8
F 522	1.1	61.0
F 523	-1.5	60.5
F 524	-5.4	62.8
F 525	-1.0	60.3
F 526	1.0	62.5
F 527	-8.5	65.0

(3) 6-I号窯

試料 No	偏 角 Di (°E)	伏 角 Ii (°)
F 391	-4.0	59.7
F 392	-7.7	58.3
F 393	-4.0	56.3
F 394	-6.3	55.5
F 395	-0.2	58.6
F 396	-8.6	57.1
F 397	-3.4	59.2
F 398	-6.9	56.7
F 399	-15.6	52.6
F 400	-6.9	58.5
F 401	-4.5	54.5
F 402	-8.1	57.3

(4) 6-II号窯

試料 No	偏 角 Di (°E)	伏 角 Ii (°)
F 376	-11.6	58.7
F 377	-8.3	58.0
F 378	-5.2	59.6
F 379	-8.6	57.2
F 380	-5.7	60.5
F 381	-6.4	60.0
F 382	-7.6	57.4
F 383	-5.2	59.7
F 384	-5.4	61.2
F 385	-6.1	60.1
F 386	-3.8	58.4

(5) 6-III-A号窯

試料 No	偏 角 Di (°E)	伏 角 Ii (°)
F 363	-8.5	56.8
F 364	-15.0	55.6
F 365	-11.6	55.0
F 366	-10.1	54.5
F 367	-14.2	56.1
F 368	-13.1	56.6
F 369	-17.1	54.6
F 370	-12.9	54.5
F 371	-17.5	54.2
F 372	-7.7	53.0

(6) 6-III-B号窯

試料 No	偏 角 Di (°E)	伏 角 Ii (°)
F 351	-12.2	64.0
F 352	-9.8	60.4
F 353	-11.1	60.8
F 354	-10.9	60.6
F 355	-7.2	62.4
F 356	-13.2	60.6
F 357	-11.8	59.1
F 358	-7.3	61.9
F 359	-11.4	61.1
F 360	-3.1	61.4
F 361	-2.5	62.1
F 362	-3.5	62.7

(7) 7-I号窯

試料 No	偏 角 Di (°E)	伏 角 Ii (°)
F 407	-11.1	52.0
F 408	-15.3	55.8
F 409	-16.3	54.5
F 410	-13.6	53.8
F 411	-13.4	55.3
F 412	-14.0	55.3
F 413	-15.3	54.2
F 414	-13.4	53.6
F 415	-15.9	58.0
F 416	-12.4	55.3
F 417	-10.6	56.7

(8) 12-I号窯

試料 No	偏 角 Di (°E)	伏 角 Ii (°)
F 266	-14.4	57.2
F 267	-10.1	56.1
F 268	-12.2	55.3
F 269	-9.4	57.6
F 270	-15.2	61.2
F 271	-7.6	59.4
F 272	-9.7	53.8
F 273	-7.8	56.6
F 274	-12.9	55.8
F 275	-11.8	62.6
F 276	-9.5	63.1
F 277	-10.9	59.4

(9) 12-II号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 251	-13.6	58.6
F 252	- 3.7	66.2
F 253	- 6.3	66.0
F 254	-11.4	62.4
F 256	-14.0	64.3
F 257	- 6.6	59.7
F 258	- 9.9	61.3
F 259	- 9.9	61.9
F 260	-12.3	63.0
F 261	-12.0	65.7
F 262	- 9.3	63.6

(10) 12-III号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 236	-3.9	63.5
F 237	-3.1	61.1
F 238	-7.3	66.0
F 239	-6.9	61.5
F 240	-7.5	65.3
F 241	-5.9	62.7
F 242	-4.6	63.5
F 243	-8.7	66.1
F 244	-7.4	63.7
F 245	-7.3	63.5
F 246	-2.9	62.8
F 247	-6.1	64.4

(11) 12-IV号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 221	-19.2	50.6
F 222	-13.6	53.6
F 223	-14.4	54.6
F 224	-12.7	53.2
F 225	-15.6	55.8
F 226	-13.7	54.6
F 227	-16.7	52.8
F 228	-14.1	54.6
F 229	-18.2	53.4
F 230	-19.7	49.3
F 231	-16.3	54.6
F 232	- 2.9	51.2

(12) 12-V号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 206	-10.5	63.0
F 207	-11.1	64.6
F 208	- 7.8	61.5
F 209	- 8.7	62.2
F 210	- 8.2	63.4
F 211	- 8.3	60.1
F 212	- 9.9	63.2
F 213	- 7.9	62.6
F 214	-10.2	66.8
F 215	-10.7	64.9
F 216	- 8.7	61.2
F 217	-10.2	62.3

(13) 12-VI号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 191	-19.3	61.6
F 192	-12.5	59.8
F 193	-12.2	57.2
F 194	- 9.1	60.6
F 195	-14.5	67.0
F 196	-16.9	65.8
F 197	-18.7	63.7
F 198	-21.5	66.4
F 199	-20.5	65.9
F 200	-13.7	64.7
F 201	-14.7	62.6
F 202	-12.0	63.7

(14) 12-VII号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 176	- 9.7	67.1
F 177	-11.5	66.2
F 178	- 9.8	64.7
F 179	-15.0	64.8
F 180	-14.0	65.8
F 181	- 8.9	66.0
F 182	-12.5	64.1
F 183	-13.7	63.6
F 184	-10.3	67.2
F 185	-17.7	64.7
F 186	-14.7	64.8
F 187	-19.5	65.4
F 188	-10.0	65.6

(15) 12-IX号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 161	-12.8	61.8
F 162	-13.0	61.5
F 163	- 5.1	59.4
F 164	- 7.4	61.4
F 165	-11.4	61.2
F 166	- 1.1	64.8
F 167	- 7.2	60.6
F 168	- 9.9	60.2
F 169	- 5.6	64.1
F 170	-11.2	61.9
F 171	-11.6	62.4
F 172	-16.8	68.2

(16) 22-I号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 326	-17.1	64.2
F 327	-20.2	63.7
F 328	-21.7	66.4
F 329	-18.1	64.4
F 330	-16.0	61.1
F 331	-14.6	63.3
F 332	-17.4	63.1
F 334	-23.1	64.8
F 335	-21.9	66.6
F 336	-13.6	64.6

(17) 22-Ⅱ号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 311	- 9.3	59.9
F 312	-14.6	59.5
F 313	- 7.6	58.3
F 314	-11.6	56.8
F 315	- 8.9	56.2
F 316	-12.0	58.1
F 317	-15.7	58.3
F 318	-17.9	57.0
F 319	-13.7	57.4
F 320	-13.3	60.1
F 321	-13.2	58.5
F 322	-12.0	57.1

(18) 22-Ⅲ号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 297	-17.9	52.4
F 298	-11.2	52.1
F 299	-13.5	52.6
F 300	-11.4	53.8
F 301	-14.2	51.2
F 302	-18.1	52.6
F 303	-16.0	52.9
F 304	-14.6	52.4
F 305	-14.2	54.2
F 306	-16.5	52.6
F 307	-14.1	49.9

(19) 22-Ⅳ号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 281	-19.5	53.0
F 282	- 9.4	54.8
F 283	-13.1	56.8
F 284	-16.4	51.4
F 285	-13.6	51.5
F 286	-12.2	48.5
F 287	-15.1	51.1
F 288	-17.4	50.8
F 289	-16.4	48.9
F 290	-17.8	50.9
F 291	-17.2	49.1
F 292	-16.4	49.6

(20) 22-Ⅰ号窯

試料 No	偏 角 Di(°E)	伏 角 Ii(°)
F 341	-10.7	58.5
F 342	-13.9	56.8
F 343	-11.3	56.7
F 344	-11.0	56.4
F 345	- 8.7	54.7
F 346	-13.6	56.8
F 347	- 9.6	60.1
F 348	-10.6	59.5
F 349	-19.3	61.4

表14 牛頭ハセムシ窯の考古地磁気測定結果

窯名の前に*を付けたデータは中島ほか(1988)からの引用。推定年代の誤差は20-1 L号窯が±30年、他はすべて±10年。

窯 名	試料数 (N)	Dm(°E)	Im(°)	α_{95} (°)	K	推定年代 (AD)
*18-7号窯	14	-15.6	50.8	1.0	1439.8	780
22-IV号窯	12	-15.4	51.4	1.6	721.5	775
22-III号窯	11	-14.7	52.4	1.0	2012.9	765
12-IV号窯	12	-14.8	53.3	1.8	603.2	760
7-I号窯	11	-13.7	55.0	1.1	1749.3	750
6-III-A号窯	10	-12.8	55.1	1.3	1294.1	750
*18-8号窯	12	-17.5	56.3	1.8	596.6	740
*18-6号窯	15	-13.7	56.4	1.5	674.5	740
*20-1 L号窯	5	-12.7	56.5	4.0	369.7	740
6-I号窯	12	-6.5	57.1	1.6	754.0	730
22-II号窯	12	-12.5	58.1	1.1	1637.2	730
12-I号窯	12	-10.9	58.2	1.7	630.3	730
23-I号窯	9	-12.0	57.9	1.7	905.8	730
*18-2号窯	15	-12.5	58.2	0.9	1844.7	730
*20-2号窯	14	-13.2	58.9	1.1	1276.9	730
6-II号窯	11	-6.8	59.2	1.0	2217.2	720
1-I号窯	12	-6.2	59.4	1.3	1187.5	720
*18-5号窯	15	-15.4	61.4	1.9	403.4	710
6-III-B号窯	12	-8.7	61.5	1.2	1314.6	710
12-IX号窯	12	-9.4	62.3	1.6	697.9	700
1-II号窯	12	-2.0	61.6	1.1	1653.3	700
12-VI号窯	12	-15.2	63.3	1.9	545.7	700
12-V号窯	12	-9.3	63.0	1.0	1842.0	700
12-III号窯	12	-5.9	63.7	1.0	2032.6	700
12-II号窯	11	-10.0	63.0	1.6	779.1	700
*19号窯	13	-9.6	62.3	2.7	237.2	700
12-VII号窯	13	-12.9	65.4	0.9	2174.0	690
22-I号窯	10	-18.3	64.3	1.3	1456.4	690

表15 考古地磁気による年代区分と考古学による
推定年代との対比

磁気方向からの区分		考古学
グループA	18-7, 22-IV 22-III, 12-IV 7-I, 6-III-A (上の方が若い、横は時代差なし)	8世紀 中から 後期
グループB	6-I, 6-II, 1-I, 12-I 18-2, 18-6, 18-8, 20-1 L 20-2, 22-II, 23-I (時代差はあるかもしれないが 磁気方向からは識別できない)	
グループC	12-II, 12-III, 12-V, 12-VI 12-VII, 18-5, 19	8世紀 前半
	12-IX, 1-II, 6-III-B (時代差はあるかもしれないが 磁気方向からは識別できない)	7世紀 末

図55の平均方向のデータは、表16に載せた。

表16 福岡県、大阪府、石川県からの8世紀頃の考古地磁気測定
結果の年代ごとの平均値

福岡県はハセムシ窯(本報告)、大阪府は陶邑(Shibuya, 1980)、石川県は小松市の窯(戸津古窯跡など: 広岡ほか, 1988)からのもので、福岡県の年代のA、B、Cは表3と対応し、大阪府と石川県の年代は平均値を計算した各窯の推定年代の中央値である。

年代(AD)	窯体数 N	偏角 Dm (° E)	伏角 Im (°)	α_{95} (°)	K
福岡県					
グループA	6	-14.5	53.0	1.6	1795.6
グループB	11	-11.4	57.9	1.2	1387.9
グループC	11	-10.5	63.0	1.4	1097.5
大阪府					
800	15	-13.5	48.0	2.3	281.8
750	34	-11.1	54.9	2.0	159.4
680	6	-10.4	63.1	5.4	156.7
石川県					
840	5	-17.0	46.5	2.7	806.5
800	6	-14.6	49.7	0.9	5929.3
770	7	-12.3	51.8	0.9	4587.2
740	8	-11.8	53.9	1.2	2045.6
680	9	-10.6	60.4	1.9	714.4
650	7	-15.7	62.4	4.5	178.6

以上で、牛頸ハセムシ窯跡群の年代推定に利用できるデータは出つくした。8世紀のデータ数はハセムシ窯跡群で充分の量になったが、残念ながら九州の他の時代のデータは昨年度以後にも得られていない。現段階で年代に関して確実なのは表15にまとめた考古地磁気と考古学との対比だけである。

本報告では、九州からの考古地磁気測定結果がさらに蓄積された時点で、推定年代を改定しなければならないことを見越した上で、次のような仮定のもとにハセムシ窯跡群の考古地磁気推定年代の一つの試算を行い、推定年代を表14の右端の欄に示した。

【仮定1】7世紀末から8世紀の大阪府・石川県の永年変化曲線は、750年より古い部分は伏角が深くなる方に引延ばしたものが正しく、新しい部分は広岡（1977）の曲線で正しいとする。この仮定からは大阪府・石川県と福岡県の地磁気分布の地域差は偏角差の約 3° が主で、伏角にはそれほど差がないことになる。

【仮定2】ハセムシ古窯跡のグループAの平均磁気方向の年代は、その伏角値を広岡（1977）の曲線と対比し760年であるとする。

【仮定3】グループCの平均磁気方向の年代を、考古学の推定年代の7世紀末から8世紀始めということを根拠に700年とする。

【仮定4】グループA、B、Cの平均磁気方向を結ぶ曲線（図55の実線）を九州における地磁気永年変化曲線とする。推定年代は、グループAの平均磁気方向の年代より古い時代には、地磁気変化は等速であったとし、グループAとCの平均磁気方向の年代を基準に均等に割り振る。こうすればグループBの平均磁気方向の年代は730年になる。

【仮定5】グループAの平均磁気方向の年代の760年より新しい（伏角が浅い）時代については、伏角値だけを広岡（1977）の曲線と対比して年代を推定する。

これらの仮定が正しければ、表14のハセムシ窯跡の考古地磁気推定年代の誤差は ± 10 年程度である。ただし、20-1L号窯は誤差角が大きいため ± 30 年となる。表15のグループについてみれば、グループAは 760 ± 20 年、Bは 730 ± 20 年、Cは 700 ± 20 年となる。

ハセムシ窯跡の年代推定を行うために、多くの貴重な考古地磁気測定結果を提供していただいた富山大学理学部の広岡公夫教授に深く感謝します。

引用文献

広岡公夫（1977）考古地磁気および第四世紀古地磁気研究の最近の動向，第四紀研究，15,200-203.

広岡公夫・岡田 宗・吉村勝之・井口滋存（1988）小松市古窯の考古地磁気，石川県小松市教育委員会，印刷中。

中島正志・夏原信義（1981）考古地磁気年代推定法，ニュー・サイエンス社，95p.

中島正志・長谷川千恵・三田村憲一・夏原信義（1988）

牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定，大谷女子大学資料館報告書，第18冊（牛頸），
75－81.

Shibuya,H. (1980) Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past

2,000 years by means of archaeomagnetism，大阪大学大学院基礎工学研究科修士論文，
54p.

遺物觀察表

例 言

1. 観察表の作成は、実測図と現物とを対照して行った。色調は、「標準土色帖」によって判断した。
2. 形態、手法の特徴の表記は、原則として『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅰ』に従っている。
3. 法量については復元値によって記述しているものも多い。なお歪みの著しいものについては実測段階での復元図をもとに計測している。
4. 各自が行った観察を、文体、用語の統一を行っており、必ずしも当初の原稿の通りでないものもある。
5. 本作業は、大谷女子大学考古学研究会の協力を得て行った。

1—Ⅲ号窯

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋 杯 (蓋)	1	上方灰原灰層	口径 13.7 器高 3.6	口縁部はなだらかに下がり、端部は丸い。天井部は比較的低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3は、回転ヘラ切り未調整。 天井部内面中央2/3は不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 10Y6/1灰色。 2/3欠損、竹管文を認める。
同 上	4	下方灰原灰層(左)	口径 11.3 器高 3.9	口縁部はなだらかに下がり、端部は丸く仕上げられている。天井は比較的高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転ヘラ切り未調整。 天井部内面の1/2以上に不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 10GY4/1暗緑灰色。 1/3欠損、竹管文を認める。
同 上	7	下方灰原灰層(右)	口径 11.3 器高 3.2	口縁部は端部近くで直下に下がり、端部は丸く仕上げている。天井は比較的低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面は回転ヘラ切り未調整。 天井部内面の1/2以上に不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 10G4/1暗緑灰色。 1/4欠損、ひずみ多し。
同 上	9	上方灰原灰層	口径 10.7 器高 3.3	口縁部は端部近くでわずかに屈曲させている。端部は丸く仕上げている。天井は比較的高く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面は、回転ヘラ切り未調整。 天井部内面は不整方向のナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 10BG7/1明青灰色。
同 上	20	同 上	口径 10.7 器高 3.2	口縁部は端部近くでわずかに内方へ屈曲させており、端部は丸く仕上げている。天井は比較的高く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面は回転ヘラ切り未調整？ 天井部内面の1/2前後に不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 5YR4/3に ぶい赤褐色。 1/2欠損。
蓋 杯 (身)	23	同 上	口径 9.4 器高 1.9 受部径11.3	たちあがりは比較的低く内傾し、端部は丸い。 受部はほぼ水平にのびる。 底部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面2/3以上回転ヘラ切り未調整。 底部内面には不整方向のナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗 (4mm前後の白色砂粒を含む)。 色調 10Y5/1灰色。
同 上	24	同 上 (A)	口径 9.9 器高 2.9 受部径11.9	たちあがりは、短かく外彎気味にのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび短かく丸い。 底部は比較的深く丸味をもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面1/2以上に回転ヘラ切り未調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗 (3mmの白色砂粒を含む)。 色調 外面 5BG6/1青灰色。内面 5PB5/1青灰色。 ヘラ記号「Y」
同 上	25	同 上	口径 10.6 器高 3.7 受部径12.8	たちあがりは比較的低く内傾し、端部は丸く仕上げられている。 受部は水平にのび、比較的長く丸い。 底部は比較的深く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面1/2に回転ヘラ切り未調整。 底部内面1/2に不整方向のナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5Y6/1灰色。 1/3欠損。 底部にヘラ記号「竹」
同 上	26	同 上	口径 10.0 器高 3.9 受部径12.2	たちあがりは比較的低く内傾し端部は丸く仕上げられている。 受部は丸く水平にのびている。 底部は中央が平らに近く、受部に向けてなだらかに上がる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面ヘラ切り未調整。 底部内面1/2に不整方向のナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 5Y7/3浅黄色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	27	下方灰原灰層(左)	口径 10.0 器高 3.8 受部径12.2	たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は水平にのび厚く丸い。 底部は丸味をもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ切り未調整。 内面は1/2以上に不整方向のナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 7.5Y5/1灰色。 ヘラ記号「V」
同上	37	同上(右)	口径 10.2 器高 3.5 受部径12.4	たちあがりは大きく内傾させており、端部は丸い。 受部は、上外方へのび丸い。 底部は比較的深く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面中央2/3に回転ヘラ切り、内面中央1/2弱に不整方向のナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 5 Y8/1灰白色。 3/4欠損。
同上	38	同上	口径 10.0 器高 2.8 受部径11.8	たちあがりは短かく内傾し丸い。受部は短かく上外方へのび丸い。底部は比較的浅く中央部は平らである。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面1/2以上、回転ヘラ切り未調整。 底部内面2/3以上に不整方向のナデ調整。	焼成 甘く軟質。 胎土 密。 色調 5 Y8/2灰白色。 1/5欠損。 ヘラ記号「V」
蓋杯(蓋)	46	同上(左)	口径 8.2 器高 3.6	天井部中央に宝珠つまみを貼付。天井はなだらかに下がり、端部は丸い。天井部内面に長い内傾するかえりを伴う。かえり端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面1/2回転ヘラ削り。天井部内面1/2に不整方向のナデ。 他はいずれも回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を含む) 色調 7.5 Y7/1灰白色。
同上	47	上方灰原灰層	口径 8.7 器高 3.6	天井部中央に乳頭状つまみを付す。天井は、なだらかに下がり端部に到る。端部は丸い。 天井部内面に長い内傾するかえりを伴う。かえり端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面4/5以上に回転ヘラ削り。 天井部内面1/2以上に不整方向のナデ、他はいずれも回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(最大4mmの白色砂粒を含む) 色調 10Y5/1オリーブ灰色。 2/3欠損。
同上	49	同上	口径 9.4 器高 3.8	天井部中央に中央が凹んだつまみを付す。天井部はわずかに丸味を有しながら下がり、端部は丸い。 天井部内面に比較的長い内傾するかえりを伴う。かえり端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2以上に回転ヘラ削り。 天井部内面1/2以上に不整方向のナデ。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 10Y4/2オリーブ灰色。 1/4欠損。
同上	50	同上	口径 9.7 器高 2.5	天井部中央に中央がわずかにくぼんだつまみを付す。 天井部はわずかに丸味を有しながら下がり、端部は丸く仕上げる。 天井部内面に内傾するかえりを伴い、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面4/5以上に回転ヘラ削り。 天井部内面1/2前後に不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 5 Y6/1灰色。 2/3欠損。
同上	51	同上	口径 8.7 器高 2.6	天井部中央に中央がわずかに凹んだつまみを付す。 天井部はなだらかに下がり端部に到る。端部は丸い。天井部内面には内傾するかえりを伴い端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2以上に回転ヘラ削り。 天井部内面2/3以上に不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 7.5 Y6/1灰色。
同上	52	下方灰原灰層(右)	口径 9.2 器高 3.1	天井部中央に中心がレンズ状に凹んだつまみを付す。 天井部はなだらかに下がり端部に到る。端部は丸い。天井部内面に長い直下にかかるかえりを伴う。かえり端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2以上に回転ヘラ削り。 天井部内面2/3前後に不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 7.5 Y5/1灰色。

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋 杯 (蓋)	53	上方灰原灰層	口径 13.1 器高 3.2	天井部中央に径の大きな中央が高い擬宝珠様つまみを付す。 天井部はなだらかに下がり端部に到る。端部は丸い。 天井部内面端部近くに短かい内傾するかえりを伴う。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2前後に回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3に不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗、白色砂粒を含む。 色調 N7/1灰白色。 1/3欠損。
蓋	54	同上	口径 8.1 器高 3.3	天井部中央に中心がレンズ状に凹んだつまみを付す。 天井は高く、平らに近く、口縁部は内彎気味に下がり、端部外面に稜を巡らせる。端部は平らである。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部全面に回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央に不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密(3mmの白色砂粒を含む) 色調 灰白色。 1/2欠損。
蓋 杯 (身)	55	同上(B)	口径 10.6 器高 4.4	口縁部は直立気味に上方へのび、端部は丸い。 底部はわずかに丸味をもつ。 口縁部外面に凸線状の凹凸2条を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ切り。 底部内面は不整方向のナデ調整。 他はいずれも回転ナデ調整を行う。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(最大4mmの白色砂粒を含む) 色調 5Y6/1灰色。 ヘラ記号「/」。 1/3欠損。
同 上	56	同上(A)	口径 10.7 器高 3.6	口縁部は上外方へのび端部は丸い。底部はわずかに丸味をもつ。口縁部外面に凸線状の凹凸を認める。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ切り。 底部内面は不整方向のナデ調整。 他はいずれも回転ナデ調整を行う。	焼成 良好。 胎土 粗(最大4mmの白色砂粒を含む) 色調 10YR6/1褐灰色。 ヘラ記号「/」。 1/2欠損。
同 上	57	灰原	口径 9.5 器高 4.8	口縁部は内彎気味に上外方へのび、端部は丸い。 底部は深く、平らである。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ切り。底部内面は不整方向のナデ調整。 他はいずれも回転ナデ調整を行う。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 5BG 5/1青灰色。 ヘラ記号「卅」。 1/3欠損。
同 上	61	下方灰原灰層(右)	口径 10.0 器高 4.3	口縁部は外彎気味に上方へのび端部は丸い。 底部は比較的深く、丸味をもち不安定である。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面は回転ヘラ切り。底部内面1/2に不整方向のナデ調整。 他はいずれも回転ナデ調整を行う。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(最大3mmの白色砂粒を含む) 色調 5BG6/1青灰色。 ヘラ記号「V」。 2/3欠損。
高 杯	59	上方灰原灰層	口径 9.4 残存高 4.0	口縁部は外彎気味に上外方へのび、端部は丸い。 底部は丸味をもち、中央に基部の細い脚を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面2/3以上に回転ヘラ削り調整。 底部内面には不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整を行う。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(最大2mmの白色砂粒を含む) 色調 7.5Y6/2灰オリーブ色。 脚部中位以下欠損。
同上(脚部)	60	灰原	底径 7.6 残存高 3.7	脚部の残欠である。上位を欠損しているが、下位に向って大きく「く」の字に拡がっている。端部は丸く仕上っている。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 灰色。 ヘラ記号「卅」を外面に認める。
提 瓶	63	同上	口径 5.5 残存高 5.0	口縁部は基部から外反して上外方へのび、端部は丸い。 体部は欠損のため不明。	マキアゲ・ミズビキ成形。 口頸部は体部成形後貼付したものか？ 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5Y5/2灰オリーブ色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
提瓶	65	下方灰原灰層(左)	口径 8.6 残存高 7.2	口頸部は基部太く外反して上外方へのび、端部近くでわずかに角度をかえ端部に到る。端部は丸い。 肩はなだらかに下がるが、上半部で欠損、口縁部外面に沈線1条を巡らす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 灰色。
長頸壺	64	灰原灰層	口径 7.5 残存高 5.4	口頸基部細く外彎気味に上外方へのび、端部近くで大きく屈曲させ端部に到る。端部は丸く仕上げる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 10Y5/1灰色。
鉢	62	下方灰原灰層	口径 13.5 残存高 6.6	口縁部は直立気味に上外方へのび、端部は丸い。 口縁部外面にはカキ目による凹凸が目立つ。底部は大半を欠損している。	マキアゲ・ミズビキ成形。 口縁部外面回転カキ目調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を含む)。 色調 5BG5/1青灰色。
甕	66	上方灰原灰層	口径 40.2 残存高 7.6	口縁部上半の遺存である。 外彎気味に外方へのび、端部は外傾する凹面をなす。 外面には回転カキ目による凹凸がみられる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転カキ目調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 5YR3/1黒褐色。
同上	67	灰原灰層	口径 21.5 残存高 12.5	口頸部は基部太く、外反して上外方へのび、端部は肥厚し段をなす。肩はなだらかに下がり丸味をもつ。	マキアゲ・ミズビキ成形。 肩部外面 格子叩き。 肩部内面 円弧叩き。 口頸部、肩部接合部分ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 10YR7/1灰白色。

6 地区

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	68	I号窯窯体内埋土	残存径 12.3 残存高 2.1	天井部は低く平ら、高い擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面残存3/4、回転ヘラ削り調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N4/灰白色。 口縁部欠損。
同上	73	I号窯終ベース	口径 14.6 器高 2.2	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。 扁平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ切り後、ナデ調整。天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 N7/灰白色。
同上	81	II号窯窯体内埋土	口径 16.9 残存高 1.8	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 N5/灰色。 天井部欠損。

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋 杯 (身)	85	Ⅱ号窯窯体内	口径 13.0 器高 4.2	口縁部は、上外方に伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。底部はやや深く、なだらか。 ハの字形の高台を付し、外側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 焼成が甘く軟質のため、調整不明。 高台はハリツケ。	焼成 甘く、軟質。 胎土 やや密(砂粒を多く含む)。 色調 2.5 Y8/3 淡黄色。
蓋 杯 (蓋)	93	Ⅲ号窯窯体内	口径 14.8 器高 2.1	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を含む)。 色調 5 B G6/1 灰白色。
蓋 杯 (身)	94	Ⅲ号窯窯体内	口径 15.9 器高 3.7	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面2/3、不整方向ナデ調整。底部内面、不整方向ナデ調整。口縁部内面1/2、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 やや密。 色調 5 P B7/1 明青灰色。
蓋 杯 (蓋)	95	A区下方灰原	口径 12.7 器高 3.5	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部は高く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面4/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 甘く軟質。 胎土 粗。 色調 7.5 Y8/2 灰白色。
同 上	98	同 上	口径 15.0 器高 3.2	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部は高く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面1/2、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 やや粗。 色調 7.5 Y7/2 灰白色。
同 上	102	同 上	口径 13.3 器高 2.8	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部はやや高く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5 G Y6/1 緑灰色。
同 上	105	同 上	口径 15.0 器高 3.2	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部は高く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面1/2、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 外面1/2 2.5 Y8/1 灰白色。外面1/2、内面2.5 Y7/1 灰白色。
同 上	114	最下段灰原	口径 13.4 器高 3.2	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部は高く、平ら。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密(白色砂粒を含む)。 色調 外面2.5 Y5/1 オリーブ灰色。内面10 YR5/1 灰赤色。 口縁部一部欠損。
同 上	116	同 上	口径 11.5 器高 2.7	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は丸い。天井部はやや低く、平ら。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面4/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密(白色砂粒を多く含む。最大5ミリ大)。 色調 7.5 R2/1 赤黒色。 口縁部一部欠損。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	117	最下段灰原	口径 19.5 器高 2.8	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は丸い。天井部はやや低く、平ら。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り後、ナデ調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 外面2.5GY5/1オリーブ灰色。 内面N5/灰色。 約1/2欠損。
同上	118	同上	口径 14.8 器高 3.2	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部はやや高く、なだらかな。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 5Y6/1灰色。 口縁部一部欠損。
同上	122	同上	口径 11.7 器高 3.65	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は丸い。天井部は高く、なだらかな。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り後、ナデ調整。 天井部内面3/5、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗(白色砂粒を多く含む)。 色調 2.5YR5/3にぶい赤褐色。 完形。
同上	124	同上	口径 12.7 器高 3.5	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は丸い。天井部は高く、なだらかな。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部外面2/5、ヘラ削り調整後、ナデ調整。 天井部内面2/5、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 やや粗。 色調 7.5YR6/3にぶい褐色。 口縁部一部欠損。
同上	125	同上	口径 15.3 器高 3.0	口縁部は下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。 天井部はやや高く、平ら。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/5、ナデ調整。天井部外面2/5、回転ヘラ削り調整。天井部外面2/5、ヘラ削り調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや密。 色調 7.5YR6/2灰褐色。 天井部外面、ヘラ記号らしき「×」キズ有り。
同上	127	同上	口径 15.3 器高 2.1	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は丸い。天井部はやや低く、やや凹形を成す。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/4、回転ナデ調整後、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 N6/灰色。 天井部外面、ヘラ記号「×」有り。 約1/2欠損。
同上	128	同上	口径 15.7 器高 3.25	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は丸い。天井部はやや高く、平ら。中央に擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面4/5、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を多く含む)。 色調 外面3/4、5PB2/1青黒色。外面1/4、5Y7/1灰白色。内面5PB4/1暗青灰色。完形。
同上	130	同上	口径 15.1 器高 3.7	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部は高く、平ら。扁平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 やや粗。 色調 5YR5/6明赤褐色。
同上	138	同上	口径 13.0 器高 2.9	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部はやや高く、平ら。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗(最大3ミリの白色砂粒を含む)。 色調 N6/灰色。 約1/3欠損。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	139	A区下方灰原	口径 17.9 器高 3.85	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部は高く、平ら。中央に擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 N4/灰色。 口縁部約1/3欠損。
同上	142	同上	口径 13.6 器高 3.1	口縁部は、下外方に下がる。端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部はやや高く、平ら。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ切り。外面1/6ナデ調整。外面1/3回転ヘラ削り調整後、ナデ調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(最大5.5ミリの白色砂粒を含む)。 色調 2.5Y7/1灰白色。 口縁部約1/3欠損。
同上	143	同上	口径 12.5 器高 3.0	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は丸い。天井部はやや高く、平ら。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整後、やや強めにナデ調整。外面1/7、ヘラ削り調整。外面1/5ヘラ削り調整後、回転ナデ調整。天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 2.5YR7/4 淡赤褐色。 約1/4欠損。
同上	144	同上	口径 12.1 器高 3.6	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部は高く、なだらか。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(最大3ミリの白色砂粒を含む)。 色調 5P B7/1明青灰色。 完形。 天井部外面にヘラ記号「X」有り。
同上	147	同上	口径 13.3 器高 2.5	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、なだらか。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/3、ナデ調整、外面1/3回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 やや粗。 色調 外面7.5YR7/4にぶい褐色。 内面7.5Y8/2灰白色。 口縁部外面一部、重ね焼きの為色調変化2.5Y6/2灰黄色。
同上	150	同上	口径 15.1 器高 1.65	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、ほぼ平ら。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ切り。 外面1/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(砂粒を多く含む)。 色調 外面 10YR 5/1褐灰色。 内面 5YR5/1褐灰色。
同上	156	最下段灰原	口径 26.3 器高 2.1	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。扁平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面5/6、回転ヘラ削り調整。 外面1/6、回転ヘラ削り調整後、ナデ調整。天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 N7/灰色。
同上	157	B区下方灰原	口径 15.4 器高 2.2	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、なだらか。扁平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密(白色砂粒を含む)。 色調 7.5Y7/1灰白色。
同上	160	最下段灰原	口径 14.9 器高 2.0	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ切り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密(白色砂粒を含む)。 色調 N6/灰色。 約1/4欠損。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	162	最下段灰原	口径 15.3 器高 2.2	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ切り。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや密。 色調 5Y6/1灰色。
同上	165	B区下方灰原	口径 15.8 器高 2.3	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらか。 偏平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 10BG6/1青灰色。
同上	166	最下段灰原	口径 15.0 器高 2.1	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、なだらか。 偏平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 10BG7/1明青灰色。 口縁部約1/6欠損。
同上	169	A区下方灰原	口径 14.9 器高 2.5	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 やや粗。 色調 5Y6/1灰色。
同上	171	最下段灰原	口径 12.2 器高 2.6	口縁部は、垂直に下がり、端部は丸い。天井部は高く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 5Y6/1灰色。 口縁部約1/4欠損。
同上	179	同上	口径 20.4 器高 2.9	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、なだらか。 偏平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整後、ナデ調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 10YR7/1灰白色。
同上	182	同上	口径 15.4 器高 1.9	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、ほぼ平ら。 偏平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ切り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや密。 色調 2.5Y6/1黄灰色。
同上	183	同上	口径 16.2 器高 3.1	口縁部は、短くやや内傾して下がり、端部は丸い。 天井部は高く、なだらか。 偏平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ切り。外面1/6、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/5、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 やや粗。 色調 外面2.5Y8/1灰白色。 内面7.5Y7/1灰白
同上	184	同上	口径 14.8 器高 2.4	口縁部は、短くやや内傾して下がり、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ切り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 やや粗。 色調 N8/灰白色。

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋 杯 (蓋)	185	最下段灰原	口径 15.1 器高 1.6	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、一定方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 10YR6/1褐 灰色。
同 上	187	同 上	口径 15.6 器高 2.6	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらか。 偏平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面1/3、一定方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗(最大3 ミリ大の砂石を含 む)。 色調 外面7.5G/1灰 色。内面10YR7/ 1灰白色。
同 上	192	A区 下方灰原	口径 16.6 器高 2.0	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、やや凹形を成す。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 甘く軟質。 胎土 粗。 色調 2.5Y6/1黄灰 色。
同 上	199	C区 石灰原灰層中	口径 15.4 器高 1.6	口縁部は、短くやや外傾して下がり、端部は丸い。 天井部はやや低く、やや凹形を成す。 偏平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、一定方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗(最大 4ミリ大の砂石を 含む)。 色調 N7/1灰白色。
同 上	200	同 上	口径 15.2 器高 2.5	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 2.5Y7/1灰白 色。 約1/5欠損。
同 上	203	最下段灰原	口径 14.1 器高 3.7	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 外側2.5Y7/2 灰黄色。内側5Y5 /1灰色。約1/2欠 損。
同 上	204	A区 下方灰原	口径 14.3 器高 2.9	口縁部は、外下方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部は高く、平ら。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 5 G5/1緑灰 色。
同 上	206	最下段灰原	口径 13.7 器高 3.4	口縁部は、外下方に広がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。 天井部はやや高く、平ら。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/5、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 10Y5/1灰色。 口縁部約1/8欠損。
蓋 杯 (身)	208	A区 下方灰原	口径 13.0 器高 4.8	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 八の字形の高台を付し、外側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 やや粗(白色 砂粒を多く含む)。 色調 5 P B7/1明 青灰色。完形。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯 (身)	209	A区 下方灰原	口径 13.4 器高 4.5	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや深く、ほぼ平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 体部内面1/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 甘く軟質。 胎土 やや粗。 色調 外面 N6/灰色。 内面 5 P B5/1青灰色。
同上	210	同上	口径 14.0 器高 4.5	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや深く、ほぼ平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 やや粗。 色調 外面 N5/灰色。 内面 5 P B7/1明青灰色。
同上	211	同上	口径 12.0 器高 3.6	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 N5/灰色。 約2/5欠損。
同上	215	最下段 灰原	口径 13.8 器高 4.6	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、一定方向ナデ調整。 口縁部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 口縁部外面1/2、回転ヘラ削り調整後、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 2.5 Y R4/1赤灰色。 口縁部約3/4欠損。 高台1/6欠損。
同上	216	同上	口径 13.8 器高 5.1	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面1/3、ヘラ削り調整。 口縁部外面、ヘラ削り調整後、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(白色砂粒を多く含む)。 色調 10 Y6/1灰色。 底部外面にヘラ記号「=」有り。
同上	219	同上	口径 13.8 器高 4.1	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は浅く、ほぼ平ら。 ハの字形の高台を付し、外側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密(黒色砂粒を多く含む)。 色調 10 G Y6/1緑灰色。 口縁部3/4欠損。
同上	222	同上	口径 12.2 器高 3.5	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は浅く、ほぼ平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 粗(最大3.5ミリの白色砂粒を含む)。 色調 5 Y6/1灰色。 口縁部約1/3欠損。
同上	224	同上	口径 16.3 器高 6.4	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は深く、ほぼ平ら。 ハの字形の高台を付し、外側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面2/3、回転ヘラ切り後、カキ目調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	焼成 甘く軟質。 胎土 密。 色調 10 YR8/2灰白色。 約1/2欠損。
壺 (蓋)	226	同上	口径 15.2 器高 3.6	口縁部は、やや下外方に下がり、端部近くで、外方に屈曲する。端部は内傾する面をなす。 天井部は高く、ほぼ平ら。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N7/灰白色。 約1/2欠損。天井部外面にヘラ記号「×」有り。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	238	最下段灰原	口径 12.3 器高 3.0	口縁部は、下外方に下がり、端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部はやや低く、なだらかな。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 N7/灰白色。 約1/2欠損。天井部外面にヘラ記号「  」有り。
蓋杯(身)	240	同上	口径 13.8 器高 4.5	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、ほぼ平ら。 ハの字形の高台を付し、外側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り。 口縁部1/3、回転ヘラ削り調整後、回転ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を多く含む)。 色調 5G3/1暗緑灰。 体、口縁部約6/7欠損。底部外面にヘラ記号「  」有り。
同上	254	A区灰原	口径 13.3 器高 5.0	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は深く、ほぼ平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り後、外面2/3回転ナデ調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(白色砂粒を多く含む)。 色調 7.5Y5/1灰色。 約1/2欠損。
同上	255	同上	口径 14.7 器高 4.6	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、ほぼ平ら。 ハの字形の高台を付し、全面で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 やや粗。 色調 N7/灰白色。 口縁部約1/3欠損。
同上	261	A区灰原	口径 18.9 器高 5.1	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、ほぼ平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 7.5Y6/1灰色。 約1/2欠損。
同上	269	最下段灰原	口径 14.4 器高 4.6	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、ほぼ平ら。 ハの字形の高台を付し、全面で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密(白色砂粒を含む)。 色調 7.5Y4/1灰。 口縁部約1/2 欠損。
同上	270	C区右灰原灰層中	口径 9.6 器高 4.4	口縁部は、上外方にのび、端部近くで外側に屈曲し、端部は丸い。 底部は深く、平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を多く含む)。 色調 N6/1灰色。 口縁部約1/2 欠損。
同上	271	同上	口径 14.1 器高 4.6	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密(白色砂粒を含む。最大4ミリ)。 色調 7.5Y6/1灰色。
同上	272	B区下方灰原	口径 8.8 器高 4.7	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は深く、平ら。 ハの字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密(白色砂粒を含む)。 色調 N4/灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	274	B区下方灰原	口径 12.1 器高 4.0	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は深く、ほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面3/4、ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。	焼成 甘く軟質。 胎土 密(白色砂粒を含む)。 色調 10Y R7/3に ぶい黄褐色。
同上	280	最段灰原	口径 19.4 器高 4.9	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、ほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(白色 砂粒を多く含む)。 色調 N7/灰白色。
同上	284	同上	口径 16.7 器高 4.0	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 粗(白色砂粒 を多く含む)。 色調 外面 7.5Y R 7/3にぶい橙色。 内面 2.5Y 6/2灰 黄色。 口縁部約1/2欠損。
同上	285	同上	口径 18.4 器高 6.9	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は深く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面4/5、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N7/灰色。
同上	286	同上	口径 21.7 器高 5.2	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 2.5Y 7/1灰白 色。 約3/5欠損。
托	288	同上	口径 15.9 器高 1.9	薄い皿状土器上面に、短い高台様の杯 受突起を有する。杯受突起端部は平ら。 皿状土器は、口縁部端部近くでやや上 外方に屈曲し、端部は丸い。 底部には、基部の太い高台を付す。高 台は短く、垂直に下がり、全面で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 皿状土器底部1/2、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。 杯受突起、高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒 を多く含む)。 色調 10B G4/1暗 青灰色。 ひずみが著しい。
同上	289	同上	口径 16.0 器高 1.6	薄い皿状土器上面に、短い高台様の杯 受突起を有する。杯受突起端部は平ら。 皿状土器の、口縁部端部は丸い。 底部には基部の太い高台を付す。 高台は短く、やや内彎して下がり、外 側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 皿状土器底部1/2、回転ヘラ削り調整。 その他回転ナデ調整。 杯受突起、高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 5YR5/1褐灰 色。 皿状土器底部にヘラ 記号「×」有り。
同上	292	同上	口径 17.0 器高 2.3	薄い皿状土器上面に、短い高台様の杯 受突起を有する。杯受突起端部は丸い。 皿状土器は、口縁部端部近くで、上外 方に屈曲し、端部は丸い。底部には基 部の太い高台を付す。高台は短く、や や外傾して下がり、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 皿状土器上部、底部、回転ヘラ削り調 整。 杯受突起、高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(白色 砂粒を多く含む)。 色調 5 P B4/1暗 青灰色。
同上	293	同上	口径 17.5 器高 1.7	薄い皿状土器上面に、短い高台様の杯 受突起を有する。杯受突起端部は平ら。 皿状土器は、口縁部端部近くで、やや 上外方に屈曲し、端部は丸い。 底部には、基部の太い高台を付す。 高台は短く、垂直に下がり、全面で接地	マキアゲ・ミズビキ成形。 皿状土器底部中央3/4、回転ヘラ削り 調整。その他回転ナデ調整。 杯受突起、高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒 を多く含む)。 色調 5 P B4/1暗 青灰色。ひずみ有 り。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
皿	299	灰原	口径 21.0 器高 3.3	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面中央2/3、回転ヘラ切り後、 ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 甘く軟質。 胎土 粗。 色調 10 Y R 7/4 に ぶい黄橙色。 口縁部5 Y 7/1 灰白色。
同上	300	同上	口径 20.7 器高 2.6	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面中央1/2、不整方向のナデ。 底部外面、回転ヘラ切り後のナデ調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 甘く軟質。 胎土 密。 色調 2.5 G Y 6/1 オ リーブ灰色。
同上	304	同上	口径 20.8 器高 1.8	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや凸型。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面3/4、回転ヘラ削り調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5 Y 7/1 灰白 色。
壺	307	A 区 下層灰原	口径 13.2 器高 6.5	口頸部は、外彎して立ち上がり、口縁 部下方に断面三角形の凸帯を成し、外 側凸状に上方に屈曲し、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 7.5 Y 7/1 灰白 色。
同上	309	同上	口径 23.1 器高 6.2	口頸部は、外彎ぎみに上外方にのび、 口縁部下方に断面三角形の凸帯を成し、 外側凸状に上方に屈曲し、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 7.5 Y 5/1 灰色。 口縁部約1/14の残 存。
高杯	310	最下段灰原	口径 13.6 器高 8.6 底径 9.2	杯部は深く、上内方に伸び端部近くで 外反する。端部は丸い。 脚部は低くラップ状に開き、端部近く で若干持ちあがったのち下がる。端部 は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 脚部はハリツケ。 底部内面は不整方向ナデ。 その他回転ナデ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密（白色砂粒 を含む）。 色調 5 P B 4/1 暗青灰色。
同上	311	同上	口径 15.1 器高 4.1 底径 9.3	杯部は浅く、口縁部にむけてやや外反 して外方に伸び、端部は丸い。 底部は平ら。 脚部は短く、垂直に下り、途中大きく 外反して外下方に伸び、小さく垂直に 屈曲して端部にいたる。端部は鋭く下 方に突出する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部内面は、不整方向ナデで外面は ヘラ切り。 脚部は回転ナデの後、斜め方向ナデで 外面にハリツケ。 その他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗（白色 砂粒を含む最大3 ミリ）。 色調 5 B G 6/1 青 灰色。
同上	313	同上	口径 15.5 器高 10.3 底径 10.6	杯部は上方にむけて伸び、底部は丸い。 脚部は外反して外下方に伸びる。	マキアゲ・ミズビキ。 杯底部内面不整方向ナデ。 その他は回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 粗（白色粒子 多く含む）。 色調 5 Y 6/1 灰色。 ひずみあり。約2/3 欠損。
同上	314	同上	口径 15.9 器高 8.5 底径 9.6	杯口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は平ら。脚部は外反し、外下方に 伸びる。端部は丸くやや下方に突出。 重ね焼きによると思われる別の固体片 熔着。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ。 底部外面はヘラ切り、一部ヘラ削りが みられる。 その他は回転ナデ調整。脚部はハリツ ケで回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗（砂粒 子多し）。 色調 N 5/ 灰色。 ひずみあり。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	315	最下段灰原	口径 15.4 器高 7.8 底径 10.0	ひずみが激しいが、杯部はほぼ垂直に立ち上がり、底部は深く平らである。脚部は外反し外下方に伸び、端部近くで持ち上がり、端部は丸く、下方に突出。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯部は丁寧な回転ナデ。 底部外面はヘラ切り、脚部はハリツケ。 外面端部近くはやや強い削りぎみのナデ。その他は丁寧な回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 N5/灰色。 ひずみあり。ヘラキズあり。
同上	316	同上	口径 16.8 器高 7.8 底径 8.2	杯部はほぼ平らで端部のみ約15°外方に立ち上がる。 底部内面中央は上部にふくらむ。 脚部は長くほぼ垂直に下がり、端部近くで大きく外反する。端部は丸く下方に突出。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部内面は不整方向ナデ。口縁近くは回転ナデ。 底部外面ヘラ切り。脚はハリツケ。 外面は回転ナデのち左斜め下方へのていねいなナデ。対面は削りぎみの強いナデによる凹凸みられる。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 7.5Y6/灰色。
同上	317	同上	口径 21.5 器高 7.7 底径 9.9	杯部は端部近くでほぼ垂直に立ち上がり、端部は平面をなす。底部は平らで浅い。 脚はハリツケで外反し外下方に伸び、端部近くで持ち上がり、端部は外下方に屈曲、下方に突出している。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部内面、不整方向ナデ。端部近くは削りのちナデ。底部外面はヘラ切り。 脚部は回転ナデで下方は削りのち回転ナデで、内面底部付近は、斜め方向に強いナデによる凹凸みられる。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 N7/灰白色。 ひずみあり。
同上	318	同上	口径 21.3 器高 6.0 底径 10.0	杯部口縁部は外彎気味に上外方へのび端部は丸い。 脚部は外反し外下方に伸び、端部は丸く下方に突出。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯内面は不整方向ナデ。底部はヘラ切り。脚部外面は左斜め下方向ナデ調整。 内面はやや削りぎみの強い斜め方向ナデ。 その他は回転ナデ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 N7/灰白色。 ひずみあり。
同上	319	同上	口径 9.8 器高 6.3 底径 4.6	杯部口縁は上外方に伸び端部は丸い。底部は平ら。 脚部はラッパ状に伸び端部近くで大きく拡がる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部内面は不整方向ナデ。 底部外面ヘラ切り、一部削りあり。 その他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 N4/灰色。
同上	323	同上	口径 14.9 器高 8.7 底径 11.5	杯部口縁は、直立気味に上方へ伸び端部は丸い。 底部は平らで深い。脚部はラッパ状に伸び端部近くで大きく拡がる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部内面は不整方向ナデ。底部はヘラ切り。その他は回転ナデ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密（白色砂粒を含む）。 色調 7.5Y7/1灰白色。
同上	333	同上	口径 19.8 器高 7.0 底径 8.8	杯部はやや丸みをおび口縁部は直上する。端部は丸い。 底部内面は平らで比較的浅い。 脚は短くラッパ状に拡がり端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ。外面はヘラ切り。その他は回転ナデ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗（礫含む）。 色調 7.5Y5/1灰色。 ひずみあり。 杯部約5/7欠損。
同上	334	同上	口径 19.7 器高 9.9 底径 9.2	杯部は丸みをおび上外方に伸び、口縁部近くでやや内方に曲げられる。 脚部はわずかに開いて下り、端部近くで大きく拡がる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部内面は不整方向ナデ。 底部外面ヘラ切り。 脚部にかき目みられる。その他は回転ナデ。	焼成 良好。 胎土 密（白色砂粒を含む）。 色調 7.5Y6/1灰色。
同上	335	A区下方灰原	口径 19.5 残存高 8.1	杯部は浅く平ら。 脚部はラッパ状に拡がる。端部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部内面、不整方向ナデ。 底部外面はヘラ削り。その他回転ナデ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 7.5Y6/1灰色。

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
高 杯 (脚)	337	最下段 灰原	口径 — 器高 6.6 底径 10.0	脚部基部は太く、外反している。端部近くで下方へ屈曲させる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を含む)。 色調 2.5GY6/1オリーブ灰色。 杯部欠損。脚部底径約1/2欠損。
高 杯	339	6地区 灰原	口径 31.7 器高 13.4 底径 13.8	杯部は浅く口縁部は上外方に伸び端部近くで上外方に立ち上がる。口縁端部は幅広の平面を呈す。脚部はラッパ状に外下方に伸びる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部内面は不整方向のナデ。杯底部外面は回転ヘラ切り。その他回転ナデ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(砂レキを多く含む。最大5mm) 色調 5BG6/1青灰色。
同 上	340	最下段 灰原	口径 30.0 器高 13.9 底径 12.9	杯部は浅く、底部に丸味をもつ。底端部で口縁部が上方へ立ち上る。口縁端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部内面、不整方向ナデで底部外面はヘラ削りののち回転ナデ調整。 脚の内面ハリツケ部近くはタテ方向の削り。 その他は削りのち回転ナデ。	焼成 やや不良(軟質)。 胎土 密。 色調 2.5Y8/1灰色。 2.5Y8/2灰色。 杯部約3/5欠損。
同 上	341	同 上	口径 30.1 残存高 15.1	杯部は浅くやや丸味を有し上外方に伸び端部近くで垂直に立ち上がり、口縁端部は内傾する平面をなす。脚は外反し、外下方に伸びる。端部は欠損している。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部内面中央1/3ナデ調整。 杯底部外面はヘラ削りの後回転ヘラ削り。 脚はハリツケ。その他回転ナデ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密(白色砂粒を多く含む)。 色調 7.5Y7/1灰白色。
壺 (蓋)	344	灰 原	口径 14.3 器高 3.5	口縁部は、内彎ぎみに下がり、端部近くでやや外反し、端部は内傾する平面を成す。 天井部は高く平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 N6/灰色。
同 上	345	同 上	口径 15.0 器高 3.1	口縁部は、外反して下がり、端部近くでわずかに外側に屈曲する。端部は内傾する平面をなす。 天井部高く、平ら。 天井部中央部に、擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面6/7、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N7/灰白色。
蓋	347	同 上	口径 10.6 器高 1.6	口縁部は、ほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央2/3、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 外面 5PB7/1明青灰色。
同 上	348	同 上	口径 11.4 器高 2.2	口縁部は、ほぼ垂直に下がり、端部近くで外方に屈曲し、端部は丸い。 天井部は浅く、ほぼ平ら。 天井部の中央1/2ほどの範囲に輪状のつまみを有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 外面1/2N7/灰白色。
短 頸 壺	350	同 上	口径 10.6 残存高 6.6 底径 9.8	口頸部は短く、ほぼ直立して立ち上がり、端部丸い。 体部最大径は肩部境目付近にあり、肩は張っている。底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密(微砂粒を含む)。 色調 10Y7/1灰白色。 体部下方1/3に、自然釉がかかっている。約1/3残存。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
短頸壺	355	灰原	口径 12.5 残存高 8.1	口頸部は短く、直立して立ち上がり、端部は平ら。 体部は丸く、なだらかに下がり、体部中位に最大径を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。 体部外面、中央付近に回転ヘラ磨き。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗（白色砂粒を含む）。 色調 5Y6/1灰色。 残存約1/10。
同上	351-A	下層灰原 B区（上灰原セクション）	口径 10.8 残存高 4.1	口頸部は短く、直立して立ち上がり、端部は丸い。 体部の大半を欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。体部外面、内面ともに摩耗の為、調整不明。	焼成 甘く軟質。 胎土 やや粗（白色砂粒を多く含む）。 色調 10YR8/4 浅黄橙色。 口頸部1/6残存。
長頸壺	359	灰原	口径 12.2 残存高 14.1	口頸部は直立し、中位で外反して口縁部に至る。端部は丸い。 口頸部中位に沈線を巡らす。 体部は殆んどが欠損している。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 7.5Y6/1灰色。
同上	361	同上	口径 12.7 残存高 17.8	口頸部は内彎気味に立ち上がり、口縁下位に沈線1条を巡らす。端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。シボリ痕が見られる。	焼成 良好。 胎土 やや密。 色調 5Y6/1灰色。
同上	365	同上	口径 9.4 残存高 11.5	口頸部は直立して内彎気味に立ち上がり、中位より外反する。端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 口頸部は回転ナデ調整。シボリ痕が見られる。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗（白色砂粒含む）。 色調 N6/灰色。
同上	366	同上	口径 11.4 残存高 13.3	口頸部は直立して内彎気味に立ち上がり、口縁2/3より更に外反する。口縁端部は丸い。頸部、口縁部より2/3付近に凹線を有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部は2段つぎ。頸部下1/2にしぼり痕が見られる。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密（白色砂礫若干含む）。 色調 5Y6/1灰色。
同上	367	同上	口径 12.7 残存高 13.3	口頸部は直立したのち外反し口縁部に至る。 口縁部は外方へ水平にのび、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。シボリ痕が見られる。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 5Y6/1灰色。 頸部外面に(5Y5/1灰色の)自然釉が見られる。
壺(体部)	369	最下段灰原	口径 残存高 10.4 底径 9.5	体部上位に最大径を有し、丸味をもつ。 底部端部に外反する高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面は不整方向のナデ。 底部外面は、回転ヘラ削りの後ナデ調整。 高台はハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 粗（白色砂粒若干含む）。 色調 10YR7/4 にぶい黄橙色。
瓶子(口頸部)	370	同上	口径 6.5 残存高 4.7	口頸部は外彎した後、口縁部近くで直立する。口縁端部は丸い。 体部は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 7.5Y6/1灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
長頸壺(頸部)	371	最下段灰原	口径 8.5 残存高 7.5	口頸部は内彎して端部に至る。口縁部は外方へ屈曲させ、段をなす。端部は丸い。口頸部中位に沈線一条を巡らす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。シボリ痕が若干見られる。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N4/灰色。
平瓶	372	同上	口径 7.2 残存高 6.2	口頸部は外反した後、屈曲させ上方に伸びる。端部は丸い。 口縁下部に沈線一条を有す。 体部は欠損している。 -	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒多く含む)。 色調 外面1/25BG5/青灰色。
壺(体部)	373	同上	口径 残存高16.0	肩部は口頸部と約140°にひらき丸味をもって下外方に下がる。体部2/3上方に最大径を有し、その付近に沈線2条を巡らし、下内方にのびる。底部は平らである。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部中央1/4回転ヘラ削り。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 やや密(微砂粒を含む)。 色調 10Y6/1灰色。
長頸壺(口頸部)	375	同上	口径 11.1 残存高 8.7	口頸部は直立し、約20°上外方にのびた後、ほぼ垂直にのびて口縁部を形成する。端部は丸い。 口頸部下位1/5に、凹線一条をめぐるす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を多く含む)。 色調 5B4/1暗青灰色。
長頸壺(口頸部)	376	同上	口径 16.6 残存高 8.0	口縁部は外彎気味に上外方にのびて端部に至る。端部内面に凹面を認める。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。シボリ痕アリ。	焼成 やや甘い。 胎土 粗(白色砂粒多く含む)。 色調 5Y6/1灰色。 歪み著るしい。
台付壺(体部)	378	同上	口径 残存高10.4	口頸部欠損。肩部は口頸部と120°を成し、下外方に下がり体部2/3に最大径を有す。 底部は平らで底部端より、やや内側に垂直に下りる。外面接地の高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 高台はハリツケ。 他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密(白色砂粒多く含む)。 色調 N6/灰色。
鉄鉢	382	同上	口径 21.3 器高 12.2	口縁部は、内彎して端部にいたる。口縁端部は丸い。体、底部は丸く、底部先端は尖底となっている。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面1/3回転ヘラ磨き。中央内面1/3回転ナデの後斜方向のナデ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 2.5YR5/2。
同上	384	同上	口径 18.0 残存高 7.4	口縁部は内彎して、端部に至る。端部は丸い。 体部はやや内彎きみに外反したのち、直立し、口縁部との境に明瞭な段をつくる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 N6/灰色。
同上	385	同上	口径 17.0 残存高 7.8	口縁部は内彎して端部に至る。端部は丸い。 体部はやや厚い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデの後、ヘラ磨き調整。	焼成 甘く軟質。 胎土 密。 色調 2.5Y8/1灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
硯	389	最下段灰原	口径 10.4 器高 4.6	体部最大径は上端にあり、体部上面にふたを伴う。体部上面に陸部、海部が形成される。硯の側面に亀頭型の水滴の突起を伴う。	体部はマキアゲ・ミズビキ成形。水滴部分は手ずくね。体部内面回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗（微砂粒を多く含む）。 色調 5Y7/1灰白色。
蓋杯（身）	390	同上	口径欠損 残存高 4.1	体部は上外方にのび上半部欠損。高台より約 7 mm 上方に約 1 cm の穴がうがたれている。高台は底部端にはほぼ垂直に付す。高台端部は外傾する平面を成し内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。	焼成 甘く軟質。 胎土 密。 色調 N6/灰色。
土鈴	391	灰原	器高 4.7 径 5.25	粗雑な作りであるが、上部把手となる部分には、穴がうがたれており、体部中央が最大径となる。内部に土の球を伴う。	外部は指によるナデつけ、ヘラ削りがみられる。内面は不明である。	焼成 やや不良（軟質）。 胎土 粗（砂粒多く含む）。 色調 2.5Y7/3浅黄色。
鉢	392	同上	口径 24.8 器高 14.0 底径 15.2	底部はゆるやかな丸みを持ち、口縁部にむけて外上方に立ち上がる。端部はやや平坦になり、若干外方に突出する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部は回転ヘラ切り。内面は不整方向ナデ。その他は回転ナデ。	焼成 良好。 胎土 粗（白色砂粒多く含む）。 色調 2.5GY6/1オリブ灰色。
甗	396	同上	口径 25.0 残存高 10.9	口縁部は端部が丸くやや外向している。やや厚手で、外面に上方に屈曲する扁平な把手がはりつけられている。	マキアゲ・ミズビキ成形。把手は外面にハリツケられ、ていねいにナデつけられている。その他は回転ナデで、一部ヘラキズがみられる。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗（墨・砂粒多く含む）。 色調 表 N3/暗灰色（自然釉）。 口縁部約 1/4 の残存。
甗	399	同上	口径 21.6 残存高 5.0	頸部から口縁にかけて外反して上外方にのび、外端面は内方に屈曲してのち上外方にのびる。内端面は平面を成す。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部内面に円弧叩きと外面に、格子叩きを施しその他口縁部は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密（白色砂粒多く含む）。 色調 N4/灰色。 頸部以下欠損。
同上	400	同上	口径 25.0 残存高 7.0	頸部から口縁にかけ、外反して上外方にのび、やや下方に突出したのち外方にのびる。内端面はほぼ平面を成す。やや厚手。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部内面に円弧叩きと外面に格子叩きを施す。口縁部は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗（砂粒多く含む）。 色調 10YR4/3にぶい黄褐色。 頸部以下欠損。
同上	402	同上	口径 25.3 残存高 5.7	頸部でゆるい凸線をなしたのち、外反して口縁近くで段をなし上下にのぼす。端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部内面円弧叩き。外面に格子叩きを施す。その他口縁部は回転ナデ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密（微砂粒を多く含む）。 色調 N6/灰色。 頸部以下欠損。
同上	403	同上	口径 25.7 残存高 8.5	頸部から口縁にかけて外彎して上外方にのび、端部下方に凸線を有し段状をなす。端部は上内方に屈曲する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密（白色砂粒含む）。 色調 N7/灰白色。 頸部以下欠損。

7 地区

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	407	I号窯灰原	口径 14.9 器高 2.8	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、不整方向ナデ。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N5/灰色。
同上	408	I号窯焚口床面上	口径 15.0 器高 2.0	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5Y6/1灰色。
同上	411	I号窯灰原	口径 16.2 器高 1.4	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は極端に低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5Y7/1灰白色。
蓋杯(身)	412	同上	口径 13.2 器高 3.9	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は鋭い。底部はやや浅く、平ら。高台は低いハの字形で、外側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 不良。 胎土 やや粗。 色調 10Y R8/3浅黄橙色。
同上	413	同上	口径 13.2 器高 4.5	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部は平ら。底部端に短い高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 やや不良。 胎土 密。 色調 7.5Y8/1灰白色。
同上	421	同上	口径 17.5 器高 5.6	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや浅く平ら。 高台は垂直に下がり、外側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 やや不良。 胎土 やや粗。 色調 内面2.5Y8/2灰白色。外面2.5Y7/1灰白色。
杯	423	同上	口径 13.7 器高 3.3	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 10Y R8/1灰白色。
皿	424	同上	口径 20.9 器高 2.2	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 10Y R8/1灰白色。
高杯	425	同上	口径 25.2 残存高 2.3	杯部口縁部は、短く外彎して上外方に立ち上がり、端部は丸い。杯部底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯部底部外面1/2、回転ヘラ切り。 杯部底部内面3/4、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密(白色砂粒を含む)。 色調 5GY6/1オリーブ灰色。 脚部欠損。

12—I 号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	430	終ベース焚口	口径 14.8 器高 1.4	口縁部は短かくほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、なだらか。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面中央3/4、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 甘く軟質。 胎土 密。 色調 10Y R7/4。 にぶい黄褐色。 口縁部1/3欠損。
同上	432	灰原	口径 18.1 器高 2.6	口縁部は短くほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、なだらか。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転ヘラ切りの後、ナデ調整。 天井部内面中央1/2、不整方向のナデ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 5 Y8/4淡黄色。 1/5欠損。
蓋杯(身)	433	終ベース直上(焚口)	口径 12.9 器高 3.9	口縁部は上外部にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、ほぼ平ら。 八の字の高台を付し、内端部で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 高台部、ハリツケ。その他回転ナデ調整。	焼成 甘く軟質。 胎土 密(微砂粒を含む)。 色調 浅黄褐色10Y R8/4。1/5欠損。
同上	434	同上	口径 13.3 器高 4.2	口縁部はほぼ垂直にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 八の字の高台を付し、やや内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向ナデ。 底部外面中央2/3、ヘラ切り調整。 その他ナデ調整。高台部、ハリツケ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 密(砂粒を含む。最大4mm大)。 色調 浅黄褐色10Y R8/3。
同上	437	終ベース焚口	口径 12.8 器高 3.7	口縁部は上外部にのび、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。 八の字の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面中央2/3、不整方向ナデ調整。その他ナデ調整。 底部外面中央2/3、ヘラおこし調整。 底部外面1/3ナデ調整。高台部、ハリツケ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 N7/灰白色。 1/5欠損。
同上	441	灰原	口径 10.0 器高 3.2	口縁部は上外部にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、中央にかけて下がっている。高台は垂直に付き、全面で接地。	底部内面2/3、不整方向のナデ調整。 底部外面ヘラ切りの後ナデ調整。 その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 2.5Y6/1灰色。
同上	448	灰原	口径 12.5 器高 5.3	口縁部は、上外部にのび端部は鋭い。 底部はやや深く、1/3ぐらゐに凹がある。高台は底部端に外彎して下り内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向のナデ調整。 底部外面、ヘラ削り調整。 高台ハリツケ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5Y5/1灰色。 高台一部欠損。

12—Ⅲ号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	450	C区焚口落ち込み	口径 13.2 器高 2.0	口縁部は垂直に下がり、やや短い。端部は鋭い。 天井は低く平らで、なだらかに外下方に下がる。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3強、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 5 B、6/1青灰色。

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋 杯 (蓋)	451	C 区 焚 口 落 込 み	口径 13.5 器高 3.0	口縁部はやや短かく垂直に下がっている。 端部は外反し、丸い。 天井は高く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 甘く軟質。 胎土 密。 色調 7.5Y8/2灰白 色。
同 上	452	同 上	口径 13.4 器高 1.7	口縁部は垂直に下がり、短い。端部は鋭い。天井部は低く平ら。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、カキ目調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 10GY 4/1 暗緑灰色。 全体にひずみが見られる。
同 上	453	同 上	口径 15.3 器高 2.4	口縁部は下外部に下がり短い。端部は鋭い。天井部はやや高く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部外面1/3、回転ナデ。 天井部内面4/5、不整方向のナデ。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5GY 6/1 緑灰色。
同 上	455	同 上	口径 15.1 器高 2.6	口縁部は薄く、下外部に下がり短かい。端部は鋭い。天井部はやや高くなだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向のナデ。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 10YR7/1灰 白色。
蓋 杯 (身)	459	同 上	口径 13.5 器高 4.0	口縁部は、上外方へ伸び、端部近くでやや外反する。 底部は平ら。垂直に下がる高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向のナデ調整。 その他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N6/灰色。
同 上	460	同 上	口径 13.3 器高 3.8	口縁部は、上外方へ伸び、上部でやや外反する。端部は丸い。 底部は平ら。 短いハの字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面は不整方向のナデ。 その他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N4/灰色。
同 上	461	同 上	口径 12.4 器高 3.8	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は平ら。高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向のナデ調整。 その他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N6/灰色。
蓋 杯 (蓋)	464	前面灰原 第一黒色土層	口径 15.4 器高 1.4	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は極端に低く、平ら。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面は回転ヘラ削り。 天井部内面3/4、不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N6/灰色。

12地区

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	465	Ⅲ号窯前面灰原 第一黒色土層	口径 12.9 器高 2.8	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 その他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N5/灰色。
蓋杯(身)	471	Ⅶ号窯灰原	口径 14.1 器高 5.45 底径 8.7	口縁部は薄く、上外方へ伸び、端部は丸い。底部はやや厚手で、深く平ら。底部端に八の字形の高台を付す。内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、一定方向のナデ調整。 高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 10 Y R4/2灰黄褐色。
蓋杯(蓋)	481	Ⅳ号窯灰原土手 (主軸Ⅰ層)	口径 15.0 器高 0.95	口縁部は短く外傾し、端部はやや丸い。天井部は極端に低く、平ら。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(白色砂粒を少々含む)。 色調 N6/灰色。
同上	494	Ⅶ号窯灰原m	口径 14.5 器高 1.3	口縁部はやや短く外傾し、端部は鋭い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 2.5 Y6/2灰黄色。
同上	497	灰原	口径 15.6 器高 2.6	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低くなだらか。扁平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 その他回転ナデ。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(白色砂粒を含む)。 色調 5 G Y6/1オリブ灰色。
蓋杯(身)	535	Ⅸ号窯灰原y	口径 14.6 器高 5.6	口縁部は、上外方に伸び、端部は外反し、丸い。底部は深く平ら。垂直に下がり低い高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 口縁部内面、外面2/3回転ナデ調整。 外面1/3ナデ調整。 底部内面は不整方向のナデ調整。外面は、回転ヘラ切り。	焼成 良好。 胎土 やや粗(最大3mmの小石を含む)。 色調 N7/灰色。
同上	537	Ⅸ号窯灰原x	口径 13.5 器高 6.1	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。底部は深く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面中央、不整方向のナデ。 底部外面、回転ヘラ切り。 その他回転ナデ調整。	焼成 不良。 胎土 やや粗。 色調 5 Y 7/2灰白色。
蓋杯(蓋)	543	Ⅸ号窯灰原土手	口径 15.0 器高 2.45	口縁部は、短くやや内傾し、端部は丸い。天井部はやや低く、平ら。扁平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整、つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 N4/灰色。
小壺	547	Ⅸ号窯焚口右	口径 9.9 残存高 4.7	口縁部は外反し、端部に至る。端部は丸い。体部中央に最大径を有す。体部は内彎して下がる。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部中央約2cm幅回転ヘラ削りの後回転ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 N6/灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	549	灰原a	口径 15.3 器高 2.3	口縁部は下外方向に伸び、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらかな。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井外面1/3、回転ナデ調整。つまみ、 回転ナデ。内面2/3、不整方向のナデ調整。 内面1/3回転ナデ調整。つまみハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 10YR6/3に ぶい黄橙色。
同上	550	同上	口径 14.6 器高 2.0	口縁部は垂直に下がり短い。端部は丸い。天井部はやや低く、なだらかな。うすく大きい擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/3、回転ヘラ削り後、 回転ナデ調整。外面1/3、回転ナデ調整。 内面2/3、不整方向のナデ調整。つまみハリツケ。	焼成 甘く軟質。 胎土 粗(最大2mm の白色砂粒含む)。 色調 2.5G8/1灰白色。 口縁1/2少々欠損。
同上	553	同上	口径 14.9 器高 1.3	口縁部は垂直に下がり短く、端部は丸い。天井部は低く、中央で凹む。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削りの後、 回転ナデ調整(一部に不整方向のナデ調整あり)。 外面1/3回転ヘラ削りの後ていねいに回転ナデ調整。 天井部内面2/3、不整方向のナデ調整、 他は回転ナデ調整。 つまみハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密(最大2mm の白色石をふくむ)。 色調 5B7/1明青灰色。
同上	554	同上	口径 14.5 器高 1.8	口縁部は垂直に下がり、短く端部は丸い。天井部は低くなだらかな。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 1/3、回転ナデ調整。 内面1/3、回転ナデ調整。内面2/3不整方向のナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(最大7mm の白色砂粒を含む)。 色調 N7/灰白色。
同上	558	灰原J	口径 14.6 器高 1.5	口縁部は下外方向に下がり、短く端部は丸い。 天井部は低く平ら。薄く、平らな擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3回転ヘラ切り、残り1/3と内面1/3、 回転ナデ調整、内面残り1/3、 不整方向ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(白小石2mm)。 色調 2.5GY8/1灰白色。
同上	560	灰原b	口径 17.3 器高 2.3	口縁部は垂直に落下し長く端部はやや丸い。天井部は高く平らで口縁部近くでややくぼむ。平らでうすい擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整、 外面1/3、内面回転ナデ調整。 つまみハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 外面1/2N7/1灰白色。
同上	561	同上	口径 14.4 器高 2.0	口縁部は垂直に下がり、端部近くで外傾する。 端部は丸い。天井部は高く平らである。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削りの後、 回転ナデ調整、外面1/3回転ナデ調整。 内面1/3、回転ナデ調整、内面2/3、 不整方向のナデ調整。つまみハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 やや密。 色調 2.5Y7/3浅黄色。
蓋杯(身)	562	灰原f	口径 14.0 器高 4.0	口縁部は上外方向に伸び端部は丸い。 底部はやや浅く中央部分でややふくらむ。 ハの字形のに高台を付す。全面で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 口縁部外内面、回転ナデ調整、 底部内面、不整方向のナデ調整。 外面、カキ目調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 2.5Y7/2灰黄色。
皿	563	灰原C	口径 20.0 器高 2.5	口縁部は短く、上外方向に伸び端部で若干外反する。端部は丸い。 底部は浅くやや平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ削りの後ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 5Y5/2灰オリーブ色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	569	灰原f	口径 14.5 器高 3.5	口縁部は短く内傾し端部は丸い。天井部はやや高く、なだらか。中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5Y7/1灰白色。
同上	572	同上	口径 12.9 器高 2.3	口縁部は、極短く、やや内方に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。中央部に扁平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 内面中央部は不整方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5Y7/2灰白色。
同上	580	同上	口径 14.6 器高 3.7	口縁部は、短くやや内傾し、端部は丸い。天井部は高く、なだらか。扁平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央1/4、回転ヘラ削り。 内面中央1/2不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5Y6/1灰色。
同上	581	同上	口径 16.4 器高 1.7	口縁部は短くほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、中央で凹む。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央5/6、回転ヘラ削り。 内面中央5/6不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5Y7/2灰白色。
蓋杯(身)	583	同上	口径 11.9 器高 3.55 底径 7.7	口縁部は上外方にのび、端部は狭小で丸い。底部はやや浅く平ら。底部端にはほぼ垂直に下がる高台を付し、全面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り。底部内面、不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5Y R7/2明褐色。
蓋杯(蓋)	584	最下段下層灰原	口径 11.0 器高 1.6	口縁部は、短くやや内傾して下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。つまみ無し。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央3/4、回転ヘラ切り後ナデ調整。 天井部内面中央1/3不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 N6/灰色。
蓋杯(身)	592	同上	口径 13.6 器高 6.15	口縁部は、内彎ぎみに上外方に伸び、端部はやや鋭い。底部は深く、平ら。八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。内面は一定方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	焼成 甘く軟質。 胎土 粗(白色砂粒を含む)。 色調 10Y6/1灰色。
同上	594	同上	口径 15.9 器高 5.9	口縁部は、上外方に伸びた後、端部近くで若干外反する。端部は丸い。底部は深く、平ら。高台は八の字形で、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面は不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 N5/灰色。
蓋杯(蓋)	602	同上	口径 11.2 器高 1.1	ひずみが著しいが、その口縁部は内傾し短く、端部で短く外反する。天井部は中央でやや凹む。つまみ痕はみとめられない。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ切り。 その他不整方向のナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 N5/灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	605	最下段下層灰原	口径 16.4 器高 3.4	口縁部は短く垂直に下がった後やや外反し、端部は丸い。天井部は高く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ切り。 天井部内面2/3、不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(2mm 大の小石含む)。 色調 10R5/2灰赤色。
蓋杯(身)	606	同上	口径 13.4 器高 4.2	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで内傾する。端部は丸い。底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を含む)。 色調 2.5GY6/1オリブ灰色。
蓋杯(蓋)	607	同上	口径 16.4 器高 1.6	口縁部は、短くやや外傾している。端部は丸い。天井部は低く平ら。口縁部近くでくぼんでいる。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(白色砂粒を含む)。 色調 N6/灰色。
同上	609	同上	口径 16.1 器高 3.2	口縁部は、短く内傾しわずかに上部に肥厚する。端部は丸い。天井部はやや高く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ切り後、回転ナデ調整。天井部外面1/4、不整方向のナデ調整。天井部内面2/3、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや軟質。 胎土 やや粗(最大3mmの白色砂礫を含む)。 色調 N6/灰色。
蓋杯(身)	617	同上	口径 12.7 器高 4.0	口縁部は上外方に伸び、若干外反している。端部は丸い。底部はやや浅く、やや丸味を帯びている。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、一定方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を多く含む)。 色調 N5/灰色。
同上	619	同上	口径 14.0 器高 3.9	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 やや軟質。 胎土 やや密。 色調 2.5Y6/1黄灰色。
同上	620	同上	口径 13.6 器高 3.7	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ切り。その他、回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密(白色砂粒を含む)。 色調 N7/灰色。
同上	621	同上	口径 13.1 器高 5.0	口縁部は、上方に伸びた後、外反している。端部は丸い。底部は深く、やや丸味を帯びている。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ削り調整。底部内面、一定方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(白色砂粒を含む)。 色調 7.5Y6/1灰色。
蓋杯(蓋)	623	同上	口径 15.3 器高 2.1	口縁部は外下方へ下がり、端部は丸い。かえりは口縁部より低く内傾し、端部は鋭い。天井部は低く平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。天井部内面、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密(白色砂粒を含む)。 色調 N4/灰色。

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋 杯 (蓋)	635	最下段下層灰原	口径 14.3 器高 3.15	口縁部は下外方へ下り、端部は丸い。内傾するかえりを有し、断面三角形を呈する。天井部はやや高くなだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転へう削り後ナデ調整。天井部内面中央4/5、不整方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや不良。 胎土 やや粗。 色調 外面 灰白色。
同 上	644	同 上	口径 15.7 器高 2.8	口縁部は、ほぼ垂直に下がり、端部は断面三角形を呈する。天井部はやや低くなだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央1/2、回転へう削り調整。天井部内面中央1/2、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや不良。 胎土 やや粗。 色調 7.5Y6/1灰色。
同 上	648	同 上	口径 21.0 器高 2.0	口縁部は内傾して下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、中央でわずかに凹む。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央1/2、回転へう削り調整。天井部内面中央1/2、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗（径0.5mm の白色砂粒を含む） 色調 5 B4/ 暗青 灰色。
同 上	651	同 上	口径 11.9 器高 2.85	口縁部はほぼ垂直短く下がり、端部は丸い。天井部はやや高く丸い。扁平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転へう削り調整。天井部内面中央4/5、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗（最大 4mmの白色砂粒を 含む）。 色調 5 B5/ 青灰 色。
同 上	656	同 上	口径 12.65 器高 2.2	口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く平ら。手づくねによる擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転へう削り調整。天井部内面中央1/3、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 7.5Y8/2灰白 色。
同 上	657	同 上	口径 14.4 器高 3.3	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高く丸い。扁平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部は外面中央1/2、回転へう削り調整。天井部内面中央2/3、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5Y7/1灰白 色。
同 上	660	同 上	口径 11.1 器高 1.7	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転へう削り調整。天井部内面中央2/3、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 N6/ 灰色。
同 上	661	同 上	口径 11.6 器高 1.4	口縁部はやや内傾ぎみに下がり、端部は丸い。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、へうおこし後ナデ調整。天井部内面中央1/2、一定方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 粗（白色砂粒 を多く含む）。 色調 7.5Y6/3オリ ーブ黄色。
同 上	662	同 上	口径 9.6 器高 1.1	口縁部は下外方へ下がり、端部は丸い。天井部は低くなだらか。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転へう削り調整。天井部内面中央2/3、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 10Y7/灰白 色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	663	最下段下層灰原	口径 15.7 器高 3.05	口縁部は短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低くなだらか。扁平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転ヘラ削り調整。天井部内面中央2/3、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 10 Y 6 / 灰色。
同上	664	同上	口径 13.7 器高 3.6	口縁部は内傾して下がり、端部は丸い。天井部は高く丸い。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転ヘラ削り調整。天井部内面中央2/3、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや良好。 腕土 やや粗。 色調 7.5 Y 5 / 灰色。
同上	673	同上	口径 15.65 器高 3.25	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高くなだらか。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転ヘラ削り調整。天井部内面中央1/2、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 あまい。 胎土 やや粗。 色調 5 Y 8 / 3 淡黄色。
同上	677	同上	口径 15.85 器高 1.85	口縁部は内彎気味に下がり、端部は丸い。天井部は低く、中央で凹む。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央3/4、回転ヘラ削り調整。天井部内面中央1/2、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 10 B G 5 / 1 青灰色。
同上	678	同上	口径 16.1 器高 2.45	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低くなだらか。中央部でわずかに凹む。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央1/2、回転ヘラ削り調整。天井部内面中央2/3、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 あまい。 胎土 やや粗。 色調 5 G Y 7 / 1 明 オリブ灰色。
同上	684	同上	口径 16.4 器高 2.0	口縁部はやや内傾して下がり、端部は丸い。天井部はやや低くなだらか。中央部でやや凹む。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央1/2、回転ヘラ削り調整。天井部内面中央1/2、一定方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 7.5 G Y 7 / 1 明 緑灰色。
同上	685	同上	口径 14.5 器高 2.7	口縁部は上部へ肥厚した後内傾して下がり、端部は丸い。天井部はやや高くなだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央1/2、回転ヘラ削り調整。天井部内面中央3/4、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 密。 色調 5 Y 8 / 2 灰白色。
同上	689	同上	口径 15.0 器高 2.8	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高くなだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転ヘラ削りの後、カキ目調整。 天井部内面中央2/3、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 7.5 Y 7 / 1 灰白色。
同上	692	同上	口径 15.1 器高 1.6	口縁部は、短くほぼ垂直に下がった後外反し、端部は丸い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、カキ目調整。 天井部内面1/2、一定方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N 6 / 灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	696	最下段下層灰原	口径 15.6 器高 2.0	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高く、中央部でややくぼんでいる。中央のつまみ附近から口縁にかけてキレツあり。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央1/2、回転ヘラ切り後ていねいなナデ調整。 天井部内面中央2/3、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 5 Y6/1灰色。
同上	699	同上	口径 16.5 器高 2.4	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり、端部は外傾する面をなす。天井部はやや高く、中央部でくぼんでいる。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央1/3、回転ヘラ削り調整。天井部内面に一部不整方向のナデ調整あり。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗(白色礫4mmなど多くみられる)。 色調 2.5G Y6/1オリブ灰色。
同上	703	同上	口径 14.6 器高 2.5	口縁部は、短く垂直に下がった後やや外反し、端部は丸い。天井部は高く、中央部がくぼんでいる。つまみはなし。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転ヘラ切り未調整。天井部内面中央2/3、不整方向のナデ調整。その他は回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 2.5G Y6/1オリブ灰色。
同上	707	同上	口径 16.8 器高 2.8	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり、端部はやや鋭い。天井部は高くなだらかで、やや中央部でくぼんでいる。口縁部附近に、キレツによるひずみがみられる。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、表面が荒れている為、調整不明(削りの後ナデか)。 天井部内面中央2/3、不整方向のナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(砂礫多い)。 色調 N5/灰色。 内面に鉄分ふくむ黄色土が付着。
蓋杯(身)	709	同上	口径 9.0 器高 4.0	口縁部は上外方にのび、口縁部近くで外反している。端部は丸い。底部は深く2/3の位置でくぼんでいる。底端部にハの字形で、外側で接地する高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面不整方向のナデ。底部外面回転ヘラ切りの後ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 5 Y6/1灰色。
同上	710	同上	口径 9.4 器高 4.6	口縁部は上外方にのび、端部は丸く、若干外反する。底部は深く平ら。底端部にハの字形で、全面接地の高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面中央1/2不整方向のナデ。底部外面回転ヘラ切りの後ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N4/灰色。
同上	711	同上	口径 14.2 器高 4.3	口縁部は上外方にのび、端部は丸く若干外反している。底部は中央部分がくぼみ、底端部にやや外字型し、全面接地のハの字型高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面不整方向のナデ調整。底部外面回転ヘラ切り調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N5/灰色。
同上	716	同上	口径 13.1 器高 6.6	口縁部は上外方に伸び、中央付近で外反する。端部は丸い。底部は深く、なだらかな。ハの字形の高台を付す。高台は内面で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 やや不良(外側口縁から底部にかけて一部軟質)。 胎土 粗(最大7mmの礫を含む)。 色調 5 Y8/2灰白色。
同上	717	同上	口径 12.9 器高 5.75	口縁部は、上外方に伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。底部はやや深く、平ら。ハの字形の低い高台を付す。高台は内面で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(直径1～2mmの白色砂粒を多く含む)。 色調 N4/灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	720	最下段下層灰原	口径 14.0 器高 5.95	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや浅く平ら。八の字形の低い高台を付す。高台はほぼ全面で接地。底部に長さ7.5cmのキレット有り。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面2/3、ヘラおこし未調整。底部内面中心より3/4、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 やや不良。 胎土 粗。 色調 2.5Y6/2灰黄色。
同上	723	同上	口径 14.2 器高 6.1	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。底部はやや浅く平ら。八の字形の高台を付す。高台は全面で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(白色砂粒を含む)。 色調 5 B5/1青灰色。
同上	726	同上	口径 17.3 器高 5.2	口縁部は、上外方に伸び、中央近くで外反する。端部は丸い。底部はやや深く、平ら。高台はほぼ垂直に下がり、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、ヘラおこし後ナデ調整。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 N7/灰白色。
同上	729	同上	口径 13.0 器高 4.1	口縁部は、内彎ぎみに上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、平ら。短い八の字形の高台を付す。高台は内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(砂礫多し)。 色調 N7/灰白色。
同上	732	同上	口径 12.6 器高 3.95	口縁部は上外方に伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。底部は浅く、平ら。八の字形の高台を付す。高台は外側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面不整方向のナデ。底部外面中央1/2カキ目の後ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 不良。 胎土 粗。 色調 5 Y8/1灰白色。
同上	734	同上	口径 13.45 器高 4.2	口縁部は、上外方に伸び、中位よりやや外反する。端部は丸い。底部はやや浅く、なだらか。短い八の字形の高台を付す。高台は内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他ナデ調整。高台は貼り付け。	焼成 やや良好。 胎土 やや密。 色調 2.5Y7/2灰黄色。
同上	739	同上	口径 13.3 器高 3.6	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、平ら。内傾して下がる低い高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 7.5G Y6/1緑白色。
同上	747	同上	口径 器高 5.2	口縁部は、上外方に伸び、中央近くでやや外反する。端部は丸い。底部は深く、平ら。八の字形の高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 密(直径1mm位の白色砂粒を含む)。 色調 N7/灰白色。
同上	748	同上	口径 16.9 器高 4.95	口縁部は、上外方に内彎気味に伸びた後、端部近くでやや外反する。端部は丸い。底部は浅く平ら。短い八の字形の高台を付す。高台は内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 5 Y6/1灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	749	最下段下層灰原	口径 17.4 器高 5.15	口縁部は、上外方に伸び、端部近くでやや外反する。 底部はやや浅く平ら。 ハの字形の高台を付す。高台は外側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り未調整。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 N6/灰色。 ヘラ記号あり。
同上	750	同上	口径 17.4 器高 5.0	口縁部は上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。底部は浅く、平ら。 垂直に下がる短い高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 2.5GY6/1オリーブ灰色。
同上	751	同上	口径 14.1 器高 5.8	口縁部は、上外方に伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。底部は深く、平ら。ハの字形の高台を付す。高台は内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を含む)。 色調 N6/灰色。
皿	752	同上	口径 14.0 器高 2.0	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切りの後ナデ調整。底部内面中央2/3、不整方向のナデ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密(黒色砂粒多く含む)。 色調 7.5Y5/1灰色。
同上	753	同上	口径 15.0 器高 1.6	口縁部は外彎気味に上外方に伸び、端部は丸い。 底部は浅く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面中央3/4、不整方向のナデ調整。底部外面回転ヘラ切りの後ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密(黒色砂粒多く含む)。 色調 N4/灰色。
同上	754	同上	口径 14.8 器高 2.35	口縁部は上外方へ伸び、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 5Y7/5灰白色。
同上	757	同上	口径 18.6 器高 2.5	口縁部は、短く上外方へ伸び、端部は丸い。底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向のナデ調整。その他は回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 粗(白色砂粒を含む)。 色調 2.5YR5/2灰赤色。 ヘラ記号有り。
同上	760	同上	口径 19.0 器高 2.6	口縁部は、上外方へ伸び、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、カキ目調整。底部内面、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 5GY7/1明オリーブ灰色。
同上	770	同上	口径 22.1 器高 2.6	口縁部は、内彎ぎみに上外方に伸び、端部は外傾する平面をなす。底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り。底部内面、一定方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 やや甘い。 胎土 やや粗(白色砂粒を含む)。 色調 10YR6/4にぶい黄橙色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
皿	771	最下段下層灰原	口径 18.3 器高 3.1	口縁部は、内彎ぎみに上外方に伸び端部近くで外方へ短く屈曲する。端部は丸い。底部はやや深く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、一定方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 10GY7/1明緑灰色。
高杯	772	同上	口径 14.5 器高 8.35	杯部底部は平らで、口縁部は上外方へ伸びる。端部は丸い。脚部は基部太く、やや内下方へ下がった後外反して下がり、端部近くで外方伸びる。端部は短く外下方に下がる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯部内底面2/3不整方向のナデ。 杯部外底面はヘラ切り。 杯部外底面より約8mmのところケズリのちナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 7.5Y5/1灰色。
同上	774	同上	口径 16.3 器高 7.9	杯部底部は平底で口縁部は上外方へ伸び端部は丸い。 脚部基部はやや太く、内下方へ下がった後大きく外彎気味に外下方へ下がる。端部近くで外上部に伸び、下外方へ屈曲させ端部にいたる。端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯部外底面回転ヘラ削り。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 N6/灰色。
同上	775	同上	口径 14.3 器高 7.2	杯部底部は平底で、口縁部は上方へ伸びた後わずかに外反し、上外方へ伸びる。端部は丸い。脚部基部は太く、ほぼ垂直に下がったのち外反し、端部近くで水平にのびる。端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯部内底面不整方向のナデ。 杯部外底面はヘラ切り。 脚部内面、端部より1/3ケズリのちナデ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 N5/灰色。
蓋杯(身)	779	同上	口径 9.5 器高 3.6	口縁部は内彎して上方にのび、端部は丸い。底部は中央部でやや持ち上がる。底部の端に八の字形の高台を付し外側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 内底面不整方向のナデ。 外底面はヘラ切り。その他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 5PB7/1明青灰色。
短頸壺	780	同上	口径 8.9 器高 6.6	口頸部はやや外彎ぎみに上外方にのび、端部は丸い。 肩部は口頸部と約140°を成して下外方へ下がり体部中位に最大径を有し、内彎して底部にいたる。底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面1/3不整方向のナデ。底部外面はヘラ切り。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒を多く含む)。 色調 2.5GY5/2オリーブ灰色。
同上	781	同上	口径 21.4 残存高 9.9	口縁部は短くわずかに内傾して、端部に至る。端部は内傾する平面をなす。体部は口縁より1/4に最大径を有し内下方に下がる。 底部は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 外面、内面上半部は回転ナデ調整。その他縦方向のナデ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 N7/灰白色。
蓋杯(蓋)	783	最下段上方灰原	口径 14.5 器高 3.0	口縁部は、内傾して下がり端部は丸い。天井部はやや高くなだらか。中央に薄い凹状のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 内面中央2/3不整方向のナデ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 N4/灰色。
蓋杯(身)	786	同上	口径 10.3 器高 4.5	口縁部はやや内彎して上方にのびた後端部近くで上外方にのびる。端部は丸い。 底部は平らで底面端に八の字型の高台を付す。高台端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面一定方向のナデ。 底部外面は回転ヘラ切り。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 5Y5/1灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	787	最下段上層灰原	口径 9.8 器高 3.9	口縁部はやや内彎した後上外方へのび 端部は丸い。 底部は平らで底部端に八の字型で端部 の丸い高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面中央1/3一定方向のナデ。底 部外面回転ヘラ切りの後ナデ調整。高 台はハリツケの後ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 N4/灰色。
高杯	799	最下段下層灰原	口径 26.2 器高 18.7	杯部底部は丸くそのままならかに上 外方へのび口縁端部近くで内傾し、短 く立ち上がり端部は内傾する平面を成 す。脚部基部は細くほぼ垂直に下った のち、中位より外反して下り端部近く で水平にのびる。端部は外下方へのび 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯部内面中央2/3不整方向のナデ。杯 部外面中央3/4回転ヘラ削り。その他 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(黒色砂粒 を多く含む)。 色調 5 Y6/1灰色。
鉢	801	同上	口径 27.9 残存高 15.9	体部は約20° 上外方にのび口縁端部は 丸い。 体部口縁より1/3に沈線 2 条、中央に 沈線 2 条を施す。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部内面口縁より 2 cm～約12cmの間 斜方向のナデ調整。 体部外面中央に約 4 cmの把手痕有り。 体部外面底部より約3.5cm回転ヘラ削 り。 その他回転ナデ調整。	焼成 甘く軟質。 胎土 粗。 色調 5 Y7/1灰白 色。
長頸壺	802	同上	口径 11.0 残存高 20.1	口頸部は直立したのち中位から上外方 へのびる。端部は外傾する平面を成す。 肩部は頸部に対し、約110° の角度を 保ち体部へと続く。体部とは直角に近い 交差をする。 底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 頸部と体部との境はナデ調整。体部外 面上1/2ケズリの後回転ナデ調整、下 1/2はケズリ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 やや密。 色調 10 Y R7/4に ぶい黄橙色。
同上	803	同上	口径 10.4 残存高 22.5	口頸部はやや上内方へのび、口縁より 2/3位で上外方へのび端部近くではほ 水平に屈曲する。端部は丸い。肩部は 頸部に対し約120° の角度を保ち、体 部へと続く。体部とは直角に近い交差 をし、肩部以下内下方に下がる。底部 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部外面上1/2ケズリ後、丁寧な回転 ナデ調整、下1/2はケズリ調整。その 他回転ナデ調整。	焼成 甘く軟質。 胎土 やや粗。 色調 10 Y R7/4に ぶい黄橙色。
甕	812	同上	口径 18.8 残存高 4.6	口頸部は若干外反し、上外方にのび、 端部は外傾する平面をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 7.5 Y7/1灰白 色。
同上	816	同上	口径 26.0 残存高 11.2	口頸部は上外方にのびた後端部近くで わずかに下外方に下り、端部は内傾す るやや丸味をおびた平面を成す。肩部 は口縁部に対し約80° の角度をなし、 なだらかに下外方へ下がる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 口縁部回転ナデ調整。 体部外面は横方向の平行タタキ、内面 は円孤叩き調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(白色 砂粒を多く含む)。 色調 N5/灰色。
同上	820	同上	口径 38.0 残存高 14.2	口頸部は外彎気味に上外方へのびる。 口縁部に断面 3 角形の凸線が 3 条めぐ り、頸部に 2 本 1 条の波状文を施す。 端部は丸い。体部は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部内面円孤叩き。 体部外面、叩き、頸部中央1/3一定方 向のナデ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 2.5 Y5/1黄灰 色。
同上	823	同上	口径 52.6 器高 11.2	口頸部は上外方にのびる。 口縁部に断面 3 角形の凸線が 2 条めぐ り端部は丸い。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部内面円孤叩き、その他回転ナデ調 整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5 Y5/1灰色。

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
甕	825	最下段下層灰原	口径 51.8 残存高 12.1	口頸部は外彎気味に上外方へのび、口縁部に断面 3 角形の凸線が 2 条めぐり、端部は外傾する平面を成す。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 7.5Y5/1灰色。
同上	826	同上	口径 35.2 残存高 7.8	口頸部は上外方にのび、口縁部に断面 3 角形の凸線が 3 条めぐり、端部は丸い。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 頸部内面から外面口縁より 4.5cm のところ、回転ナデ調整。その他一定方向（口縁と垂直方向）のナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N5/灰色。
同上	828	同上	口径 23.0 残存高 7.6	口頸部は外彎気味に上外方にのび、口縁部に断面 3 角形の凸線が一条めぐり端部は外傾する平面を成す。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 外面回転ナデ調整。 内面は器面の荒れがひどく調整不明。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 2.5Y5/2暗灰黄色。
同上	830	同上	口径 39.6 残存高 9.8	口頸部は上外方にのび、口縁部に断面 3 角形の凸線が一条めぐり、端部は外傾する平面を成す。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 2.5Y6/1黄灰色。
同上	831	同上	口径 48.6 残存高 9.1	口頸部は上外方にのび、口縁部になだらかな山型の凸線が 2 条めぐり端部は丸い。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 外面口縁より約 5 cm 回転ナデ調整、以下一定方向のナデ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 10Y R6/1褐灰色。
同上	832	同上	口径 45.8 残存高 27.6	口頸部は外彎して上外方にのび、口縁部付近でやや上方に角度を変えのびる。口縁部に断面 3 角形の凸線が 2 条めぐり端部は外傾する面をなす。体部は頸部と約 90° の角度をなしなだらかに外下方へ下がる。体部中位以下は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 口頸部回転ナデ調整。体部外面格子叩き。体部内面円弧叩き。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 5 Y4/1灰白色。
同上	833	同上	口径 46.8 残存高 11.1	口頸部は約 25° 上外方にのび、口縁部に断面 3 角形の凸線 2 条がめぐり、端部は外傾する面をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 口頸部回転ナデ調整。体部内面円弧叩き。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗（砂粒を多く含む）。 色調 10Y5/1灰色。
同上	834	同上	口径 35.2 残存高 25.5	口頸部は約 20° 上外方にのび、口縁部になだらかな山伏の凸線 2 条を施し、端部は外傾する平面をなす。体部は頸部と約 70° の角度で内彎きみに下外方にのびる。体部中位以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 頸部外面下 1/2 不整方向のナデ調整。体部外面は叩き、内面は円弧叩きを施す。その他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 5 Y4/1灰色。

22-I号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	835	窯体内埋土	口径 16.55 器高 2.5	口縁部は短く、外傾し、端部は丸い。天井部はやや低く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 2.5Y R4/1赤灰色。
蓋杯(身)	841	同上	口径 15.85 器高 6.75 底径 10.3	口縁部は上外方に伸び、端部近くで外反し、端部は丸い。底部は深く、平ら。底部端にハの字形の高台を付し、全面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、ナデ調整。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 粗。 色調 7.5Y R5/8明褐色。
蓋杯(蓋)	842	焚口上層灰層	口径 10.3 器高 2.0	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、なだらか。つまみ無し。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/3、回転ヘラ切り後、ナデ調整。天井部内面1/3、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N3/暗灰色。 残存約1/2。
同上	844	同上	口径 14.3 器高 2.95	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。天井部は低く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 甘く軟質。 胎土 やや粗。 色調 5 Y 7/2灰白色。 残存約1/6。

22-II号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	847	窯体内埋土	口径 15.2 器高 3.6	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密(白色砂粒を多く含む)。 色調 10Y 6/1灰色。
同上	849	同上	口径 16.2 器高 2.1	口縁部は短く、外傾し、端部はやや鋭い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密(白色砂粒を多く含む)。 色調 5 P B4/1暗青灰色。
同上	850	同上	口径 13.25 器高 2.55	口縁部は短く、やや内傾して下り、端部は丸い。天井部は低く、平ら。やや高い、擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/4、ナデ調整。天井部内面1/4、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 2.5G Y6/1オリーブ灰色。
蓋杯(身)	851	焼成部内上層灰層	口径 13.15 器高 4.45 底径 9.2	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反し、端部は丸い。底部はやや深く、平ら。底部端に短く、垂直な高台を付す。外側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N7/灰白色。 残存約1/2。

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋 杯 (身)	852	焼成部内上層灰層	口径 13.9 器高 4.0 底径 9.45	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで、やや外反し、端部は丸い。底部は深く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。他は回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 2.5GY7/1明 オリブ灰色。 残存約1/2。

22-Ⅲ号窯

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋 杯 (蓋)	859	窯体内埋土	口径 11.3 器高 2.85	口縁部は短く内傾し、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらか。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(黒色砂粒を多く含む)。 色調 5Y7/1灰白色。
同 上	861	同 上	口径 12.5 器高 2.0	口縁部は短く内傾し、端部は丸い。天井部は低く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 5B7/1明青灰色。
同 上	862	同 上	口径 14.7 器高 2.4	口縁部は短く内傾し、端部は丸い。天井部はやや低く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 やや粗。 色調 5Y7/2灰白色。
同 上	864	同 上	口径 13.0 器高 1.65	口縁部は短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、中央でやや凹む。擬宝珠様つまみを付す。口縁部1/4欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 5B4/1暗青灰色。
同 上	868	同 上	口径 14.2 器高 1.75	口縁部はやや外傾ぎみに下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。扁平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。天井部内面、不整方向ナデ。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N6/灰色。
同 上	869	同 上	口径 15.4 器高 2.4	口縁部外面は凹面をなし、端部は丸い。天井部はやや低く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 密。 色調 7.5Y8/2灰白色。
同 上	874	同 上	口径 15.2 器高 1.4	口縁部は短く、ほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 7.5Y8/1灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	879	窯体内埋土	口径 11.3 器高 3.3 底径 6.3	口縁部は上外方向に伸び、端部は丸い。底部はやや深く、平ら。底部端に、短く、ほぼ垂直な高台を付す。内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 N5/灰色。
同上	882	同上	口径 14.2 器高 4.3 底径 7.6	口縁部は、上外方向に伸び、端部は丸い。底部はやや深く、ほぼ平らだが、底部端で内面に肥厚する。底部端にはほぼ垂直な高台を付す。口縁部1/6欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 密。 色調 5 Y6/1灰色。
同上	885	同上	口径 15.5 器高 5.2	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや深く、平ら。底部中よりに低い高台を付す。全面で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 密。 色調 7.5 Y8/2灰白色。
皿	886	同上	口径 19.0 器高 3.15 底径 13.2	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、やや丸味をおびる。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面、カキ目調整。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 やや密(黒色砂粒を含む)。 色調 10 Y7/1灰白色。
同上	887	同上	口径 17.5 器高 2.8 底径 13.4	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部内面、不整方向ナデ調整。底部外面、回転ヘラ切り。後カキ目調整。他は回転ナデ調整。	焼成 甘い。 胎土 密。 色調 2.5 Y5/1黄灰色。
蓋杯(蓋)	905	左下灰だまり	口径 12.6 器高 3.4	口縁部は短く内傾し、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらか。扁平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 N6/灰色。
同上	906	同上	口径 14.4 器高 3.0	口縁部は短く内傾し、端部は丸い。天井部はやや低く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 5 B6/1青灰色。
蓋杯(身)	907	同上	口径 10.8 器高 3.7 底径 6.5	口縁部は、やや外彎ぎみに、上外方に伸び、端部は丸い。底部は深く、平ら。八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 5 B6/1青灰色。
同上	908	同上	口径 12.6 器高 3.6 底径 7.4	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや深く、平ら。短く、ほぼ垂直な高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 10 B G7/1青灰色。

22-Ⅳ号土坑

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋 杯 (蓋)	897	右 土 坑	口径 11.5 器高 2.0	口縁部は外傾し、なだらかに下がり、 端部は丸い。天井部は低く、なだらか。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り後、回 転ナデ調整。 天井部内面、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや密。 色調 5 Y7/1灰白 色。
同 上	898	同 上	口径 12.5 器高 1.3	口縁部は、短く外上方へ伸びた後、垂 直に下がり、端部は丸い。天井部は低 く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部内面1/2、一定方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 N6/灰色。
同 上	901	同 上	口径 14.4 器高 3.2	口縁部は短く内傾し、端部は丸い。天 井部はやや高く、なだらか。擬宝珠様 つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナ デ調整。天井部内面、不整方向ナデ調 整。他は回転ナデ調整。つまみはハリ ツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 N5/灰色。
同 上	902	同 上	口径 13.0 器高 2.0	口縁部は短く内傾し、端部はやや鋭い。 天井部はやや低く、平ら。擬宝珠様 つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナ デ調整。天井部内面2/3、不整方向ナ デ調整。他は回転ナデ調整。つまみは ハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 密。 色調 7.5 Y8/2灰白 色。

22-ⅢⅣ号窯

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋 杯 (身)	888	灰 原 左 下 区	口径 13.55 器高 4.0 底径 10.3	口縁部は上外方に伸び、端部近くでや や外反し、端部は丸い。底部は深く、 平ら。底部端にハの字形の高台を付す。 全面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、 不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調 整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 2.5 Y8/3淡黄 色。
皿	892	同 上	口径 16.3 器高 2.0 底径 12.15	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、ナデ調整。底部内面2/3、 不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 10 Y5/1灰色。
蓋 杯 (身)	894	同 上	口径 14.75 器高 4.0 底径 7.1	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、なだらか。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、 不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調 整。	焼成 甘い。 胎土 粗。 色調 N4/灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	919	灰原右上区	口径 15.2 器高 1.3	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、中央で凹んでいる。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/4、回転ヘラ切り後回転ナデ調整、1/4ケズリ調整。天井部内面1/3、一定方向ナデ調整、1/3回転ナデ後ナデ消し調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 N6/灰色。
同上	921	同上	口径 14.05 器高 3.6	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらかな。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、自然茶灰釉剝離の為手法不明。天井部内面、斜め方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗。 色調 5 Y7/1灰白色。
同上	922	同上	口径 18.9 器高 2.1	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ切り、1/2磨耗。 天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 不良(軟質)。 胎土 やや粗。 色調 2.5 Y8/1灰白色。
蓋杯(身)	923	同上	口径 11.4 器高 3.4	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや深く、平ら。短く、ほぼ垂直な高台を付し、全面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(黒色砂粒を多く含む)。 色調 10 Y R4/2灰黄褐色。
同上	925	同上	口径 13.2 器高 3.8	口縁部はやや外彎ぎみに上外方に伸び、端部は丸い。底部は深く、中央でやや凹む。短く、ほぼ垂直な高台を付し、全面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 7.5 Y7/1灰白色。
同上	927	灰原右下区	口径 13.15 器高 3.7	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり端部は丸い。天井部は高く、丸い。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ切り。1/2ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 2.5 Y7/2灰黄色。
蓋杯(蓋)	941	同上	口径 16.5 器高 2.7	口縁部は、内傾して下がり、端部は外傾する面をなす。天井部はやや低く、なだらかな。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。 天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 やや粗。 色調 5 Y8/3淡黄色。
同上	945	同上	口径 14.5 器高 1.65	口縁部は、外傾して下がり、端部は丸い。天井部は低く、中央で凹む。扁平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面3/4、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N6/灰色。 ひずみが大い。
同上	961	同上	口径 16.2 器高 2.5	口縁部はやや内傾し、端部は丸い。天井部はやや低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 やや密。 色調 5 Y7/2灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	963	灰原右下区	口径 16.1 器高 3.1	口縁部はやや内傾し、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらかな。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 密(白色砂粒を多く含む)。 色調 2.5Y8/2灰白色。
同上	968	同上	口径 16.9 器高 2.4	口縁部は外傾し、なだらかに下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、中央でやや凹む。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 粗。 色調 5Y7/1灰白色。
同上	972	同上	口径 18.65 器高 2.8	口縁部は、垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、なだらかな。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。天井部内面3/4、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 7.5Y4/1灰色。
同上	974	同上	口径 15.1 器高 2.0	口縁部は短くやや内傾し、端部は丸い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 10Y6/1灰色。
同上	978	同上	口径 12.8 器高 2.3	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、中央がやや凹む。高い、擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 N6/灰色。
同上	980	同上	口径 14.4 器高 1.15	口縁部は短く、端部は丸い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り。天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 5Y5/1灰色。
同上	985	同上	口径 15.0 器高 2.4	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。やや高い、擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り。天井部内面1/4、一定方向ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 2.5GY7/1明 オリーブ灰色。
同上	990	同上	口径 15.4 器高 2.7	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗。 色調 N5/6灰色。
同上	991	同上	口径 13.8 器高 3.2	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、平ら。高い擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。 天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 10YR7/2に ぶい黄褐色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	995	灰原右下区	口径 13.6 器高 2.0	口縁部は短く垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 N4/灰色。
同上	998	同上	口径 15.0 器高 1.7	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。天井部内面1/2、一定方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 N4/灰色。
同上	1000	同上	口径 14.7 器高 2.3	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、なだらかな。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/3、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面1/2、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 N6/灰色。
同上	1008	同上	口径 15.5 器高 1.5	口縁部は、外傾ぎみに下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 粗(黒色砂粒を含む)。 色調 7.5Y6/1灰色。
同上	1010	同上	口径 15.7 器高 1.25	口縁部は短く、外傾ぎみに下がり、端部はやや鋭い。天井部は低く、中央でやや凹む。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(白色砂粒を含む)。 色調 2.5Y8/1灰白色。
同上	1012	同上	口径 14.9 器高 1.6	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低く、中央でやや凹む。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(黒色砂粒を含む)。 色調 N7/灰白色。
同上	1014	同上	口径 15.4 器高 1.1	口縁部は、短く垂直に下がった後、下外方に屈曲する。端部は丸い。天井部は低く平ら。大きな扁平つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 7.5Y7/1灰白色。
同上	1016	同上	口径 15.0 器高 1.95	口縁部外面は凹面をなし、外傾して下がる。端部は丸い。天井部はやや低く、なだらかな。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 2.5GY6/1オリーブ灰色。
同上	1020	同上	口径 18.8 器高 2.2	口縁部は短く、垂直に下がり、口縁部外面は、やや凹面をなし、端部は丸い。天井部は低く、平ら。高い擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(黒色砂粒を多く含む)。 色調 7.5Y7/1灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	1023	灰原右下区	口径 14.5 器高 1.5	口縁部は短く、やや外傾ぎみに下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 粗(白色砂粒を含む)。 色調 2.5Y8/3淡黄色。
同上	1032	同上	口径 16.7 器高 2.5	口縁部は、ほぼ垂直に下がった後、下外方に屈曲する。天井部はやや高く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、ナデ調整。天井部内面、ナデ調整。他は回転ナデ調整。	焼成 不良。 胎土 やや粗。 色調 2.5Y8/2灰白色。
蓋杯(身)	1033	同上	口径 13.1 器高 3.75	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。低い高台を付す。端面は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 N7 /灰白色。
同上	1035	同上	口径 17.4 器高 4.7 底径 10.6	口縁部は、上外方向に伸び、端部は丸い。底部は深く平ら。底部端に短く、ほぼ垂直な高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 甘く軟質。 胎土 密。 色調 10Y R8/4浅黄橙色。
同上	1036	同上	口径 15.0 器高 3.6 底径 5.9	口縁部は、上外方向に伸び、端部は丸い。底部は深く平ら。底部端に短く、ほぼ垂直な高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、回転ナデ調整。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 粗(白色砂粒、黒色砂粒を多く含む)。 色調 N5/灰色。
同上	1039	同上	口径 11.5 器高 3.1 底径 8.3	口縁部は上外方向に伸び、端部は丸い。底部はやや浅く平ら。底部端に、ほぼ垂直に下がる高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 N6/灰色。
同上	1043	同上	口径 13.1 器高 3.9	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや浅く、平ら。底部端よりやや内側に逆八の字形の外側で接地する高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向のナデ調整。体部の下から2/5、回転ヘラ削りの後、ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗(小石を含む)。 色調 7.5GY7/1明緑灰色。
同上	1052	同上	口径 13.5 器高 3.6	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、なだらか。底部端よりやや内側にほぼ垂直に下がる低い高台を付す。外側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面5/6、一定方向のナデ調整。底部内面1/6、ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(8mm大の石あり、黒色粒子、白色粒子を多く含む)。 色調 6/N灰色。
同上	1057	同上	口径 13.4 器高 3.9	口縁部は、やや内彎しながら、上外方に伸びる。端部は丸い。底部はやや浅く、なだらか。底部端よりやや内側に八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削りの後、ナデ調整。底部内面、ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 やや不良。 胎土 やや密。 色調 2.5Y7/3浅黄色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	1063	灰原右下区	口径 21.05 器高 3.2	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、なだらか。底部内よりに八の字形の高台を付す。ほぼ全面で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、ナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻 胎土 やや密。 色調 5 Y 6/2 灰オリープ色。
同上	1065	同上	口径 16.4 器高 3.9	口縁部は上外方に伸び、やや外反している。端部は丸い。底部はやや浅く、平ら。底端部よりやや内側に八の字形の高い高台を付す。ほぼ全面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面2/3、回転ヘラ切り。底部その他ナデ調整。底部内面中央1/3、不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 2.5 Y 6/1 黄灰色。
蓋杯(蓋)	1068	同上	口径 27.0 器高 5.1	口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや高く、平ら。高い擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ切り。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 N 6/ 灰色。
高杯	1069	同上	口径 25.6 残存高 3.7	杯口縁部は、上外方にのび、端部は平面をなす。杯部底部は浅く、平ら。脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、ヘラ切り調整。底部内面、不整方向ナデ調整、指押え跡あり。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 2.5 Y R 5/3 に ぶい赤褐色。 残存 杯部1/2弱。
同上	1070	同上	口径 28.2 残存高 3.8	杯口縁部は短かく、内彎しながら立ち上がる。端部は内傾する面をなす。杯部底部はやや深く、平ら。脚部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、1/3 回転ナデ調整、2/3 ヘラナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 甘い。 胎土 密。 色調 10 Y R 7/4 に ぶい黄褐色。 残存 杯部1/2弱。
杯	1073	同上	口径 13.1 器高 2.9	口縁部は上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。底部はやや浅く、中央でなだらかな凸形をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面にカキ目調整が見られる。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 2.5 Y 6/1 黄灰色。
皿	1076		口径 13.9 器高 1.6	口縁部は、上外方に外彎し、端部は丸い。底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切りの後ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 5 Y 8/1 灰白色。
同上	1079	同上	口径 17.3 器高 2.1	口縁部は、上外方に伸び、端部近くでやや内彎した後外反する。端部は丸い。底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切りの後カキ目調整。底部内面、1/3一定方向ナデ、1/3不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 6/N 灰色。
同上	1080	同上	口径 8.3 器高 2.6	口縁部は、上外方に伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。底部は浅く、ほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 やや粗。 色調 5 Y 7/1 灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
皿	1084	灰原右下区	口径 21.1 器高 27.5	口縁部は、外彎した後やや内彎し、端部近くで外反する。端部は丸い。底部は浅く、ほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り調整。底部内面、摩耗の為調整不明。他は回転ナデ調整。	焼成 不良。 胎土 粗。 色調 10 Y R8/1 灰白色。
同上	1086	同上	口径 20.2 器高 3.0	口縁部は、内彎しながら上外方に伸びる。端部は丸い。底部はやや深く、ほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。底部内面、磨耗の為調整不明。その他回転ナデ調整。	焼成 甘い。 胎土 粗。 色調 5 Y7/1 灰白色。
短頸壺	1087	同上	口径 12.5 残存高 16.0 最大径 22.0	体部は内彎し、口縁より約4cm下がった部分で最大径をとる。その後大きく上内方に内彎し伸び、口縁部近くではほぼ垂直に屈曲し、上外方に立ち上がる。端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部2/3はケズリの後丁寧なナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 不良(軟質)。 胎土 やや粗。 色調 10 Y R8/3 浅黄橙色。 体部中央から底部欠損。
壺	1089	同上	口径 9.1 残存高 5.8	頸部からほぼ直立したのち、外反しながら上外方に伸びる。口縁近くで、内方に屈曲し段状となった後上外方に立ち上がる。端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 2.5 Y8/2 灰白色。 頸部以下欠損。
同上	1094	同上	口径 残存高 14.8 最大径 18.3	底部よりゆるやかな円を描くように内彎しながら立ち上がり、肩部で上内方に彎曲する。肩部に凹線を二条施す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部下半分ケズリ調整。肩部は不整方向ナデ。 頸部近くの内面はタテ方向ナデがみられる。その他回転ナデ調整。	焼成 やや不良。 胎土 やや密。 色調 2.5 Y8/1 灰白色。 口頸部及び底部欠損。
壺	1095	同上	口径 残存高 15.4 底径 13.2 最大径 18.5	肩部分に最大径を有す。 体部は底部から内彎ぎみにはほぼ直上し、肩部で内方に屈曲する。全体に厚いが底部近くであらいケズリがみられ、やや薄くなっている。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部内面は回転ナデ調整。外面は肩の部分に不整方向ナデがみられ、体部下半分にヘラケズリがみられる。底部はヘラ切りと思われる。	焼成 やや不良。 胎土 粗。 色調 7.5 Y8/1 灰白色。 底部から頸部にかけて残存。口頸部と底部欠損。
台付平鉢	1099	同上	口径 12.1 器高 5.4 最大径 13.7 底径 8.6	底部から内彎しながら上外方に伸び、口縁部近くで上内方に立ち上がる。端部は丸い。 全体に薄手で、底部には八の字形に下がる高台を付す。高台は内面接地である。	マキアゲ・ミズビキ成形。 内面は摩耗しており調整は不明。底部は回転ヘラ切り。体部外面は回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 密(最大1.5mmの砂粒)。 色調 5 Y5 /1 灰白色。
同上	1100	同上	口径 19.8 器高 3.6 底径 13.3	底部から内彎しながら上外方約10°に伸び、体部中央からはほぼ直上する。口縁部でやや外反したのち端部となる。端部は内傾する面をなす。底部はほぼ平らだが中央部でやや凹む。垂直に下りる高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部回転ヘラ切り。その他は回転ナデ。	焼成 やや軟質。 胎土 粗(白色砂粒多く含む)。 色調 2.5 Y7/2 灰黄色。
蓋杯(蓋)	1102	灰原左下区	口径 12.0 器高 2.2	口縁部は、短かく垂直に下がり、端部は丸い。天井部は低くなだらかな。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ切り後ナデ調整。天井部外面1/3、つまみ、内面は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 N7/ 灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	1105	灰原左下区	口径 16.0 器高 2.5	口縁部は、内傾して下がり、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらかな。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/6回転ヘラケズリのちナデ調整。1/3ケズリ。内面中央2/3不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 不良(軟質)。 胎土 やや密。 色調 5 Y8/2灰白色。
同上	1107	同上	口径 13.2 器高 2.5	口縁部は垂直に落下し、短かく端部は丸い。天井部は低く、なだらかなでやや凹む。首が長い、擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3ナデ調整。天井部外面1/3、内面1/3回転ナデ調整。内面中央2/3不整方向のナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 やや粗(約1.5mm大の石有り)。 色調 5PB3/1暗青灰色。
同上	1108	同上	口径 14.8 器高 2.3	口縁部は垂直に下がり端部は丸い。天井部はやや低くなだらかな。扁平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3回転ヘラ削りの後ナデ調整。天井部内面中央1/3不整方向のナデ、その他回転ナデ調整。	焼成 良好 胎土 やや密 色調 5Y7/2灰白色。
同上	1109	同上	口径 15.0 器高 1.7	口縁部は、短く内傾して下がり、端部は丸い。 天井部は、低く平ら。中央部が凸形の擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央1/4回転ヘラ切りの後、ナデ調整。天井部内面中央2/3不整方向のナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 やや不良。 胎土 やや粗(最大3mmの礫含む)。 色調 5 Y7/3浅黄色。
同上	1111	同上	口径 13.5 器高 1.0	口縁部は、垂直に落下し、端部はやや鋭い。天井部は低く凹む。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ切り。1/3、回転ナデ調整。天井部内面1/3、回転ナデ調整。中央2/3、不整方向のナデ調整。	焼成 良好。 胎土 粗。 色調 5 Y5/1灰色。
同上	1113	同上	口径 13.4 器高 1.4	口縁部は垂直に落下し、端部はやや鋭い。天井部は低く、なだらかな。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3回転ヘラ切り未調整。天井部内面中央2/3、不整方向のナデ。その他回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 粗(最大3mm大の石有り)。 色調 5 B3/1暗青灰色。
同上	1114	同上	口径 15.45 器高 1.5	口縁部は短く、外傾しながら下がり、端部は丸い。 天井部は低く、なだらかな。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央1/2、回転ヘラ削りの後ナデ調整。天井部内面、ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 7.5G Y7/1明緑灰色。
同上	1119	同上	口径 18.7 器高 1.5	口縁部は、垂直に落下した後やや外反する。端部は丸い。天井部は、低く中央部で凹む。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面中央2/3、回転ヘラ切り。内面中央2/3、ナデ調整。その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(最大直径1.5~2mmの石を含む)。 色調 2.5Y7/3浅黄色。
蓋杯(身)	1124	同上	口径 13.4 器高 3.8	口縁部は内彎しながら上外方に伸びる。端部は丸い。底部はやや浅く丸味をおびる。八の字形の低い高台を付す。高台は内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面中央2/3、回転ヘラ切り。内面は不整方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。高台はナデ調整でハリツケ。	焼成 甘い。 胎土 やや密(白色粒を含む)。 色調 2.5G Y7/1明オリブ灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	1125	灰原左下区	口径 13.2 器高 3.7	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで若干外反する。端部は丸い。 ハの字形で全面接地の低い高台を付す。底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面へラ切り。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 5 Y 7/1 灰白色。
同上	1126	同上	口径 13.2 器高 3.7	口縁部は、上外方に伸び外反する。端部は丸い。底部は平ら。 ハの字形の低い高台を付す。高台は内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面へラ切り後、ナデ調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 粗(最大直径 2mm の石を含む)。 色調 5 G Y 7/1 明オリブ灰色。
蓋杯(蓋)	1131	灰原	口径 14.7 器高 3.05	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラケズリ調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや良好。 胎土 やや粗(礫を含む)。 色調 10 Y R 7/2 に ぶい黄橙色。
同上	1135	同上	口径 14.5 器高 2.1	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや不良。 胎土 やや粗。 色調 7.5 Y 8/1 灰白色。
同上	1136	同上	口径 17.5 器高 2.3	口縁部は外傾して下がり、端部は丸い。 天井部はやや低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、ヘラ切り。天井部内面、不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 やや甘い。 胎土 密。 色調 2.5 Y 7/2 灰黄色。 約1/3欠損。
同上	1137	同上	口径 15.3 器高 1.5	口縁部は短かく、やや外傾しながら下がる。端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 扁平つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。天井部内面中央1/2、ナデ調整。つまみは貼り付け。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや粗(白色礫等含む)。 色調 7.5 Y 6/2 灰オリブ色。
同上	1141	同上	口径 13.5 器高 3.1	口縁部は垂直に下がり、端部は外傾する面をなす。天井部は高く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。天井部内面、ナデ調整。その他回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密(但し最大 3mm の白色礫含む)。 色調 2.5 G Y 6/1 オリーブ灰色。
蓋杯(身)	1142	同上	口径 10.9 器高 3.6	口縁部は、上外方に伸び、中位でやや外反する。端部は丸い。底部は浅く、平ら。ほぼ垂直な高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、ナデ調整。底部内面、回転ナデ後不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 N5/灰色。
鉢(底部)	1147	同上	残存高 3.1	底部は平ら。体部は外反するが、大半を欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、外面不整方向のナデ。その他回転ナデ調整。	焼成 甘く軟質。 胎土 やや密。 色調 10 Y R 7/4 明黄褐色。 底部のみ残存。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
皿	1150	灰原	口径 17.8 器高 2.5	口縁部は、短かく上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。その他は回転ナデ調整。	焼成 やや甘い。 胎土 密（白色砂粒を含む）。 色調 2.5GY8/1灰白色。

23地区

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	1151	I号窯 窯体内床面直上	口径 13.4 器高 5.0	口縁部は、短く内傾して下がり、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらかな。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り後ナデ調整。天井部内面1/2、一定方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 5Y5/1灰色。
同上	1152	同上	口径 12.4 器高 1.9	口縁部は短く内傾して下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り。天井部内面1/2、一定方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 10Y5/1灰色。
同上	1158	同上	口径 18.4 残存高 1.5	口縁部は短く外上方へ伸びた後、内傾して下がり、端部は丸い。天井部はやや低く、平ら。つまみ欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ切り。天井部内面、摩耗のため調整不明。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 7.5YR7/3に ぶい橙色。
蓋杯(身)	1165	同上	口径 13.0 器高 3.8	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや浅くほぼ平ら。内傾して下がる短い高台を付し、外側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、ヘラ切り。底部内面3/7、ナデ調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 密。 色調 5Y7/1灰白色。
同上	1163	同上	口径 14.2 器高 3.7	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや浅く、平ら。高台は低い八の字形で、外側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、ナデ調整。底部内面、ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	焼成 良好堅緻。 胎土 やや密。 色調 5B5/1青灰色。
同上	1169	同上	口径 16.4 器高 5.0	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや深く、平ら。高台は低い八の字形で、外側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向ナデ。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	焼成 良好。 胎土 密（白色砂粒を多く含む）。 色調 5Y6/1灰色。
皿	1170	同上	口径 14.1 器高 2.4	口縁部は上外方に伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。底部は浅く、やや丸みを帯びる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、摩耗。底部内面、摩耗。他は回転ナデ調整。	焼成 やや甘い。 胎土 密（白色砂粒を含む）。 色調 2.5Y7/3浅黄色。

器種	遺物 番号	出土 地区	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
皿	1176	I号窯 室内床面直上	口径 19.3 器高 2.0	口縁部は上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後ナデ調整。 底部内面2/5、ナデ調整。他は回転ナデ調整。	焼成 良好。 胎土 密。 色調 2.5Y5/1黄灰色。
同上	1177	灰 原	口径 19.3 器高 2.7	口縁部は上外方に伸び、端部近くでわずかに外反する。端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り。底部内面、不整方向のナデ調整。他は回転ナデ。	焼成 良好。 胎土 密（白色砂粒を含む）。 色調 7.5Y4/1黄灰色。

あ と が き

昭和から平成と年号が代った時期が、この報告書の最終段階であった。わずか2年間の調査ではあったが、牛頸窯跡群について多くの事を学ばせていただいた。既に多年の成果が、こつこつと積み重ねられており、それらの集成がまたれるところでもある。

大野城市教育委員会とりわけ担当の舟山良一氏の好意に甘えながら漸くここに成果の一端が公刊されることになった。これもひとえに関係各位の努力のたまものであり、厚く感謝する。

今後とも、須恵器研究に牛頸窯跡群の成果が多く採り入れられ、益々の発展があることを期待しつつあとがきを終りたい。

なお参加者については冒頭に記述しているが、地元の参加者についてはここに記して感謝の意を表する。

(中村 浩)

調査補助員

中島恒次郎

調査作業員

川辺 照子、川辺 満子、河野 房子、藤島ミトシ、中山三千代、田中 岩男、
川口 清己、手塚 清子、中山チエ子、中山さつき、篠原 純子、船越 美寿、
福岡 麗子、佐藤利恵子、前田 直子 他 (敬称略、順不同)

大野城市文化財調査報告書

本文編 第30集

平成元年 3 月

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2番1号

印刷 サンキ印刷株式会社